

一般国道9号(羽合道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

鳥取県東伯郡羽合町

MINAMIDANOOYAMA

南谷大山遺跡II

MINAMIDANI

南谷29号墳

1994

財團法人 鳥取県教育文化財団

建設省 倉吉工事事務所

## 序

東郷池周辺は、古くから遺跡の宝庫として知られています。東郷池の北西に位置する羽合町には、国史跡の橋津古墳群や砂丘下の大集落であった長瀬高浜遺跡など全国に知られた遺跡があります。また泊村では、集落跡や古墳のほか銅鐸などの貴重な遺物も出土しています。さらに、東郷町では国史跡の北山古墳をはじめとする古墳群や集落跡などがあります。なかでも、伯耆国（鳥取県西部）の一宮であった儀文神社では、経筒・金銅仏などの遺物が出土し、「伯耆一宮経塚出土品」として国宝に指定されています。

当財団では、このような遺跡地帯を、昨年度にひきつづき建設省の委託を受け、「一般国道9号（羽合道路）改築工事に伴う発掘調査」として、羽合町で行いました。その結果、砂丘下の大集落であった長瀬高浜遺跡の空白期間を埋める時期の集落跡が丘陵地で調査されました。これらは、郷土の歴史を解き明かしていくうえでの、貴重な資料です。今回、この調査成果を報告書にまとめ刊行することができました。本報告書が教育および学術研究のため広く活用され、歴史の解明の一助になればと期待するとともに、文化財に対する理解や認識がより深まり、その成果が永く後世に伝えられれば幸いです。

最後に、建設省倉吉工事事務所ならびに交通の不便な所にもかかわらず調査に参加してくださった地元の方々をはじめ、ご協力いただいた方々、その他関係各位に對して心から感謝し、厚くお礼申し上げます。

平成6年3月

財團法人 鳥取県教育文化財団

理事長 西 尾 邑 次

## 序 文

建設省が管理する一般国道9号は、京都市を起点として福知山を経由し、蒲生峠から山陰地方へ入り、日本海に沿って鳥取・島根両県を西走し、山口県下関に至る延長約609kmの路線であり、山陰地方の産業・経済活動の動脈として大きな役割を果たしています。

このうち建設省倉吉工事事務所では、東伯郡泊村から米子市（鳥取・島根県境）まで76.4kmを管理しており、各種の道路整備事業を実施しています。そのうちの一つに東伯郡羽合町及び泊村地内において、将来の国土開発幹線道路として当面、活用できる機能を有する高規格な自動車専用道路である青谷・羽合道路の整備を進めています。

羽合工区は、泊村原地内でインターチェンジにより現道9号及び（主）倉吉青谷線とアクセスし、羽合町長瀬でインターチェンジによって北条道路一般部と一部アクセスしますが、途中東郷池が見渡せる位置にサービスエリアが予定されている延長6kmの県中部地方ではじめての高規格道路で、昭和61年度に国道9号のバイパス事業として事業に着手しましたが、63年度に高規格な機能を持たすように構造変更を行い、同年用地買収に着手しました。平成2年度からは、羽合高架橋下部工事に着手し、平成4年度に下部工を完了し、上部工に着手しました。今年度は、上部工を銳意促進しています。

このルートには、全部で10か所の古墳・散布地がありますが、鳥取県教育委員会と協議を行い、文化財保護法第57条の3の規定に基づき文化庁長官へ通知した結果、事前に発掘調査を行い、記録保存を行うことになりました。

このうち羽合町地内では昨年度にひき続き大山所在遺跡について財団法人鳥取県教育文化財団と発掘委託契約を締結し、鳥取県教育委員会の指導のもとに発掘調査が行われました。

本書は、この調査結果に学術的な考察を加え、「記録」として保存するためにまとめられたものです。この貴重な「記録」が文化財に対する認識と理解を深めるため、並びに教育及び学術研究のために広く活用されることを期待するとともに、建設省の道路事業が、文化財保護に深い关心を持っていることに御理解いただければ幸い存じます。

おわりに、事前の協議をはじめ現地での調査から報告書の編集に至るまでご協力をいただいた鳥取県教育委員会及び財団法人鳥取県教育文化財団の関係各位のご尽力に対し感謝いたします。

平成6年3月

建設省 倉吉工事事務所長  
濱 谷 武 治

## 例　　言

1. 本報告書は、1993年度一般国道9号（羽合道路）改築工事に伴う南谷大山遺跡C区〔大山所在遺跡（ハ）〕の一部・南谷29号墳の埋蔵文化財発掘調査記録である。
2. 本報告書に収載した南谷大山遺跡（一部1991年度～1992年度調査）は、周知の名称であるが、南谷29号墳は新発見のため、南谷古墳群の一連の名称をついた。
3. 本報告書に収載した遺跡の所在地は、鳥取県東伯郡羽合町大字南谷字大山谷83・89・92、字二ノ琴引69、字新林81・98他である。
4. 本報告書で示す標高は、建設省による道路センター航No85 (X : -556153.399 Y : -40044.199) の92.228mを起点とする標高値を使用し、方位は磁北を示す。X : 、Y : の数値は国土座標第5系の座標値である。
5. 本報告書に記載の地形図は、国土地理院発行の1/50000 地形図「青谷・倉吉」、調査区位置図は、羽合町1/2500地形図「都市計画地図5」を使用した。
6. 報告書の作成は、調査員の討議に基づくものである。  
報告書本文については、調査員が協議のうえ分担して執筆し、執筆担当者名を目次に記載した。  
造構図の浄写は、中部埋蔵文化財調査事務所で、遺物の実測・浄写は、鳥取県埋蔵文化財センターで行った。  
造構写真は発掘担当調査員が、遺物写真は岸本・牧本が撮影した。  
本書の編集は牧本が行った。
7. 造構実測は基本的に調査員・調査補助員が行ったが、調査前および最終の地形測量については、ワールド航測コンサルタント株式会社に委託して行った。
8. 鋳造鉄斧のX線ラジオグラフィー（X線透過撮影）を、奈良国立文化財研究所にお願いした。
9. 南谷大山遺跡で検出された焼失住居および上屋構造について、奈良国立文化財研究所・浅川滋男主任研究官に現地指導をお願いし、多忙のところ玉稿をいただいた。記して感謝したい。
10. 南谷大山遺跡堅穴住居跡内他で出土した炭化物を、鳥取大学農学部農林総合科学科の古川郁夫教授・矢部浩氏に樹種鑑定をお願いし、多忙のところ玉稿をいただいた。記して感謝したい。
11. 堪穴住居内中央ピットの土壤分析・種子同定を、パリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
12. 貯蔵穴埋土中の花粉分析を、古環境研究所に委託した。
13. C S I 19出土の白玉の重量測定について、県立倉吉工業高等学校にお世話になった。
14. ラジコンヘリコプターによる造構空中写真を、大橋保夫氏に委託した。
15. 出土遺物、図面、写真等は鳥取県埋蔵文化財センターに保管されている。ただし、出土遺物は将来的に羽合町教育委員会に移管する予定である。
16. 現地調査および報告書の作成に当たって、下記の方々に御指導・御協力して頂いた。  
  
〈現地指導〉  
　福田孝司・手嶋義之・山本　清（鳥取県文化財保護審議会委員）  
　田中義昭（鳥根大学法文学部教授）  
　浅川滋男（奈良国立文化財研究所主任研究官）  
　松田潔（鳥取県教育委員会文化課）  
  
〈石材鑑定〉  
　赤木三郎（鳥取大学教育学部教授）  
  
〈鉄器鑑定〉  
　村上隆・小林謙一（奈良国立文化財研究所）  
  
〈指導・助言〉  
　赤沢秀則（鹿島町教育委員会）  
　真田廣之・根鈴智津子・森下哲哉（倉吉市教育委員会）

根鈴輝夫（倉吉博物館）

中野知照（日本海文化を考える会）

西尾克己、宮本正保（島根県教育委員会埋蔵文化財調査センター）

松山智弘（出雲市教育委員会）

## 凡　例

1. 発掘調査時における遺構番号と報告書記載の遺構番号は、基本的に一致する。
2. 本報告書における遺構記号は次のように表す。また、竪穴住居跡・ピット群のピット番号は、調査時のものから変更したものがある。

S I : 竪穴住居跡 S B : 堀立柱建物跡 S K : 土坑・土壙 S D : 溝状遺構 S S : 段状遺構  
S X : 墳葬施設 P : 柱穴・ピット
3. 本報告書における実測図は下記の縮尺で掲載した。
  - (1) 遺構図——竪穴住居跡：1/30・1/60、堀立柱建物跡：1/60、土坑・土壙：1/30・1/40・1/60、溝状遺構：1/60・1/100、段状遺構：1/60・1/100、ピット群：1/60・1/100、床面遺物出土状況：1/4・1/30、土器溜り：1/30、埋葬施設：1/40、古墳：1/60・1/200、主体部：1/30
  - (2) 遺物実測図——土器：1/3・1/6・1/8、土玉：1/2、鉄製品：1/2、石器：1/1・1/3・1/4、玉製品：1/1、銅鏡：1/1
4. ピットの規模は(長径×短径×深さ)cmで表した。竪穴住居跡の規模は、壁溝を除いた床面の規模である。古墳墳丘の規模は、墳端(裾部)までの計測値である。
5. 遺構図における表示は以下の通りである。

■：焼土面、△：貼床、▲：焼土、◆：炭化物、●：炭・灰、■：灰色粘土、■：赤色顔料、△：砂、□：旧衣、  
●：土製品、△：鉄製品、□：石製品、◎：玉製品、◆：炭化種子
6. 本報告書における遺物記号は次のように表す。

P o : 土器・土製品 S : 石製品 F : 鉄製品 J : 玉製品 B : 銅製品
7. 上器実測図のうち、弥生土器・土師器は断面白抜き、須恵器・陶磁器は断面黒塗りで表現した。遺物実測図における記号は以下の通りにする。

→：ケズリの方向(砂粒の動きで判断した)、■：赤色塗彩、……：擦り範囲、——：敲打範囲  
△：敲打面、▲：擦り面、●P o : 床面出土土器、●S : 床面出土石器、●F : 床面出土鉄製品
8. 遺跡名は次の略号を用いた。南谷大山遺跡=MO。
9. 遺物には、遺跡名、地区名、遺構名もしくはグリッド名、取り上げ番号、取り上げ年月日を基本的に銘記した。実測した遺物については、実測者の頭文字を使った実測者番号(N-1, S-1等)を2×5mm程度のシールに記し、それを個体ごとに貼り付け、実測原図にもその番号を記した。
10. 遺物観察表については以下の通りとする。
  - (1) 法量の欄の番号は次の通りとする。

①口径②器高③胸部最大径④底部径⑤複合口縁立ち上がり高⑥須恵器杯蓋稜径⑦須恵器杯蓋口縫高⑧須恵器杯身基部径⑨須恵器杯身立ち上がり高である。その他の計測値については、その都度計測位置を記載した。また、実測の際に復元した計測値には、数値の後に※印、残存値は同様に△印を付した。
  - (2) 手法の欄に記載されている成形・調整・施文の方向は、実測値で表された方向である。
  - (3) 備考欄に記載してあるKR-1等の番号は実測者番号である。

# 目 次

序 文  
序 言  
例 例  
凡 例  
目 次

## 第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯	(牧本)	1
第2節 調査の経過と方法	(牧本)	1
第3節 調査体制	(牧本)	4

## 第2章 位置と環境

第1節 地理的環境	(岸本)	5
第2節 歴史的環境	(牧本)	6

## 第3章 南谷大山遺跡の調査

第1節 南谷大山遺跡C-I区の概要	(牧本)	10
第2節 南谷大山遺跡C-I区の調査結果	(牧本・山根)	11
第3節 南谷大山遺跡C-II区の概要	(牧本)	73
第4節 南谷大山遺跡C-II区の調査結果	(岸本・牧本)	73
第5節 南谷大山遺跡C-III区の概要	(牧本)	94
第6節 南谷大山遺跡C-III区の調査結果	(牧本)	94
第7節 南谷大山遺跡C-IV区の概要	(牧本)	103
第8節 南谷大山遺跡C-IV区の調査結果	(岸本)	103
第9節 南谷大山遺跡C-V区の概要	(牧本)	111
第10節 南谷大山遺跡C-V区の調査結果	(岸本・牧本)	111

## 第4章 南谷29号墳の調査

第1節 南谷29号墳の調査結果	(岸本)	151
-----------------	------	-----

## 第5章 遺構・遺物の検討

第1節 土器編年について	(牧本)	158
第2節 玉製品について	(牧本)	171
第3節 鉄製品について	(牧本)	171
第4節 墓穴住居跡について	(岸本・牧本)	173
第5節 南谷大山遺跡の変遷・性格と集団の動向	(牧本)	176

## 註・参考文献

南谷大山遺跡出土遺物観察表	(岸本・牧本)	188
南谷大山遺跡C S 19出土臼玉一覧表	(牧本)	219
特論1 烧失型穴住居の復原—AS 101とBS 120にみる二段伏屋式構造—	浅川滋男	223
特論2 南谷大山遺跡集落跡から出土した炭化物の樹種	古川郁夫・矢部 浩	227
特論3 南谷大山遺跡自然科学分析	パリノ・サーヴェイ株式会社	231
特論4 鳥取県・南谷大山遺跡土坑(貯蔵穴)内埋土の花粉分析	古環境研究所	244

## 挿 図 目 次

挿図 1	南谷大山遺跡と道路建設ルート	3	挿図46	南谷大山遺跡CSK09遺構図	55
挿図 2	羽舎町の位置	5	挿図47	南谷大山遺跡CSK10遺構図	56
挿図 3	周辺遺跡分布図	7	挿図48	南谷大山遺跡CSK11遺構図	56
挿図 4	南谷大山遺跡C区全体図	10	挿図49	南谷大山遺跡CSK12遺構図	57
挿図 5	南谷大山遺跡CSI01出土遺物実測図	11	挿図50	南谷大山遺跡CSK13遺構図	58
挿図 6	南谷大山遺跡CSI01遺構図	12	挿図51	南谷大山遺跡CSS04遺構図	60・61
挿図 7	南谷大山遺跡CSI03遺構図	13	挿図52	南谷大山遺跡CSS04出土遺物実測図(1)	62
挿図 8	南谷大山遺跡CSI03出土遺物実測図	14	挿図53	南谷大山遺跡CSS04出土遺物実測図(2)	63
挿図 9	南谷大山遺跡CSI04・08遺構図	16・17	挿図54	南谷大山遺跡CSS05遺構図	64
挿図10	南谷大山遺跡CSI04貼床除去後遺構図	18・19	挿図55	南谷大山遺跡CSS05出土遺物実測図	64
挿図11	南谷大山遺跡CSI04出土遺物実測図(1)	21	挿図56	南谷大山遺跡CSD01・05・07・08・09遺構図	66・67
挿図12	南谷大山遺跡CSI04出土遺物実測図(2)	22	挿図57	南谷大山遺跡CSD06遺構図	68
挿図13	南谷大山遺跡CSI04出土遺物実測図(3)	23	挿図58	南谷大山遺跡CSD02遺構図	68
挿図14	南谷大山遺跡CSI08出土遺物実測図	23	挿図59	南谷大山遺跡CSX01遺構図	69
挿図15	南谷大山遺跡CSI05出土遺物実測図(1)	25	挿図60	南谷大山遺跡CSX01出土遺物実測図	70
挿図16	南谷大山遺跡CSI05遺構図	26・27	挿図61	南谷大山遺跡CSX02出土遺物実測図	70
挿図17	南谷大山遺跡CSI05出土遺物実測図(2)	28	挿図62	南谷大山遺跡CSX02遺構図	70
挿図18	南谷大山遺跡CSI05出土遺物実測図(3)	29	挿図63	南谷大山遺跡CSX03遺構図	71
挿図19	南谷大山遺跡CSI06遺構図	30・31	挿図64	南谷大山遺跡CSX03出土遺物実測図	71
挿図20	南谷大山遺跡CSI06内SK1遺構図	30・31	挿図65	南谷大山遺跡C-I区遺構外出土遺物実測図(1)	72
挿図21	南谷大山遺跡CSI06出土遺物実測図(1)	32	挿図66	南谷大山遺跡C-I区遺構外出土遺物実測図(2)	72
挿図22	南谷大山遺跡CSI06出土遺物実測図(2)	33	挿図67	南谷大山遺跡CS102遺構図	74・75
挿図23	南谷大山遺跡CSI07出土遺物実測図(1)	35	挿図68	南谷大山遺跡CS102出土遺物実測図	76
挿図24	南谷大山遺跡CSI07遺構図	36・37	挿図69	南谷大山遺跡CS102南西側土器溜り 出土遺物実測図	77
挿図25	南谷大山遺跡CSI07出土遺物実測図(2)	38	挿図70	南谷大山遺跡CS102貼床除去後遺構図	78
挿図26	南谷大山遺跡CSI11遺構図	39	挿図71	南谷大山遺跡CS102南西側土器溜り 検出状況図	78
挿図27	南谷大山遺跡CSI11出土遺物実測図(1)	40	挿図72	南谷大山遺跡CS109遺構図	80
挿図28	南谷大山遺跡CSI11出土遺物実測図(2)	41	挿図73	南谷大山遺跡CS109出土遺物実測図	80
挿図29	南谷大山遺跡CSI12・15出土遺物実測図(1)	43	挿図74	南谷大山遺跡CS110遺構図	81
挿図30	南谷大山遺跡CSI12・15遺構図	44・45	挿図75	南谷大山遺跡CS110出土遺物実測図	82
挿図31	南谷大山遺跡CSI12出土遺物実測図(2)	46	挿図76	南谷大山遺跡CSB01出土遺物実測図	82
挿図32	南谷大山遺跡CSI13遺構図	46	挿図77	南谷大山遺跡CSB01遺構図	83
挿図33	南谷大山遺跡CSI13出土遺物実測図	47	挿図78	南谷大山遺跡CSK02遺構図	83
挿図34	南谷大山遺跡CSI14遺構図	48	挿図79	南谷大山遺跡CSK04遺構図	84
挿図35	南谷大山遺跡CSI14土器検出状況図	48	挿図80	南谷大山遺跡CSK04出土遺物実測図	84
挿図36	南谷大山遺跡CSI14出土遺物実測図(1)	49	挿図81	南谷大山遺跡CSK05遺構図	84
挿図37	南谷大山遺跡CSI14出土遺物実測図(2)	50	挿図82	南谷大山遺跡CSK05出土遺物実測図	84
挿図38	南谷大山遺跡CSI14炭化物出土状況図	50	挿図83	南谷大山遺跡CSK06遺構図	85
挿図39	南谷大山遺跡CSI16遺構図	51	挿図84	南谷大山遺跡CSK07遺構図	86
挿図40	南谷大山遺跡CSI16出土遺物実測図	52	挿図85	南谷大山遺跡CSK07出土遺物実測図	86
挿図41	南谷大山遺跡CSB02遺構図	53	挿図86	南谷大山遺跡CSK14遺構図	87
挿図42	南谷大山遺跡CSK01遺構図	54	挿図87	南谷大山遺跡CSS02遺構図	88
挿図43	南谷大山遺跡CSK01出土遺物実測図	54	挿図88	南谷大山遺跡CSS03出土遺物実測図(1)	89
挿図44	南谷大山遺跡CSK03遺構図	54			
挿図45	南谷大山遺跡CSK06遺構図	55			

插図83	南谷大山遺跡CSS03遺構図	90・91
插図84	南谷大山遺跡CSS03出土遺物実測図(2)	92
插図91	南谷大山遺跡C-II区遺構外出土遺物実測図	93
插図92	南谷大山遺跡CS03-04・ビット群遺構図	95・97・98
插図93	南谷大山遺跡C-III区既ち割り土層断面図	99-100・101
插図94	南谷大山遺跡C-III区遺構外出土遺物実測図	102
插図95	南谷大山遺跡CSS06P1内遺物検出状況図	103
插図96	南谷大山遺跡CSS06遺構図	104・105
插図97	南谷大山遺跡CSS06出土遺物実測図	104・105
插図98	南谷大山遺跡CSD12出土遺物実測図	106
插図99	南谷大山遺跡CSD12・16遺構図	107
插図100	南谷大山遺跡C-N区遺構外出土遺物実測図(1)	108
插図101	南谷大山遺跡C-IV区遺構外出土遺物実測図(2)	109
插図102	南谷大山遺跡C-N区遺構外出土遺物実測図(3)	110
插図103	南谷大山遺跡CSI17遺構図	112・113
插図104	南谷大山遺跡CSI17出土遺物実測図(1)	114
插図105	南谷大山遺跡CSI17出土遺物実測図(2)	115
插図106	南谷大山遺跡CSI17出土遺物実測図(3)	116
插図107	南谷大山遺跡CSI18出土遺物実測図	117
插図108	南谷大山遺跡CSI18遺構図	118
插図109	南谷大山遺跡CSI19遺構図	119
插図110	南谷大山遺跡CSI19白玉検出状況図	120
插図111	南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(1)	121
插図112	南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(2)	122
插図113	南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(3)	122
插図114	南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(4)	123
插図115	南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(5)	124
插図116	南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(6)	125
插図117	南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(7)	126
插図118	南谷大山遺跡CSI20遺構図	128・129
插図119	南谷大山遺跡CSI20出土遺物実測図(1)	130
插図120	南谷大山遺跡CSI20出土遺物実測図(2)	131
插図121	南谷大山遺跡CSI20出土遺物実測図(3)	132
插図122	南谷大山遺跡CSI20出土遺物実測図(4)	133
插図123	南谷大山遺跡CSI21遺構図	134
插図124	南谷大山遺跡CSI21出土遺物実測図(1)	134
插図125	南谷大山遺跡CSI21出土遺物実測図(2)	135
插図126	南谷大山遺跡CSI21炭化物出土状況図	136
插図127	南谷大山遺跡CSK15遺構図	136
插図128	南谷大山遺跡CSK16遺構図	137
插図129	南谷大山遺跡CSK17遺構図	137
插図130	南谷大山遺跡CSK18遺構図	138
插図131	南谷大山遺跡CSK18出土遺物実測図	138
插図132	南谷大山遺跡CSK19遺構図	138
插図133	南谷大山遺跡CSK19出土遺物実測図	138
插図134	南谷大山遺跡CSD10出土遺物実測図	139
插図135	南谷大山遺跡CSD13出土遺物実測図	139
插図136	南谷大山遺跡CSD10-11-13-14-15-17遺構図	140-141・142
插図137	南谷大山遺跡CSD17出土遺物実測図	143
插図138	南谷大山遺跡C-V区墓石・ビット群出土遺物実測図(1)	144
插図139	南谷大山遺跡C-V区墓石・ビット群遺構図	144
插図140	南谷大山遺跡C-V区墓石・ビット群出土遺物実測図(2)	145
插図141	南谷大山遺跡C-V区サブトレンチ土層断面図	145
插図142	南谷大山遺跡C-V区遺構外出土遺物実測図(1)	146
插図143	南谷大山遺跡C-V区遺構外出土遺物実測図(2)	147
插図144	南谷大山遺跡C-V区遺構外出土遺物実測図(3)	148
插図145	南谷大山遺跡CSS01遺構図	149
插図146	南谷29号埴垣丘測量図	152
插図147	南谷29号埴塁土除去後平面図	152
插図148	南谷29号埴土層断面図	153・154
插図149	南谷29号埴周溝内土器出土状況図	153・154
插図150	南谷29号埴主体部遺構図	155・156
插図151	南谷29号埴出土遺物実測図(1)	155・156
插図152	南谷29号埴主体部墓壙実測図	157
插図153	南谷29号埴出土遺物実測図(2)	157
插図154	南谷大山遺跡土器縦年表(1)	165・166
插図155	南谷大山遺跡土器縦年表(2)	167・168
插図156	南谷大山遺跡土器縦年表(3)	169・170
插図157	南谷大山遺跡BSI38出土有孔円盤	171
插図158	白玉分頭冠	171
插図159	南谷大山遺跡道構配置図	177
插図160	南谷大山遺跡道構配置図(弥生時代後期)	178
插図161	南谷大山遺跡道構配置図(古墳時代前期)	180
插図162	南谷大山遺跡道構配置図(古墳時代中期)	182

## 挿 表 目 次

挿表 1	南谷大山遺跡 C S S 04 ピット群一覧表	…59	挿表 5	南谷大山遺跡土器縄年表 対照表	…154
挿表 2	南谷大山遺跡 C S S 03 ピット群一覧表	…89	挿表 6	遺跡・時期別住居分布表	…173
挿表 3	南谷大山遺跡 C - III 区 ピット群一覧表	…95	挿表 7 ~ 37	南谷大山遺跡出土遺物観察表	…108 ~ 218
挿表 4	南谷大山遺跡 C 区 竪穴住居跡一覧表	…150	挿表 38 ~ 41	南谷大山遺跡 C S I I I 出土日記一覧表	…219 ~ 222

## 図 版 目 次

図版 1	1993年度南谷大山遺跡調査前（北上空より） 調査前近景（東より）		図版 10	C S K 03 完掘状況（北西より） C S K 08 完掘状況（東より） C S K 09 完掘状況（東より） C S K 11 完掘状況（北西より）
図版 2	C - I 区 南部（西上空より） C - I 区 北部（東上空より） C S I 01 完掘状況（北より） C S I 01 完掘状況（東より）		図版 11	C S K 12 完掘状況（北より） C S S 04 高杯（Po40）出土状況（南西より） C S S 04 床面蓋（Po48）出土状況（北より） C S S 05 完掘状況（西より）
図版 3	C S I 03 完掘状況（北西より） C S I 04 ~ 08 完掘状況（東より） C S I 04 貼床除去後（東より） C S I 04 床面甃（Po 4）出土状況（北西より）		図版 12	C S D 02 完掘状況（北より） C S X 01 完掘状況（東より） C S X 01 完掘状況（東より） C S X 01 完掘状況（東より） CSX01 小型丸底甃（Po1）出土状況（北より）
図版 4	C S I 05 完掘状況（北西より） C S I 05 床面甃（Po 1）出土状況（東より） C S I 05 壁（Po 7）出土状況（北東より） C S I 06 完掘状況（北西より）		図版 13	C S X 02 検出状況（東より） C S X 02 完掘状況（東より） C S X 02 検出器（Po 1）出土状況（東より） C S X 03 完掘状況（東より）
図版 5	C S I 06 壁（Po 8 ~ Po 16）出土状況（北西より） C S I 06 石材出土状況（北より） C S I 07 完掘状況（北西より） CSI07 土器（Po8 ~ Po10 ~ Po11）出土状況 （南より）		図版 14	C - II 区 全景（北上空より） C S I 02 完掘状況（北より） C S I 02 完掘状況（西より） C S I 02 貼床除去後（西より）
図版 6	C S I 11 完掘状況（南より） C S I 11 遺物出土状況（西より） C S I 11 床面甃（F 4）出土状況（北より） C S I 12 ~ 15 完掘状況（南より）		図版 15	C S I 02 南西側土器埋り検出状況（西より） C S I 03 完掘状況（北より） C S I 03 P 1 内甃（Po 1）出土状況（東より） C S I 10 完掘状況（東より）
図版 7	C S I 12 床面甃（Po 3）出土状況（東より） C S I 12 床面鐵器（F 5）出土状況（東より） C S I 13 完掘状況（北西より） C S I 14 完掘状況（西より）		図版 16	C S I 10 P 1 内甃（Po 1）出土状況（南より） C S B 01 完掘状況（東より） C S B 01 P 3 内石材検出状況（南より） C S K 02 完掘状況（北東より）
図版 8	C S I 14 床面遺物出土状況（北より） C S I 14 遺物出土状況（北より） CSI14 床面甃（Po2 ~ Po3 ~ Po8）出土状況 （南東より） C S I 18 完掘状況（北西より）		図版 17	C S K 04 完掘状況（西より） C S K 05 完掘状況（北より） C S K 06 完掘状況（東より） C S K 07 完掘状況（北西より）
図版 9	CSI16 床面甃（Po1）・石材出土状況（東より） C S I 16 床面鉢（Po 5）出土状況（北より） C S B 02 完掘状況（北より） C S K 01 完掘状況（東より）		図版 18	C S K 07 土層断面（南より） C S K 14 完掘状況（西より） C S S 02 完掘状況（北東より） C S S 03 完掘状況（南より）
			図版 19	C - III 区 全景（西上空より）

C S D 03・04完掘状況（北より）	図版28 南谷29号墳墳丘断面削盛土状況（西より）
C - V 区全景（西上空より）	南谷29号墳主体部石棺材検出状況（西より）
C S S 06完掘状況（西より）	南谷29号墳主体部完掘状況（西より）
図版20 CSS06P1内壇(Po1・Po2) 出土状況 （東より）	南谷29号墳北周溝内器台(Po5) 出土状況 （北より）
C S D 12完掘状況（北より）	図版29 C S I 01・C S I 03・C S I 04出土遺物
C - V 区全景（北上空より）	図版30 C S I 04・C S I 08・C S I 05出土遺物
C - V 区北部（北西より）	図版31 C S I 05出土遺物
図版21 C - V 区北部（東より）	図版32 C S I 05・C S I 06出土遺物
C S I 17-1・2完掘状況（京より）	図版33 C S I 06・C S I 07出土遺物
C S I 17-3完掘状況（東より）	図版34 C S I 07・C S I 11出土遺物
C S I 17-4完掘状況（京より）	図版35 C S I 11・C S I 12出土遺物
図版22 C S I 18完掘状況（西より）	図版36 C S I 12・C S I 13・C S I 14出土遺物
C S I 19完掘状況（西より）	図版37 C S I 14・C S I 16出土遺物
C S I 19東壁際土器出土状況（西より）	図版38 C S I 16・C S K 01・C S S 04出土遺物
C S I 19石製有孔円錠(J1)出土状況 （西より）	図版39 CSS04・CSS05・CSX05・C-I区遺構外・ CSI02出土遺物
図版23 C S I 19白玉出土状況（西より）	図版40 CSI02・CSI09・CSI10・CSK04・CSK07 出土遺物
C S I 20完掘状況（南西より）	図版41 CSS03・C-II区遺構外・C-III区遺構外 出土遺物
C S I 20遺物出土状況（東より）	図版42 C-III区遺構外・CSS06・CSD12・C-IV区 遺構外出土遺物
C S I 20土器出土状況（南東より）	図版43 C-IV区遺構外・C S I 17出土遺物
図版24 C S I 21完掘状況（東より）	図版44 C S I 17・C S I 18・C S I 19出土遺物
C S I 21遺物出土状況（東より）	図版45 C S I 19出土遺物
C S K 15完掘状況（北西より）	図版46 C S I 19・C S I 20出土遺物
C S K 16完掘状況（北より）	図版47 C S I 20出土遺物
図版25 C S K 17完掘状況（南より）	図版48 C S I 20出土遺物
C S K 18遺物(Po1・Po2)出土状況（北東より）	図版49 C S I 20・C S I 21出土遺物
C S K 19土層断面（南より）	図版50 CSI21・CSK18・CSK19・CSD10・CSD13・ CSD17出土遺物
C S D 10・11完掘状況（北より）	図版51 C-V区集石・ビット群・C-V区遺構外出土遺物
図版26 C S D 11完掘状況（北より）	図版52 C-V区遺構外出土遺物
C S D 17完掘状況（南西より）	図版53 C-V区遺構外・南谷29号墳出土遺物、軽石一括
C S D 17完掘状況（北より）	
C - V 区集石・ビット群土器出土状況（京より）	
図版27 C - VI区全景（北上空より）	
C S S 01完掘状況（北東より）	
南谷29号墳完掘状況（西上空より）	
南谷29号墳周溝完掘状況（北より）	

## 特論図版目次

特論 2-1 ツブラシイ・クスノキ	特論 2-8 スダジイ・スダジイ・スダジイ
特論 2-2 スギ・スダジイ	特論 2-9 スダジイ・シラカシ
特論 2-3 イヌシデ・スダジイ・スダジイ	特論 2-10 ホオノキ
特論 2-4 ツバキ・ツブラシイ	特論 3-1 植物組成の顕微鏡写真
特論 2-5 シラカシ・ネジキ	特論 3-2 植物珪穀体の顕微鏡写真
特論 2-6 スダジイ・スダジイ・スダジイ	特論 3-3 種子の実体顕微鏡写真
特論 2-7 クスノキ・スダジイ	特論 4 南谷大山遺跡土坑（貯蔵穴）内 埋土の花粉・孢子遺体

# 第1章 調査の経緯

## 第1節 調査に至る経緯

- 羽合道路** 烏取県中部地域の交通混雑緩和を図るために、1973年より一般国道9号改築工事として、北条バイパスの建設が進められ、1990年11月に全面開通した。さらに、この工事の一環として羽合道路が1986年度に自動車専用道路として都市計画決定され、事業に着手し、その後、1988年度に高規格道路として計画変更された。この道路は、現道9号の泊村園地内のインターチェンジから、羽合町長瀬のインターチェンジを抜け、北条バイパスに結ぶものである。
- 試掘調査** 計画地内とその周辺は、周知の遺跡が密集する地域であるため、建設に先立ち計画地内の遺跡・構造の広がりを確認する必要性が生じた。そして、1988年～1990年度に亘って羽合町教育委員会によって、国庫補助事業として各丘陵上を中心に試掘調査が行われた。その結果、今年度調査区内においてT4-2で古墳周溝、T9で竪穴住居跡が検出されている。
- 発掘調査** 試掘調査の結果を受けて、1991年～1992年にかけて中部埋蔵文化財調査事務所では、南谷大山遺跡A区、B区、及びC区の一部【大山所在遺跡（イ）、（ロ）、（ハ）の一部】を調査した。その結果、弥生時代後期後半～古墳時代中期後後にかけての竪穴住居跡49棟（建て替えを含むと72棟）、掘立柱建物跡3棟、土坑・土壙29基、段状造構4基、溝状造構8条、ピット群4カ所、及び大量の土器・石器類、弥生時代の竪穴住居内出土では県内3例目の小型仿製鏡、また、古墳時代中期後半の竪穴住居内では、西日本でも2例目の鉄錠と考えられる鉄製品を検出することができ、この地域における集落の性格・構造・変遷および土器編年を考える上で大変貴重な資料を提供することができた。
- また、同調査区内において古墳4基を調査した。古墳は、南谷古墳群に属し南谷24号墳～26号墳・28号墳と命名した。このうち、南谷24号墳では墳丘内に上下に並ぶ2基の埋葬施設が検出され、被葬者の性格・墳丘墓造形機を考る上で大変貴重な資料を提供することができた。
- 調査計画** こうした状況のもと、建設省中国地方建設局倉吉工事事務所は、鳥取県教育委員会文化課と協議し、財團法人鳥取県教育文化財団に記録保存のための事前調査を委託した。これによって当文化財団が発掘計画を作成し、それに基づき、中部埋蔵文化財調査事務所が発掘調査を担当する事になった。
- 1993年度は、南谷大山遺跡C区【大山所在遺跡（ハ）】の残り8570m<sup>2</sup>を調査する予定であったが、調査終了時には8794m<sup>2</sup>に変更となった。

## 第2節 調査の経過と方法

1993年度は、まずワールド航測コンサルタント株式会社に委託して調査前の地形測量を行った。

そして、前年度にならって同様に調査区全体を、国土座標に載るように10mグリッドに区画し、基準杭を打った。その結果南北軸はC～Q、東西軸は18～32となった。グリッド名（以下Gと略した）は、南西側の杭の名称を取って名づけた。

調査は4月5日から始め、構造の広がり及び最終的な調査区の範囲を確認するために、E-23 G、F-21 G、F-24 G、G-20 G、G-23 G、H-20 G、I-25 G、J-25 G、K-25 G、K-26 G、K-27 G、L-24 G、L-28 G、M-25 G、M-26 G、M-27 G、M-28 G、M-29 G、N-23 G、N-24 G、N-28 G、O-23 G、O-29 G、O-30 G、O-32 G、P

-31 Gに計21本のトレンチを入れた。

その結果、M-23 Gでは堅穴住居跡、ピット、焼土面及び上飾器多数を検出するに至り、遺構の広がりが谷底部にまで及ぶ事が判明した。また、I-25 G・J-25 Gで土坑を検出し、遺構の範囲がさらに南側に延びる事が判明した。このため、鳥取県教育委員会文化課を通して建設省と協議した結果、調査範囲の拡張が決定した。しかし、西側斜面に設定したトレンチでは、遺構の存在が確かめられず、この部分を調査範囲から除いた。

拡張部分の地形測量は、西側谷部については当事務所によって行った。以上で準備作業を終了し、遺構検出作業に取りかかった。

表土剥ぎは、4月12日から古墳部分を除いて重機によって行ったが、地形の起伏が激しくまた、排土場所が限られたため2台の重機を使用し、6月3日に終了した。西側尾根部(C-I-II区)の拡張部は、人力によって行った。さらに、西側谷部(C-V区)では、北側の調査区際でCS120が半分検出され、残りの箇所には重機による排土が高く積まれており、この部分を検出するために11月10日から11月12日まで、再び重機による排土除去および表土剥ぎ作業を行った。

遺構検出作業によって、弥生時代後期後半から古墳時代中期後半の堅穴住居跡21棟(重複、建て替えを合せると26棟)、掘立柱建物跡2棟、土坑・土壙19基、段状遺構6カ所、溝状遺構17条、ピット群2カ所、埋葬施設3基、占墳時代前期前半の古墳1基を確認した。

特に堅穴住居跡は、比較的まとまった状態で検出された。そこで、昨年度に引き続き指導助言を仰ぎ、調査を進めることにした。堅穴住居の構造の問題については、奈良国立文化財研究所浅川滋男主任研究官に指導を仰ぎ、集落の構成の問題については、鳥根大学法文学部田中義昭教授の指導を仰いだ。

古墳については、新発見のため南谷古墳群の一連の番号をつけ、南谷29号墳と命名した。盛土がわずかに存しておらず、墳丘の断ち割りを行ったところ、大半が破壊されていたが、旧表土面を掘り込むかたちで箱式石棺が検出されている。

遺構の個別写真は、ローリングタワーからおよびラジコンヘリコプターによって行い、遺跡全体の写真は、セスナ機による空中撮影を行った。

本遺跡の1993年度調査は、最終地形実測をワールド航測コンサルタント株式会社に業者委託して、11月29日に終了した。

#### 調査日誌抄

4月5日	南谷大山遺跡調査開始	9月1日	C S X02完掘
4月13日	強風の下、南谷29号墳表土剥ぎ	9月3日	古風13号接近のため作業中止
4月23日	南谷29号墳北周溝内で轄部P-5出土	9月11日	ラジコンヘリコプターによる写真撮影
4月26日	C S 02'未掘	9月13日	C S I16完掘写真 C S D03実測終了
5月12日	C S I104検出、最高気温28℃を記録	9月14日	鳥取県文化財保護審議会、
5月13日	C S I01完掘、鳥取で29.9℃を記録	9月19日	山本清氏・鶴田季司氏・手嶋義之氏、現場を視察
5月19日	ベルトコンベアー設置	9月24日	C S S06 P1内柵Po1・Po2写真撮影、実測中
5月26日	南谷29号墳主体部完掘状況写真	9月25日	奈良国立文化財研究所浅川滋男主任研究官、調査を指導
5月29日	梅雨入り、強風(最大瞬間風速32.2m)のため午前中で作業中止	9月29日	倉吉市立明倫小学校6年生、南谷大山遺跡を見学
6月2日	梅雨入り、強風(最大瞬間風速32.2m)のため午前中で作業中止	10月6日	C S I19で古木出土
6月3日	C S I05実測、重機剥き終了、休憩用テント復旧	10月9日	南谷大山遺跡現地説明会
6月4日	C S I03実測	10月22日	ベルトコンベアー撤収
6月11日	C S I04埋土探査、C S K04完掘	10月28日	C - V区地形測量終了
6月21日	C S B01完掘写真、C S I10検出	11月1日	C S I21完掘
7月9日	C S B02'未掘	11月2日	航空写真
7月29日	C S I05・06・07完掘写真	11月5日	鳥根大学法文学部田中義昭教授、現場を指導、ラジヘリ写真
7月30日～8月3日	古風6号等のため作業中止(記録的凍度)	11月8日	C S I18・19、C - V区集石・ピット群実測終了
8月9日	C S I14'実測調査、個別写真、C S K10剥り下げ	11月10日～12日	C - V区重機剥き
8月10日	古風7号接近のため作業中止	11月15日	拡張部(C S I20・C S D17)検出
8月23日～26日	残暑、夏の暑さ戻る、鳥取で32.5℃(26日)	11月24日	積雪のため作業中止
		11月26日	C S I20・C S D17完掘
		11月29日	本年度調査終了

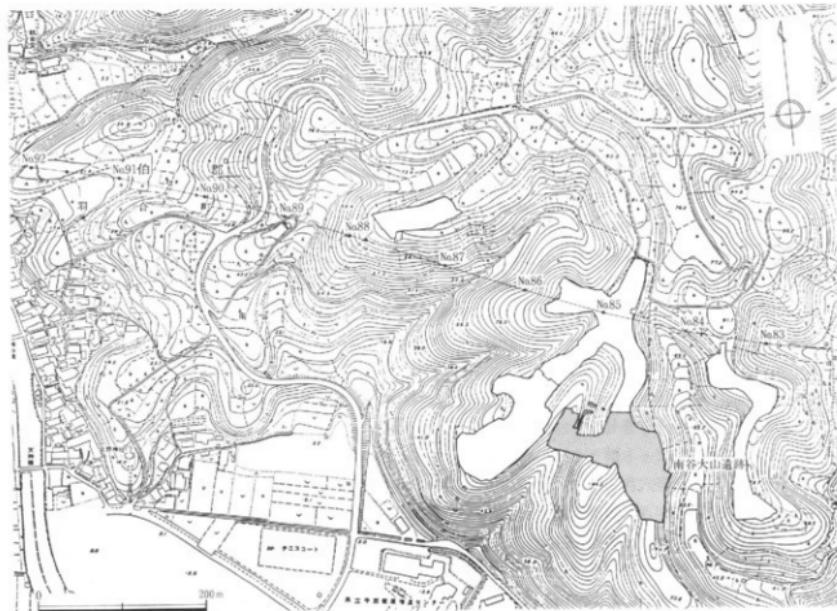


図1 南谷大山遺跡と道路建設ルート



写真1 重機表土剥ぎ作業



写真2 ラジコンヘリコプターによる撮影



写真3 整理作業風景



写真4 整理作業風景

### 第3節 調査体制

調査は鳥取県教育委員会、鳥取県埋蔵文化財センターの指導のもとに下記の体制で実施された。

○調査主体 財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長	西尾邑次（鳥取県知事）
副理事長兼常務理事	入江圭司
事務局長	若松良雄
財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター	
所 長	土井田憲治（鳥取県教育委員会文化課長）
次 長	山根豊己
調査指導係長	田中弘道（鳥取県埋蔵文化財センター次長）
庶務係長	山根夏男（鳥取県埋蔵文化財センター庶務係長）
主任事務職員	木下利雄
事 務	福田妙子
○調査担当 財団法人鳥取県教育文化財団 中部埋蔵文化財調査事務所	
所 長	入江輝三
主任調査員	牧本哲雄
調 査 員	岸本浩忠
調査補助員	山根雅美
整 理 員	浦木伊都子

○調査協力

下記の方々に発掘作業員、整理作業員として協力していただいた。

朝倉郁雄、生田恵子、市橋貴志子、伊藤義輝、入江淑恵、岩室紀男、植原昭典、大鳴貞夫、大鳴由起枝、小椋美佳、狩野仁女、河口智津子、吉川久子、木戸孝行、倉益和美、藏本重信、鳴崎久子、清水房子、杉原光雄、杉村秀吉、高浜新策、竹田 肇、谷本美智恵、高浜とし子、津嶋時三、角田磨智子、中田 都、中村晶宏、中村勝恵、西本てる子、野崎悦子、浜口みち子、藤田広子、藤田恭人、前 宮子、真壁 均、松井久雄、松田悦雄、松岡朋子、松田澄子、松本美重、光井芳子、村口いつ子、森脇幸子、安田成行、山崎 巖、山田暉美、山本博子、若杉道子、

（五十音順、敬称略）



写真5 発掘調査参加者一同

## 第2章 位置と環境

### 第1節 地理的環境

**鳥取県** 鳥取県は本州の西部、中国地方の北東部に位置する。北は日本海、東は兵庫県、南は標高1200mを越える中国山地を県境として岡山県・広島県、西は島根県と接する。鳥取県の県域は東西126km、南北61.85km、面積349.269km<sup>2</sup>で、日本全体の約1%を占める。鳥取県は鳥取市を中心とする京部、倉吉市を中心とする中部、そして米子市・境港市などからなる西部の三地域に分けられる。各地域とも地勢は山がちで、山地が県総面積の86.3%を占める。それぞれの地域には千代川（東部）、天神川（中部）、日野川（西部）の県下を代表する河川が流れ、その下流域に東部の鳥取平野、中部の倉吉・北条・羽合平野、西部の米子平野が発達している。また各平野の海岸線には鳥取平野の鳥取砂丘、北条・羽合平野の北条・長瀬砂丘、米子平野の弓が浜半島などの砂丘、砂洲が発達している。その中でも代表的なものは鳥取砂丘で、東西長15km、南北幅最大2kmの規模を持つ。

**羽合町** 羽合町は、鳥取県の中央部を占める東伯郡の北東に位置し、東には泊村、東郷池をはさんで東郷町、西には天神川を境に北条町、南は倉吉市と接している。北には日本海が、その波頭を光らせている。当町は約7000人の人口、面積12.4km<sup>2</sup>の町域を有する。地形は、標高約100mの馬ノ山より東に連なる低い丘陵、天神川の河口部に発達した長瀬砂丘、天神川から東郷池に向かって広がる羽合平野、そして東郷池とからなる。

**東郷池** 東郷池は、約420haの汽水湖で、かつては日本海の内湾だった。繩文海進の後、河川の上砂の運搬などにより、北条・長瀬砂丘が発達した。その結果、海口が塞き止められてできた潟湖である。最深部は4.6mで、湖底より温泉が湧き出る。

現在、東郷池には含人川・東郷川・羽衣石川・埴見川が流れ込み、その水は横津川を通して日本海へ至る。古代においては天神川も、流路の変動はあったものの同池に注いでいた。同池には淡水魚だけでなく、橋津川を逆流して流入する海水にのって海産の魚介類が入る。

**調査地域** 前述の東郷池の北東にある丘陵から、東郷池に向かって南に伸びる狭い尾根上に存在するのが、南谷大山遺跡・南谷古墳群である。特に南谷大山遺跡・南谷29号墳が所在する尾根上からは、東郷池・羽合平野・日本海はもとより、遠く島根半島まで視野に入れることができる。また、最近の調査では同遺跡の谷部においても、集落が営まれていたことがわかっている。



図2 羽合町の位置

## 第2節 歴史的環境

- 旧石器時代** 東郷池周辺に限らず鳥取県において遺構を作り旧石器遺跡は確認されていないが、大山山麓の丘陵上でいくつかの旧石器が見つかっている。中部地区では、関金町野津三の黒曜石製ナイフ型石器、倉吉市和田の石刃、倉吉市上神・鋤の細石刀石核、倉吉市国府の搔器、倉吉市中尾遺跡の国府型のナイフ型石器などである。このうち、野津三のナイフ型石器・中尾遺跡のナイフ型石器は県下では唯一のローム層中の発見であり、大変貴重なものである。
- 縄文時代** 縄文時代早創期に盛行するとされる隆嶽文土器群は県内では発見されていないが、石器類は二十数カ所で確認されている。中部地区では、有茎尖頭器が大栄町穂波・東伯町櫻下・関金町鶴ヶ平などで見つかっている。やはり大山山麓の丘陵での発見である。早期でも丘陵・台地上に遺跡が確認されている。倉吉市取木遺跡では竪穴住居跡・炉跡・押型文の深鉢などが見つかっている。東郷池周辺においても、南谷19号墳(2)の旧表下より安山岩製のスクレイバーが見つかっている。また、原第2遺跡(68)では落とし穴と考えられる土坑が見つかっており、縄文時代人が海岸部の丘陵上にも足跡を残していたことが窺える。
- 前期** 前期になると気候が温暖になり海進が進み、この地域では広いラグーンが形成され、この周辺で遺跡が確認されるようになる。北条町島遺跡は、前期から晩期の貝塚を伴う遺跡で、土器のほかに石器、丸木舟、貝、人骨、動物骨が検出されている。丸木舟は県内でも数例知られるに過ぎず、貴重なものである。また、花粉分析の結果や貝の種類から古環境の変化の中期 様子を復元することができるようになった。中期の遺跡は、倉吉市平ル林遺跡・北条町船渡遺跡・羽合町南谷ヒシリ遺跡(1)などが知られるにすぎず、遺跡の密度も少ない。後期になると遺跡の数は増加し、倉吉市津田峰遺跡・東伯町森巣後期第2遺跡・関金町横峯遺跡ではこの時期の住居跡が見つかっている。これらの住居の中央には、石組の炉が作られている。この周辺では、倉吉市天神川下流遺跡・東郷町北福第3遺跡(57)で磨削繩文土器などが表採されている。晩期では、倉吉市松ヶ坪遺跡で配石墓・土器棺墓、土壙が見つかっている。
- 後期** なかでも、土器棺墓は県内においても岸本町林ヶ原遺跡とここにしか見つかっておらず、この時期の葬制を知る貴重な資料である。長瀬高浜遺跡では刻目突帶文土器・北条町北尾遺跡でもこの時期の土器を出土している。時期ははっきりしないが、東郷町別所第2(42)・第6遺跡(43)、福永第3遺跡(60)、野花第2遺跡(36)、白石第1遺跡(51)でも縄文土器が表採されている。泊宮町の山遺跡(73)では、漁撈具として使用されたと考えられる石鍊が見つかっており、縄文人が海や湖で盛んに魚を獲っていたことが想像される。
- 弥生時代** 大陸から伝播した稚作は、日本列島をかなりの速さで北上したと考えられ、鳥取県でも前中期には米子市目久美遺跡で水田跡が確認されている。東郷池周辺では水田跡は確認されていないが、稚作に伴う遺物が各所で見つかっており、弥生時代水田の調査が行われるのも近いものと思われる。この時期には、天神川の沖積作用と日本海からの風によって形成された砂丘上に、長瀬高浜遺跡(15)が現われる。この遺跡は弥生時代前期から中世までの複合遺跡であるが、この時期の遺構には4棟の玉作工房跡のほか、土壙墓などがある。玉作工房跡は日本でも最も古いものの一つである。
- 中期** 長瀬高浜遺跡では中期の土壙墓がわずかに見られるが、後期の遺構は全く見られず、古墳時代に入ってからが最も栄える。東郷池周辺では、この時期の遺跡は長瀬高浜の土壙墓を除いては確認されておらず、遺跡の密度が少なくなっている。かわりに、丘陵上での遺跡の密度が増すと推定される。



挿図3 周辺遺跡分布図

- A. 南谷大山遺跡 1. 南谷ヒジリ遺跡 2. 南谷19~23号墳・南谷夫婦塚遺跡 3. 南谷大ナル遺跡  
 4. 乳母ヶ谷第2遺跡 5. 洋古墳 6. 宇野第1遺跡 7. 宇野第4遺跡 8. 宇野第5遺跡 9. 橋津(馬ノ山)4号墳 10. 乳母ヶ谷遺跡 11. 南谷遺跡 12. 南谷貝塚 13. 和助北遺跡 14. 橋津台場 15. 長瀬高浜遺跡 16. 天神川下流遺跡 17. 大平山古墳群 18. 福庭古墳 19. 小田銅鐸出土地 20. 向山古墳群 21. 福庭遺跡 22. 山根古墳群 23. 藤と埴丘墓 24. 伊木古墳群 25. 隅ヶ坪遺跡 26. 門田遺跡 27. 津浪遺跡 28. 片平4号墳 29. 佐美遺跡 30. 佐美古墳群 31. 墳見中ノ谷古窯跡 32. 墳見古墳群 33. 長和田古墳群 34. 野花北山1号墳 35. 引地古墳群 36. 野花第2遺跡 37. 羽衣石第1生産遺跡 38. 羽衣石第2生産遺跡 39. 羽衣石城跡 40. 小鹿谷古墳群 41. 別所古墳群 42. 別所第2遺跡 43. 別所第6遺跡 44. 高辻第1遺跡 45. 高辻第3遺跡 46. 高辻古墳群 47. 川上古墳群 48. 川上生産遺跡 49. 久見古瓦出土地 50. 久見古墳群 51. 白石第1遺跡 52. 中興寺古墳群 53. 野方第3遺跡 54. 野方・弥陀ヶ平庵寺 55. 野方古墳群 56. 北福第1遺跡 57. 北福第3遺跡 58. 北福古墳群 59. 漆原古墳群 60. 福永第3遺跡 61. 藤津古墳群 62. 大鼻遺跡 63. 船窓遺跡 64. 宮内狐塚古墳 65. 伯耆一宮経塚 66. 宇野第1遺跡 67. 宇谷古墳群 68. 原第2遺跡 69. 園7号墳・園西川遺跡 70. 園古墳群 71. 河口城跡 72. 石脇2号墳(尾尻古墳) 73. 宮の山遺跡 74. 堀勾玉出土地 75. 池ノ谷銅鐸出土地

後期 後期においても同様の現象が見られ、焼失住居が見つかった倉吉市福庭遺跡(21)、炭化米・貝殻などを包蔵する4基の貯蔵穴が見つかった大暮遺跡(62)、竪穴住居が調査された南谷ヒシリ遺跡(1)・南谷大ナル遺跡(3)・南谷夫婦塚遺跡(2)・乳母ヶ谷第2遺跡(4)・南谷大山遺跡(A)・宇谷第1遺跡(66)など、丘陵上の遺跡の密度が増加する。低地においては、和助北遺跡(13)で祭祀関係の土器と思われる、赤色塗彩された脚付注口上器が見られるのみである。この地域は銅鐸の出土例が多く、倉吉市小田(19)で2口(外縁付鋤II式・扁平鋤式)、北福第1遺跡(56)・長瀬高浜遺跡で小銅鐸がそれぞれ1口、泊村池ノ谷で2本の舌とともに1口(外縁付鋤I式)、北条町米里で1口(外縁付鋤式)、やや離れて東伯町八橋で1口(扁平鋤式)が見つかっている。そのほかにも、伝伯耆国とされるもの1口(外縁付鋤I式)がある。また、弥生時代における集団墓から卓越した倉吉市阿弥大寺1~3号墓、藤原墳丘墓(23)などの四隅突出形弥生墳丘墓が計4基存在する。

古墳時代 主な前期古墳には、三角縁神獣鏡を含む多数の副葬品をもつ、復元全長100mを測る前方後円墳である橋津(馬ノ山)4号墳(9)がある。橋津4号墳を含む24基からなる橋津古墳群のうち22基は、国の史跡に指定されている。さらにこの古墳群には橋津2号墳などの大型前方後円墳が築造され、東郷池周辺だけではなく広く東伯者一帯を支配した集団の存在が想定できる。また、泊村には小規模な前方後円墳ではあるが仿製斜線帶鏡をもつ石脇2号墳(尾尻古墳)(72)がある。北条町には土下古墳群・曲古墳群など前期から後期にかけての古式群集墳がある。橋津古墳群を仰ぎ見る妙丘に立地する長瀬高浜遺跡において、160数棟の竪穴住居、40棟の掘立柱建物をもつ大集落が再び現われる。この集落は前期から中期にかけて營造されているが、中期の中頃にはその規模も縮小している。集落が廃絶されると古墳が築造されるようになる。また、性格は不明であるがおびただしい数の器財型埴輪群が見つかっている。他に、刀状木製品・火つき白・彩色礎・手捏ね土器など祭祀に伴う遺物が出土している津浪遺跡(27)が知られている。この時期の住跡は、南谷大山遺跡・佐美古墳群(30)など、丘陵上でも確認されている。

中期 橋津4号墳以後もこの地域では、東郷池の東岸には全長90mを測る前方後円墳である宮内狐塚古墳(64)、南岸には山陰最大級の規模を誇る全長110mを測る前方後円墳である野花北山1号墳(34)と大型前方後円墳が累々と築造される。このように、墳丘規模及び内容で他の古墳をはるかに凌駕する古墳が存在する東郷池周辺は、古墳時代前期から中期にかけて東伯者の中心的な地域であると考えられる。中期後半の集落は、南谷大山遺跡のように丘陵上でも營まれている。この地域は子持勾玉の出土が多く、東郷町高辻第1遺跡(44)1例、泊村塚(74)で1例、倉吉市でも2例が知られている。

後期 後期になると大型の前方後円墳は見られなくなるが、中小規模の前方後円墳が各古墳群においても見られるようになる。また、從来の竪穴系の埋葬施設に代わって、横穴式石室が採用される。片平4号墳(28)は基底部を箱式石棺状に組み、板石を持ち送りながら小口積みにするもので、東伯者では倉吉市大宮古墳とならび導入期の横穴式石室である。その後、この地域で比較的容易に手に入れることができる板状攝理の安山岩を使用する横穴式石室が取り入れられ、壙發的に増加する。片平1・5号墳・長和田20号墳(33)・中興寺1号墳(52)・久見17号墳(50)・北福23号墳(58)・宮内31号墳・橋津9号墳・福庭古墳(18)・園古墳群(70)・宇谷古墳群(67)などで知られている。このうち中興寺1号墳などのように各壁が一枚石で構成されている石室や、櫛庭古墳に見られるような切石石室は終末の様相を示す。古墳以外では、埴見中ノ谷古窓跡(31)がある。6世紀前葉の窓跡で、この地域の須恵器を生産した数少ない遺跡の一つである。

- 歴史時代** この地域は古代寺院跡がたくさん見つかっている。白鳳期には、<sup>おとめき</sup>大御堂廃寺、<sup>おとめき</sup>野方・<sup>おとめき</sup>弥陀ヶ平廃寺<sup>(54)</sup>、<sup>おとめき</sup>大原廃寺が造営される。大御堂廃寺は法起寺式の伽藍配置であったと考えられている。礎石の中央には柱を据えた穴が穿たれており、炭化した柱の一部が残っていたた  
**白鳳期**
- ～
- 奈良時代** いう。この寺院は、発掘された墨書き上器より8世紀後半頃には久米寺と呼ばれていたようである。野方・弥陀ヶ平廃寺からは川原寺式の瓦の他に、塔心中央に柱穴をもつ塔心礎・礎石が見つかっている。大原廃寺からは、柱穴をもつ塔心礎、川原寺式の瓦が見つかっている。また、発掘調査により塔の基壇の一部が明らかになり、法起寺式の伽藍配置であったことが確認された。久見<sup>(49)</sup>でも7世紀後半頃と8世紀後半頃の瓦が見つかっており、寺院跡か官衙跡の存在が考えられる。奈良時代には現在の倉吉市国府に伯耆国衙が造られ、また伯耆国分寺、<sup>おとめき</sup>國分尼寺も建立されるなど、東伯耆は奈良・平安時代の政治の中心地であった。<sup>(50)</sup>この地域は伴合体制下にあっては伯耆国河村郡にあたり、河村郡は筋賀、舍人、多麻、埴見、日下、河村、竹田、三朝の八郷から成る。郡衙の所在地は不明であるが、河村郷、舍人郷、多麻郷の三か所が候補地として考えられている。この地域には古代伴合体制の名残りとしての条里遺構が残っている。天保地統全図などには整然と並んだ方格地割りがあり、当時の名残りを留めていると考えられている。
- 平安時代** 平安時代に入り自墾地系莊園が現われ律令体制が崩壊し、次第に封建制社会が形成されるようになる。このようななか、力を得てきただのが国司・郡司・寺社であった。東郷池周辺では、伯耆一宮、東郷氏である。東郷氏は、中央の貴族や寺社に所領を寄進して、地方豪族としての地位を高めていった。伯耆一宮である倭文神社は「伯耆六社」の一つで、承和4<sup>(837)</sup>年に從五位下の神階が与えられていたが、広大な社領を経済基盤として在地領主層の信仰を集めながら伯耆一宮の地位を獲得したものと考えられている。平安時代末期になると、末法思想が広まる。伯耆一宮の境内に隣接した山林で経塚<sup>(65)</sup>が発見された。経塚のなかには石室があり、そのなかに金銅製經筒、金銅製觀音菩薩立像、銅製千手觀音立像、銅板線刻弥勒立像などが安置されていた。經筒には「(中略) 康和五年癸未 (中略)」銘が刻まれている。これら出土品は国宝に指定されている。
- 中世**
- 鎌倉時代** 地頭の勢力は鎌倉幕府権力の伸長を背景に次第に強大になった。大阪府柳沢真次郎氏所蔵の正嘉2<sup>(1258)</sup>年銘の「伯耆国河村郡東郷莊下地中分絵図」によって地頭の莊園侵略の様子が窺われる。長瀬高浜遺跡では約80基の火葬墓や土塙墓が調査され、この時期の葬制が明らかとなった。
- 室町時代** 中世城郭も数多く知られており、南条貞宗によって築城された羽衣石城<sup>(39)</sup>、山名氏によって築城された河口城<sup>(71)</sup>などがある。応仁の乱後は各地で騒擾戦乱が絶えず、この地においても大永4<sup>(1524)</sup>年尼子経久によって羽衣石城が落城し、また馬ノ山で尼子氏と山名氏が合戦をするなど争いの跡をとどめている。天正9<sup>(1581)</sup>年には羽柴秀吉と吉川元春が対陣した。秀吉は御冠山に、元春は馬ノ山に陣を設けたが、馬ノ山にはこの時に築かれた土塙状遺構が残っている。また、乳母ヶ谷第2遺跡で調査された土塙状遺構も、この対陣の際に築かれたと思われる。山間地にはこの時期と思われるタカラ跡が數ヵ所確認されている。また、播磨津川改修にともない、中世の貝塚が検出された。南谷貝塚<sup>(12)</sup>は、ヤマトシジミなどの貝類のほか、漆器などの木製品が出土している。
- 近世近代** 南谷ヒジリ遺跡では、16～17世紀と考えられる藏骨器が検出されている。また、文久3<sup>(1863)</sup>年には外洋に対する海岸防備のために砲台が設置された。鳥取県では由良、橋津、赤崎、淀江、境などに台場が建設され、海岸防備に当たった。橋津の台場<sup>(14)</sup>建設に当たって、馬ノ山4号墳の前方部が削られたといわれている。

## 第3章 南谷大山遺跡の調査（第3次調査）

### 第1節 南谷大山遺跡C-I区の概要

**位 置** 1993年度の南谷大山遺跡の調査区は、地形的特徴からさらに細かく、標高84m付近から南側に伸びる東側尾根(C-I区)、標高83m付近から南側に伸びる西側尾根(C-II区)、C-I区・C-II区にはさまれた谷底部(C-III区)、C-II区西側の急峻な斜面部(C-IV区)、1991~92年度調査区と今年度調査区の尾根部にはさまれた谷底部(C-V区)、今年度調査区のうち標高87m付近の最も高い部分(C-VI区)に分けることができる。

C-I区は、今年度調査区のうち、東側尾根上に遺跡が展開する地区である。この尾根の先端部には、周知の乳母ヶ谷遺跡があり、この間にも造構の存在が推定される。

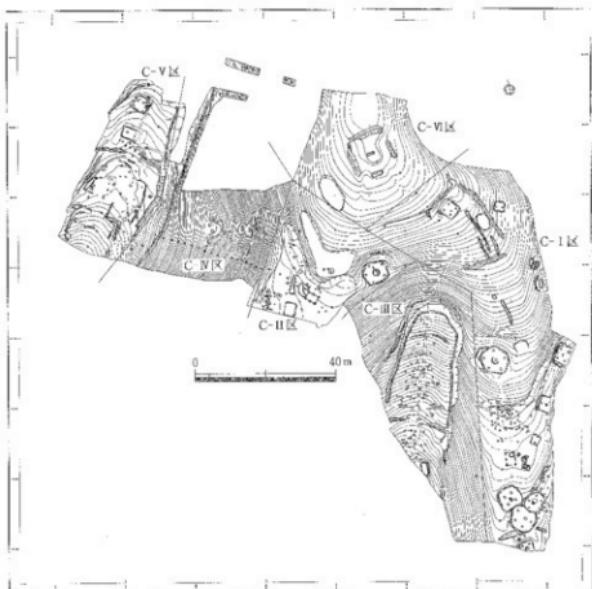
**造 構** この地区は今年度調査区のうちでは最も造構が密集する地区で、弥生時代後期には、竪穴住居跡CS I 01・08・11・13・14・15・16、掘立柱建物跡CS B 02、貯蔵穴CS K 01が作られている。

古墳時代前期になると、竪穴住居跡CS I 03・04・05・06・07・12、段状造構CSS 04・05が作られる。

古墳時代中期には、埋葬施設CS X 01・02・03が作られている。

さらに、時期は不明であるが、貯蔵穴と考えられるCS K 08・09、不明土坑CS K 03・10・11・12・13、溝状造構CS D 01・02・05・06・07・08・09がある。

このうち、弥生時代の集落は比較的高い位置から営まれているが、古墳時代の集落は、標高73m以下のやや低い位置に展開している。



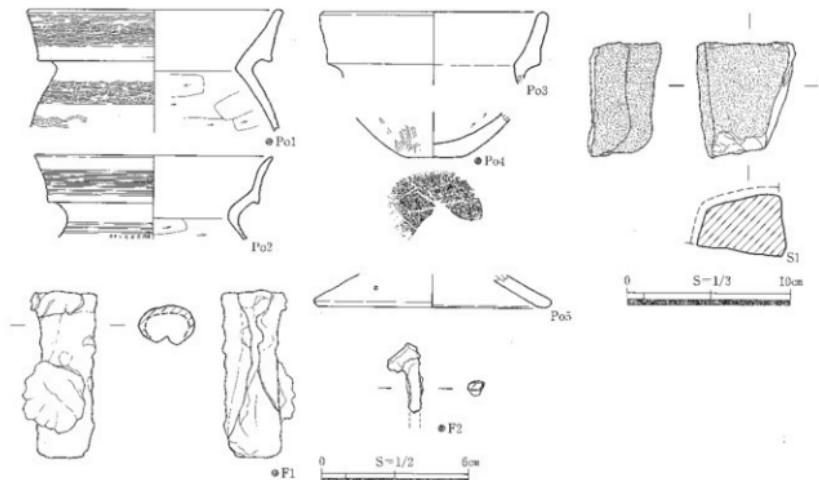
挿図4 南谷大山遺跡C区全体図

## 第2節 南谷大山遺跡C-I区の調査結果

### 1. 壁穴住居跡

C S I 01 (挿図5・6、図版2・29)

- 位 置 C-I区北側のN23グリッドにあり、標高82.7~83.3mの緩やかに南側に傾斜する斜面に位置する。南東側約10mにはC S I 16が、すぐ北側にはC S D01が近接している。
- 形 態 遺存状態は非常によく、平面は隅丸方形を呈す。規模は、北西~南東4.20m、南西~北東3.90mを測り、床面積は17.0m<sup>2</sup>である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北西壁で最大1.02mを測る。
- 壁溝は、北東・南東壁際で検出されたが、それ以外では検出されなかった。規模は、幅10~20cm、深さ3~6cmを測り、断面逆台形状を呈す。
- 主柱穴はP1~P4の4個で、それぞれの規模は、P1(70×57~52)cm、P2(92×81~32)cm、P3(80×75~63)cm、P4(77×67~62)cmを測る。主柱穴間距離は、P1~P2間から順に2.2m、2.6m、2.6m、2.4mである。
- 中央ピット 中央ピットは、やや南西側にずれるP5で、規模は、(42×40~59)cmを測る。埋土は3層に分層でき、⑯・⑰層には炭化物が含まれており、鑑定の結果ツブラジイ・クスノキが含まれていた。また、中央ピット上には主柱穴と異なり、貼床は施されていない。
- 埋 土 埋土は8層に分層できた。いずれの層も中心に向かって堆積しており、自然堆積の状況が窺われる。このうち、⑦層は、壁際で厚く堆積しており、周堤が崩れて堆積したものと考えられる。最下層の⑤層には炭化物が含まれている。
- 貼 床 ほぼ全面に粘質土を含む⑨層による貼床が施されている。貼床は、主柱を立てた後に施さ



挿図5 南谷大山遺跡CS I 01出土遺物実測図

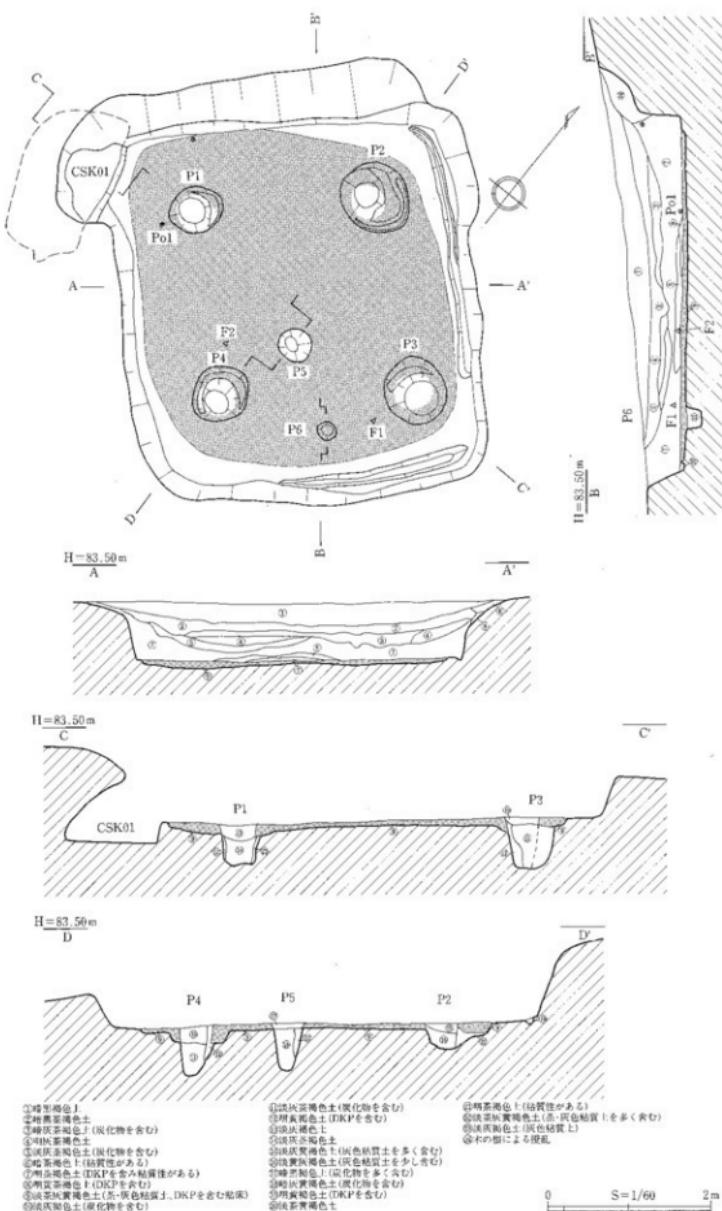


図6 南谷大山遺跡CSK01遺構図

れたものと考えられ、柱穴上では柱の部分で貼床が切れていた。

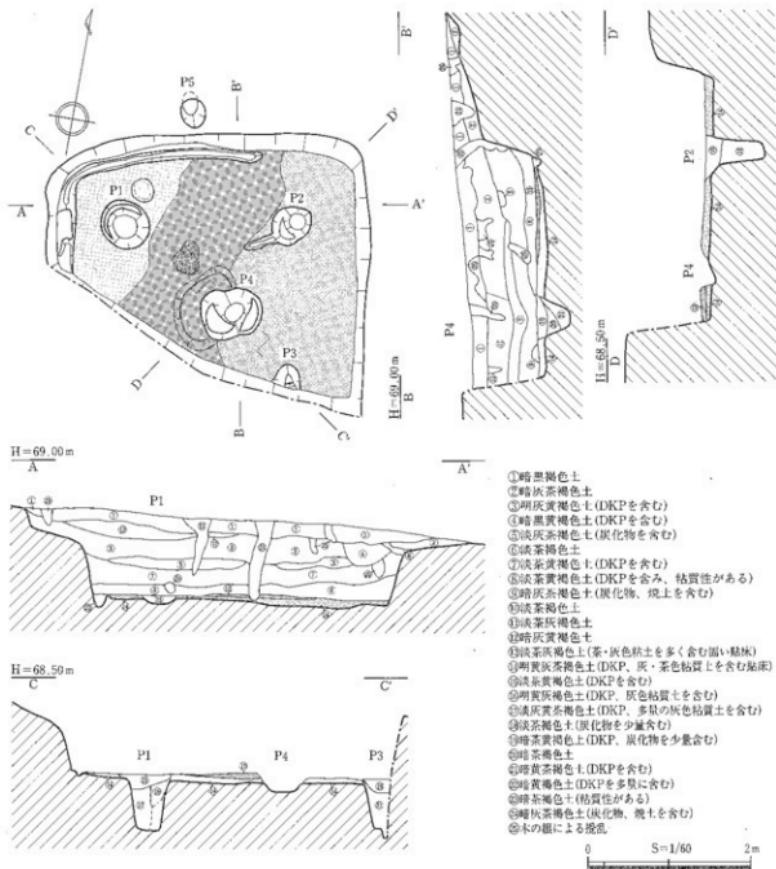
**屋内貯藏穴** 西側コーナーには、後述する C S K01が袋状に掘り込まれており、形態的特徴から C S I 01に伴う屋内貯藏穴と考えられる。

**遺 物** 固化できたものには、複合口縁をもつ甕 Po 1・Po 2・Po 3、平底をもつ底部 Po 4、蓋 Po 出土状況 5、砥石 S 1、袋状鉄斧 F 1、不明鉄器 F 2がある。

このうち、床面からは、西側コーナー付近 Po 1、東側コーナー付近 F 1が出土している。また、中央ピット内から Po 4が出土している。

その他は埋土中からの出土である。この他にも、固化できなかったが、埋土中から軽石が出土している。

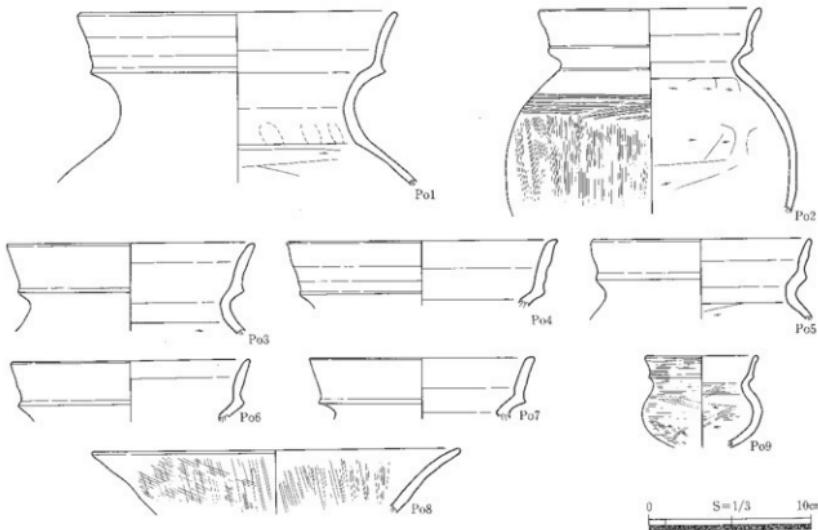
**時 期** 床面出土遺物から、C S I 01は大山II期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



插図7 南谷大山遺跡CS101構造図

C S I 03 (挿図 7・8、図版 3・29)

- 位 置** C—I 区の最も南側の P 32・33 グリッドにあり、標高 68.0~68.4 m の平坦面に位置する。南側は調査区外のため完掘できていない。北側約 3 m には C S I 05、北側約 2 m には C S D 02 がある。
- 形 態** 造存状態はよく、南側を推定すると平面は隅丸方形を呈す。規模は、東西 3.50 m、南北 2.8 m 以上を測り、床面積は南側を推定すると約 12 m<sup>2</sup> で、現存では 8.5 m<sup>2</sup> である。残存壁高は、最も造存状態の良い北壁で最大 0.66 m を測る。
- 壁溝は、東側で検出されなかった。規模は、幅 10~16 cm、深さ 9~16 cm を測り、断面「U」字状を呈す。
- 主柱穴は検出したものは P 1~P 3 の 3 個であるが、本来は 4 本柱の建物であると考えられる。それぞれの規模は、P 1 (65×58~69) cm、P 2 (52×44~75) cm、P 3 (36×30~73) cm 以上を測る。主柱穴間距離は、P 1~P 2 間から順に 2.2 m、2.2 m である。
- また、北側には (36×30~45) cm を測る P 5 がある。斜めに掘り込まれている事から、垂木を支えるピットと考えられる。
- 中央ピット** 中央ピットは、住居のほぼ中央に橢円形に (110×70~3) cm と一段高くなる土壇の東側に掘り込まれた P 4 で、規模は (78×58~42) cm を測る。この土壇は、⑬層を盛って作られている。
- 焼 土 面** 中央ピットの北側には、不整形に広がる焼土面が 1 カ所検出されている。
- 埋 土** 埋土は 12 層に分層できた。いずれの層も住居の中心部に向かって堆積しており、自然堆積したものと考えられる。
- 貼 床** 床面には、全面に⑬層による貼床が施されているが、土壇を含めて住居中央南北方向には固く締まった⑬層による貼床が施されている。貼床は、主柱を立てた後に施されたものと考えられる。



挿図 8 南谷大山遺跡 CSI 03 出土遺物実測図

**石 材** P 1 の北側で、扁平で円形を呈す石材が検出されている。使用痕等は認められず、性格は不明である。

**遺 物** 固化できたものには、壺 Po 1 、甕 Po 2 ~ Po 7 、高杯 Po 8 、小型丸底壺 Po 9 がある。

**出土状況** いずれも埋土中からの出土であるが、Po 4 、Po 5 、Po 8 は埋土下層からの出土である。

**時 期** 埋土下層の出土遺物から、CS I 03 は大山Ⅳ期、古墳時代前期後半頃のものと考えられる。

**CS I 04・08 (挿図 9~14、図版 3・29・30)**

**位 置** CS I 04・08 は、調査区の東側尾根上の O27 グリッドにあり、標高 73~74.1m の平坦面に位置する。CS I 04 の西側は CS I 08 を大きく切り込んで作っており、北東 3m には CS I 13 が位置している。

**形 態** 遺存状態は良く、平面は東西にやや長い五角形を呈する。規模は、東西 7.98m 、南北 7.18m を測り、床面積は、43.0m<sup>2</sup> である。残存壁溝は、最も遺存状態の良い北壁で最大 1.03m を測る。

壁溝は、幅 8~17cm 、深さ 3~12cm を測り、断面「U」字状を呈す。東側～南側ではとぎれるものの、本来は全周していたものと考えられる。

主柱穴は P 1 ~ P 5 の 5 個で、それぞれの規模は、P 1 (51×46~75) cm 、 P 2 (72×55~71) cm 、 P 3 (83×60~94) cm 、 P 4 (62×53~60) cm 、 P 5 (84×70~62) cm を測る。

主柱穴間距離は P 1 ~ P 2 間から順に 3.8m 、 3.4m 、 3.5m 、 3.8m 、 3.5m である。

なお、P 1 には、やや浅い P 12 、 P 13 が接続しているが、規模的には P 1 とはほぼ同じで柱穴として掘り込まれたものと考えられるが、CS I 04 に付随するものは不明である。

主柱穴間に P 7 (34×24~17) cm 、 P 8 (46×35~51) cm 、 P 9 (55×51~60) cm 、 P 10 (29×21~49) cm 、 P 11 (53×45~51) cm を測るビットがある。これらは、主柱穴に比べて深さがあまりなく、位置的・規模的に考えて補助柱穴と考えられる。このうち、P 9 は後述する CS I 08 の主柱穴とも考えられ、再考する余地がある。

**中央ビット** 住居中央部には、灰赤褐色粘質土によって (200×150) cm にわたり不整な「コ」字状に、 2cm 程度と低いながらも一段高く上塙が作られている。この部分のやや北東側に、不整格円形の中央ビット P 6 が二段に掘り込まれている。P 6 は、まず上縁部を (68×50~7) cm に掘り、さらに (44×32~28) cm に掘り込んでいる。埋土は 3 層に分層できた。ブロック状に入り込む③層中には、炭化物を含んでいる。

中央ビットの周辺には、土塙を切り込んで、 (34×34~41) cm を測る P 15 、 (44×42~36) cm を測る P 14 がある。これらは、用途不明であるが、棟持柱の可能性もある。

**出 入 口** また、北東側壁溝に接続して長さ 16~24cm 、幅 9~12cm の溝と、同様に、深さ 5cm 程度のビットが等間隔に並んでいる。この部分は、P 1 ~ P 2 間に当たり、補助柱穴の規模も他のものと比べて小さく、また、この部分には焼土面がないことから、これらの溝およびビットに、出入り口に立てられた階段状のものが据えられたものと考えられる。

**CS I 08** CS I 04 によって大きく削られているために正確な規模・形態は不明であるが、遺存している壁の状態から、平面は六角形を呈すものと考えられる。残存する規模は、東西 2.5m 以上 (推定 5m) 、南北 5.50m を測り、床面積は 8m<sup>2</sup> 以上、東側を推定すると約 25m<sup>2</sup> と考えられる。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大 0.61m を測る。

壁溝は、南側でとぎれるが、幅 9~17cm 、深さ 2~11cm を測り、断面「U」字状を呈す。確実に主柱穴と考えられるものは P 21 、 P 22 、 P 23 の 3 個で、それぞれの規模は、 P 21 (56×

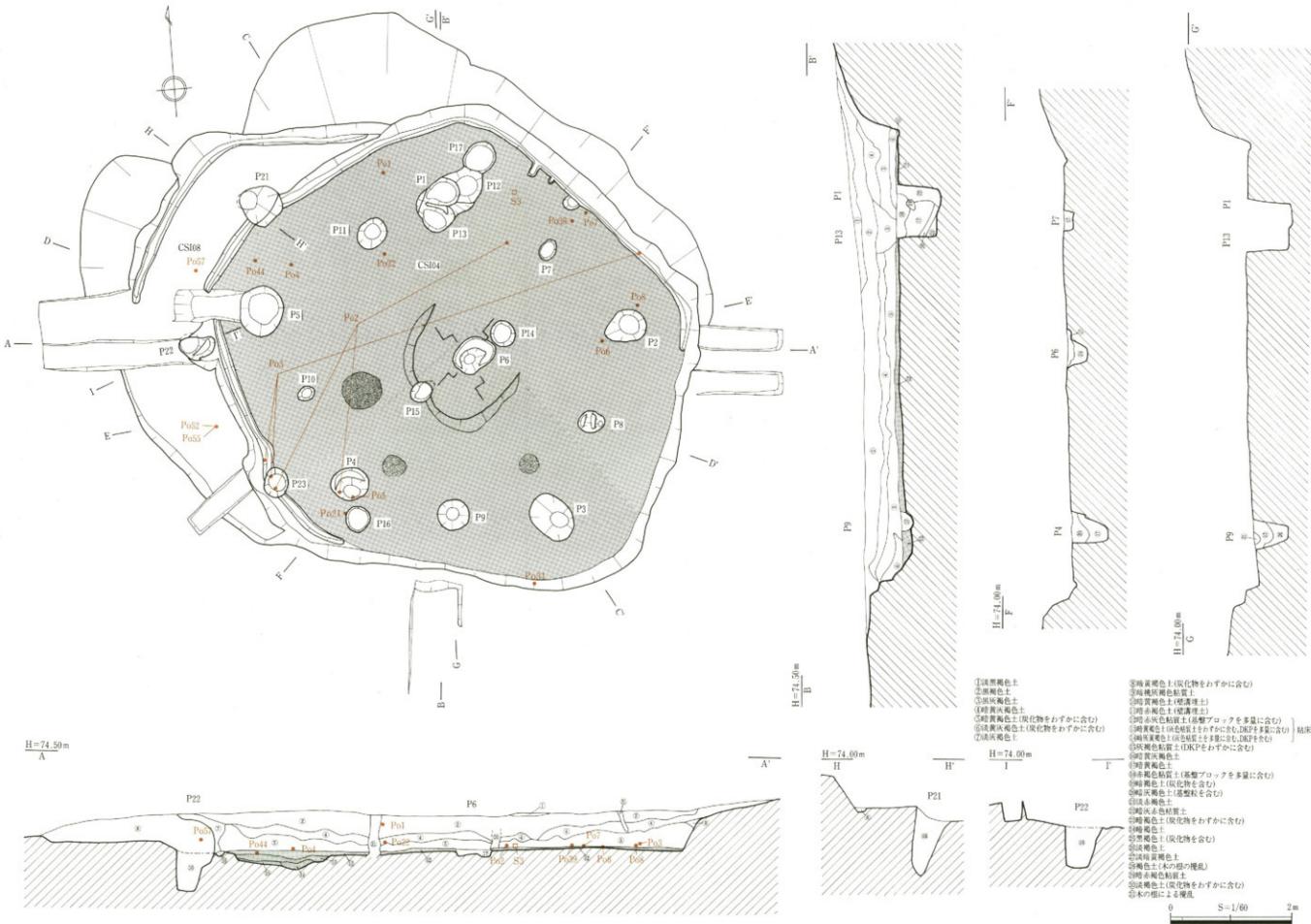
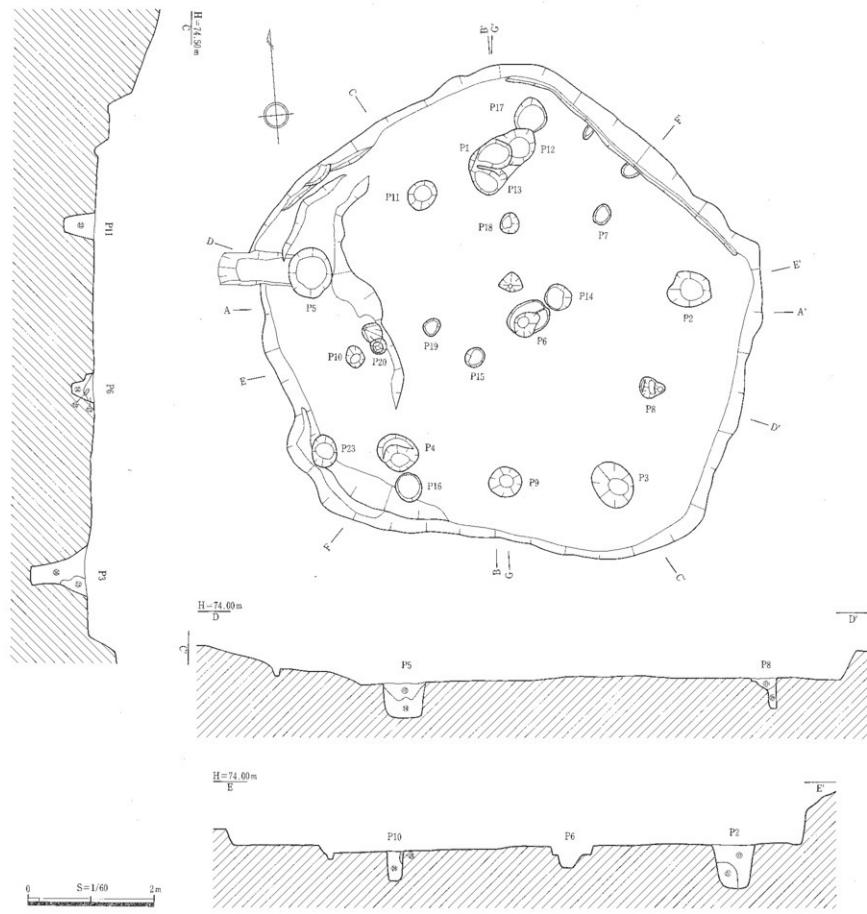


図9 南谷大山遺跡CSII04-08造構図



挿図10 南谷大山遺跡CSI04貼床除去後遺構図

53-108) cm、P22 (53×30-83) cm、P23 (51×33-71) cmを測る。これらは、CS I 04の床面上のP9、P14、P12と合せて、ほぼ等間隔に六角形に並んでいることから、CS I 08の主柱穴とも考えられる。

このように考えると、主柱穴間距離はP21-P22間から順に2.6m、2.8m、3.0m、3.1m、2.2m、3.1mとなる。

**焼 土 面** CS I 04の床面上には、南側のP3・P4・P10付近に3カ所、横円に広がる焼土面が検出された。

**埋 土** CS I 04の埋土は8層に分層することができた。①②④⑤層は、壁際から住居中央部に向かって流れ込んだような堆積状況を示し、住居の廃絶と共に自然堆積した状況が窺われる。このうち、⑤層中には炭化物が含まれている。

また、③層はP1上にあり、柱材が腐朽したものと考えられる。

さらに、西側壁溝上には、⑦層が垂直方向に伸びており、壁溝内に立てられた板状のものが腐朽したものと考えられる。また、北側では、炭化物を含む⑥層が水平方向に堆積しており、同様に、壁溝内に立てた板状のものが倒れたまま腐朽したものと考えられる。

CS I 08の埋土は、暗黄褐色土⑧層が単層で入り込んでいた。

**貼 床** CS I 04の床面ほぼ全面に、厚さ5~20cmに暗赤灰褐色粘質土による貼床⑩層が施されている。西側では、この層の下に⑪~⑫層によってくほんだ部分が捕壙されている。

貼床除去後に、P18~P20・P23を検出した。それぞれの規模は、P18 (32×28-46) cm、P19 (27×25-12) cm、P20 (26×26-24) cm、P23 (51×38-71) cmを測る。用途は不明であるが、P23は、CS I 08の主柱穴と考えられる。

**不 整 落ち込み** CS I 04の貼床を除去すると、住居中央部から西側で、不整形に掘り込まれた落ち込みが検出された。断面も不整形な皿状を呈す。この落ち込みは、住居プラン内に納まることから、住居を掘削する段階で掘り込まれたものと考えられる。

CS I 04の基盤層は、東・北側が堅緻なローム層であるのに対し、西・南側がDKP層になっており、住居の掘削段階で、柔らかく掘りやすいDKP層を掘り過ぎ、その部分を補うために、西側の貼床が厚くなつたものと考えられる。

**遺 物** CS I 04からは、図化できたものには、壺Po1・甕Po2~Po28、底部Po29・Po30、高杯出土状況 Po31~Po34、鼓形器台Po35~Po37、直口壺Po38、低脚杯Po39、小型丸底壺Po40・Po41、擂鉢Po42、土玉Po43・Po44、土鍾Po45~Po50、黒曜石剣片S2、磨石S3がある。

このうち床面からは、北西壁寄りでPo1・Po4・Po22・Po44が、北東壁寄りでPo7・Po8・Po39・S3が、P2付近でPo6・Po8が、南壁際でPo31が、P4内でPo5がそれぞれ出土している。また、Po2・Po3は南西コーナー付近のものと北東壁際のものが接合している。

その他のものは、埋土中からの出土である。なお、擂鉢Po42は備前V期と思われる。

CS I 08からは、図化できたものには、甕Po51・Po52、底部Po53~Po55、土玉Po56・Po57がある。

このうち床面からはPo56が、P23の南側でPo52・Po55が、P23の北側でPo57が、P22内でPo53・Po54がそれぞれ出土している。

その他は、埋土下層からの出土である。

**時 期** 床面出土遺物のうち、Po5は若干古い様相があるが、CS I 04は大山Ⅶ期、古墳時代前期前半頃のものと考えられる。

CS I 08は、床面出土の土器から大山Ⅱ期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。

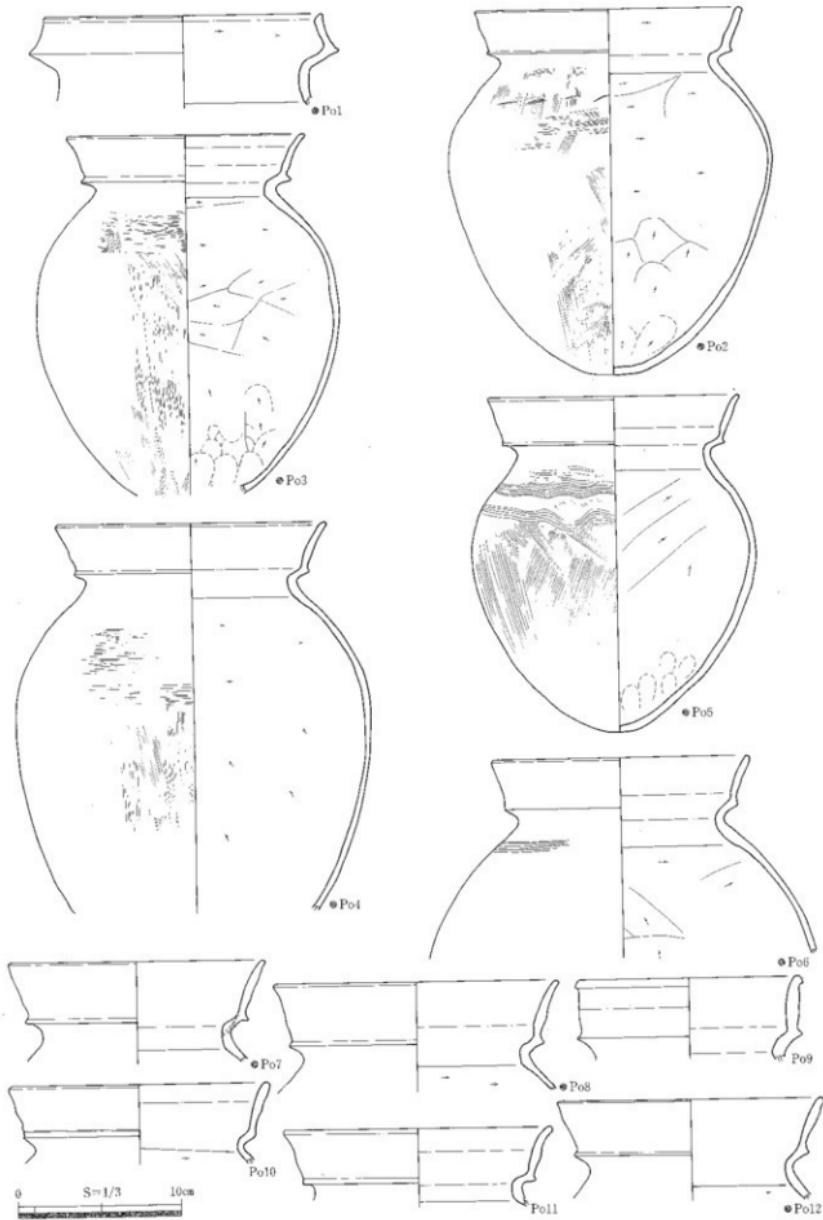
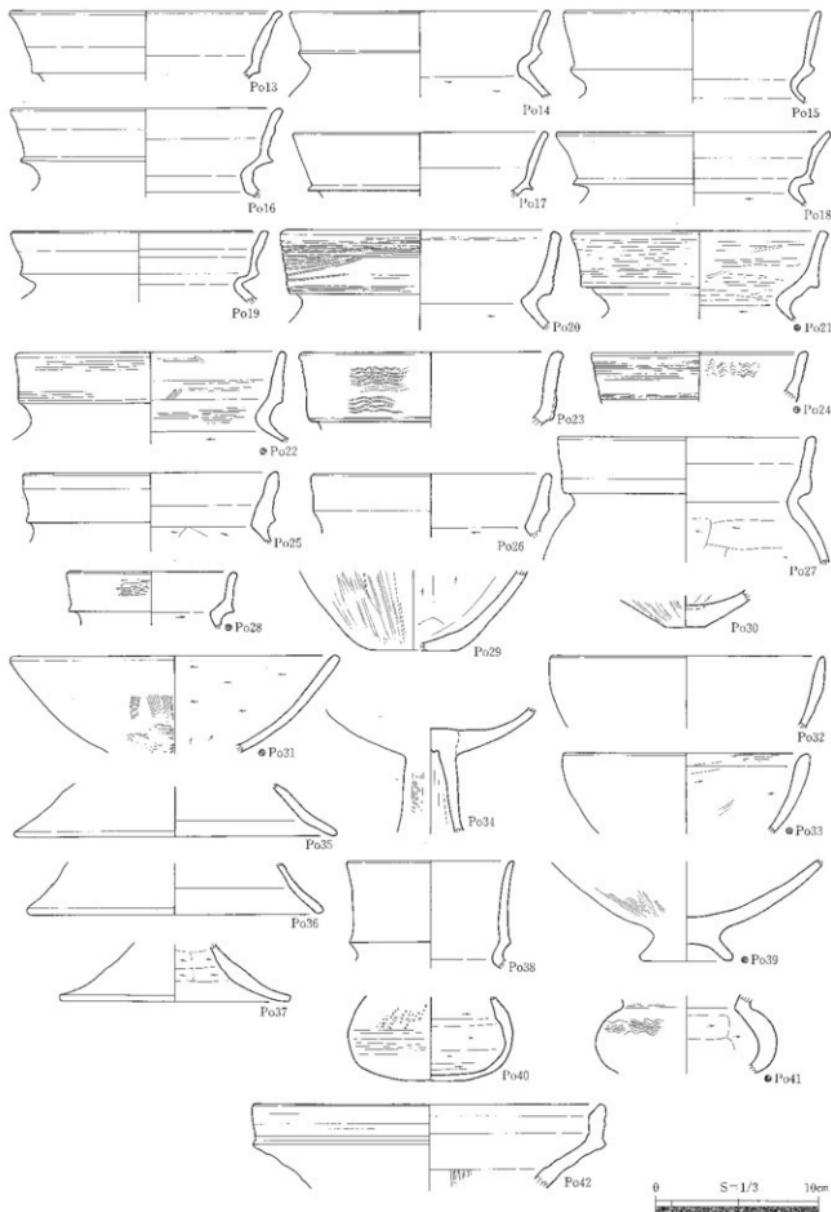
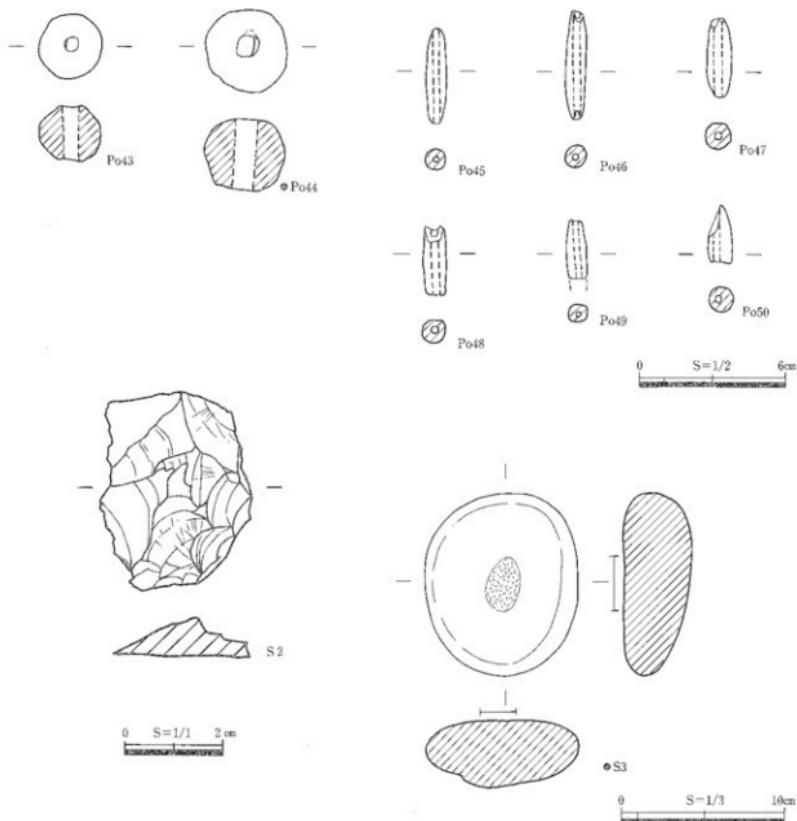


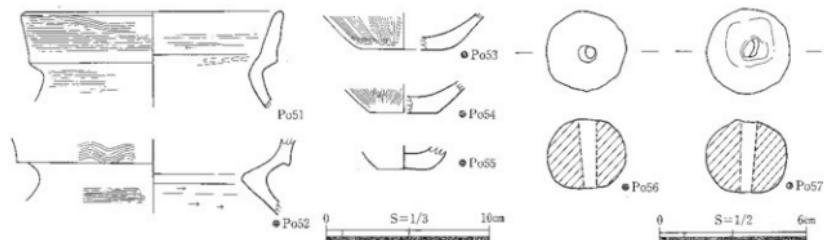
插圖11 南谷大山遺跡CSII04出土遺物實測圖(1)



博図12 南谷大山遺跡CSII04出土遺物実測図(2)



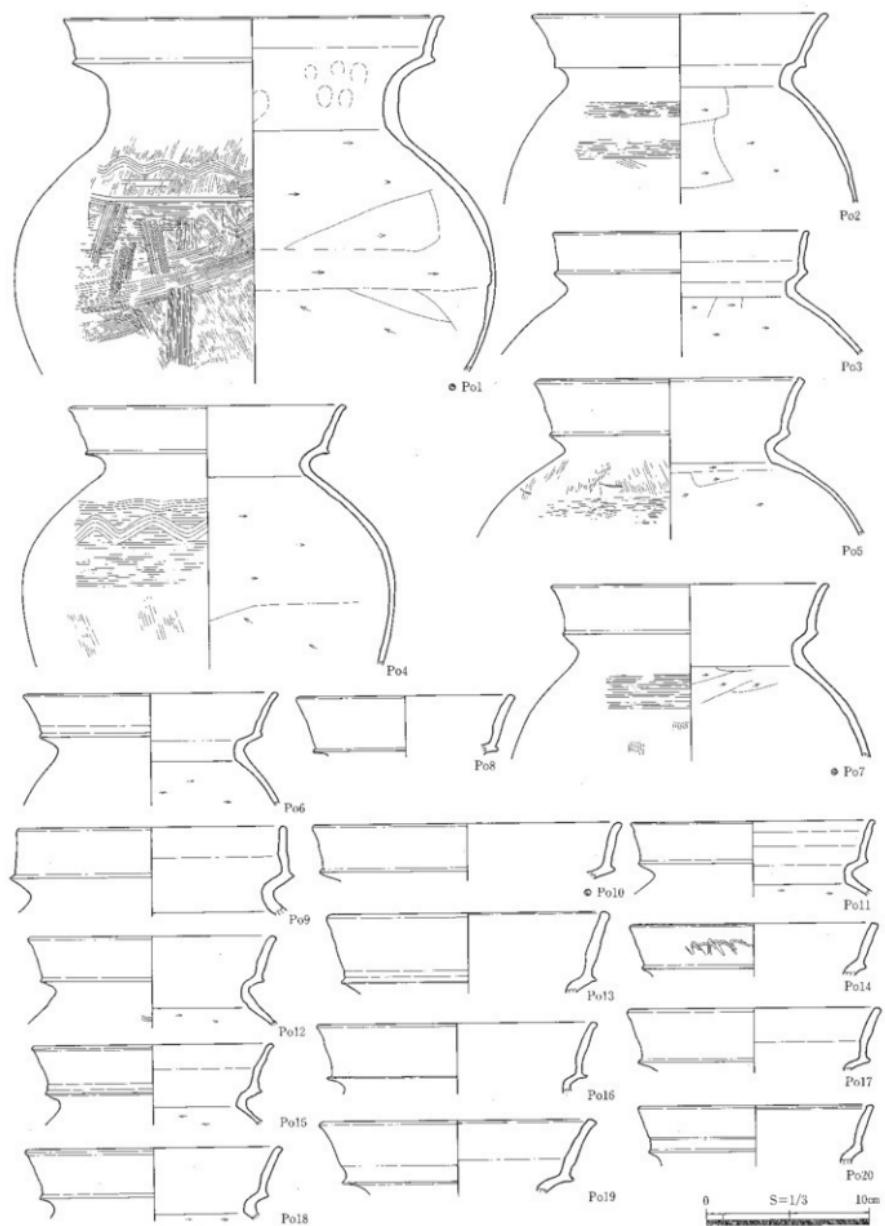
挿図13 南谷大山遺跡CSII04出土遺物実測図(3)



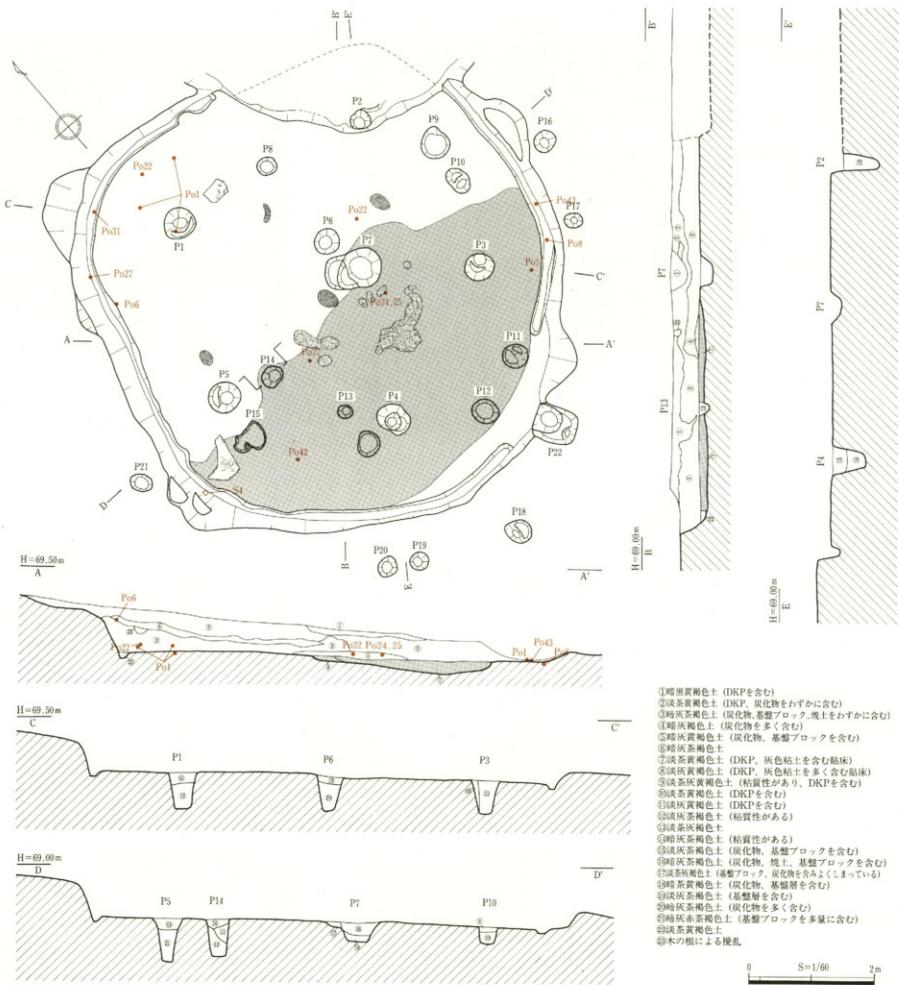
挿図14 南谷大山遺跡CSII08出土遺物実測図

C S I 05 (挿図15~18、図版4・30~32)

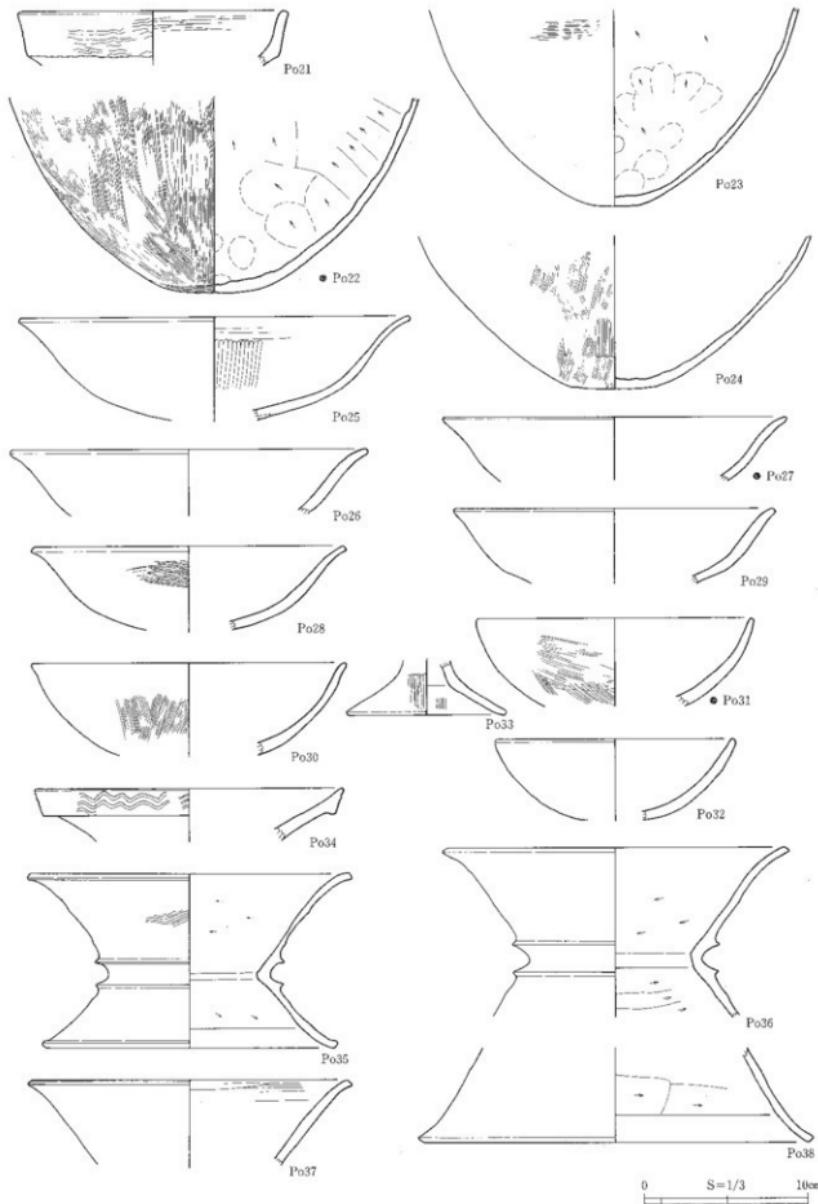
- 位 置** C-I 区南側のP31・32グリッドにあり、標高68.2~69.0mの平坦面に位置する。北東側はC S I 06によって切り取られ、西側にはC S I 07が接している。この平坦面にはC S I 05~C S I 07が重複しているが、土層の切り合ひ関係から、C S I 05→C S I 06→C S I 07の順で作られている事が判明した。
- 形 態** 遺存状態はよく、平面は隅丸五角形を呈す。規模は、東西6.80m、南北7.20mを測り、床面積は北東側を推定すると41.5m<sup>2</sup>である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.62mを測る。
- 壁溝は、南側でとぎれるもののはば全周するものと考えられ、幅6~21cm、深さ4~7cmを測り、断面逆台形状を呈す。
- 主柱穴はP 1~P 5の5個で、それぞれの規模は、P 1 (52×48~61) cm、P 2 (32×32~76) cm、P 3 (48×44~54) cm、P 4 (54×40~53) cm、P 5 (52×48~70) cmを測る。主柱穴間距離は、P 1~P 2間から順に3.4m、2.9m、3.0m、2.7m、2.9mである。
- 中央ピット** 中央ピットはP 7で、3個のピットが切りあっている。規模は(65×62~29) cmを測る。埋土は3層に分層でき、いずれの層にも炭化物が含まれている。また、⑦層はよく縮まっており、意図的に埋められた可能性がある。
- この他にもP 6~P 15のピットが検出されているが、用途は不明である。
- 周辺ピット** また、住居周辺にはP 16~P 22のピットが掘り込まれている。これらは径30~35cm、深さ45cm程度としっかりしており、垂木を支えるものというよりは、庇状のものがあった可能性もある。
- 焼 土 画** 中央ピットの西側に、楕円形に広がる焼土面が検出されている。
- 炭 化 物** 中央ピットの南側では、狭い範囲ではあるが炭化物層が検出されている。
- 埋 土** 埋土は6層に分層できた。①・②層は自然堆積したものと考えられるが、③層は北西側にのみ堆積しており、自然堆積したものとは考えがたい。また、③層は炭化物・焼上粒を、④層は炭化物を多く含んでおり、明らかな炭化材は検出されていないが、C S I 05は焼失した可能性がある。
- 貼 床** 床面の南側半分に、粘質土を含む⑦層による貼床が施されている。貼床は、主柱を立てる前に施されたものと考えられる。
- 遺 出 土 状 態** 図化できたものには、壺Po 1、甕Po 2~Po 21、底部Po 22~Po 24、高杯Po 25~Po 33、鼓形出土状況 器台Po 34~Po 38、小型丸底壺Po 39~Po 41、低脚杯Po 42、瓶形土器Po 43、磨石S 4、不明鉄器F 3がある。
- このうち床面からは、Po 1が北壁際と東壁際から離れた状態で、Po 22が北側壁際とP 6付近で離れた状態で、さらに、Po 27が北側壁際とP 14付近で離れた状態で出土している。また、北側壁際ではPo 31が出土している。東壁際ではPo 7・Po 43が、南西壁際ではPo 42・S 4が出土している。一方、P 3内でPo 10が出土している。
- これら以外は、埋土中からの出土である。
- 時 期** 床面出土遺物から、C S I 05は大山VI期、古墳時代前期後半頃のものと考えられる。



擇図15 南谷大山遺跡CSI05出土遺物実測図(1)



挿図16 南谷大山遺跡CS105遺構図



挿図17 南谷大山遺跡CSI05出土遺物実測図(2)

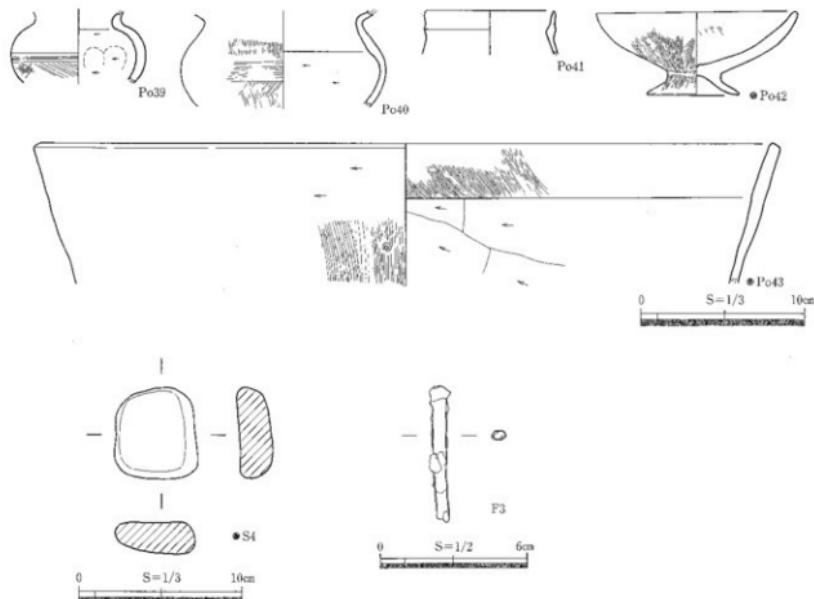


図18 南谷大山跡CS105出土遺物実測図(3)

CS 106 (挿図19~22、図版4・5・32・33)

**位 置** C-1区南側のP31グリッドにあり、標高68.1~68.6mの平坦面に位置する。南西側はC S 105を削り取り、北東側、東側はそれぞれC S S 05、C S K11に接している。

**形 態** 遺存状態はよく、平面は橢円形を呈す。規模は、東西4.90m、南北5.80mを測り、床面積は24.2m<sup>2</sup>である。残存壁高は、最も遺存状態の良い西壁で最大0.69mを測る。

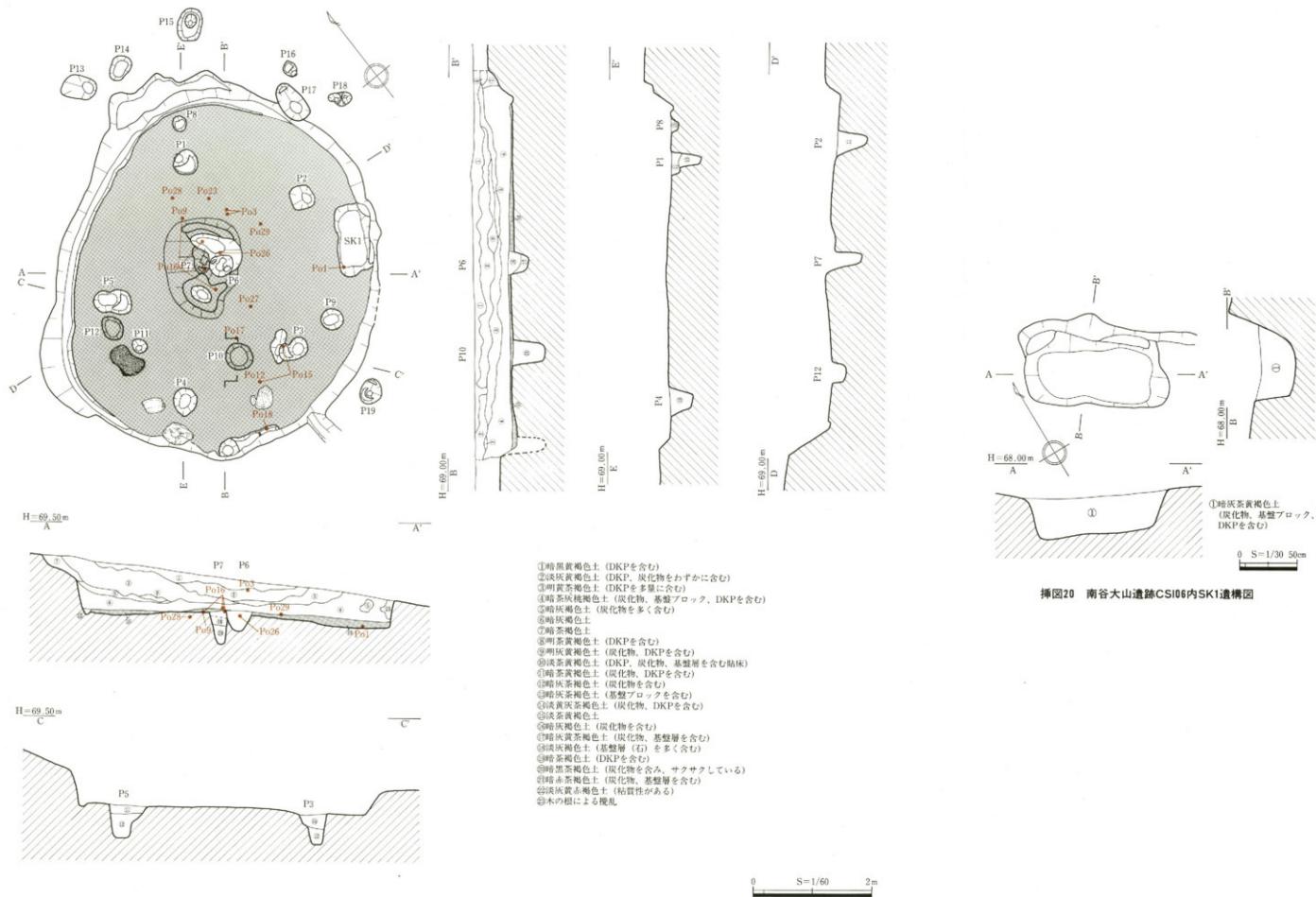
壁溝は、北西壁際で検出されており、幅6~20cm、深さ2~6cmを測り、断面逆台形状を呈す。

主柱穴はP 1~P 5の5個で、それぞれの規模は、P 1 (42×40~51) cm、P 2 (46×44~54) cm、P 3 (38×35~52) cm、P 4 (46×38~40) cm、P 5 (64×36~50) cmを測る。主柱穴間距離は、P 1~P 2間から順に2.3m、2.6m、2.2m、2.2m、2.7mである。

**中央ピット** 中央ピットは、床面ほぼ中央に (173×132~4) cmに一段高くなる土壇のやや東側に掘り込まれたP 6で、規模は (43×36~20) cmである。埋土は2層に分層でき、いずれの層にも炭化物が含まれている。

その他に、P 8・P 9・P 11が検出されている。また、貼床除去後にP 7・P 10・P 12が検出されたが、用途は不明である。また、周辺にはP 13~P 19が検出されている。

**屋 内** 東側壁際には、平面隅丸長方形を呈す土坑が掘り込まれている。規模は、長径1.16m×短貯藏穴 径0.53m、深さ0.37mを測る。埋土は、炭化物・基盤ブロックを含む暗灰茶黄褐色土が単層



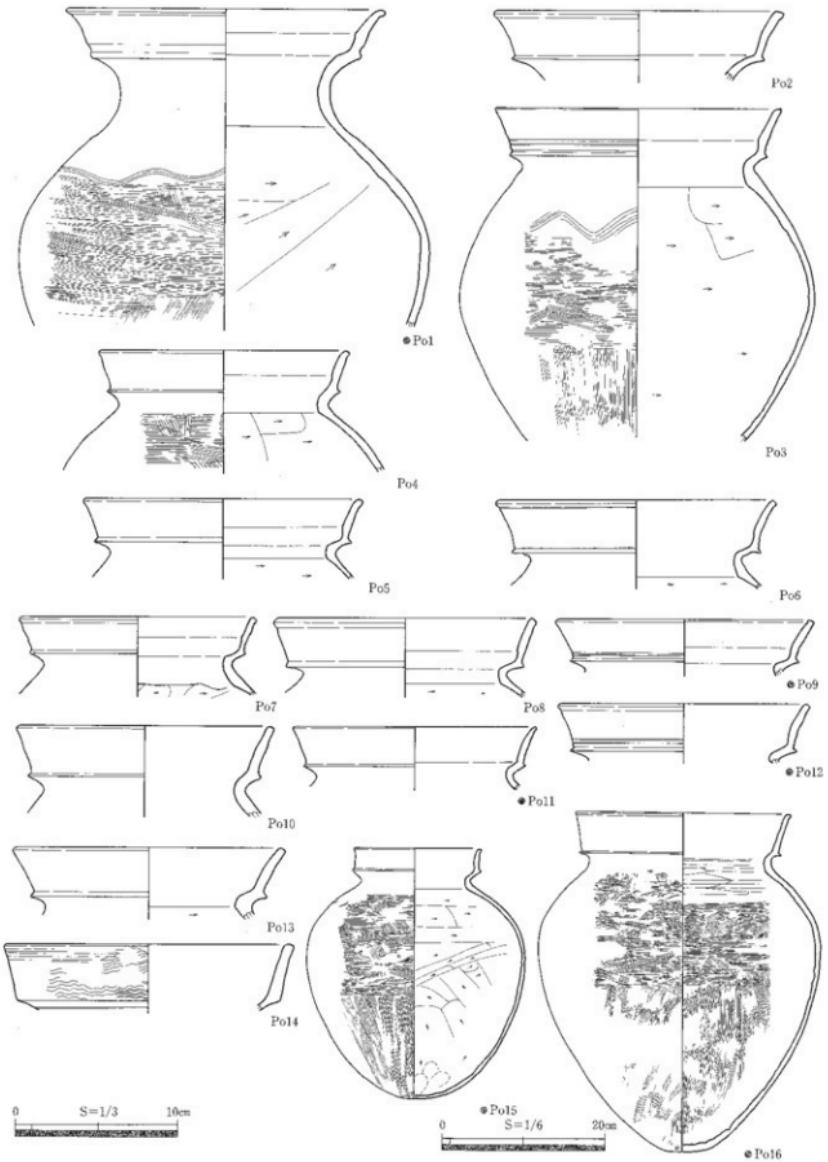
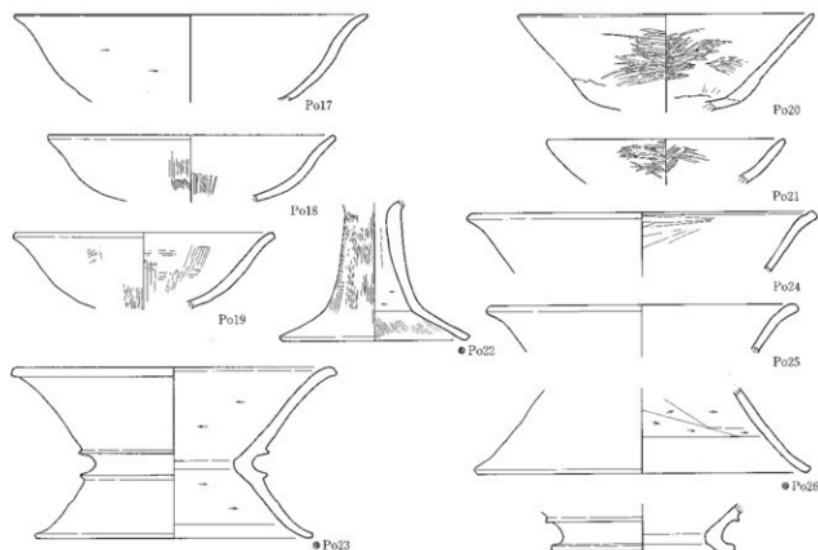
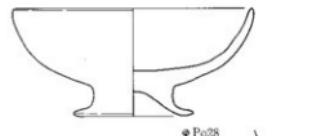


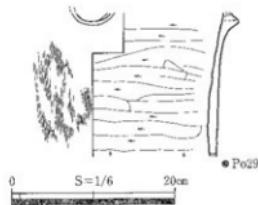
插圖21 南谷大山遺跡CSI06出土遺物實測圖(1)



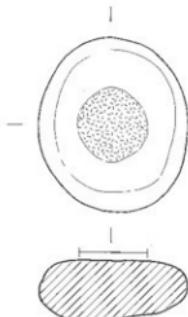
0 S=1/3 10cm



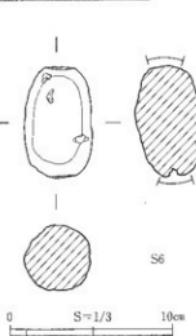
● Po28



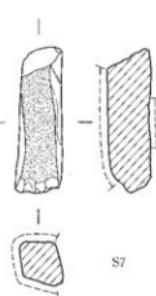
0 S=1/6 20cm



S5



S6



S7

0 S=1/3 10cm

插図22 南谷大山遺跡CS106出土遺物実測図(2)

ではいる。この土坑は、位置的・形態的に屋内貯藏穴と考えられる。

**焼 土 壁** 中央ピットの南西側には、楕円形に広がる焼土面が1カ所検出されている。

また、南側壁際で、ノミ痕が明瞭に残る大型の石材が2個検出されている。この石材の裏面にもノミ痕が施されている。ノミ痕の幅は、約4cmを測る。

**埋 土** 埋土は9層に分層できた。①・②層は自然堆積したものと考えられるが、厚く堆積する③層は南西側にあり、周壁が崩れ落ちたものと考えられる。また、⑤層は炭化物を含んでおり、明らかな炭化材は検出されていないが、CS I 06は焼失した可能性がある。

**貼 床** 床面の全面には、基盤層を含む⑩層による貼床が施されている。

**遺 物** 固化できたものには、壺Po 1・Po 2、甕Po 3～Po16、高杯Po17～Po22、鼓形器台出土状況 Po23～Po27、低脚杯Po28、瓢形土器Po29、敲石S 5・S 6、砥石S 7がある。

このうち、床面からは中央部でPo 9・Po16・Po26、北壁際でPo22、中央やや北寄りでPo23・Po29、東壁際でPo 1、南壁寄りでPo15が出土している。

それら以外は埋土中からの出土である。

**時 期** 床面出土遺物から、CS I 06は大山Ⅵ期、古墳時代前期後半頃に作られたものと考えられる。このうち、Po16は若干古い様相を残す。

#### CS I 07 (挿図23～25、図版5・33・34)

**位 置** C-I区南側のO31・P31グリッドにあり、標高68.5～69.3mの平坦面に位置する。南東側はCS I 05を埋め、CS I 06に接している。

**形 態** CS I 07は、少なくとも3回の建て替えがあったものと考えられ、それぞれCS I 07-1～CS I 07-3とした。

**CS I 07-1** 遺存状態は比較的よく、平面は隅丸方形を呈す。規模は、東西5.80m、南北5.80mを測り、床面積は南東側を復元して考えると約41.5m<sup>2</sup>、現存では38.6m<sup>2</sup>である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北東壁で最大0.43mを測る。

壁溝は、東側・南西側でとぎれるもののほぼ全周していたものと考えられ、幅13～23cm、深さ4～9cmを測り、断面「U」字状を呈す。

主柱穴はP 1～P 4の4個で、それぞれの規模は、P 1 (68×54-46) cm、P 2 (52×46-65) cm、P 3 (44×42-69) cm、P 4 (64×58-72) cmを測る。なお、P 1・P 4は複数の柱穴が掘り込まれているものと考えられる。主柱穴間距離は、P 1～P 2間から順に2.4m、2.6m、2.7m、2.5mである。

**中央ピット** 中央ピットは、床面ほぼ中央に二段に掘り込まれるP 5で、上縁部は長楕円形を呈し、(92×66-26) cmに掘り込まれ、さらに中央部を(44×34-49) cm掘り込む。埋土は3層に分層でき、⑪・⑫層中に炭化物が含まれている。

その他に、P 6～P 11・P 16・P 17が検出されているが、用途は不明である。

**埋 土** 埋土は13層に分層できた。これらはいずれも住居の中央に向かって堆積しており、自然堆積したものと考えられる。しかし、主柱穴P 4の埋土および上方の埋土を見ると、⑪・⑫層と類似した層で、住居が埋まる過程の中で、P 4には柱が立っていた可能性がある。

**貼 床** 床面の中央部には、⑬層による貼床が施されている。貼床除去後では、後述する07-2の主柱穴と考えられるP 14、P 15、その他にP 12・P 13が検出されている。

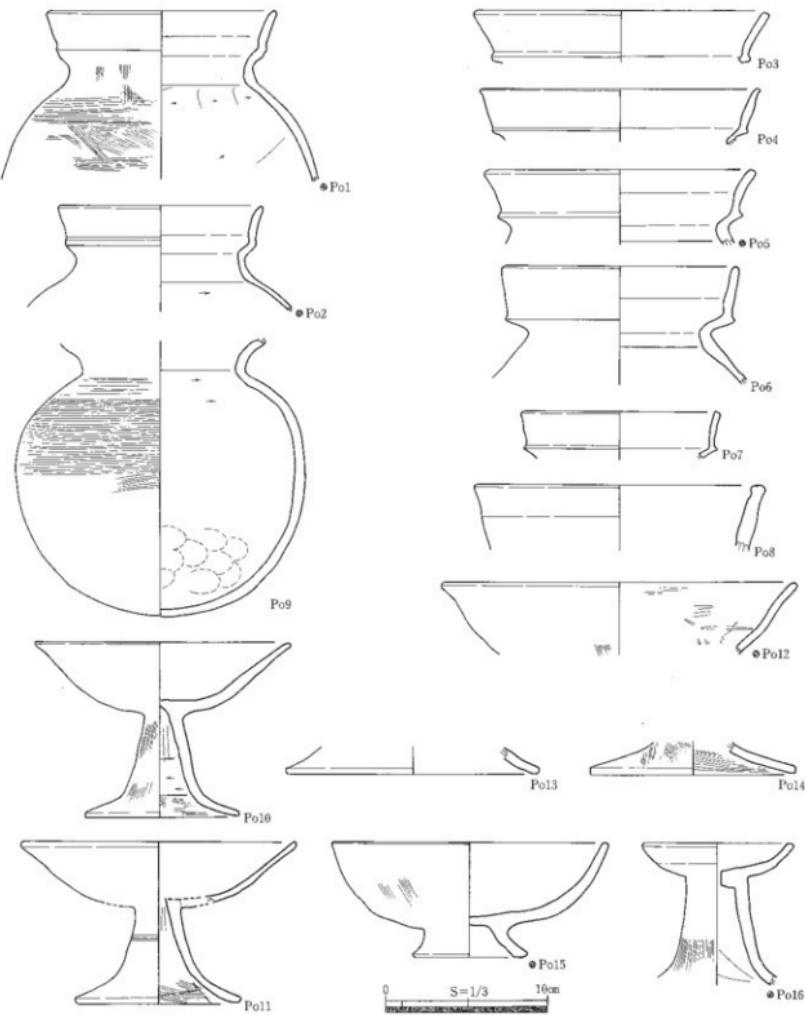
なお、CS I 07-1の床面上では、周壁から約50cm内側と約80cm内側に、壁溝と考えられる溝が検出されている。これらは、07-1に建て替えられる以前のものと考えられ、外側のもの

を07-2、内側のものを07-3として考えた。

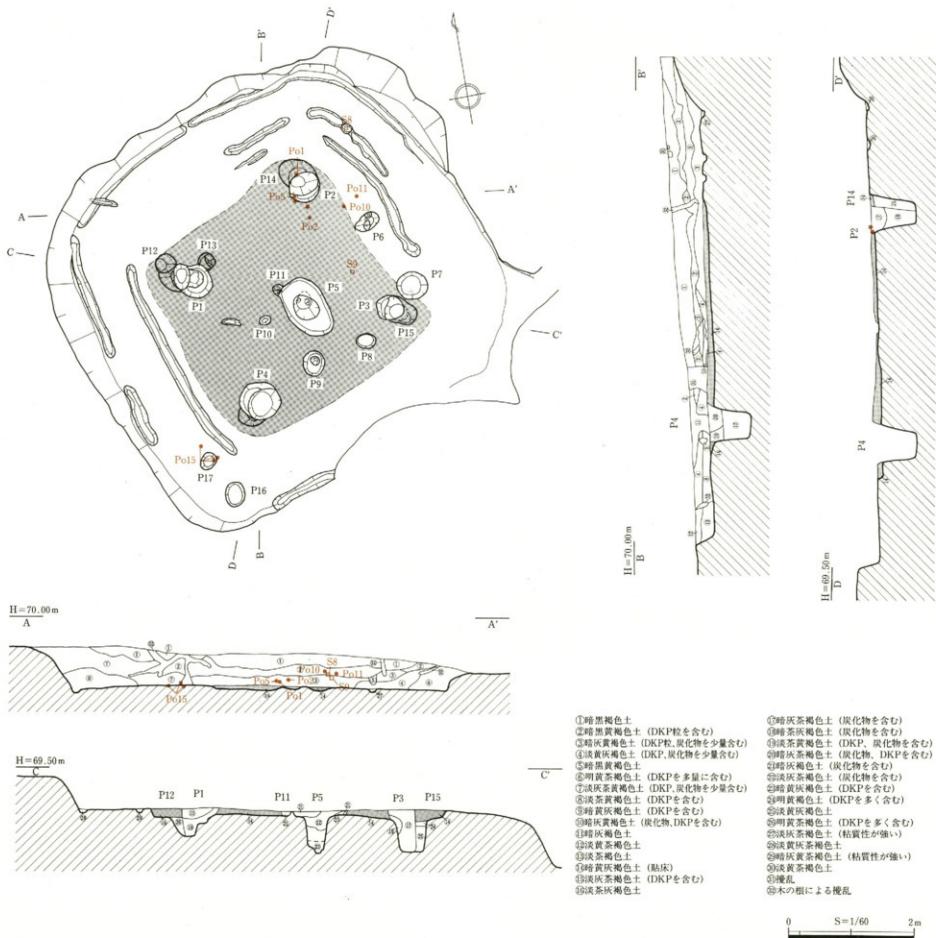
CSI07-2 C S I 07-2は、平面形は遺存している壁溝の状態から、隅丸方形と考えられる。規模は、東西約4.2mを測る。

壁溝は部分的にとぎれ、幅12~16cm、深さ3~9cmを測り、断面「U」字状を呈す。

主柱穴はP 1内の浅いビット、P14、P15、P 4と考えられ、いずれのビットも07-1より



挿図23 南谷大山遺跡CSI07出土遺物実測図(1)



挿図24 南谷大山遺跡CSI07遺構図

は若干浅い。主柱穴間距離は、P 1～P14間から順に2.3m、2.7m、2.7m、2.3mを測る。

**CSI07-3** C S I 07-3は、最も内側に作られたもので、遺存する壁溝から存在が推定される。壁溝は、幅11～18cm、深さ2～4cmを測り、断面「U」字状を呈す。  
主柱穴等は不明である。

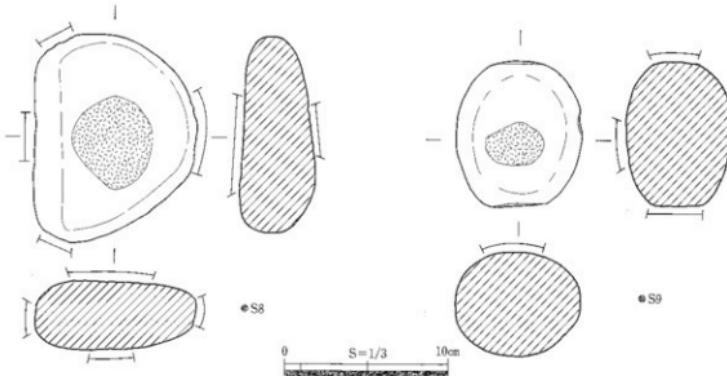
**遺 物** 図化できたものには、壺Po1・Po2、甕Po3～Po9、高杯Po10～Po14、低脚杯Po15、小出士状況 型高杯形器台Po16、敲石S 8・S 9がある。

このうち床面からは、北東側でPo1・Po2・Po5・S 8・S 9が、南西側コーナー付近でPo15が、中央ピット内でPo16が、P 3内でPo12が、それぞれ出土している。

これら以外は埋土中からの出土であるが、Po9・Po10・Po11は暗黒褐色土中でまとまって出土している。

また、土器・石器以外に床面およびP 2中でモモ核が2個検出されている。また、北西コーナーで軽石が検出されている。

**時 期** 床面出土遺物から、C S I 07は大山VI期、古墳時代前期後半頃のものと考えられる。

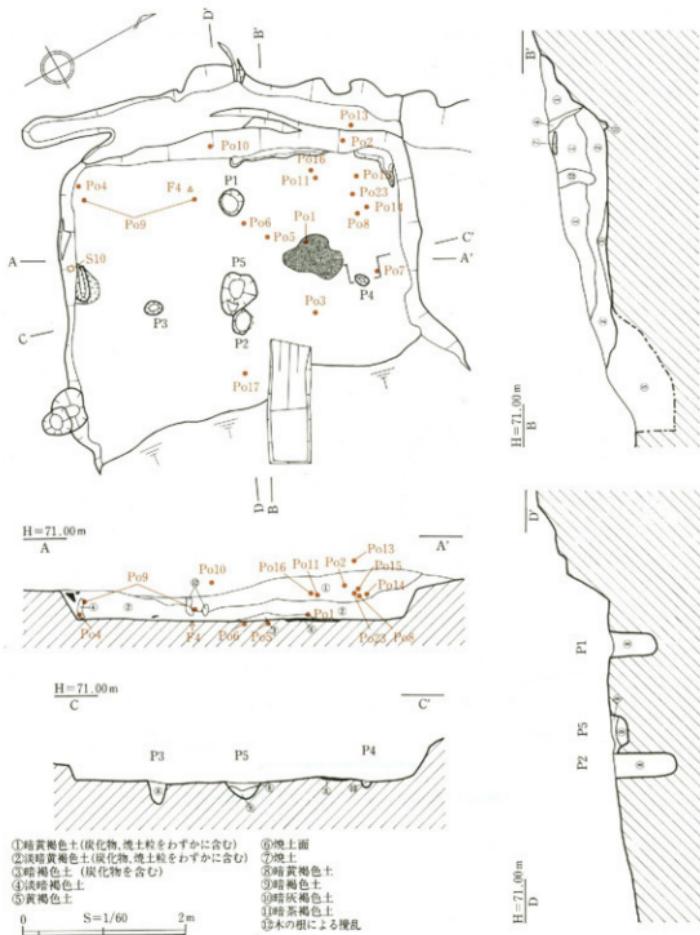


挿図25 南谷大山遺跡CSI07出土遺物実測図(2)

C S I 11 (挿図26~28、図版6・34・35)

**位 置** 調査区の東側尾根上のP27・28、Q27・28グリッドにあり、標高69.7~70.8mの緩やかに傾斜する東斜面に位置する。このため、東壁は流失している。南側約7mにはC S I 14、北側約10mにはC S I 12がある。

**形 態** 東側が流失しているため正確な規模は不明であるが、遺存している壁の状態から、平面は方形または長方形を呈すものと考えられる。残存する規模は、東西3.4m以上、南北4.11mを測り、床面積は14m<sup>2</sup>以上である。残存壁高は、最も遺存状態の良い西壁で最大0.63mを測る。壁溝は、西壁際で部分的に検出された。



挿図26 南谷大山遺跡CS 11遺構図

主柱穴と考えられるものはP1・P2で、それぞれの規模はP1(32×32-58)cm、P2(31×21-79)cmを測る。主柱穴間距離は約1.4mを測る。

また、床面上には、P3・P4のビットが検出された。それぞれの規模は、P3(23×17-28)cm、P4(17×12-10)cmを測る。P3・P4は中央ビットをはさんで等間隔にあり、何らかの構造柱と考えられる。

**中央ビット** 中央ビットはP5で、(26×22-24)cmを測る。埋土は2層に分層できた。そのうち、⑨層中には炭化物が含まれている。

**焼土面** P4付近で、36×25cmに不整形に広がる焼土面が1カ所検出された。

**埋土** 埋土は5層に分層できた。このうち①・②層中からは炭化物・焼土粒が含まれており、さらに、床面直上では炭化物を含む③層が部分的に検出された。また、①層中には、焼け落ちの焼土と考えられる⑦層がブロック状に入り込んでいた。

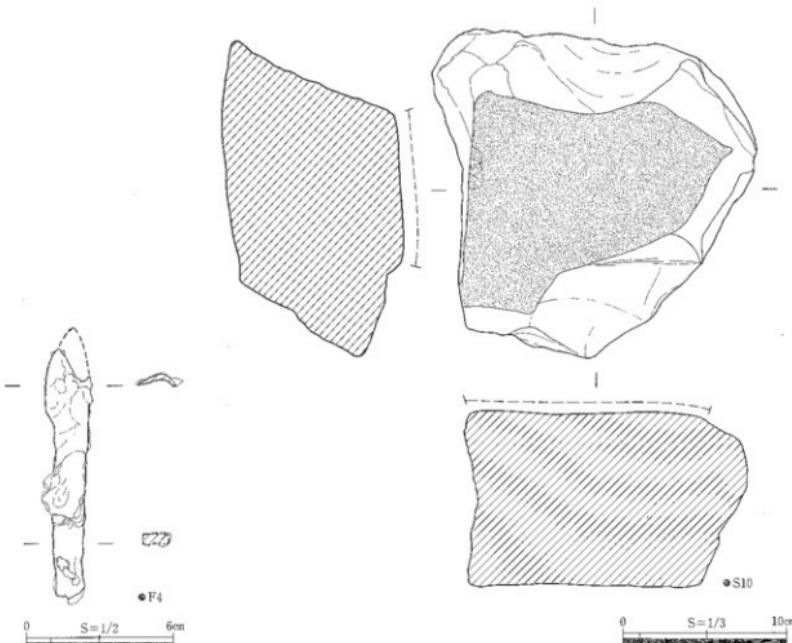
これらのことから、C S I 11は焼失した可能性がある。

貼床は見られない。

**遺物** 固化できたものには、壺Po1・Po2、甕Po3-Po18、底部Po19・Po20、蓋Po21、脚出土状況 Po22、無頸壺Po23、砾石S10、施F4がある。

このうち床面からは、南西コーナーでPo4・Po9が、西側壁際でF4が、P1付近でPo5・Po6が、南側壁際でS10が、東側でPo3・Po17がそれぞれ出土している。その他は埋土中からの出土である。

**時期** 床面出土遺物から、C S I 11は大山Ⅲ期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



挿図27 南谷大山遺跡CS11出土遺物実測図(1)

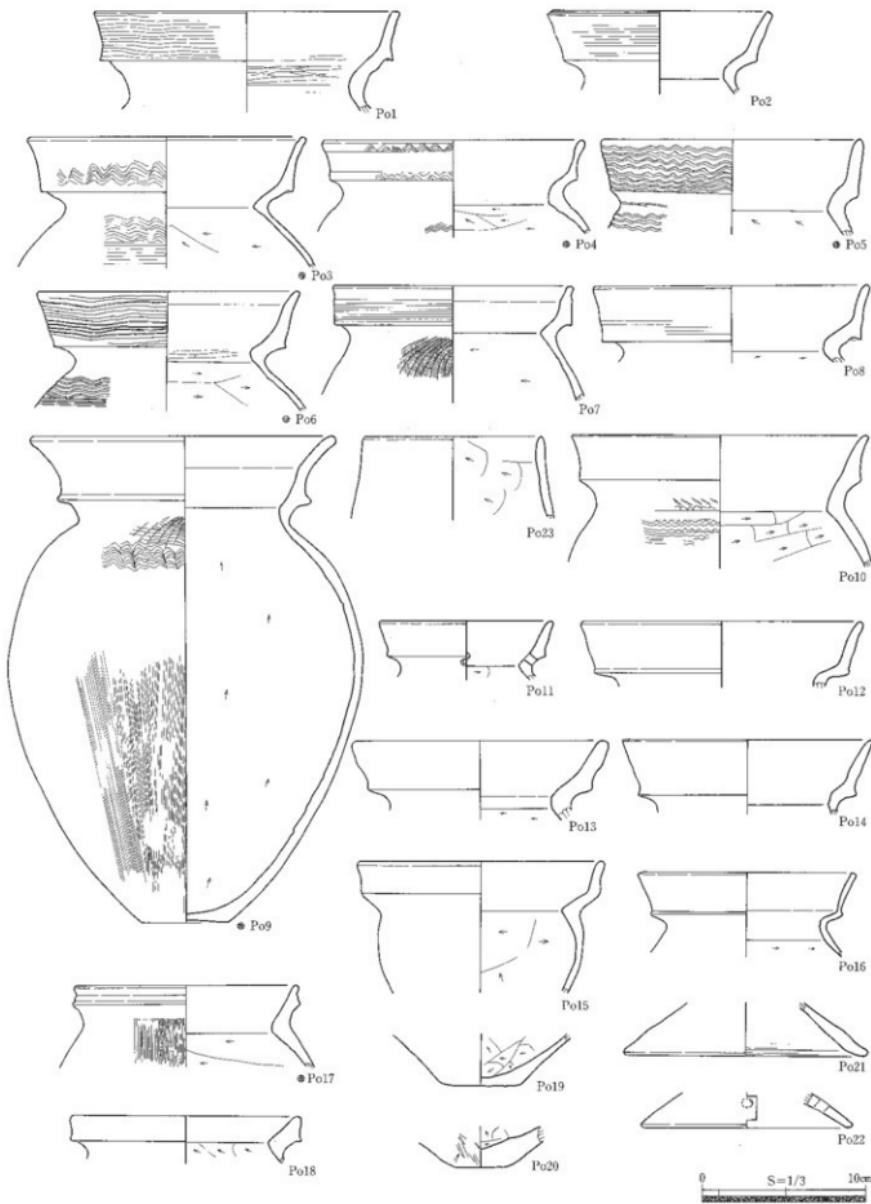
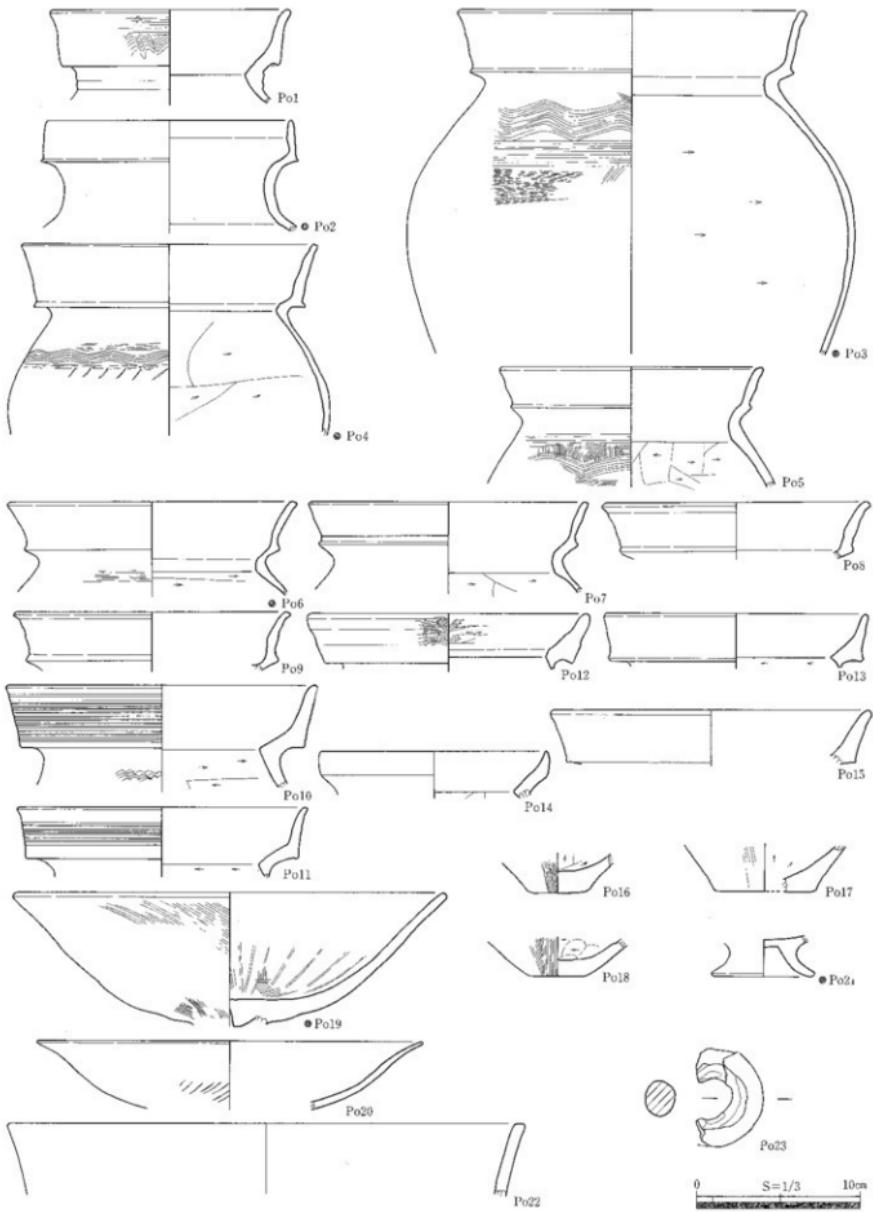


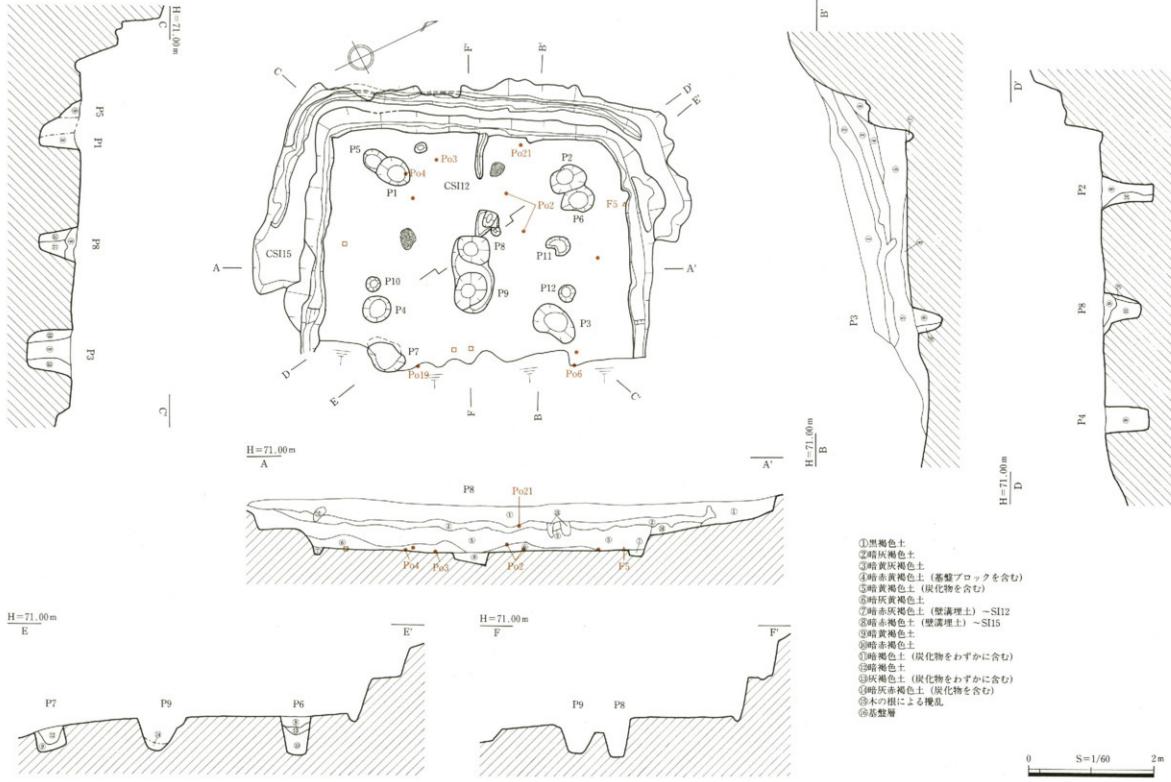
插图28 南谷大山遗址CSI11出土遗物实测图(2)

C S I 12・15 (挿図29~31、図版6・7・35・36)

- 位置** 調査区の東側、P 27・Q 27グリッドにあり、標高69.7~70.8mのかなり傾斜する斜面に位置する。このため、東側は流失している。南側約10mにはC S I 14がある。
- 形態** C S I 12は、東側が流失しているため正確な規模は不明であるが、遺存している壁の状態から、平面は方形または長方形を呈すものと考えられる。残存する規模は、東西3.7m以上、南北4.9mを測り、床面積は18m<sup>2</sup>以上、東側を復元すると20m<sup>2</sup>程度である。残存壁高は、最も遺存状態の良い西壁で最大1.30mを測る。
- 壁溝は、實際を全周するものと考えられ、幅9~28cm、深さ3~14cmを測り、断面逆台形状を呈す。西側壁溝の中央には、住居中心に向かって長さ0.7m、幅10cm、深さ4cmを測る溝が接続している。
- 主柱穴はP 1~P 4と考えられる。それぞれの規模はP 1 (53×42-63)cm、P 2 (57×40-86)cm、P 3 (76×48-70)cm、P 4 (45×45-74)cmを測り、主柱穴間距離はP 1~P 2間から順に、2.7m、2.8m、2.9m、2.2mである。
- 中央ピット** 中央ピットはP 8で、(52×45-60)cmを測る。埋土は3層に分層できたが、①層中には炭化物が含まれていた。
- 焼土面** 床面上には、P 1~P 2間、P 1~P 4間に、合わせて2カ所の焼土面が検出された。
- 炭化材** また、床面西側から北側コーナー付近で、炭化材がわずかではあるが出土している。これらは非常に遺存状態が悪かったが、樹種鑑定の結果スダジイと判明した。
- C S I 15** C S I 15は、C S I 12の床面より約50cm高い位置に作られているが、C S I 12によって大きく削り取られており、正確な規模は不明である。遺存している壁の状態から判断すると、平面は方形または長方形を呈すものと考えられる。残存する規模は、東西2.8m以上、南北6mを測り、床面積は15m<sup>2</sup>以上で、東側を復元すると36m<sup>2</sup>程度となり、C S I 12より一回り大きい。残存壁高は、最も遺存状態のよい西壁で最大0.67mを測る。
- 壁溝は、北側でとぎれしており、幅13~20cm、深さ4cmを測り、断面逆台形状を呈する。
- 主柱穴は、C S I 12の床面上で検出されたP 5~P 7と考えられるが、もうひとつは流失してしまったものと考えられる。それぞれの規模は、P 5 (35×27-34)cm、P 6 (55×40-64)cm、P 7 (60×45-35)cmを測る。主柱穴間距離はP 5~P 6間、P 7~P 5間がそれぞれ3.4m、3.2mである。
- 中央ピットはP 9で、(80×59-53)cmを測る。埋土下層の④層中で炭化物片が多数検出され、樹種鑑定の結果ツバキ・ツブラジイと、複数の樹種が含まれていた。
- 埋土** 埋土は、C S I 12は7層に、C S I 15は1層に分層できた。このうち、C S I 12の埋土の状況を見ると、中心に向かって堆積しており、自然堆積の状況が窺える。しかし、⑤層中に炭化物を含んでおり、また、⑥層は焼け落ちの際の灰層と考えられ、床面からも炭化材が検出されていることから、C S I 12は焼失したものと考えられる。
- また、C S I 15の埋土である⑧層は、均質で締まっており、意図的に埋められた可能性がある。
- 遺物** 炭化できたものには、壺Po 1・Po 2、甕Po 3~Po 15、底部Po 16~Po 18、高杯Po 19・
- 出土状況** Po 20、低脚杯Po 21、瓶形土器Po 22・Po 23、不明鉄器F 5がある。
- このうち床面からは、西側壁寄りでPo 3・Po 21が、P 1上でPo 4が、北側壁際でF 5が、P 2と中央ピットの間でPo 2が、東側でPo 6・Po 19がそれぞれ出土している。
- その他は埋土中からの出土である。このうち、Po 1・Po 10・Po 12~Po 15・Po 16~Po 18は弥



挿図29 南谷大山遺跡CSII 12-15出土遺物実測図(1)



挿図30 南谷大山遺跡CSI12-15遺構図

生土器であり、切り合ひ関係からCSII12に先行するCSII15の土器が混入した可能性がある。

時 期 床面出土遺物から、CSII12は大山V期、古墳時代前期前半頃のものと考えられる。

CSII15からは遺物は検出されなかつたが、CSII12の埋土中から弥生土器が検出されており、大山III期の可能性がある。

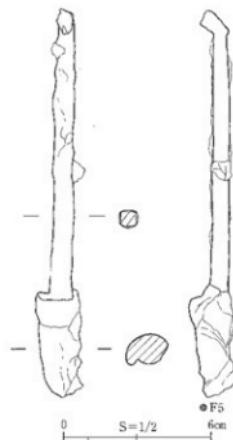
#### CSII13 (挿図32・33、図版7・36)

位 置 調査区の東側尾根上のP27グリッドにあり、標高74.2~74.9mの緩やかに南側に傾斜する斜面に位置する。南側は流失している。南西側約3mにはCSII04、東側約8mにはCSII12・15がある。

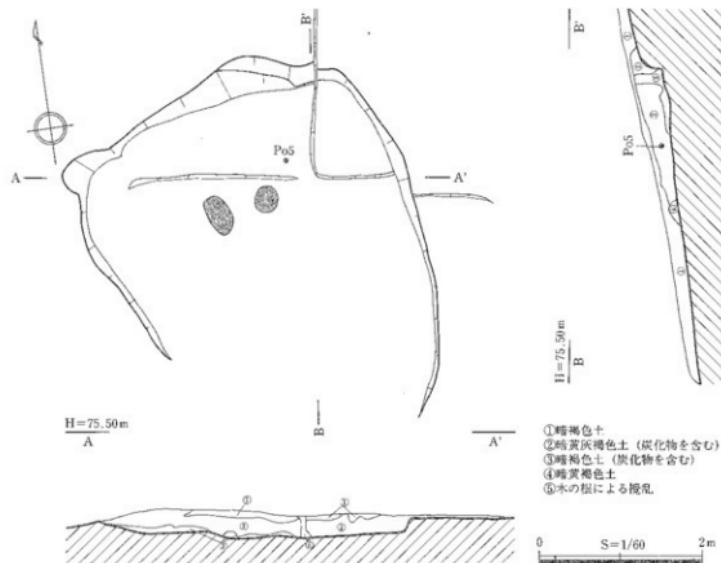
形 態 遺存状態は悪く、南側が流失しているため正確な規模は不明であるが、遺存している壁の状態から、平面は隅丸方形を呈すものと考えられる。残存する規模は、東西3.7m、南北2.7m以上を測り、床面積は10m<sup>2</sup>以上、南側を推定すると約13m<sup>2</sup>と考えられる。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.62mを測る。

壁溝・主柱穴・中央ピットは確認されなかった。

焼 土 面 住居のほぼ中央部において、楕円に広がる焼土面を2カ所検出した。

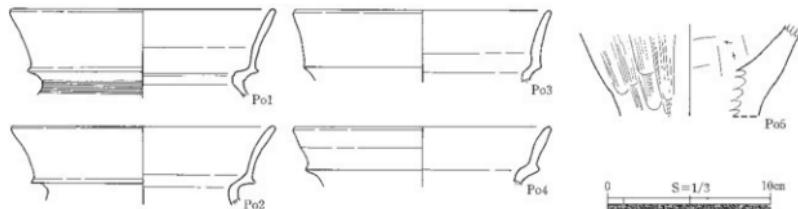


挿図31 南谷大山遺跡CSII12出土遺物実測図(2)



挿図32 南谷大山遺跡CSII13遺構図

- 炭化材** 床面上から、構造材と考えられる炭化材が出土している。樹種鑑定の結果シラカシと判明した。
- 埋土** 埋土は3層に分層できたが、②・③層中には炭化物が含まれている。床面から炭化材が出土していること考え合わせると、CS I 13は焼失した可能性がある。  
貼床は見られない。
- 遺物** 固化できた遺物には、甕Po1～Po4、鉢Po5がある。
- 出土状況** いずれも埋土中からの出土である。
- 時期** 出土遺物から、CS I 13は大山IV期、弥生時代後半頃のものと考えられる。



挿図33 南谷大山遺跡CS I 13出土遺物実測図

#### CS I 14 (挿図34～38、図版7・8・36・37)

- 位置** CS I 14は、C-I区のやや南側のP29・30グリッドにあり、標高70.1mの平坦面に位置する。北側約8mにはCS I 11がある。
- 形態** 造存状態は比較的良好、平面は長方形を呈すものである。規模は、東西2.23m、南北2.68mを測り、床面積は5.6m<sup>2</sup>である。残存壁高は、最も造存状態の良い西壁で最大0.19mを測る。付近は、CSS 04の平坦面があり、これにともない削平を受けたものと考えられる。  
主柱穴はP 1・P 2の2個で、それぞれの規模はP 1 (41×38-16) cm、P 2 (43×38-35) cmを測り、主柱穴間距離は1.9mで、簡単な上屋構造であったものと考えられる。  
壁溝・中央ピットは、認められなかった。
- 焼土面** P 2に接して、稍円形に広がる焼土面が検出された。
- 埋土** 埋土は2層に分層でき、①層中には炭化物が含まれていた。②層は、上屋構造が焼け落ちた際の炭・灰層と考えられ、床面の中央部に集中してみられた。  
のことより、CS I 14は焼失したものと考えられる。  
また、西側壁寄りで赤色顔料と思われるもの、南東コーナー付近で灰色粘土の塊が検出されている。
- 貼床** 貼床は③層で、床面の中央よりや東側にのみ認められた。
- 遺物** 固化できたものには、甕Po1～Po11、底部Po12、脚付甕Po13、高杯Po14～Po18、手捏ね土器Po19、土玉Po20がある。
- このうち床面からは、Po 1～Po 3・Po 5・Po 7～Po 9・Po 12～Po 14・Po 16・Po 19・Po 20が南側に集中しており、炭・灰層下で出土している。また、P 2内ではPo 17・Po 18が、P 1付近でPo 6がそれぞれ出土している。このうち、Po 1はやや広い範囲に散乱している。Po 10は、P 2内のものと西側壁際のものが接合している。

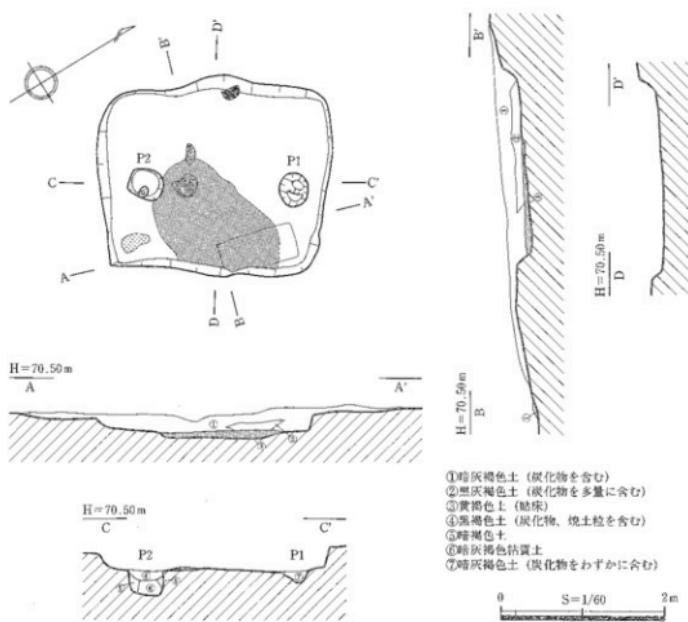


図34 南谷大山遺跡CSII14遺構図

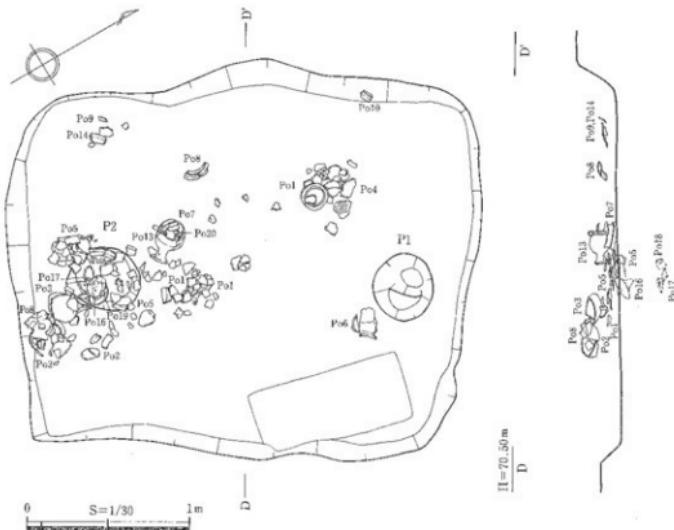
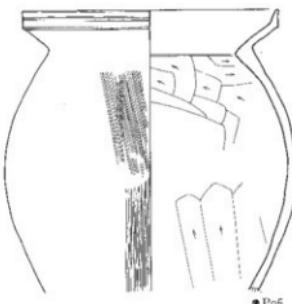
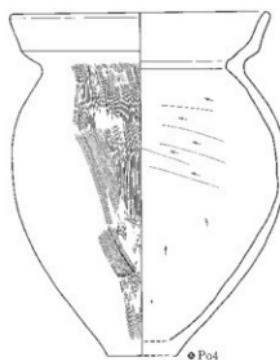
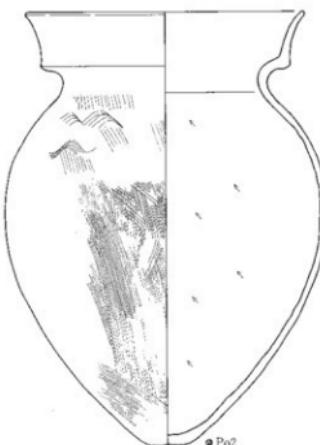
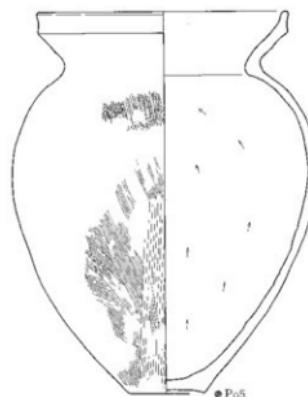
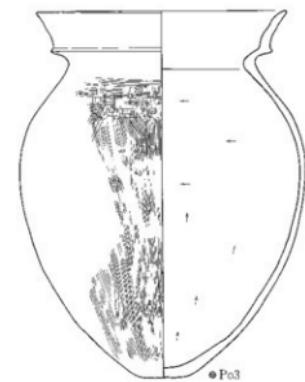
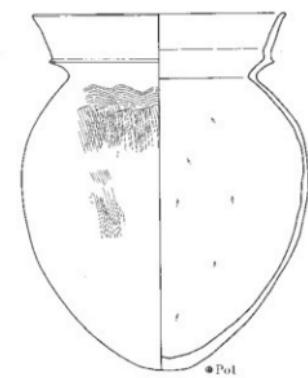
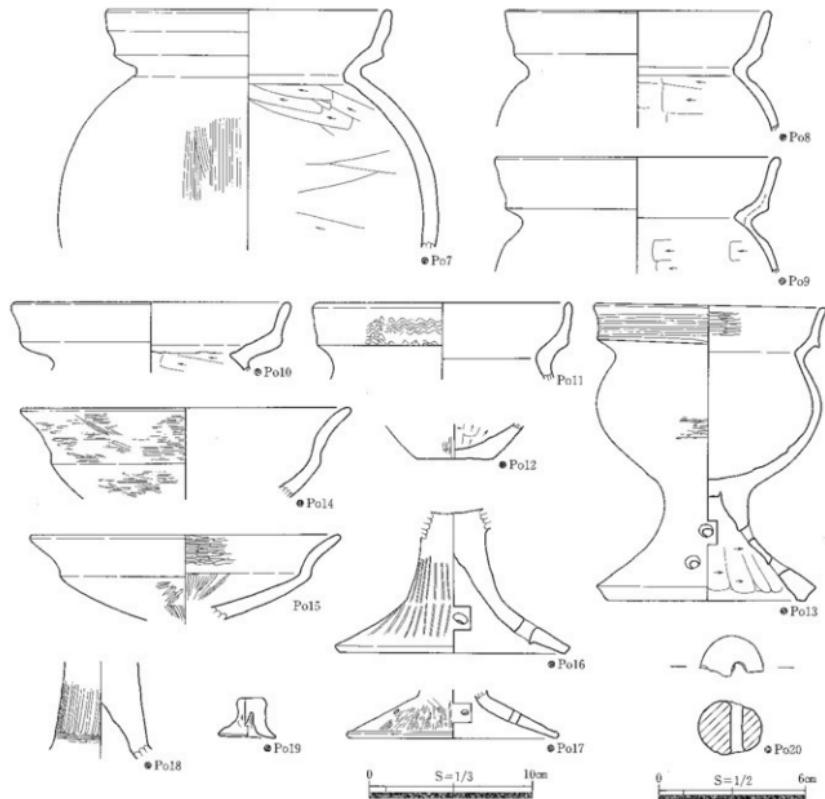


図35 南谷大山遺跡CSII14土器検出状況図



0 S=1/3 10cm

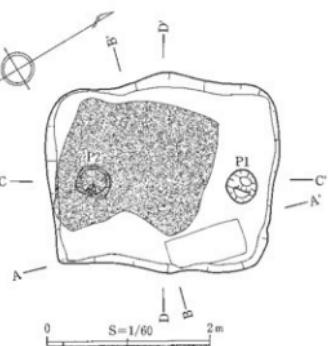
挿図38 南谷大山遺跡CSII4出土遺物実測図(1)



挿図37 南谷大山遺跡CSII14出土遺物実測図(2)

その他は埋土下層からの出土である。

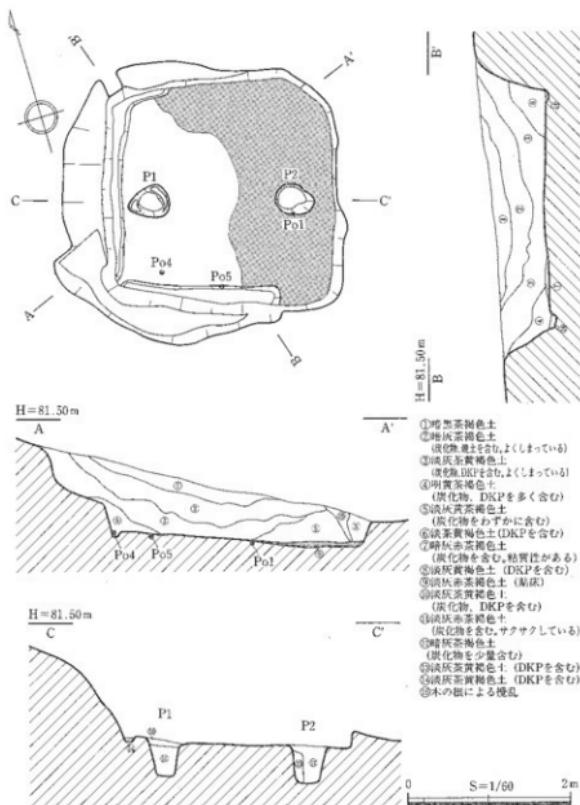
**時 期** 床面出土遺物のうち、Po13は脚部のつくりにやや古い様相が見られるが、その他のものについては良好な一括資料として捉えられる。CSII14は、これらの土器から大山三期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



挿図38 南谷大山遺跡CSII14炭化物出土状況図

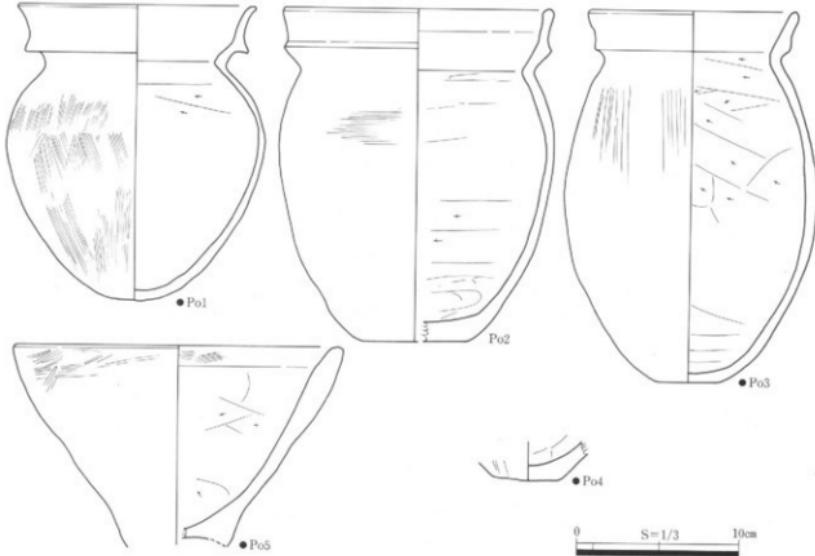
C S I 16 (挿図39・40、図版8・9・37・38)

- 位 置** C-I 区の北側のO23グリッドにあり、標高80.2~81.2mの東側に傾斜する斜面に位置する。西側約2mにはC S D 09、北西側約10mにはC S I 01がある。
- 形 態** 造存状態はよく、平面は隅丸方形を呈す。規模は、東西2.65m、南北2.50mを測り、床面積は6.6m<sup>2</sup>である。残存壁高は、最も造存状態の良い西壁で最大0.91mを測る。
- 壁構は、北側および東側で検出されなかった。規模は、幅10~20cm、深さ1~7cmを測り、断面「U」字状を呈す。
- 主柱穴はP1・P2の2個で、それぞれの規模は、P1 (52×36-48) cm、P2 (46×38-45) cmを測る。主柱穴間距離は、1.8mである。
- 中央ピットはない。



挿図39 南谷大山遺跡CS 16遺構図

- 埋 土** 埋土は8層に分層できた。いずれの層も住居の中心部に向かって堆積しており、自然堆積したものと考えられる。
- 貼 床** 床面には、東側半分に粘質土を含む⑨層による貼床が施されている。
- 遺 物** 固化できたものには、甕Po 1～Po 3、底部Po 4、鉢Po 5がある。
- 出土状況** このうち床面からは、南側壁際でPo 4・Po 5が、東側壁寄りでPo 1が出土している。



挿図40 南谷大山遺跡CSI16出土遺物実測図

- また、Po 3も床面上から出土している。  
Po 2は埋土下層からの出土である。
- 時 期** 床面出土遺物から、CSI16は大山III期、弥生時代後期後半頃のものと考えられる。



写真6 C-1区調査風景

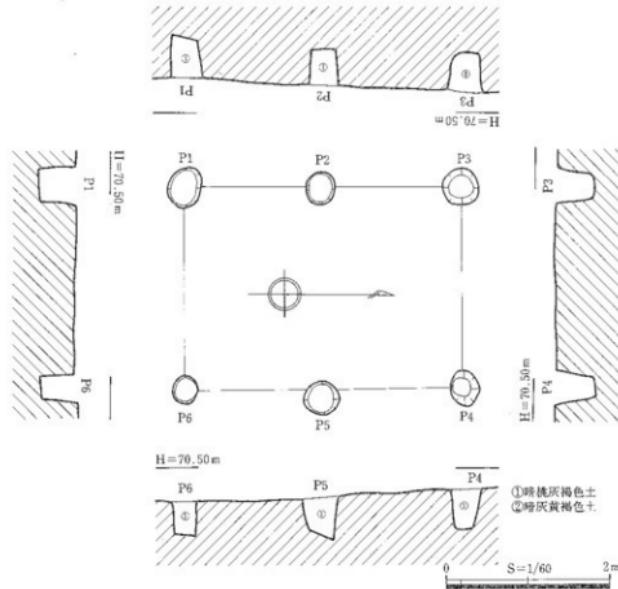


写真7 現地説明会風景

## 2. 挖立柱建物跡

C S B 02 (挿図41、図版9)

- 位 置** C-I 区の南側の O30・P30 グリッドにあり、標高 70.1m の平坦面に位置する。付近には、C S K08・09 が接し、東側 1m には C S K13 がある。
- 形 態** 衍行 2 間・3.5m、梁行 1 間・2.5m を測る掘立柱建物跡である。主軸方向は、N-0°-E と、北を向く。柱穴は P1 ~ P6 の 6 個で、それぞれの規模は、P1 (50×40-47) cm、P2 (40×35-45) cm、P3 (45×45-51) cm、P4 (45×37-52) cm、P5 (46×40-49) cm、P6 (35×32-47) cm である。柱穴間距離は、P1 ~ P2 間から順に 1.7m、1.8m、2.5m、1.8m、1.7m、2.5m である。
- 埋 土** 埋土は、P3 が②層が単層で、その他は①層が単層で入り込んでいる。
- 時 期** P4 内から弥生土器片が出土しているが、小片のため同化できなかった。しかし、土器の特徴から大山田期・弥生時代後期後半頃のものと考えられる。
- また、P4 付近に貯蔵穴と考えられる C S K09 がある。C S B 02 内の貯蔵穴の可能性があるが、C S K09 から遺物が出土していないため、その関係は不明である。
- 掘立柱建物跡は、C 区では C-I 区の C S B 02 と、C-II 区の C S B 01 の 2 棟のみ検出されている。いずれも弥生時代後期後半頃のものと考えられており、B 区の掘立柱建物跡より古い。



挿図41 南谷大山遺跡CSB02遺構図

### 3. 土坑・土壤

CSK01 (挿図42・43、図版9・38)

位 置 C-I区の北側のM23・N23グリッド、CS I01の北西側コーナーに、袋状に掘り込まれている。

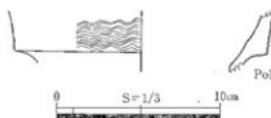
形 態 平面は、上縁不整形、底部不整な長楕円形を呈し、底部長径1.80m×短径1.13mを測る。深さは0.86mを測り、断面は袋状を呈す。

埋 土 埋土は、4層に分層できた。①・②層には炭化物が含まれ、③層には基盤であるDKP層を含んでおり、壁が崩れながら堆積したものと考えられる。

遺 物 埋土中から、わずかに甕Po1が出土している。

時 期 出土遺物から、CSK01は大山II～III期・弥生時代後期後半頃のものと考えられるが、CS K01の埋土は、CS I01の埋土と異なる②層が入り込んでおり、CS I01が廃絶された以降も使用された可能性がある。

用 途 形態上の特徴から、CSK01は、CS I01内に掘り込まれた屋内貯蔵穴と考えられる。



挿図43 南谷大山遺跡CSK01出土遺物実測図

CSK03 (挿図44、図版10)

位 置 C-I区の最も南側のP32グリッドにあり、標高67.5～68.3mの平坦面に位置する。南側約1mにはCSI03、北側約2mにはCSI05がある。

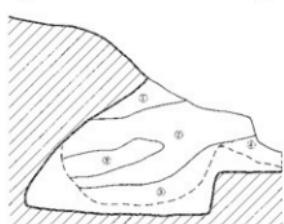
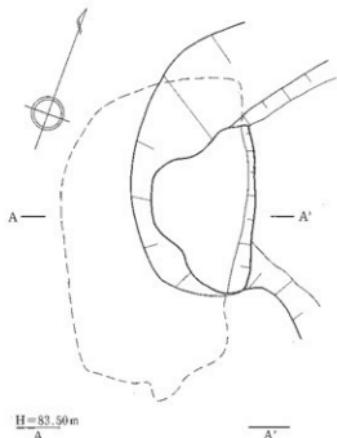
形 態 平面は、上縁不整な楕円形、底部楕円形を呈し、二段に掘り込まれる。規模は、上縁部長径0.87m×短径0.69mを測る。深さは0.79mを測り、断面は台形状を呈す。

埋 土 埋土は、2層に分層できた。

遺 物 埋土中から、土器片が出土しているが、図化できなかった。

時 期 CSK03の時期は不明である。

用 途 CSK03の用途は不明である。



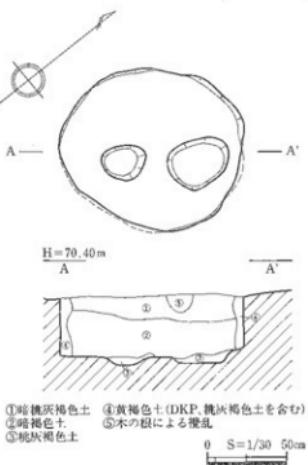
挿図42 南谷大山遺跡CSK01造構図



挿図44 南谷大山遺跡CSK03造構図

**C SK08 (挿図45、図版10)**

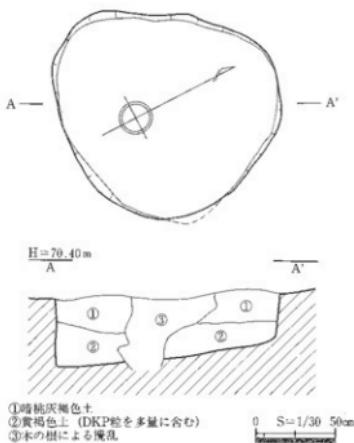
- 位 置** C-I 区の南側のP30グリッドにあり、標高70.2mの平坦面に位置する。西側約0.5mにはC SK09、南東約1mにはC SK13がある。
- 形 態** 平面は、上縁部・底部とも楕円形を呈し、規模は、上縁部長径1.13m×短径1.0m、底部長径1.14m×短径1.02mを測る。深さは0.36mを測り、断面は長方形を呈し、一部袋状に掘り込まれる。底部には、深さ約3cmのビットが2個掘り込まれる。
- 埋 土** 埋土は、4層に分層できた。②層中から石材が出土している。
- 時 期** 遺物は全く出土していないため、C SK08の時期は不明である。
- 用 途** C SK08は、形態上の特徴から屋外貯蔵穴と考えられる。



挿図45 南谷大山遺跡CSK08遺構図

**C SK09 (挿図46、図版10)**

- 位 置** C-I 区の南側のO30-P30グリッドにあり、標高70.2mの平坦面に位置する。東側約0.5mにはC SK08があり、C SB02の範囲内にある。
- 形 態** 平面は、上縁部・底部とも不整な楕円形を呈し、規模は、上縁部長径1.38m×短径1.27m、底部長径1.35m×短径1.22mを測る。深さは0.46mを測り、断面は長方形を呈し、一部袋状に掘り込まれる。底部には、木の根による搅乱がある。
- 埋 土** 埋土は、2層に分層できた。
- 時 期** 遺物は全く出土していないため、C SK09の時期は不明である。
- 用 途** C SK09は、位置的にC SB02内にあるが、これに伴うものではなく、形態上の特徴から屋外貯蔵穴と考えられる。



挿図46 南谷大山遺跡CSK09遺構図

**C SK10 (挿図47)**

- 位 置** C-I 区のやや北側のO25グリッドにあり、標高77.5~77.7mの緩やかに南に傾斜する斜面上に位置する。南東側約1mにはC SD06がある。
- 形 態** 平面は、上縁部・底部とも不整な楕円形を呈し、規模は、上縁部長径1.54m×短径0.91m、

底部長径1.4m×短径0.76mを測る。  
深さは0.12mを測り、断面は逆台形状を呈す。

埋 土 埋土は、2層に分層できた。  
時 期 造物は全く出土していないため、C SK10の時期は不明である。  
用 途 C SK10の用途は不明である。

C SK11 (挿図48、図版10)

位 置 C-I区の南側のP31・Q31グリッド内にあり、標高67.5~68.0mの緩やかに東に傾斜する斜面に位置する。

形 態 西側は、C S I 06によって削り取られ、東側は流失しているため遺存状態は悪い。

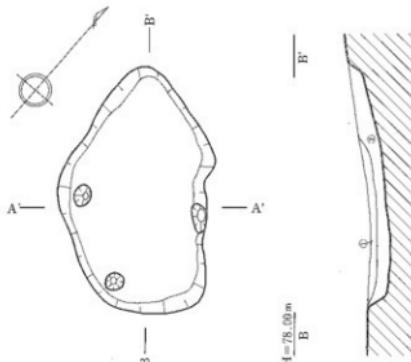
平面は、上縁部・底部とも不整な帶状を呈し、規模は、上縁部長径2.0m以上×短径2.0mを測る。

深さは最大0.44mを測り、断面は逆台形状を呈す。

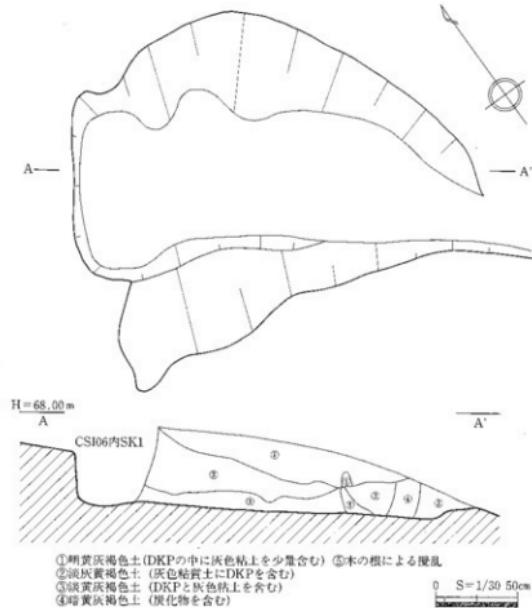
埋 土 埋土は、4層に分層できた。

時 期 遺物は全く出土していないため、C SK11の時期は不明であるが、C S I 06が掘り込まれる以前にあり、古墳時代前期後半以前のものと考えられる。

用 途 C SK11の用途は不明である。



挿図47 南谷大山遺跡CSK10遺構図



挿図48 南谷大山遺跡CSK11遺構図

C SK12 (挿図49、図版11)

- 位 置 C-I区の北側のO23グリッドにあり、標高81.2~81.9mの緩やかに南に傾斜する斜面に位置する。付近には、CSD05・07~09があり、東側約3mにはCSII16がある。
- 形 態 平面は、上縁部・底部とも橢円形を呈し、規模は、上縁部長径5.0m×短径3.6mを測る。深さは最大0.1mを測り、断面は皿状を呈す。
- 埋 土 埋土は、2層に分層できた。
- 時 期 遺物は全く出土していないため、CSK12の時期は不明である。
- 用 途 CSK12の用途は不明である。

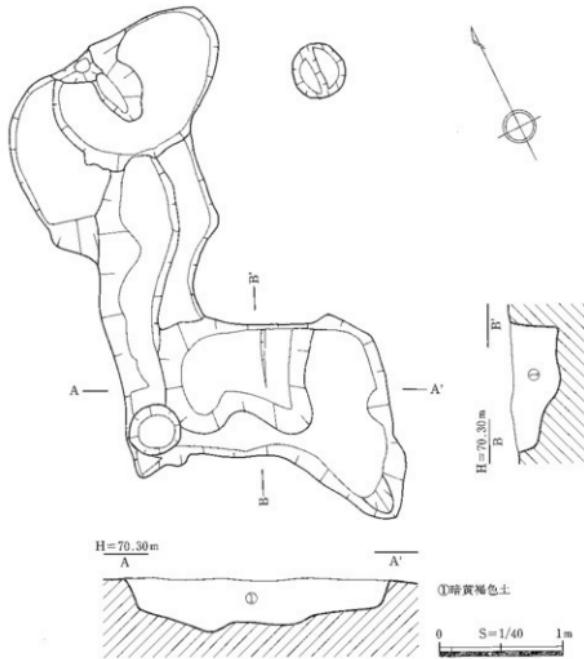


挿図48 南谷大山遺跡CSK12遺構図

C SK13 (挿図50)

- 位 置 C-I区の南側のP30グリッドにあり、標高70.2mの平坦面に位置する。西側約1mにはCSK08があり、北東側約4mにはCSII14がある。
- 形 態 平面は、上縁部・底部とも不整形な逆「コ」字状を呈し、北側・南側が2段に掘り込まれ、一段深くなる。規模は、上縁部長軸3.55m×短軸2.15mを測る。深さは最大0.42mを測り、断面は不整形な台形状を呈す。
- 埋 土 北側・南側は、底部に木の根による搅乱を受けている。
- 埋 土 埋土は、暗黄褐色土が単層ではいる。

遺物 埋土中から土器片が出土しているが、小片のため図化できなかった。  
時期・用途 C S K13の時期、用途は不明である。



挿図50 南谷大山遺跡CSK13透構図

#### 4. 段状遺構

C S S 04 (挿図51~53、図版11・38・39)

- 位置 C S S 04は、C-I区のやや南側O28・O29・P28・P29グリッドに位置し、緩やかに南側に傾斜する斜面を加工して平坦面をしている。標高は約70.5~71.2mである。東側でC S I 11、南東側でC S I 14と接している。
- 形態 南側斜面を、逆「L」字状に高さ約1m削り込み、平坦面を作っている。東西約16m、南北約12mを測る。
- ピット群 平坦面には64個のピットが見られるが、規則性は認められない。規模等は挿表1を参照されたい。
- 溝 また、ピットが集中する部分には、幅15~20cm、深さ2~9cmを測る溝が、斜面際に作られている。ピットは規則性が認められなかったが、この溝は、壁溝の可能性があり、この部分に竪穴住居または平地式の住居があった可能性も捨て切れない。
- 埋土 埋土は6層からなる。これらの土層を観察すると、当遺構の埋土は自然堆積を窺わせる。

**造 物** 固化できたものには、壺Po1、甌Po2～Po31、底部Po32～Po38、高杯Po39・Po40、鼓形出土状況 器台Po41～Po43、小型丸底壺Po44、小型高杯形器台Po45・Po46、低脚杯Po47、蓋Po48、土玉Po49・Po50、敲石S15がある。

このうち床面およびピット内からは、Po2がP2内から、Po43がP38内から、Po48がP62付近でそれぞれ出土している。

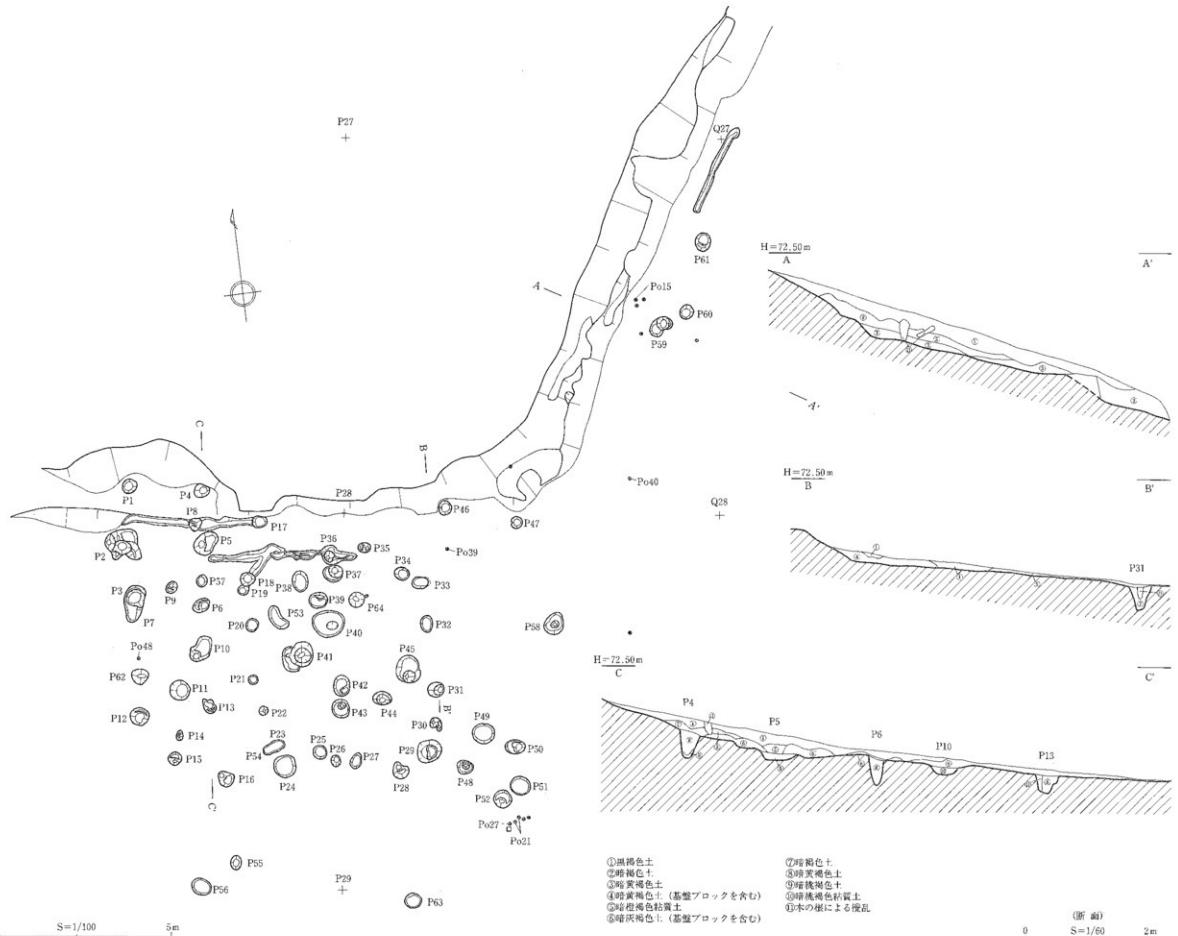
それ以外は埋土中からの出土である。

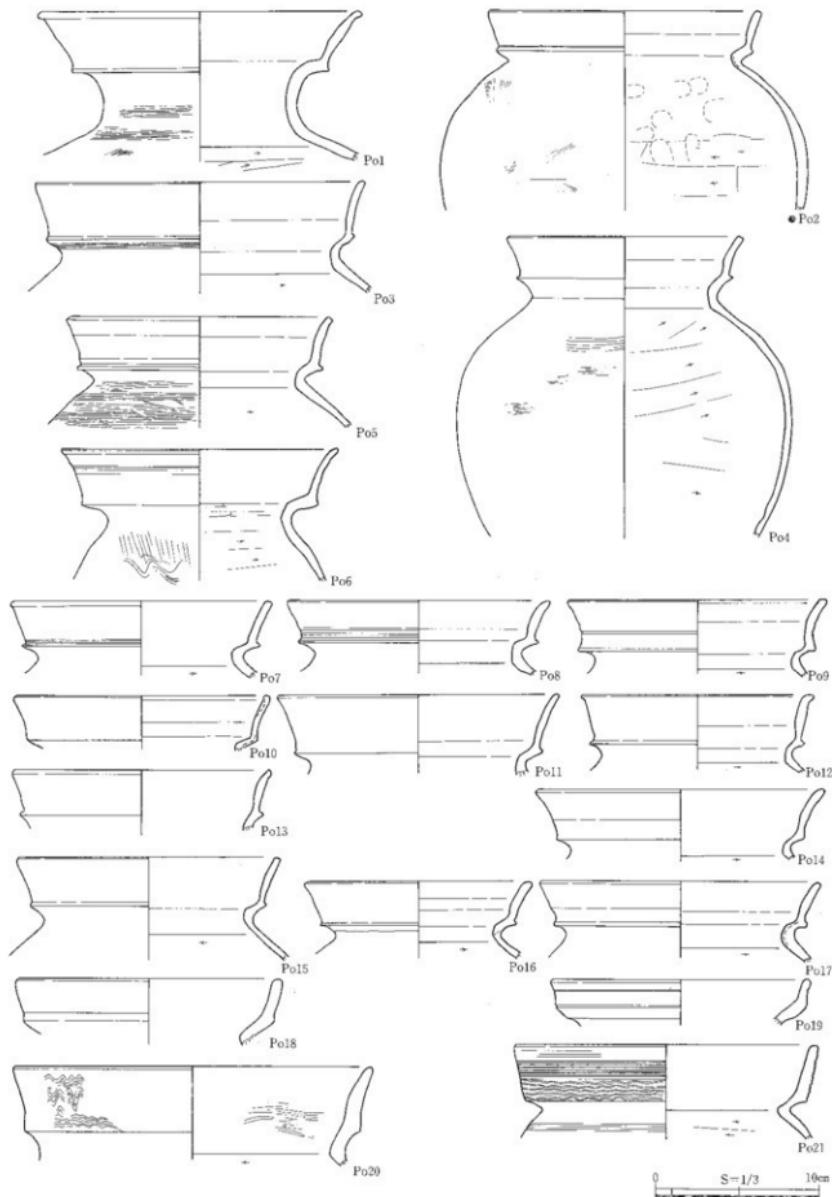
**時 期** 出土土器は、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての特徴をもつものばかりであるが、底面およびピット内出土の土器から、CSS04は大山VI期、古墳時代前期後半頃のものと思われる。

**用 途** 用途は不明である。

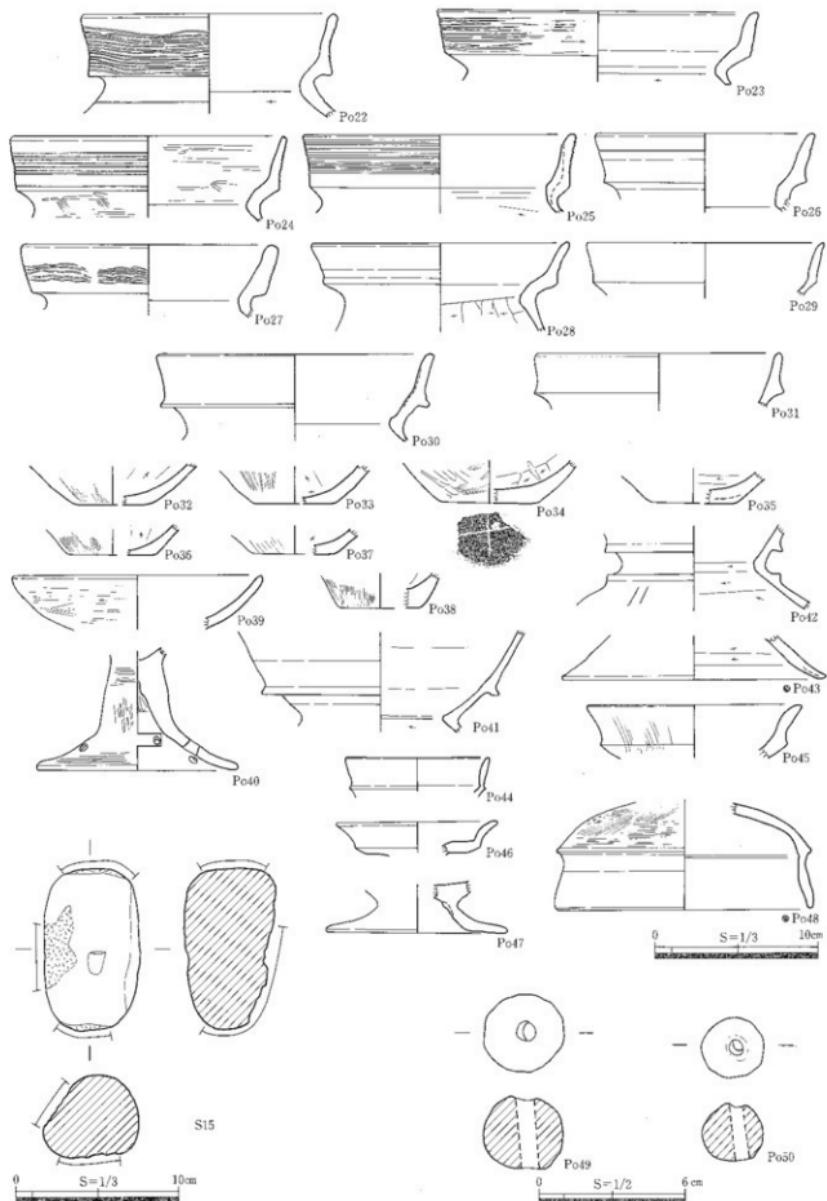
ピット番号	規 模 (cm) (長径×短径×深さ)						
1	40×34-35.2	17	38×30-6.7	33	40×30-37.2	49	58×52-24.4
2	104×90-44.7	18	40×38-48.3	34	38×36-51.3	50	52×38-33.4
3	54×54-44.0	19	28×20-16.2	35	33×26-12.8	51	56×48-25.0
4	40×38-34.2	20	34×32-15.5	36	30×24-49.0	52	48×46-37.8
5	70×46-49.7	21	24×23-7.7	37	50×44-49.1	53	64×28-15.3
6	44×34-47.2	22	24×22-25.5	38	58×46-29.8	54	30×24-9.3
7	46×40-11.5	23	30×24-13.5	39	46×40-40.0	55	38×28-38.9
8	32×24-28.2	24	60×60-10.5	40	86×70-18.7	56	50×40-9.1
9	36×24-14.3	25	35×34-15.4	41	93×60-46.2	57	30×24-27.9
10	74×46-17.2	26	30×24-45.3	42	54×44-14.4	58	62×52-40.4
11	54×52-34.4	27	44×30-9.4	43	50×48-22.6	59	60×30-63.8
12	50×46-36.8	28	44×40-23.4	44	50×34-35.6	60	35×34-23.1
13	44×28-31.5	29	70×60-49.2	45	74×60-44.8	61	50×40-48.9
14	27×14-33.5	30	40×38-20.4	46	34×33-26.8	62	46×40-56.1
15	34×32-20.1	31	42×36-42.6	47	32×30-55.1	63	44×40-25.3
16	46×36-37.9	32	46×30-19.9	48	40×32-24.0	64	40×39-32.7

摺表1 南谷大山遺跡CSS04ピット群一覧表





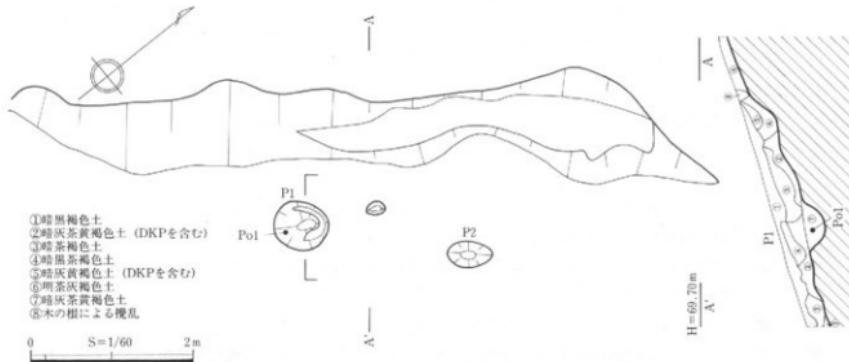
插図52 南谷大山遺跡CSS04出土遺物実測図(1)



擇図53 南谷大山遺跡CSS04出土遺物実測図(2)

C S S 05 (挿図54・55、図版11・39)

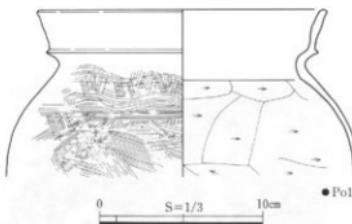
- 位 置** C S S 05は、C-I区の南側P30・P31・Q30・Q31グリッドに位置し、緩やかに南東側に傾斜する斜面を加工して平坦面にしている。標高は約68.0~69.6mである。南側でC S I 06と接している。
- 形 態** 南東側に傾斜する斜面を、高さ約1.3m削り込み、平坦面を作っている。東西約1.5m、南北約4mを測る。
- ピット群** 平坦面には2個のピットが見られる。それぞれの規模は、P 1 (58×55~41)cm、P 2 (53×32~21) cmを測る。
- 埋 土** 埋土は6層からなる。これらの土層を観察すると、当遺構の埋土は自然堆積を窺わせる。
- 遺 物** 図化できたものには、P 1内から出土した甕Po 1がある。
- 出土状況** この他にも、埋土中から土器が出土しているが、図化できなかった。
- 時 期** P 1内出土のPo 1から、C S S 05は大山Ⅶ期、古墳時代前期後半頃のものと思われる。
- 用 途** 用途は不明である。



挿図54 南谷大山遺跡CSS05遺構図



写真8 C-II区調査風景



挿図55 南谷大山遺跡CSS05出土遺物実測図

## 5. 溝状造構

C S D 01・05・07・08・09 (挿図56)

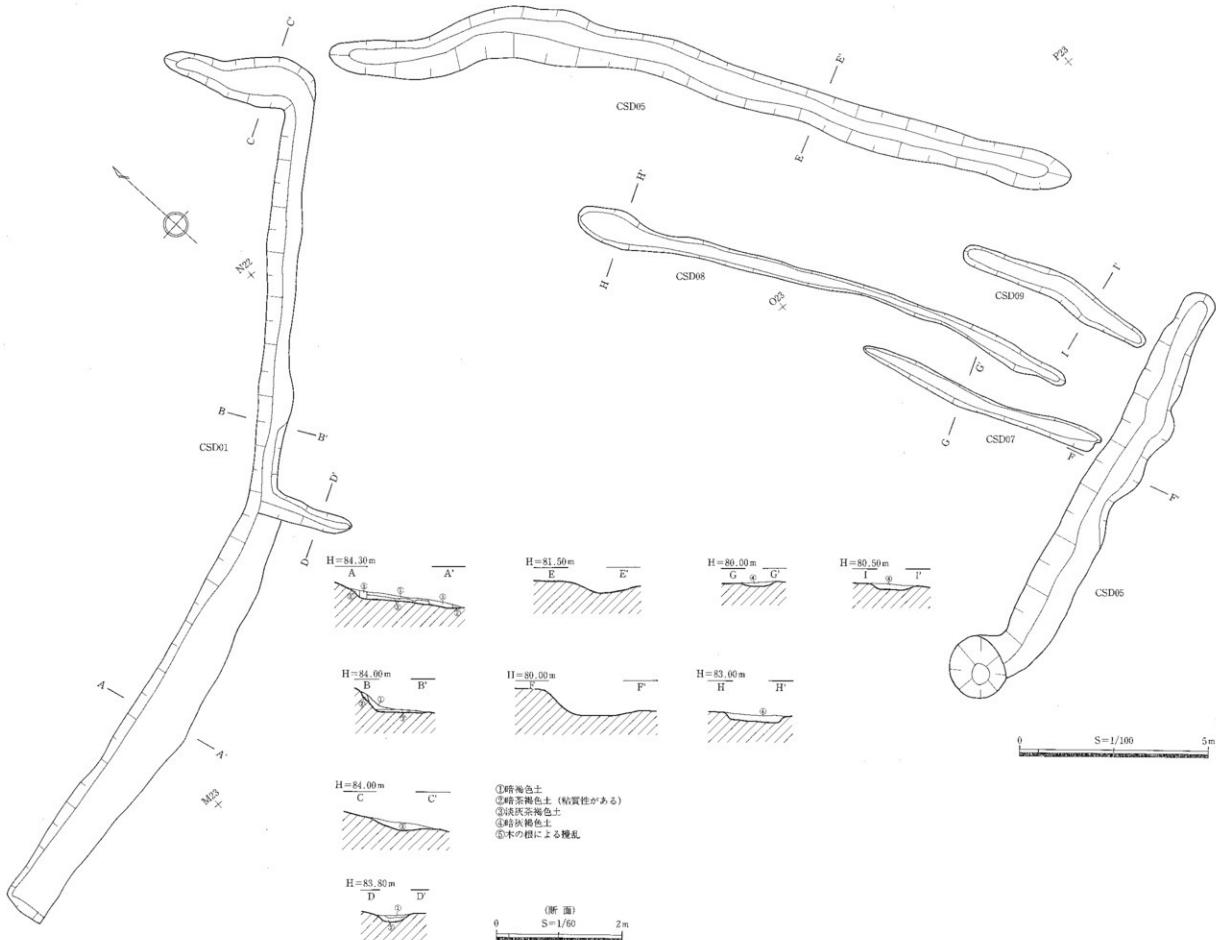
- 位 置** C S D 01・05・07・08・09はC-I区の北側、L23・M23・N22・N23・O23・O24グリッドにあり、標高79.5~82.5mの緩やかに南側に傾斜する斜面に位置する。C S D 01の南側約2mにはC S I 01が、C S D 08とC S D 05との間には、C S K 12がある。また、C S D 05の東側約3mには、C S I 16がある。
- 形 態** C S D 01は、ほぼ東西方向に約24m走り、N22グリッドで北側に折れ、約3.5m延びている。  
**C S D 01** 途中で鉤状になる部分もあり、南側に約2.2m延びている。長さ約27.5m、幅約0.5~1.3m、深さ約20cmを測り、断面は「U」字状を呈し、一部段状になる。
- C S D 05** C S D 05は、東西方向に約12.3m走るものが、O24グリッドでいったんとぎれるものの、北側へ折れてC S D 01の屈曲部付近まで、約19.8m延びる。幅約0.8~1.1m、断面「U」字状を呈し、深さ8~51cmを測る。東西方向に走る溝の西端には、(170×140~87)cmを測る大型のピットが掘り込まれている。
- C S D 07** C S D 07は、南北方向に約6.7m走り、幅約0.4~0.65m、断面「U」字状を呈し、深さ2~5cmを測る。
- C S D 08** C S D 08は、南北方向に約13.6m走り、幅約0.3~1.0m、断面「U」字状を呈し、深さ3~11cmを測る。
- C S D 09** C S D 09は、南北方向に約5.3m走り、幅約0.5~0.75m、断面「U」字状を呈し、深さ7~9cmを測る。
- C S D 05・07・08・09は、それぞれ1~1.8m離れてほぼ平行して走っており、C S D 07~09はC S D 01・05に比べて浅い。
- 埋 土** 埋土は、1~2層からなり、これらは、自然堆積と思われる。埋土は、竪穴住居跡などの埋土と異なっている。
- 遺 物** それぞれの埋土より土器片が出土しているが、図化できなかった。
- 時 期** これらの溝状造構の時期は不明であるが、付近のC S I 02の黒褐色土中から治平元宝1枚が出土しており、中世以降のものと考えられる。
- 用 途** これらは、中世以降の耕作等に伴うものと考えられる。



写真9 CS106調査風景



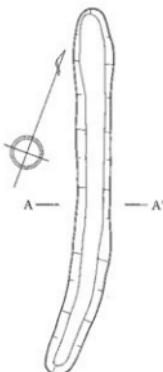
写真10 CSS04調査風景



插図56 南谷大山遺跡CSD01-05-07-08-09造構図

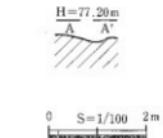
C S D 06 (挿図57)

- 位 置 C S D 06はC-I区のはば中央部の、O26グリッドにあり、標高76.0~78.5mの緩やかに南側に傾斜する斜面に位置する。北西側約2mにはC S K10がある。
- 形 態 はば南北方向に一直線に延びる。長さ7.6m、幅約0.8m、深さ3~10cmを測り、断面は「U」字状を呈する。
- 埋 土 埋土は、暗灰褐色土層からなり、これらは、自然堆積と思われる。
- 遺 物 埋土中より土器片が出土しているが、図化できなかった。
- 時 期 時期は不明であるが、C S D 01・05・07~09とはば同様の時期と考えられる。
- 用 途 用途は不明であるが、耕作等にかかるものと考えられる。

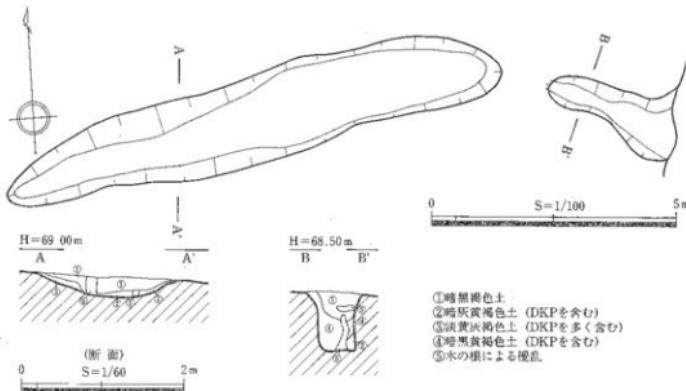


C S D 02 (挿図58、図版12)

- 位 置 C S D 02はC-I区の南側、O32・P32グリッドにあり、標高68.2~68.8mの平坦面に位置する。一ヵ所とぎれており、はば東西方向に走っている。西側のものはC S I 05の埋土を掘り込んで作られている。南側約2mにはC S I 03がある。
- 形 態 東側で一ヵ所とぎれるものの緩やかな弧状を呈し、西側のものは長さ4.2m、幅約0.5~0.7m、深さ13~22cmを測り、断面は「U」字状を呈する。東側のものは長さ1.2m、幅0.3m、深さ60~70cmを測り、断面「U」字状を呈す。
- 埋 土 埋土は、4層からなり、これらは、自然堆積と思われる。
- 遺 物 埋土中より土器片が出土しているが、図化できなかった。
- 時 期 確かな時期は不明であるが、C S I 05の埋土を切り込んで作っていることから、古墳時代前期以降のものと思われる。
- 用 途 用途は不明である。



挿図57 南谷大山遺跡  
CSD06遺構図

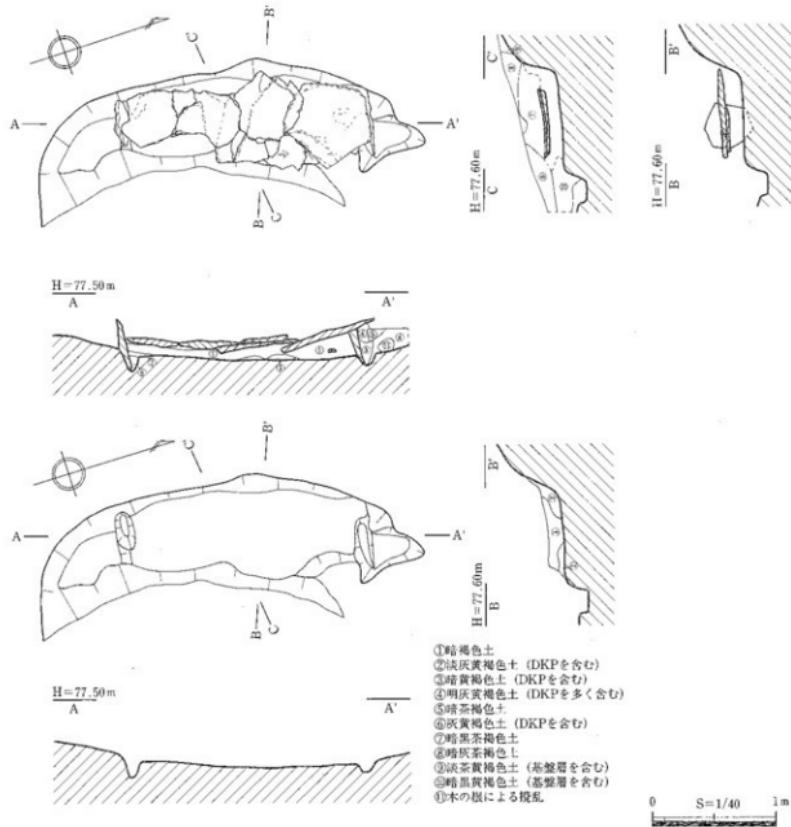


挿図58 南谷大山遺跡CSD02遺構図

## 6. 埋葬施設群

C S X01 (挿図59・60、図版12・39)

- 位 置** C-I区の北東側のP24・25グリッドにあり、標高77.0~77.3mの東側斜面に位置する。東側にはC S X02が接し、南東側3mにはC S X03がある。
- 形 態** 南北に長い墓壙内に作られた石蓋土塁墓であるが、小口側にも板石を立てており、側板を簡略化した石棺墓と呼んでもよい。東側は、C S X02によって削り取られている。本来は、小口石上に蓋石が乗せられるものと考えられるが、南側は小口石が外側へ倒れ込み、蓋石が落ち込んでいる。蓋石は9枚架構されている。
- 墓壙の規模は、長さ3.18m×幅0.9m以上、深さ0.4mを測る。内法では、長さ1.8m×幅0.8m以上である。



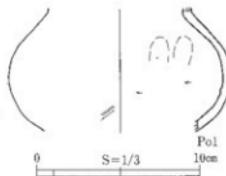
挿図59 南谷大山遺跡CSX01造構図

小口側には、石を立てるための溝が掘り込まれ、小口石を立てた後③～⑤層で墓壙内を埋め戻している。

**埋 土** 埋土は、腐食土と考えられる⑦・⑧層が堆積しており、蓋石が架構された後は埋め戻されず、そのまま放置された可能性がある。また、内部には、①・②層が入り込んでいた。

**遺 物** 南小口側の蓋石上に、小型丸底壺Po 1が共軸さ 摂図60 南谷大山遺跡CSX01出土遺物実測図  
**出土状況** れていた。

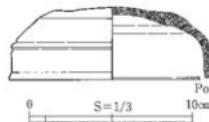
**時 期** C S X 01の時期は不明であるが、C S X 02からは、T K 208並行期の須恵器杯蓋が出土しており、これより若干遅るものと考えられる。



#### C S X 02 (摂図61・62、図版13)

**位 置** C - I 区の北東側のP25グリッドにあり、標高76.5～76.9mの東側斜面に位置する。西側にはC S X 01が接し、南東側約2mにはC S X 03がある。

**形 態** 平面長楕円形を呈し、一部二段に掘り込んでいる。墓壙上面は長さ2.44m×幅1.0m、深さ0.2mに掘り込み、幅0.2～0.4mのテラスを設けた後に、さらに長さ2.2m×幅0.6m、深さ0.18m掘り込んでいる土壙墓である。  
底部には、粘土が敷かれていたものと考えられる。

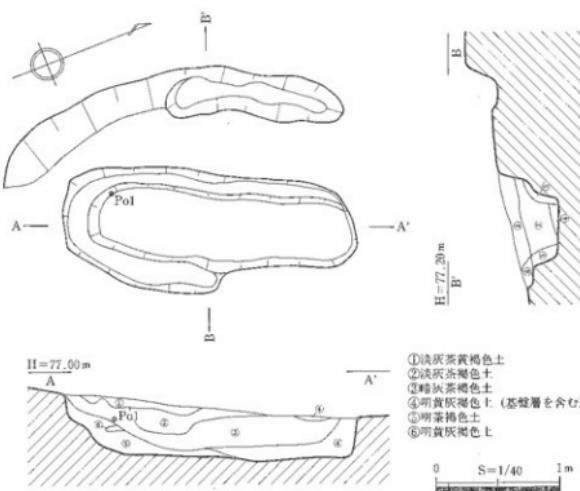


**後 背** 後背には、幅0.3m前後を測る弧状を呈す溝

**区画溝** が掘り込まれている。この溝は、土壤墓を区画するためのものと考えられる。

**遺 物** 墓壙内南側で、やや浮いた状態で、須恵器杯蓋Po 1が口縁部を下にして出土している。

**時 期** Po 1は陶邑編年TK208並行期・山陰須恵器編年I期とされる。大山Ⅳ期・古墳時代中期後半のものと考えられる。



摂図62 南谷大山遺跡CSX02遺構図

C S X03 (挿図63・64、図版13)

**位 置** C-I区の北東側のP25グリッドにあり、標高75.8~76.3mの東側斜面に位置する。北側約2mにはC S X02がある。

**形 態** 平面長楕円形を呈す土塙墓である。墓壇は長さ2.35m×幅1.03m、深さ0.36mを測る。

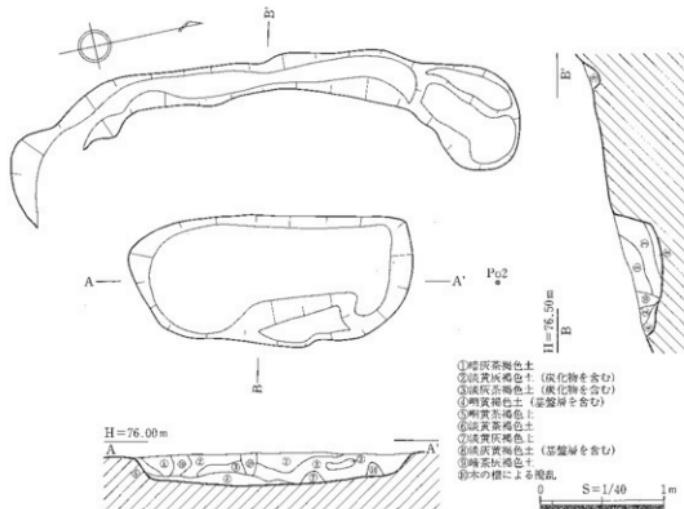
**後 背** 後背部には、幅0.3~0.5m前後、深さ20cm前後を測る鎌状を呈す溝が掘り込まれている。

**区 画 溝** この溝は、土塙墓を区画するためのものと考えられる。

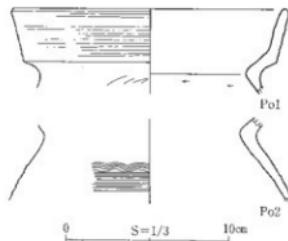
**遺 物** 埋土中より甕Po 1・Po 2が出土しているが、これらは弥生時代後期後半の特徴をもつもの

**出土状況** で、この埋葬施設に伴うものではない。

**時 期** C S X03の時期は遺物が出土していないため不明であるが、同様の形態の埋葬施設であるC S X02から陶邑編年T K208並行期・山陰須恵器編年I期と考えられる須恵器杯蓋が出土しており、ほぼ同時期の大山Ⅳ期・古墳時代中期後半のものと考えられる。



挿図63 南谷大山遺跡CSX03遺構図



挿図64 南谷大山遺跡CSX03出土遺物実測図

## 7. 道構外遺物について (挿図65・66、図版39)

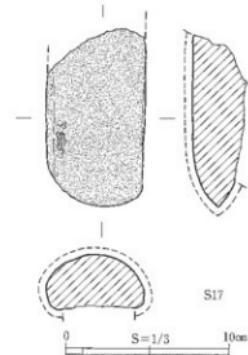
道構外からは、図化できたものに甕Po 1～Po 3、高杯Po 4・Po 5、鼓形器台Po 6・Po 7、小型丸底壺Po 8、太型蛤刃石斧S 17がある。

このうちPo 1は、P 25グリッドの斜面部、Po 2～Po 8は、O 29・O 30・P 30・P 31グリッドの平坦部、S 17は、O 24グリッドから出土している。

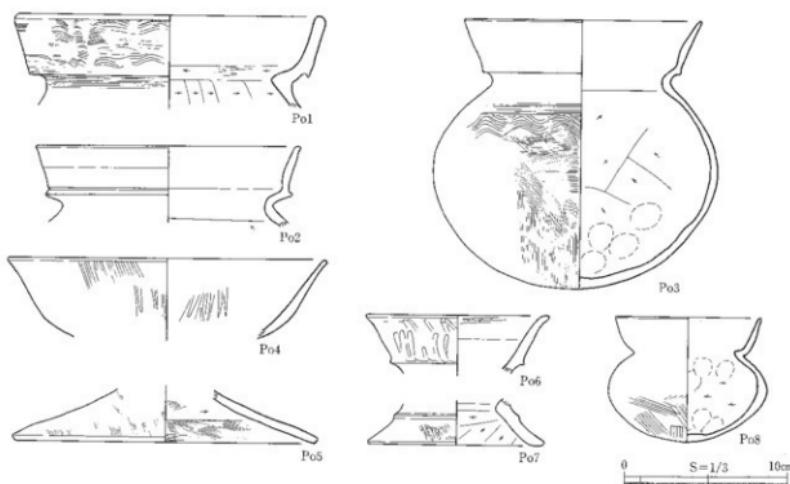
Po 1は、口縁部に施文が施され、口縁部下端が下垂することから大山II期と考えられる。Po 3は、口縁部がナデのみになり、シャープな作りで肩部も丸底化することから、大山IV期、弥生時代後半頃のものと考えられる。

Po 2は、口縁端部が平坦面をもつことから大山V期、Po 4～Po 8は大山VI期頃のものと考えられる。

S 17については時期は不明である。



挿図65 南谷大山遺跡C—I区道構外出土遺物実測図(1)



挿図66 南谷大山遺跡C—I区道構外出土遺物実測図(2)

### 第3節 南谷大山遺跡C-II区の概要

- 位 置 C-II区は、標高79~83mの、今年度調査区のうちの西側尾根上に遺跡が展開する地区である。この尾根の先端部には、径約15m、高さ約3mを測る南谷30号墳がある。
- 遺 構 この地区では、弥生時代後期には、掘立柱建物跡C S B01、貯蔵穴C S K06・07、不明土坑C S K04・05・14、段状遺構C S S 03およびこれに伴うビット群が作られている。  
古墳時代前期になると、竪穴住居跡C S I 02・09・10が作られる。  
さらに、時期は不明であるが、不明土坑C S K02、段状遺構C S S 02がある。

### 第4節 南谷大山遺跡C-II区の調査結果

#### 1. 竪穴住居跡

C S I 02 (挿図67~71、図版14・15・39・40)

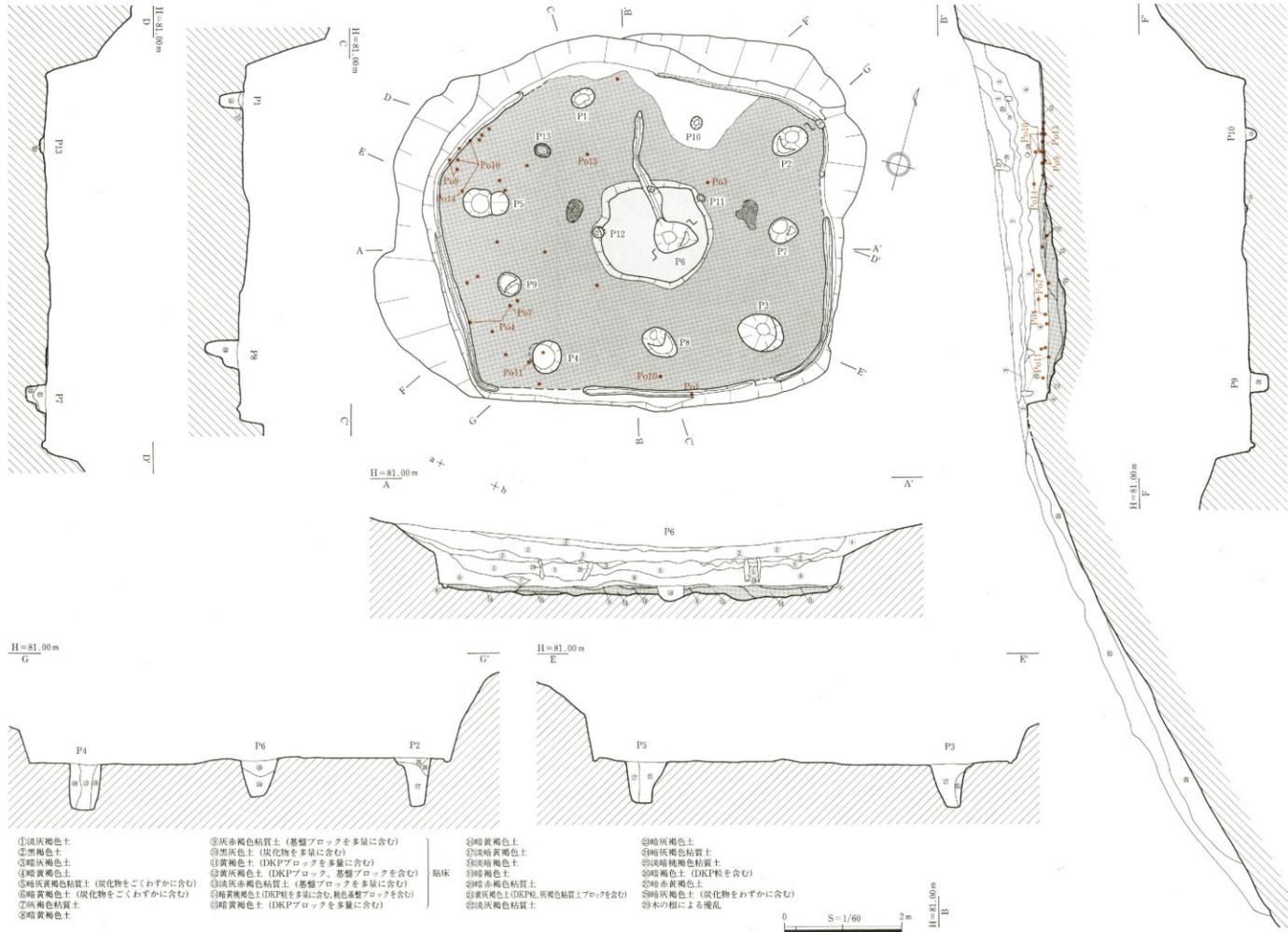
- 位 置 調査区のやや北側、西側尾根の基部にあり、斜面が大きく湾曲するK24・25、L24・25グリッドにあり、標高79.5~80.7mの緩やかに南側に傾斜する斜面に位置する。すぐ西側にはC S S 03が近接する。
- 形 態 遺存状態は非常に良く、平面は東西に長い扁平な五角形を呈する。規模は、東西6.50m、南北5.55mを測り、床面積は32.0m<sup>2</sup>である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で1.47mを測る。壁溝は、とぎれる部分があるもののほぼ全周し、幅8~13cm、深さ3~6cmを測り、断面「U」字状を呈す。  
主柱穴はP 1~P 5の5個で、それぞれの規模は、P 1 (41×30~42) cm、P 2 (63×46~84) cm、P 3 (80×46~76) cm、P 4 (57×52~81) cm、P 5 (48×47~73) cmを測る。主柱穴間距離はP 1~P 2間から順に3.6m、3.3m、3.8m、2.9m、2.5mである。  
主柱穴間にP 7 (22×20~20) cm、P 8 (51×46~36) cm、P 9 (64×47~59) cm、P 10 (40×38~26) cmを測るビットがある。また、貼床除去後にP 5~P 1間に(28×24~9) cmを測るP 13を検出した。P 13は床面検出時に確認できなかつたが、位置的に考えてP 7~P 10と同様の性格をもつものと考えられる。これらは、主柱穴に比べ深さがありなく、位置的・規模的に考えて補助柱穴と考えられる。

住居中央部には、灰赤褐色粘質土によって(210×182)cmにわたり不整円形に、一段高く土壇が盛られている。なお、灰赤褐色粘質土の下には炭化物を多量に含む⑩層がはさまれている。この部分のやや東側に、不整形の中央ビットP 6が掘り込まれている。規模は(78×54~66)cmを測る。埋土は2層に分層でき、下層の暗灰褐色粘質土には炭化物を含んでおり、鑑定の結果、スギ・スタジイが含まれていた。中央ビットの周辺には、P 11・P 12があり、中央ビットを囲む何らかの施設があった可能性がある。

中央ビットに接続して北側に、中央ビットの土壇を掘り込んで長さ約2m、幅10~23cm、深さ2~11cmを測る、断面「U」字状の溝が走っている。埋土は、暗黄褐色土1層である。この溝は、壁まで届いていない。

焼 土 面 床面上には、中央ビットをはさむように、東西に2カ所に焼土面が検出されている。

埋 土 埋土は7層に分層することができた。③~⑦層は、壁際から住居中央部に向かって流れ込

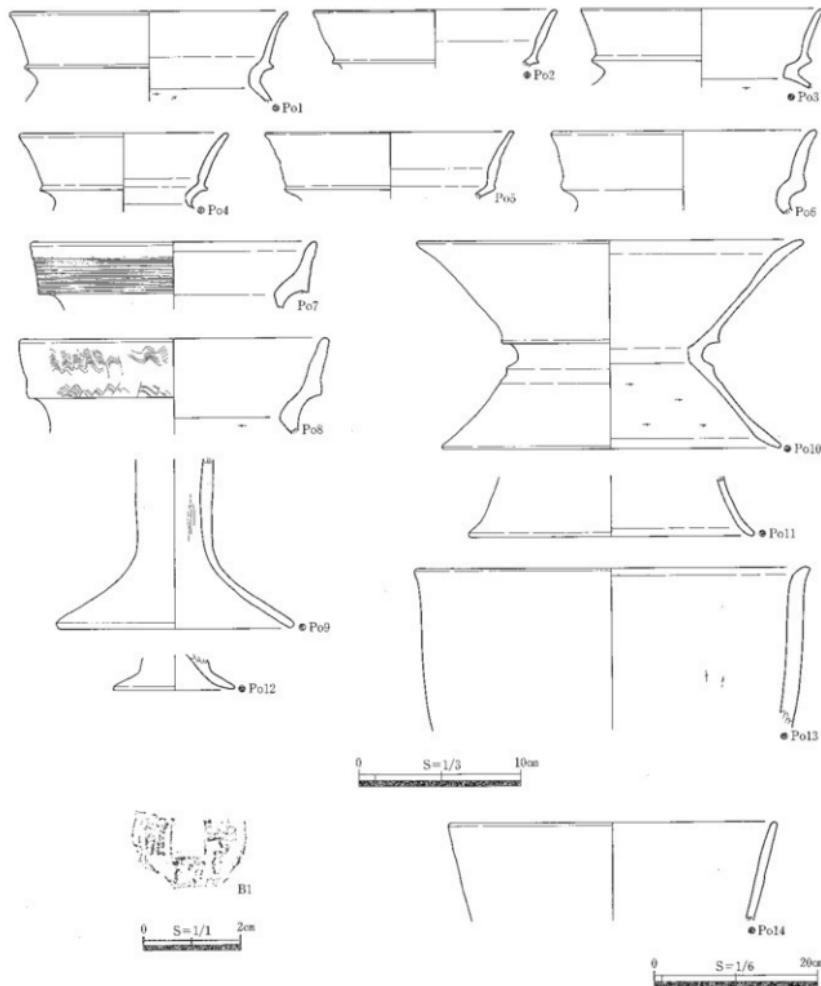


挿図67 南谷大山遺跡CSI02遺構図

んだような堆積状況を示し、住居の廃絶と共に自然堆積した状況が窺われる。このうち、⑤・⑥層中には炭化物が含まれている。

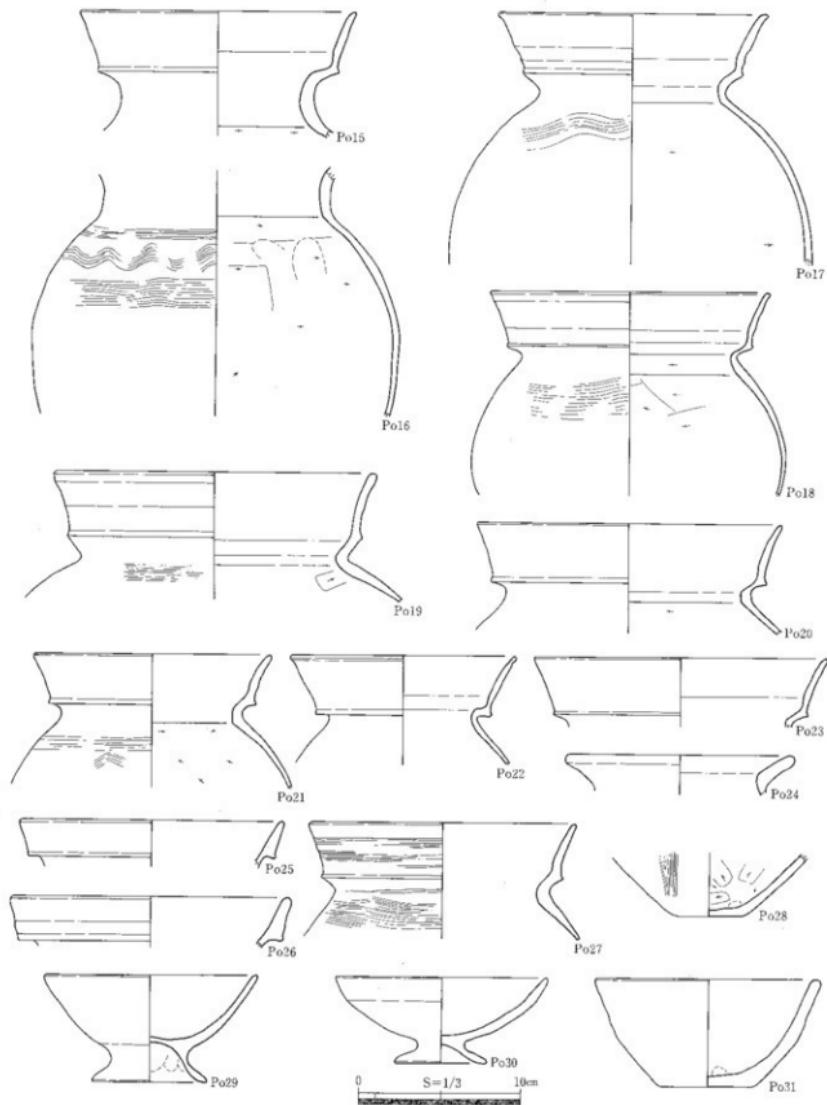
また、住居中央部の土壇の周囲には、炭化物を含んだ砂質土が薄く検出されている。

さらに、住居の南側には、暗赤褐色土が堆積している。この層の下には、旧表土と考えられる黒褐色土があり、この住居を掘削する段階に出た排土を南側斜面に捨てた結果、堆積したものと考えられる。

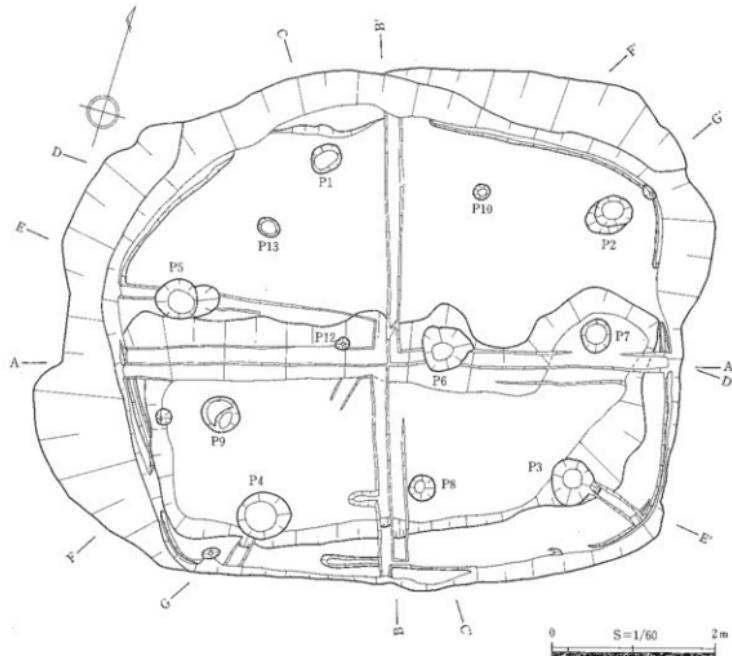


挿図68 南谷大山遺跡CSII02出土遺物実測図

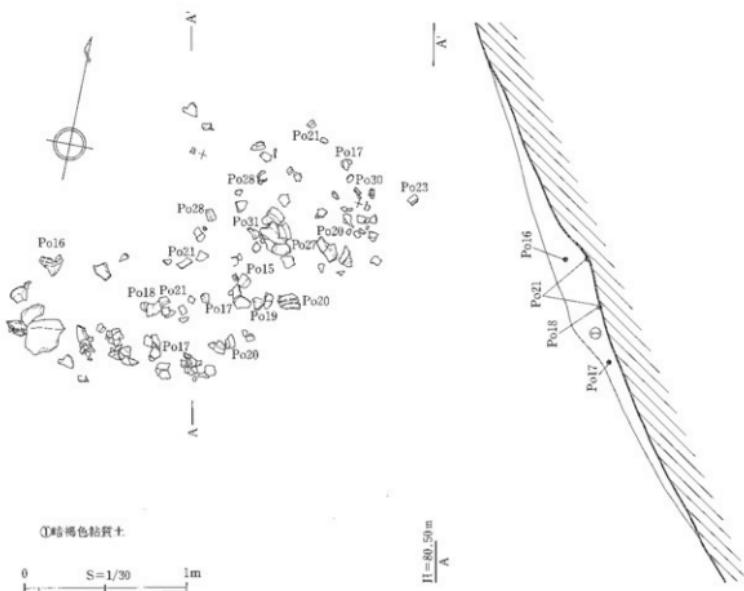
貼床　床面のはば全面に、貼床が施されているが、すべて均質な土による貼床ではなく、中央部では土壇を含めて粘質土の⑨層による貼床が、それ以外はDKP層を多量に含む⑩～⑯層による貼床が施されている。厚さは均一ではなく、南側は深いところで約30cmの貼床が施され



挿図60 南谷大山遺跡CS102南西側土器溝り出土遺物実測図



插図70 南谷大山遺跡CSI02貼床除去後遺構図



插図71 南谷大山遺跡CSI02南西側土器濯り検出状況図

ているのに対し、北側は数cmしか施されていない。

**不 肇** また、貼床を除去すると、住居中央部より南側で、(5.9×2.8-0.3)mの不整長方形に落ち込み 挖り込まれた落ち込みが検出された。断面も不整形な皿状を呈す。この落ち込みは、住居プラン内に納まるところから、住居を掘削する段階で掘り込まれたものと考えられる。C S I 02の基盤層は、北側が堅硬なローム層であるのに対し、中央より南側がD K P層になっており、住居の掘削段階で、柔らかく掘りやすいD K P層を掘り過ぎ、その部分を補うために、南側の貼床が厚くなったものと考えられる。

なお、C S I 02の北側後方は大きくカールしているが、これは斜面に構築するために、人工的に整形して掘り込んだものと考えられる。

**遺 物** C S I 02内で図化できたものには、甕Po 1-Po 8、高杯Po 9、鼓形器台Po10・Po11、低出土状況 脚杯Po12、瓶形土器Po13・Po14、治平元宝B 1がある。

このうち床面からは、北西コーナー付近でPo 9・Po10・Po14が、南西コーナー付近でPo 4・Po11が、南側壁際でPo 1・Po10が、そしてP 1と中央ピットの間でPo13が、中央ピット付近でPo 3が、P 3内でPo 2・Po12がそれぞれ検出されている。

その他のものはPo 6・Po 8・B 1が埋土上層、その他は埋土下層中からの出土である。

**土器溜り** C S I 02の南側の斜面では、壺Po15・Po16、甕Po17-Po27、底部Po28、低脚杯Po29・Po30、鉢Po31の土器類が炭化物と共に検出された。炭化物は、鑑定の結果スダジイ・クスノキが含まれていた。このうち、Po24は、C S I 02の貼床内出土の土器と接合していることから、これらは、C S I 02の土器とは同時期と考えられ、C S I 02で使用された土器が、住居が火災になつたために廃棄されたものと考えられる。

**時 期** 床面出土遺物から、CSI02は大山V期、古墳時代前期前半頃のものと考えられる。なお、土器溜りから出土しているものは、床面から出土しているものより若干古い様相を含むものがある。

#### C S I 09 (挿図72・73、図版15・40)

**位 置** C S I 09はC-II区の最も南側のH25グリッドにあり、C S S 03がつくる標高約78.7~79.3mの平坦面の西斜面側に位置する。

北側にはC S K07が接している。この他、当住居の約0.6m北東にはC S K06が、約5.9m東にはC S K05が、約10m東にはC S B01が、約4.2m南東にはC S I 10が、それぞれ位置する。

**形 貌** 南側は調査区外に延び出し、西側は流失しているため遺存状態は悪く、平面は不整形をしている。ピットの配置等から判断すると、隅丸方形を呈していたと考えられる。規模は東西約3.8m以上、南北約2.0m以上である。床面積は12.2m<sup>2</sup>以上である。残存壁高は、最も残りの良い東壁で最大0.30mを測る。

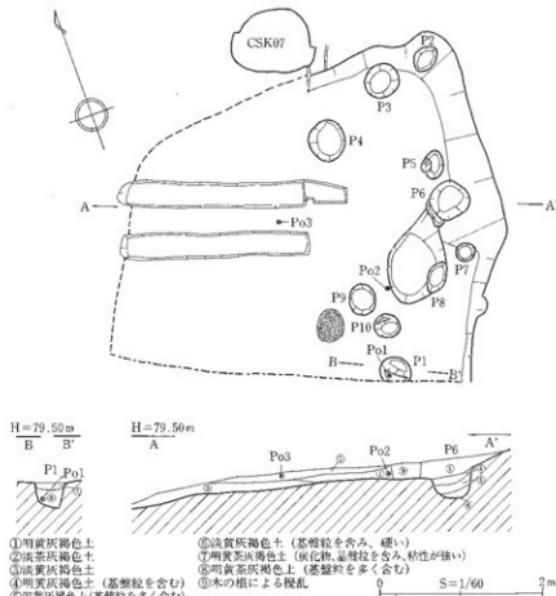
検出されたピットは、10個である。これらのうち、P 1は(40×33-33)cmを測り、主柱穴のうちの一つと考えることもできる。中央ピット・壁溝は、検出されなかった。

**埋 土** 埋土は3層からなる。基盤層と埋土が酷似しており、その判別は困難だった。

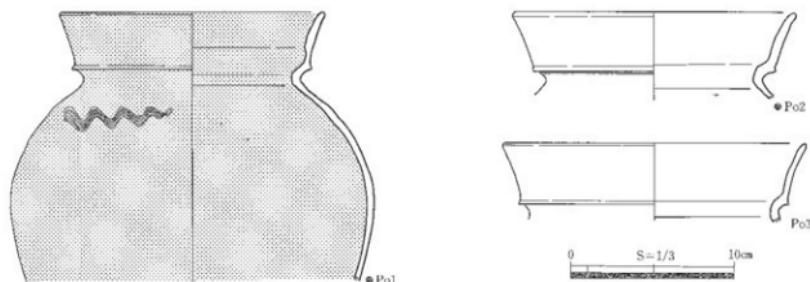
**焼 土 面** 造構南東部、床面より13cm浮いた状態で、焼土が見られた。範囲(43×32)cm、厚さ1.6~2.0cmで、楕円形を呈する。表面は硬くしきりしていた。この焼土は、焼け落ちの焼土と考えられる。

**遺 物** P 1中より甕Po 1が、床面より甕Po 2が、埋土中より甕Po 3がそれぞれ検出された。これ出土状況 らのうち甕Po 1は、逆さまの状態で出土した。この他、土器片が出土したが図化できなかった。

**時 期** P 1中の土器Po 1より、C S I 09は大山V期、古墳時代前期前半のものと考えられる。近くのC S I 10も大山V期のものである。



插図72 南谷大山遺跡CSK07遺跡図



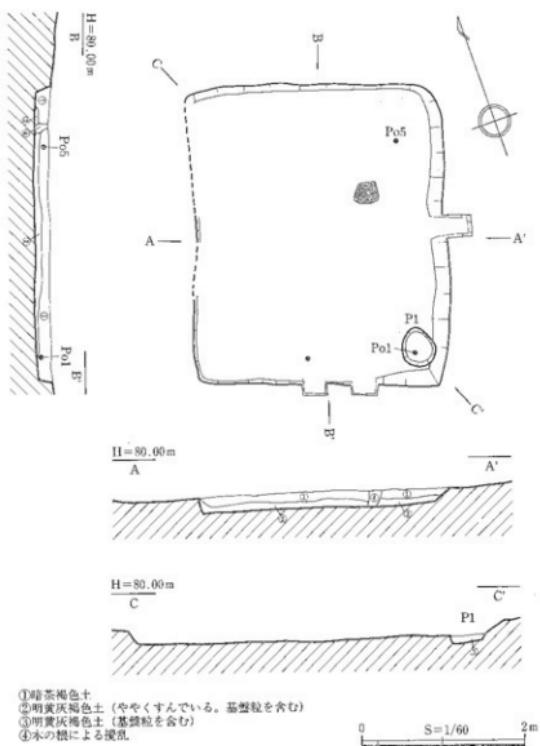
插図73 南谷大山遺跡CSK09出土遺物実測図

#### C S I 10 (挿図74・75、図版15・16・40)

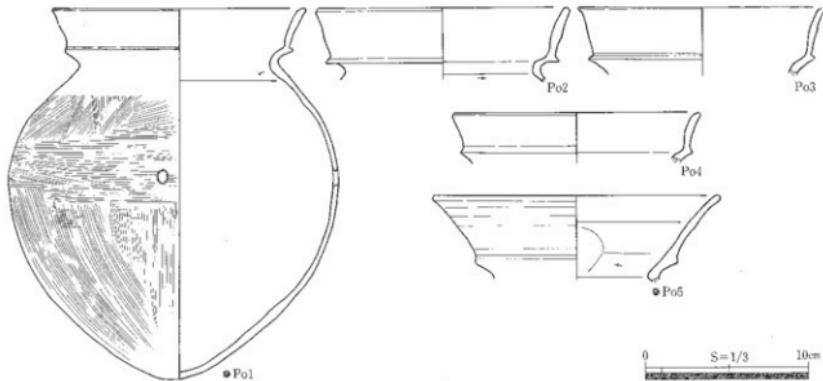
**位 置** C S I 10はC-II区の最も南側のI 26グリッドにあり、C S S 03がつくる標高約80.1mの平坦面に位置する。

約5.3m北西にはC S K 06が、約2.3m北にはC S K 05が、約2.8m北東にはC S B 01が、約4.2m北西にはC S I 09が、それぞれ位置する。

- 形 態** 遺存状態は比較的よく、平面は方形を呈する。規模は東西2.9m、南北3.6mを測る。床面積は10.6m<sup>2</sup>である。残存壁高は最も残りの良い北東壁で、0.22mである。
- 壁溝は見られず、検出されたピットも1個のみである。唯一のピットP1は(47×43-16)cmを測る。規模から考えて、当ピットは主柱穴とは考え難い。
- 床面は、柔らかく粘性の強い明黄褐色土からなる。
- 埋 土** 埋土は2層からなる。埋土中には、焼土粒がみられる。
- 焼 土** 特に北東区では、(32×30)cmの四角形の範囲内に約10cmの厚さで、焼土粒を多く含んだ埋土が堆積していた。
- 遺 物** P1中より甕Po1が、埋土中より甕Po2~Po4が、床面より鼓形器台Po5が検出された。これらのうち、甕Po1は潰れた状態で出土した。また、鼓形器台Po5は、北東コーナーで検出された。
- 時 期** P1中の土器Po1より、C S I 10は大山V期、古墳時代前期前半のものと思われる。C S I 09も大山V期の造構である。



挿図74 南谷大山遺跡CS 10造構図



挿図75 南谷大山遺跡CSII10出土遺物実測図

## 2. 挖立柱建物跡

### C S B01 (挿図76・77、図版16)

**位 置** C S B01は、C-II区の南東側J 25・J 26グリッド、C S S 03がつくる標高約80.1mの平坦面に位置する。

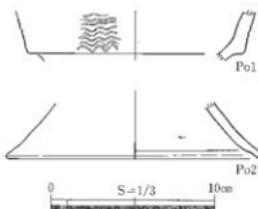
当遺構の約1.7m北東にはC S K04が、約3m北西にはC S K05が、約10m北西にはC S K06が、約12m西にはC S K07が、約12.9m北東にはC S I 02が、約10m西にはC S I 09が、約2.9m南西にはC S I 10がそれぞれ位置する。

**形 性** 梁行1間4.2m、桁行2間6.2mを測る。主軸方向は、N-54°-Wである。柱穴は6個である。規模はそれぞれP 1 (54×48-63) cm、P 2 (60×60-81) cm、P 3 (60×54-67) cm、P 4 (72×60-72) cm、P 5 (60×52-34) cm、P 6 (46×46-48) cmである。柱穴間距離は、P 1-P 2間から順に、1.6m、1.6m、2.1m、1.6m、1.5m、2.1mである。

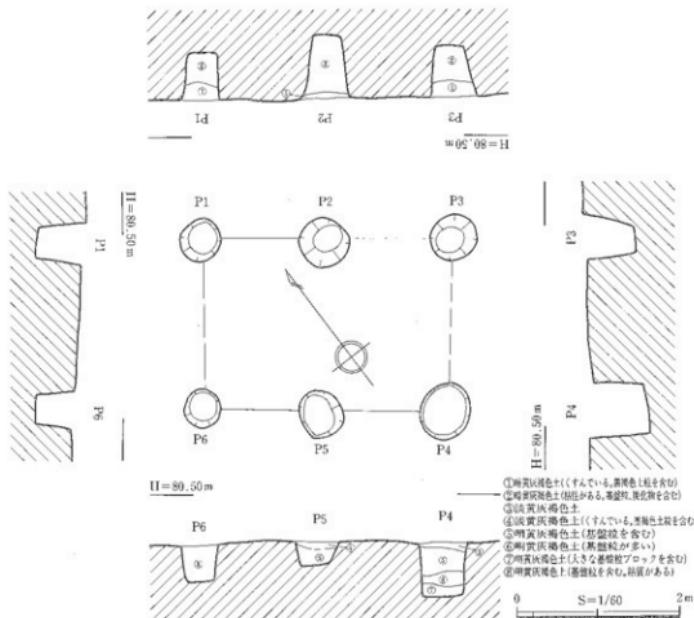
**埋 土** 埋土は7層からなる。基盤粒を主体とし、粘性があるものが多い。土層の状況より、柱根は抜かれたものと考えられる。

**遺 物** P 6・P 2の埋土中より、甕Po 1・鼓形器台Po 2がそれぞれ出土した。これ以外のすべて出土状況のピットにおいても土器片が検出されたが、図化できなかった。一方、P 3の暗黄灰褐色土中には、石材がみられた。さらに、これらの石の間からは炭化物が検出された。樹種鑑定の結果、ネジキと判断された。

**時 期** P 6中の甕Po 1より、C S B01は弥生時代後期後半、大山田期のものと思われる。



挿図76 南谷大山遺跡CSB01出土遺物実測図

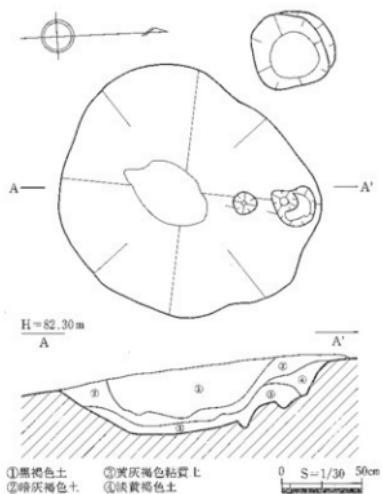


挿図77 南谷大山遺跡CSB01造構図

### 3. 土坑・土壤

CSK02 (挿図78、図版16)

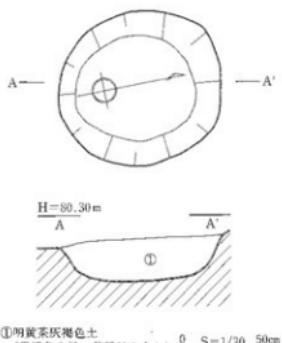
- 位 置** C-II区の北側のJ25グリッド、CS  
S02の南側に掘り込まれている。
- 形 態** 平面は、上縁不整な楕円形を呈し、上縁  
部長径1.65m×短径1.53mを測る。深さ  
は0.43mを測り、断面は皿状を呈す。
- 埋 造 物** 埋土は、4層に分層できた。  
物 埋土中から、土器片が出土しているが、  
國化できなかった。
- 時 期** 時期を比定できる上器が出土していな  
いため、CSK02の時期は不明である。
- 用 途** CSK02の用途は不明である。



挿図78 南谷大山遺跡CSK02造構図

C S K04 (挿図79・80、図版17)

- 位 置** C S K04は、C-II区のやや北側のJ25グリッドにあり、標高約80.1~80.2mの南向き斜面に位置する。約1.7m南西にはS B01がある。
- 形 態** 平面は円形、断面は皿状を呈する。長径1.04m×短径0.94m、深さ0.55mを測る。
- 埋 土** 埋土は、明黄茶灰褐色土のみである。この土は土器を伴い、しっかりしている。
- 遺 物** 遺物としては、埋土下層より甕Po 1が出土している。
- 時 期** 甕Po 1より、C S K04は大山II~III期、弥生時代後期後半のものと思われる。
- 用 途** 用途は不明である。



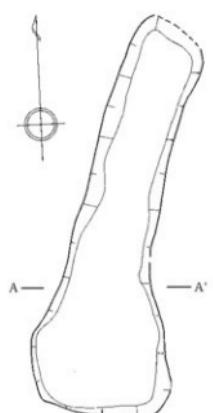
挿図79 南谷大山遺跡CSK04遺構図

C S K05 (挿図81・82、図版17)

- 位 置** C S K05はC-II区中央部のI25グリッドにあり、標高約79.7mの平坦面に位置する。約3.3m東にはC S B01が、約2.6m南西にはC S I10が、  
挿図80 南谷大山遺跡CSK04出土遺物実測図  
約5.2m西にはC S K06が、それぞれ位置する。
- 形 態** 平面は不整形の長台形状を呈している。断面は逆台形を呈する。上縁部で長軸4.9m×短軸0.9~1.7m、深さ0.45mを測る。
- 埋 土** 埋土は3層からなる。これらはいずれも粘性を有する。
- 遺 物** 遺物としては、暗黄茶褐色土中より出土した甕Po 1が挙げられる。
- 時 期** 甕Po 1より、C S K05は大山III~IV期、弥生時代後期後半のものと考えられる。
- 用 途** 用途は不明である。



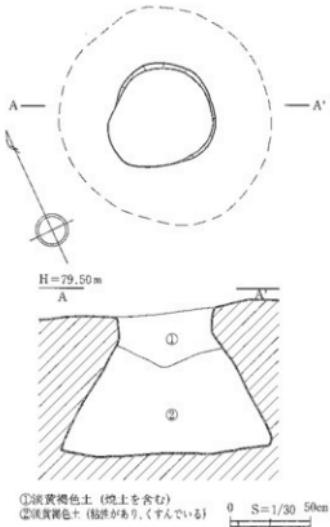
挿図82 南谷大山遺跡CSK05出土遺物実測図



挿図81 南谷大山遺跡CSK05遺構図

C S K 06 (挿図83、図版17)

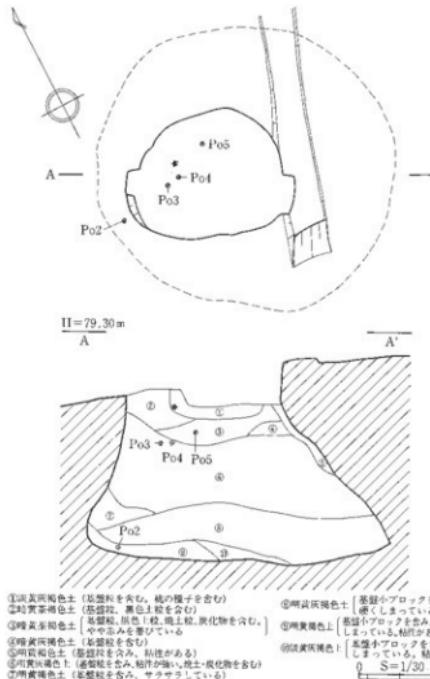
- 位 置** C S K 06はC-II区のやや西側のI 25グリッド、標高約79.4mの平坦面に位置する。約1.6m西にはC S K 07が、約5.3m東にはC S K 05が、約0.6m南西にはC S I 09が、そして約5.3m南東にはC S I 10が位置する。
- 形 態** 平面は円形、断面は袋状を呈する。上縁部で長径0.68m×短径0.64mを、底部では長径1.4m×短径1.3mを測る。深さは約0.9mである。
- 埋 土** 埋土は2層からなる。
- 遺 物** 埋土中より土器片が検出されたが、図化することは出来なかった。
- 時 期** C S K 06からは、時期を特定する遺物が出土していないため、時期は不明であるが、この地域の貯蔵の形態から考えると、当遺構の時期は弥生時代後期以前に限定される。
- さらに、当土坑は近接するC S K 07とペアで利用されていたこと、考えることもできる。この場合、C S K 07が大山IV期、弥生時代後期後半のものと考えられることから、当遺構も前者と非常に近い時期のものといえよう。
- 用 途** 袋状を呈することから、C S K 06は貯蔵穴として用いられたと思われる。



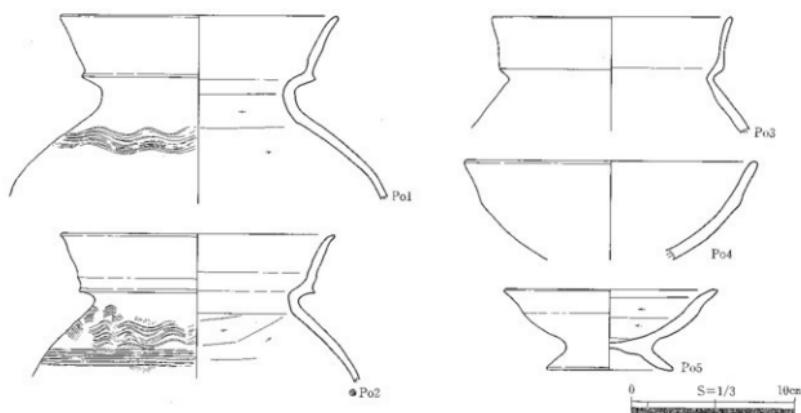
挿図83 南谷大山遺跡CSK06遺構図

C S K 07 (挿図84・85、図版17・18・40)

- 位 置** C S K 07はC-II区の西側のH25グリッドにあり、標高約79mの平坦面に位置する。当遺構は、南部でC S I 09と接している。この他、約1.7m東にはC S K 06が、約7.4m北東にはC S K 05が、約6.8m東にはC S I 10が、それぞれ位置する。
- 形 態** 平面は上縁部不整形、底部円形を呈し、断面は袋状を呈する。上縁部で長径0.9m×短径0.8mを、底部では長径1.9m×短径1.7mを測る。深さは約1mである。
- 埋 土** 埋土は10層からなる。いずれも基盤粒を主体とするものである。堆積の状況より、壁が崩落しながら堆積したと思われる。
- 遺 物** 底面より甕Po 2が、埋土上層より壺Po 1・甕Po 3・高杯Po 4・低脚杯Po 5が検出された。これらのうち甕Po 2・低脚杯Po 5は、逆さまの状態で出土した。一方、淡黄灰褐色土中より種子が検出された。鑑定の結果、モモ核と判断された。
- 時 期** 床面出土の土器Po 2より、C S K 07は大山IV期、弥生時代後期後半頃と考えられる。前述したとおり、近接するC S K 06とはペアで利用されていたと考えられる。
- 用 途** 袋状を呈すること・多くの土器を伴うこと・モモ核が出土したこと等から、C S K 07は貯蔵穴として用いられたと判断される。



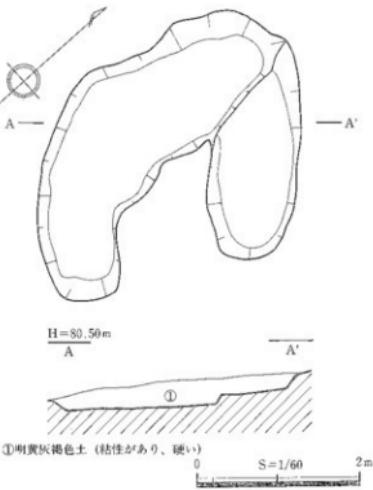
插図84 南谷大山遺跡CSK07遺構図



插図85 南谷大山遺跡CSK07出土遺物実測図

C SK14 (挿図86、図版18)

- 位 置** C SK14は、C-II区の中央部のI 25・J 25グリッドにあり、標高約79.8~80.1mの平坦面に位置する。約2.3m北東にはC SK04が、約1m西にはC SK05が、約2.8m南西にはC SK10が、約9.5m南西にはC SK09が、それぞれ位置する。一方、東ではC SB01と接している。
- 形 態** 平面は不整形で、逆「コ」字状を呈し、断面は方形を呈する。上縁部で東西3.1m、南北3.5m、底面で東西約2.6m、南北約2.8mを測る。幅1.0~1.35m、深さは0.45mである。
- 埋 造 物** 埋土は、明黄灰褐色土のみである。
- 時 期** 埋土中からわずかに弥生土器片が出土しているが、図化できなかった。
- 用 途** 確かな時期は不明であるが、弥生時代頃のものと考えられる。

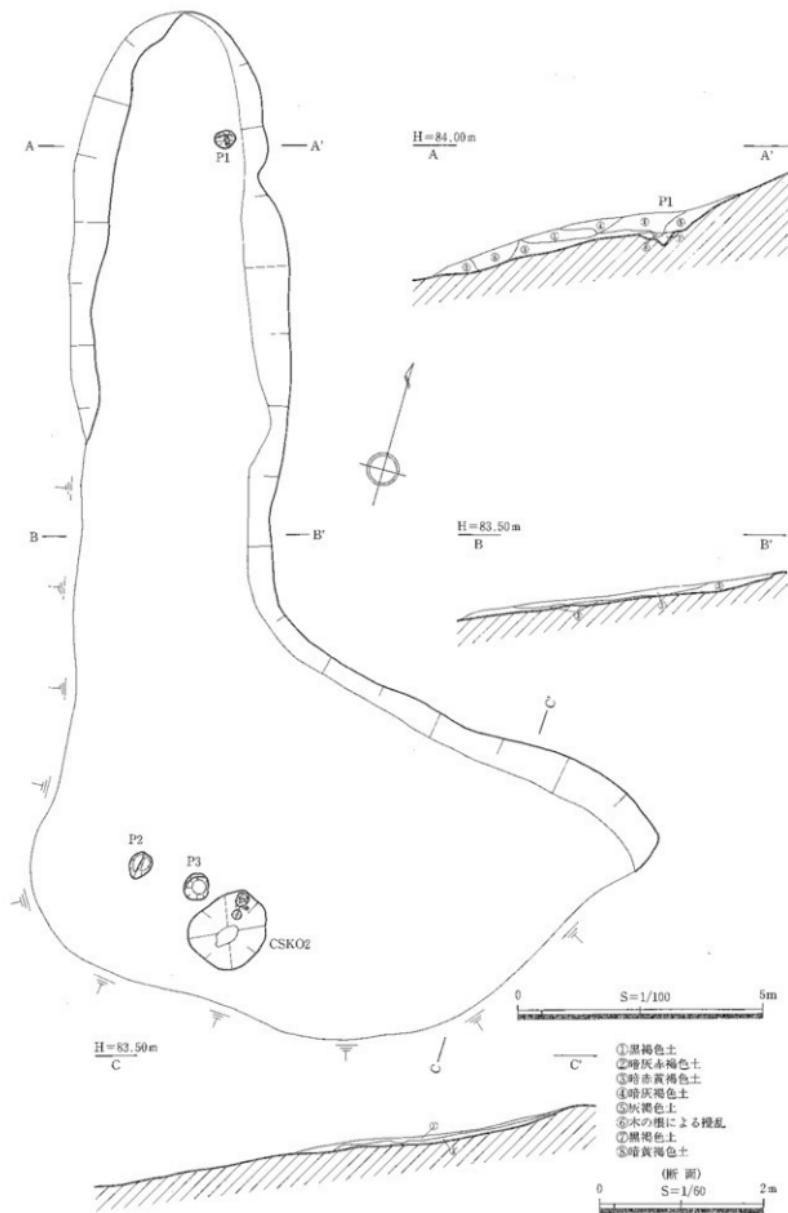


挿図86 南谷大山遺跡CSK14遺構図

#### 4. 段状邊溝

C SS02 (挿図87、図版18)

- 位 置** C SS02は、C-II区のJ 22・J 23・J 25・K24・K25グリッドにあり、標高81.6~83.4mの南西に傾斜する斜面に位置する。北東側約7mにはC SS01、南東側はC SS03に接続している。
- 形 態** 斜面を最大0.48m削り込み、平坦面を作っている。平坦面は、「L」字状を呈し、東西約5.8m、南北約10.1mを測る。平坦面は、緩やかに傾斜している。北側斜面際には(40×35-10)cmを測るP 1が、南側平坦面には(52×39-16)cmを測るP 2、(53×50-73)cmを測るP 3、C SK02が作られている。
- 埋 造 物** 埋土は5層からなる。
- 時 期** 埋土中から土器片が出土しているが、図化できなかった。
- 用 途** C SS02の時期は不明である。



挿図87 南谷大山遺跡CSS02遺構図

## CSS03 (挿図88~90、図版18・41)

**位置** CSS03は、南側へ延び出す狭い尾根の基部にあたり、C-II区のI23・I24・I25・I26・J24・J25・J26・K25グリッドに位置する。標高は約79.25~81.75mである。北東側でCSS02と接する。約2.4m東にはCSI02が、約17.3m西にはCSS06がそれぞれ位置する。一方、平坦面の中には、CS109・10、CSB01、CSK04・05・06・07・14がある。

**形態** 南側に延びる尾根を、約3.5m削り込み、平坦面を作っている。平坦面は、不整形な「L」字状を呈し、東西約13.1m、南北約20.7m以上を測る。南側は調査区外に延びている。

**ピット群** 造構内に39のピットが見られる。埋土は主に基盤粒で、規模等は挿表2を参照されたい。

**埋土** 埋土は9層からなる。これらの土層を観察すると、当造構の埋土は自然堆積を窺わせる。

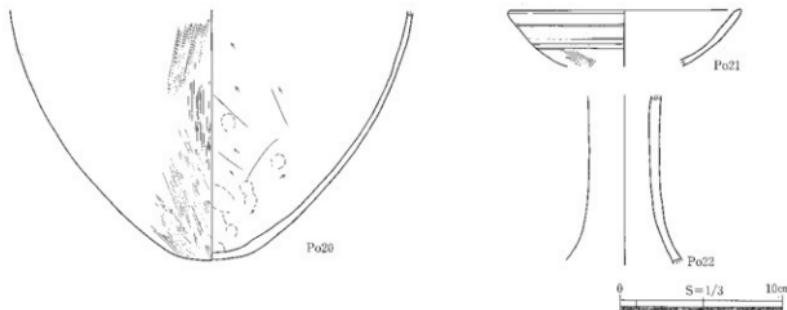
**遺物** 固化できたものには、甕Po1~Po17・注口土器Po18・肩部Po19・底部Po20・低脚杯Po21。

**出土状況** 高杯脚部Po22がある。

このうち床面近くでPo12が、P26内からPo1が、P28内からPo9が出土している。

それ以外は埋土中からの出土である。

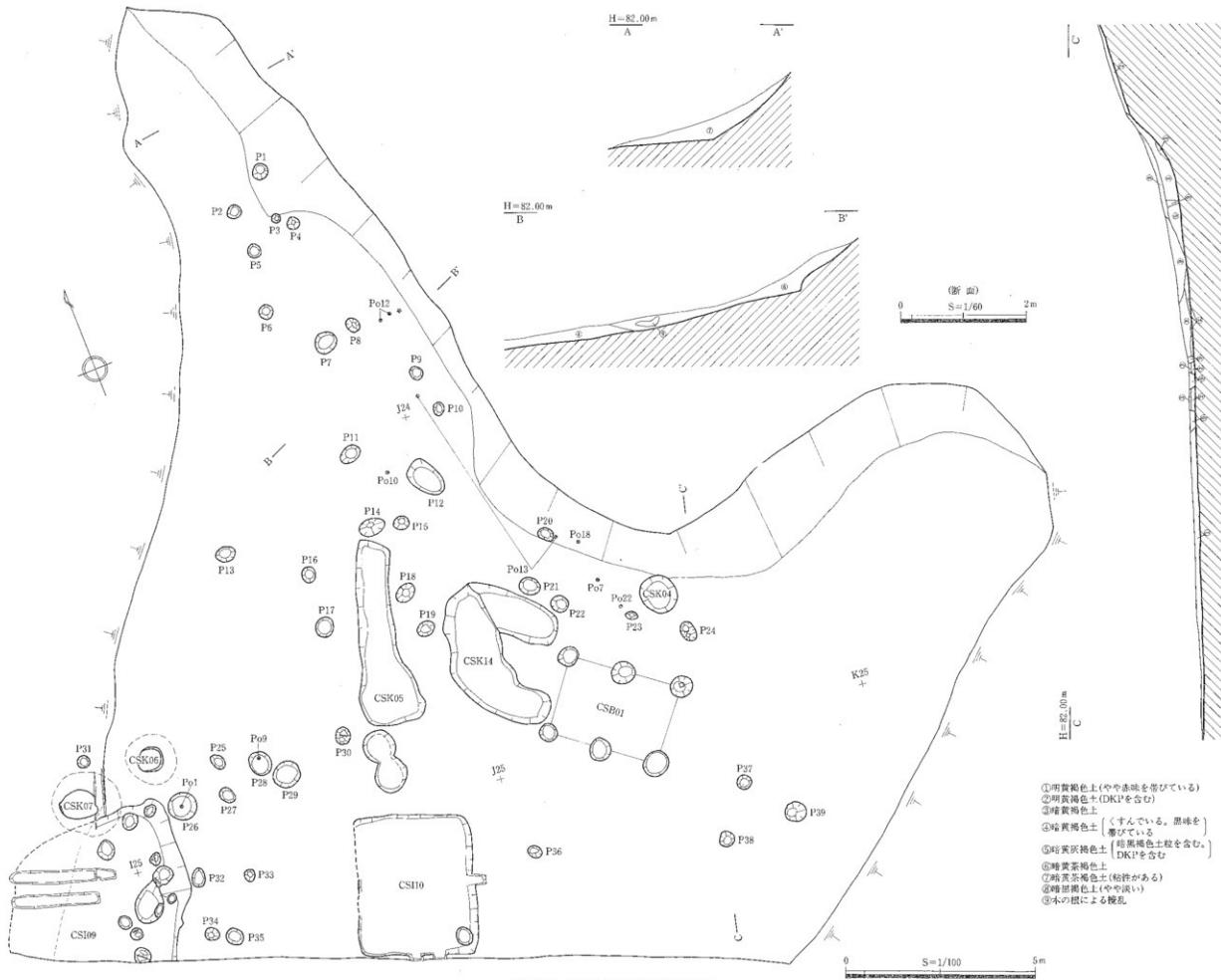
これらの他には、造構の北側と東側でモモ核が、それぞれ1つずつ検出された。特に前者は甕Po12のすぐ近く、暗黄茶褐色土中の底面付近で出土した。



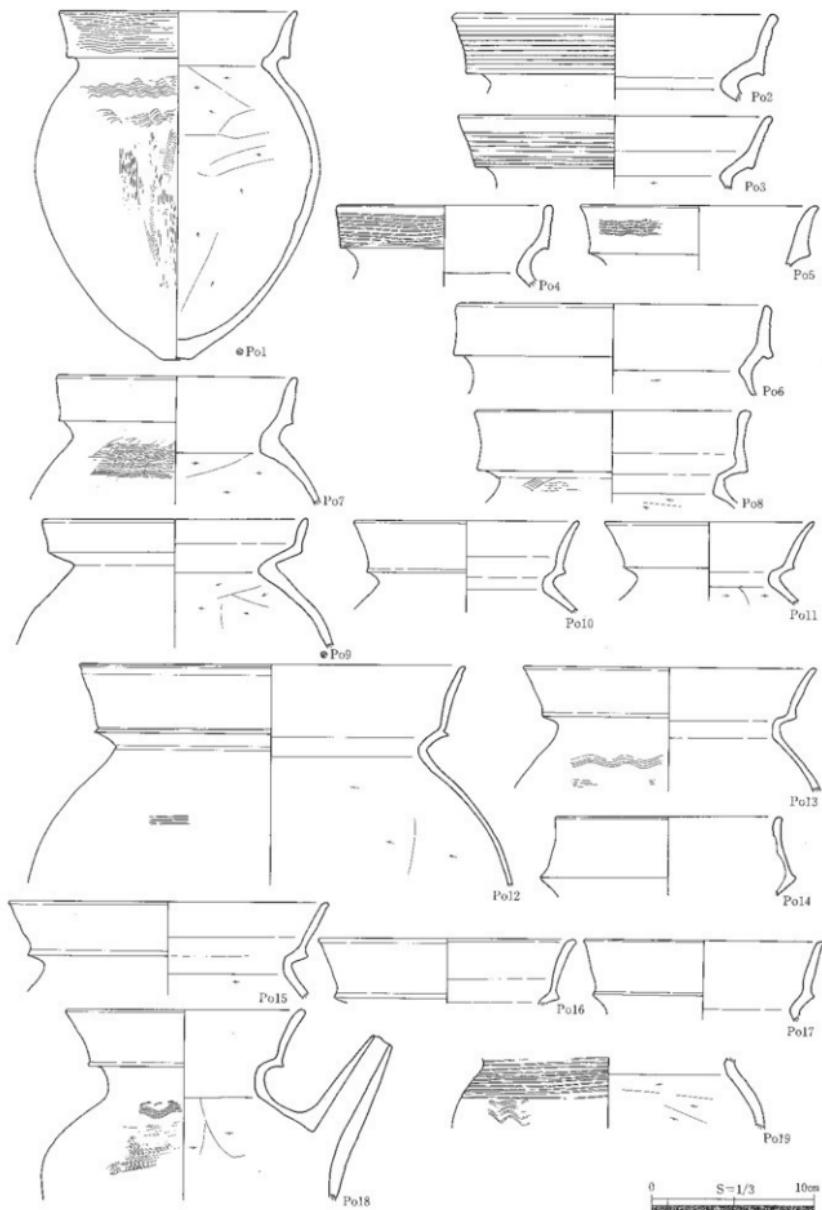
挿図88 南谷大山遺跡CSS03出土遺物実測図(1)

ピット番号	規 模 (cm) (長径×短径×深さ)						
1	43×40-27.7	11	55×40-51.7	21	55×50-15.6	31	35×30-20.2
2	37×35-16.6	12	110×70-20.1	22	45×42-25.5	32	50×32-10.6
3	24×23-11.0	13	50×40-65.3	23	33×20-62.1	33	35×33-35.2
4	35×32-20.2	14	70×43-70.8	24	55×35-54.8	34	43×35-12.4
5	37×35-29.0	15	42×35-33.6	25	43×30-15.3	35	48×40-10.5
6	38×36-17.6	16	40×38-39.9	26	78×75-70.7	36	48×35-25.2
7	60×50-18.2	17	53×50-14.5	27	45×34-22.1	37	40×35-24.8
8	38×35-11.3	18	55×43-40.1	28	68×65-24.5	38	42×40-43.5
9	35×33-18.4	19	47×40-48.6	29	70×68-19.8	39	57×50-24.9
10	33×28-21.9	20	43×30-21.4	30	45×40-37.2		

挿表2 南谷大山遺跡CSS03ピット群一覧表



插図89 南谷大山遺跡CSS03遺物図



插図90 南谷大山遺跡CSS83出土遺物実測図(2)

- 時 期 底面およびピット内出土の土器から、C S S 03は大山Ⅲ期、弥生時代後期後半頃のものと思われる。
- 用 途 用途は不明である。

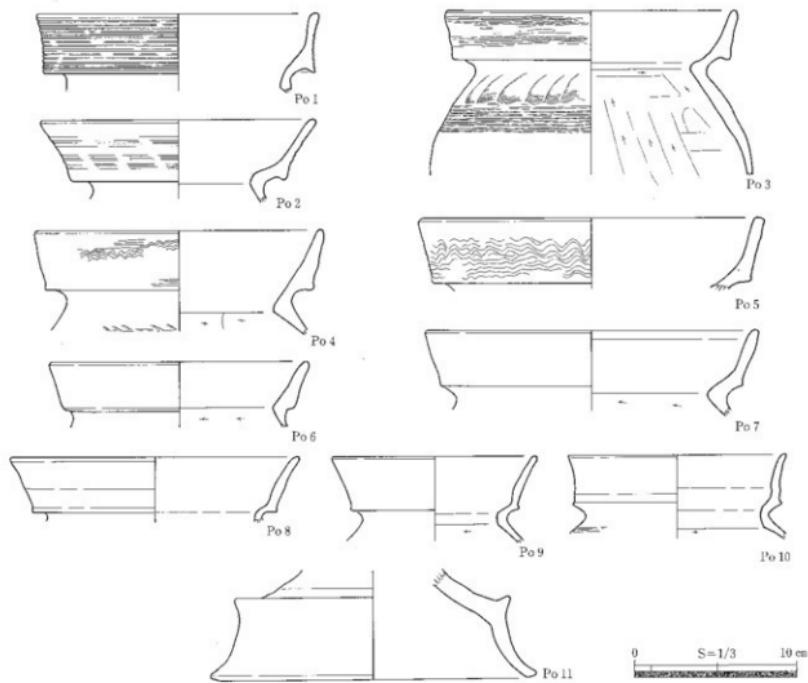
### 5. 遺構外遺物について (挿図91、図版41)

遺構外からは、図化できたものに甕Po1～Po10、鼓形器台Po11がある。

このうちPo1はI26グリッド、Po2～Po4・Po8はH24・J24グリッドの平坦部、Po5はK25グリッド、Po6・Po7・Po9・Po10はI23・I24グリッドの斜面部、Po11はJ26グリッドの平坦部から出土している。

Po1～Po5は、口縁部に施文が施され、口縁部下端が下垂することから大山Ⅱ期と考えられる。Po6・Po7は、口縁部がやや厚手でナデのみになることから大山Ⅲ期、Po8・Po9は口縁部ナデのみでシャープな作りになることから大山Ⅳ期、Po10は口縁端部が平坦面をもつことから大山Ⅴ期頃と考えられる。Po11は、大山Ⅲ期頃のものと考えられる。

これらの遺物は、C-II区の遺構の時期とほぼ重なるもので、出土位置は遺構外になるものの、これらの遺構に関わるものと考えられる。



挿図91 南谷大山遺跡C-II区遺構外出土遺物実測図

## 第5節 南谷大山遺跡C-I区の概要

**位 置** C-I区は、標高63~76mの、C-II区にはさまれた谷底の部分に遺跡が展開する地区である。この地区は、表土が0.75~1mと非常に厚く堆積しており、表土中から弥生土器・土師器が多量に検出されている。これらは、C-II区から流れ込んだものと考えられる。

**造 構** この地区では、溝状造構CSD03・04、ピット群が検出されている。この地区で検出された造構は、いずれも時期が不明である。

また、この地区をさらに掘り下げたところ、造構検出面から0.6~1.0m下で旧表土が検出された。旧表土と造構検出面との間では、遺物は検出されなかった。

## 第6節 南谷大山遺跡C-II区の調査結果

### 1. 溝状造構

CSD03・04 (挿図92・93、図版19)

**位 置** CSD03・04は、C-II区のほぼ全域のL26・L27・L28・L29・M25・M26・M29・N25・N26・N27・N28・N29・N30グリッドにあり、標高約65.1~74.7mの緩やかに南側に傾斜する斜面に位置し、谷底を囲むように二重に走る。外側のものをCSD03、内側のものをCSD04とした。

CSD04の内側には、ピット群がある。

**形 態** CSD03は、C-II区の谷部を逆「U」字状に取り囲んでいる。北側は一部流失しており、段状を呈す。南側は流失している。総延長約34m、幅約0.5~1.1m、深さ13~40cmを測り、断面は「U」字状を呈す。

CSD04は、CSD03の内側を廻るもので、同様に、谷底を囲むように逆「U」字状に廻っている。北側は一部流失しており、段状を呈す。南側は流失している。総延長約77.5m、幅0.7~2.3m、深さ約30cmを測り、断面「U」字状を呈す。

また、CSD04の内側には、溝と溝を結ぶように谷に直交して走る溝が2本検出されている。北側のものは、やや弧状を呈し、長さ約12m、幅0.4~0.8m、深さ約5cmを測り、断面「U」字状を呈す。

南側のものは、部分的に途切れるものの、やや弧状を呈し、総延長約11m、幅0.5~1.5m、深さ16~54cmを測り、断面「U」字状を呈す。西側の溝は調査区外に延び込む。

**埋 土** 埋土は2層に分層でき、これらは、自然堆積と考えられる。CSD03・04とも谷底の埋土を切り込んで作っており、谷底のピット群より新しいものである。

**遺 物** 遺物は全く検出されなかった。

**時期・用途** CSD03・04とも、時期・用途は不明であるが、CSI02埋土中から治平元宝が出土しており、中世以降の耕作等に関わるものと考えられる。また、立地的にC-V区の溝状造構と類似しており、近世まで下るものとも考えられる。

## 2. ピット群 (挿図92、図版19)

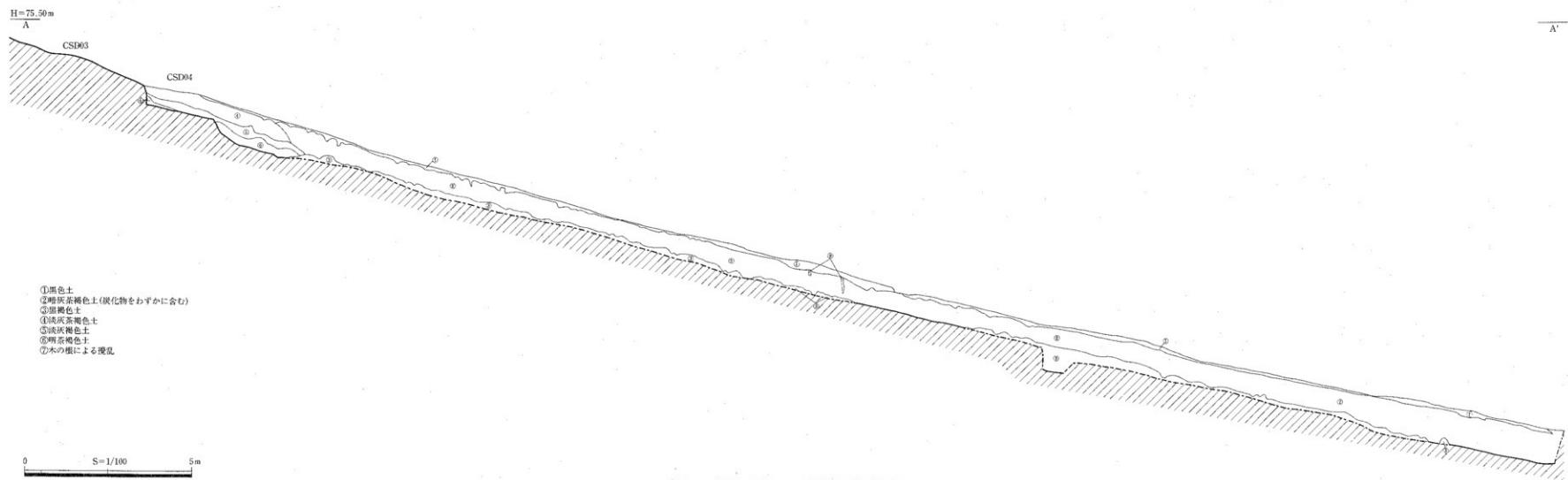
- 位置 C-I区の、C SD04に埋められた部分に作られている。
- 形態 総数107個検出されている。不整形を呈するものがほとんどで、大きさ・深さはさほど大きくない。規模等は挿表3を参照されたい。
- 埋土 埋土は、黒褐色土が単層ではいる。
- 遺物 埋土中から土器片が出土したものもあるが、小片のため図化できなかった。
- 時期・用途 時期を判断する上器が出土していないため、ピット群の時期は不明であるが、C SD03-04よりは、切り合い関係から若干遡るものと考えられる。

ピット番号	規模 (cm) (長径×短径×深さ)						
1	58×50-25.5	28	20×20- 9.0	55	46×35-13.0	82	26×22-20.6
2	90×60-25.9	29	40×20-11.4	56	16×15-11.0	83	23×18-19.2
3	85×55-21.8	30	33×26-14.6	57	35×33-10.1	84	43×32-21.2
4	32×25-10.2	31	40×26-13.9	58	40×33-17.1	85	38×27-11.5
5	40×30-20.0	32	18×12-11.1	59	35×30-15.6	86	60×30-26.2
6	30×23- 6.0	33	45×30-15.2	60	30×25-21.8	87	50×17-24.4
7	55×35-16.4	34	40×35-11.5	61	35×23-27.5	88	70×22-16.0
8	85×55-28.2	35	23×22-13.8	62	34×22-16.1	89	38×28-24.6
9	45×33-19.3	36	45×43-15.2	63	46×36-22.8	90	25×23- 6.7
10	33×25- 9.8	37	50×40-26.0	64	55×40-14.3	91	40×25-11.9
11	35×30-20.5	38	45×30-13.1	65	90×36- 7.7	92	25×10-11.2
12	130×35-32.7	39	50×40-13.1	66	28×25-11.9	93	28×18-11.0
13	30×25-13.7	40	45×30-19.4	67	40×30-16.0	94	35×24-10.2
14	40×35-17.5	41	40×25-17.6	68	85×70-24.0	95	35×23-17.6
15	20×20- 8.0	42	25×20-11.3	69	30×18-16.5	96	28×25-10.1
16	45×22-18.8	43	40×20-18.3	70	45×28-17.0	97	28×25-18.0
17	45×25-17.3	44	40×27-18.4	71	50×22-16.9	98	30×15-13.0
18	60×25-18.5	45	18×15-10.3	72	72×40-28.8	99	27×17-20.5
19	40×20-11.7	46	20×20-12.5	73	30×25-12.5	100	38×17- 9.5
20	18×16-11.8	47	55×50-14.4	74	55×30-15.3	101	27×22-13.3
21	35×28-11.6	48	35×20-16.7	75	50×40-17.8	102	23×20- 9.5
22	40×33-11.6	49	27×23-15.4	76	50×25-14.2	103	30×25-13.3
23	35×28-31.7	50	40×36-38.4	77	68×15-24.7	104	37×30-11.6
24	75×65-20.1	51	50×30-23.5	78	60×45-25.5	105	50×46- 8.8
25	63×55-24.8	52	45×33- 9.8	79	90×30-22.8	106	35×25-18.1
26	23×20-11.6	53	30×23-26.7	80	28×24-23.7	107	17×15- 8.5
27	45×25-26.7	54	70×65-30.3	81	45×30-15.0		

挿表3 南谷大山遺跡C-I区ピット群一覧表



挿図92 南谷大山道路CSD03・04、ピット群造構図



挿図93 南谷大山造跡C-III区断ち割り土層断面図

### 3. 遺構外遺物について (挿図94、図版41・42)

遺構外からは、図化できたものに甕Po 1～Po 9、底部Po10、低脚杯Po11、土鍤Po12～Po14がある。

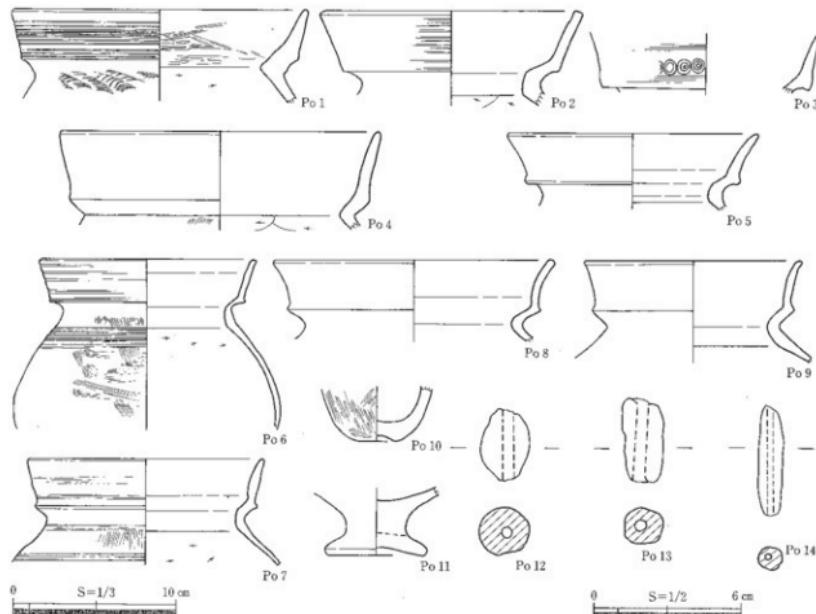
いずれも表土および黒褐色土中からの出土である。

Po 1は、口縁部に施文が施され、内面にミガキが見られることから大山II期、Po 2・Po 3は、口縁部に施文が施されるが頸部屈曲部が丸味をもつことから大山III期、Po 4・Po 5も口縁部がやや厚手でナデのみになることから大山III期、Po 6・Po 7は口縁部ナデのみでシャープな作りになり、口縁端部が平坦面をもつことから大山V期、Po 8・Po 9は口縁部下端が退化傾向を示すことから大山VI期頃のものと考えられる。

Po10・Po12～Po14は時期不明、Po11は大山III～IV期頃のものと考えられる。

このうち、Po 3は、3重巻のスタンプ文が施されるものである。スタンプ文が施されるものは、南谷大山遺跡ではPo 3のみである。

これらの遺物は、いずれも表土および黒褐色土中からの出土であり、C-I区の遺構の時期を比定できるものではない。また、これらは、弥生時代後期後半～古墳時代前期後半にかけてと幅があり、出土位置から考えて、C-I区・C-II区から流れ落ちてきたものと考えられる。



挿図94 南谷大山遺跡C-I区遺構外出土遺物実測図

## 第7節 南谷大山遺跡C-IV区の概要

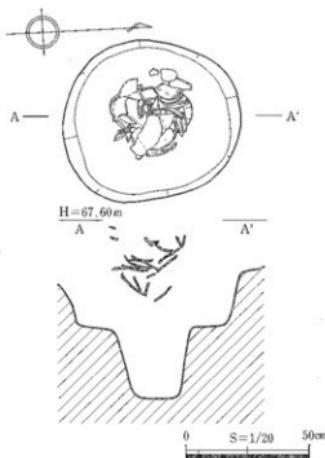
- 位 置 C-IV区は、C-II区の西側、標高61~78mの急斜面部である。この地区は、調査前の地形測量で大きくカール状にえぐられる箇所が見つかり、この部分にトレンチを設定したところ、多量の土師器片が出土したため、調査区にとり込んだ。
- 造 構 この地区では、古墳時代前期と考えられる段状造構CSS06、弥生時代後期~古墳時代前期にかけてと考えられる溝状造構CSD12、時期は不明であるがCSD12に続くように溝状造構CSD16が作られている。

## 第8節 南谷大山遺跡C-IV区の調査結果

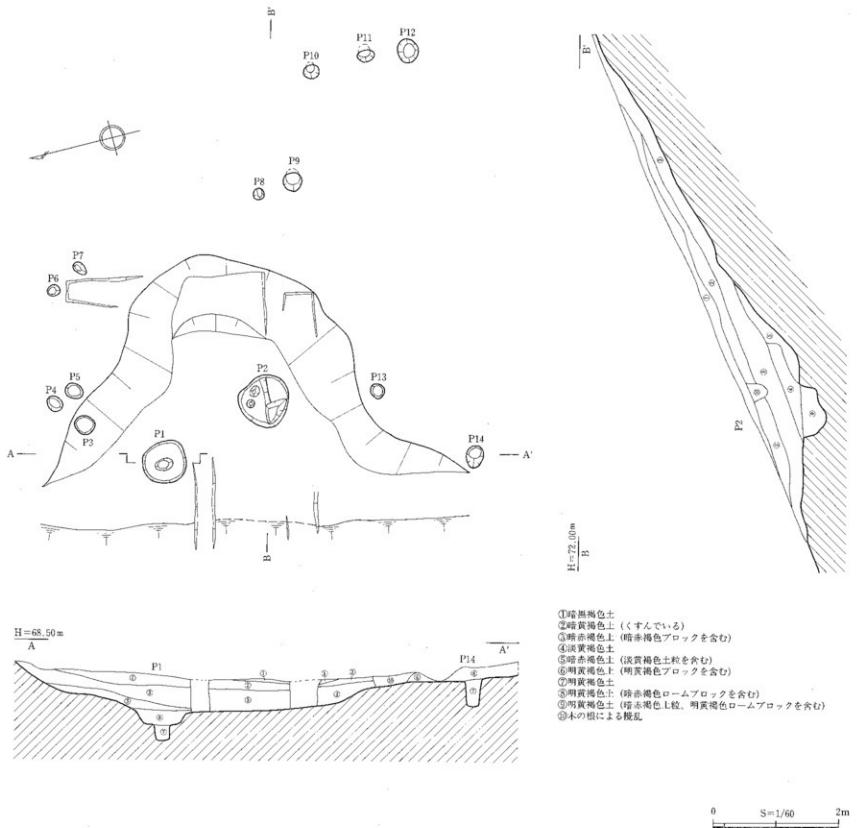
### 1. 段状造構

CSS06 (挿図95~97、図版19・20・42)

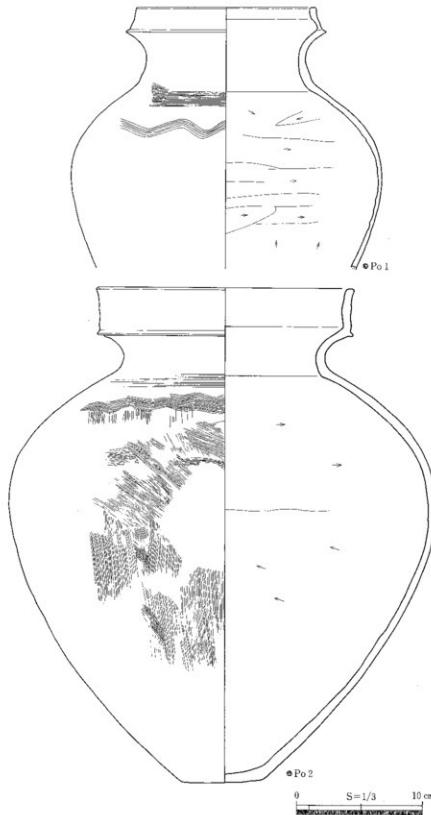
- 位 置 CSS06は、C-IV区のはば中央部のG23・G24グリッドにあり、標高67.32~68.66mの、西に傾斜する急斜面となっている。斜面の上方、約17.3m東にはCSS03が、約21.7m南東にはCSI09が、約20m南東にはCSK07が、約20.9m南東にはCSK06がそれぞれ位置する。一方、斜面の下側では、約10.6m西にCSD12が南北に走っている。
- 形 態 斜面を不整形な三角形状に掘り込んで、平坦面を作っている。規模は、底面で東西約3.3m、南北約4.4mを測る。高低差は約1.2mである。底面は緩やかに傾斜している。
- 埋 土 埋土は7層からなる。これらの土層を観察すると、③・⑥層は基盤の礫を含む層で、人工的に埋められたものと考えることができる。
- ビット 平坦面にビットが2個検出されている。  
P1は平面円形を呈し、二段に掘り込まれている。規模は(73×67-52)cmである。P2は(86×81-42)cmを測る。
- 周辺ビット 道構周辺には、計12個のビットが検出されている。これらは径30cm程度と小さく、深さも10~20cm程度である。いずれも不規則に並んでいる。
- 遺 物 遺物としては、P1中より壺Po1・Po2が出土壤している。これらは、潰れた状態でしかも重なり合って、出土している。  
このほか、埋土中から土器片が出土しているが、図化できなかった。
- 時 期 壺Po1・Po2より、CSS06は大山Ⅳ期、古墳時代前期前半頃のものと思われる。
- 用 途 急斜面に造られ、大型の主柱穴が掘り込まれており、祭祀的な意味合いが濃いものと考えられる。



挿図95 南谷大山遺跡CSS06P1内土器検出状況図



挿図98 南谷大山遺跡CSS06遺構図

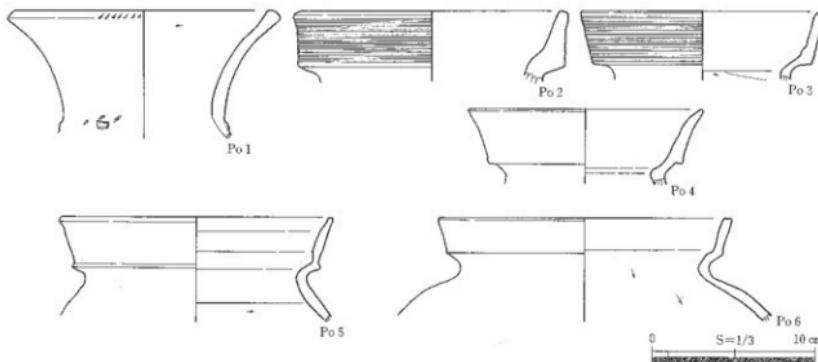


挿図97 南谷大山遺跡CSS06出土遺物実測図

## 2. 溝状遺構

CSD12・16 (挿図98・99、図版20・42)

- 位置** CSD12・16はC-IV区の西側、G20・G21・F21・F22・F23・F24・E24グリッドに位置する。付近は標高約60~66mの急斜面である。CSD12は、ほぼ南北方向に走っている。CSD16は、CSD12の北東側に約0.5m離れて位置する。約3.3m西にはCSD13が、約8.4m西にはCSD10がそれぞれ平行して走っている。約10.6m東にはCSS06が位置する。CSD12の南側は調査区外に延びてしている。
- 形態** CSD12は、現状で長さ約47.5m、溝の幅約0.4~1.1m、深さ約30~50cmを測り、断面は「V」字状を呈する。
- CSD16** CSD16は、斜面に立地するため、北側・西側は流失しており、原形をとどめていない。中央には段があり、北側が低くなっている。長さ約47.5cm、幅約0.4~1.1m、深さ約30~50cmを測る。断面は「U」字状を呈すものと考えられる。
- 埋土** CSD12の埋土は5層からなり、CSD16の埋土は暗灰茶褐色土のみである。これらは、自然堆積と思われる。
- 遺物** CSD12では、図化できたものには、壺Po1・甕Po2~Po6がある。いずれも埋土中から出土状況の出土であり、これらのうち、壺Po1・甕Po3~Po5は南部より、甕Po2・Po6は北部より出土した。
- CSD16からは遺物は検出されなかった。
- 時期** 甕Po2~Po4は弥生時代後期の特徴を有するが、甕Po5は古墳時代前期の特徴をもつことから、CSD12は、弥生時代後期から古墳時代前期にかけてのものと、判断される。
- なお、Po1については、弥生時代中期中葉頃のものと考えられる。
- CSD16の時期は不明であるが、CSD12に接続するようにあり、同様の時期が考えられる。
- 用途** CSD12・16とも用途については、はっきりしたことは言えないが、尾根を下る道路あるいは、BSD03のように、集落を区画するための溝と考えることもできる。



挿図98 南谷大山遺跡CSD12出土遺物実測図

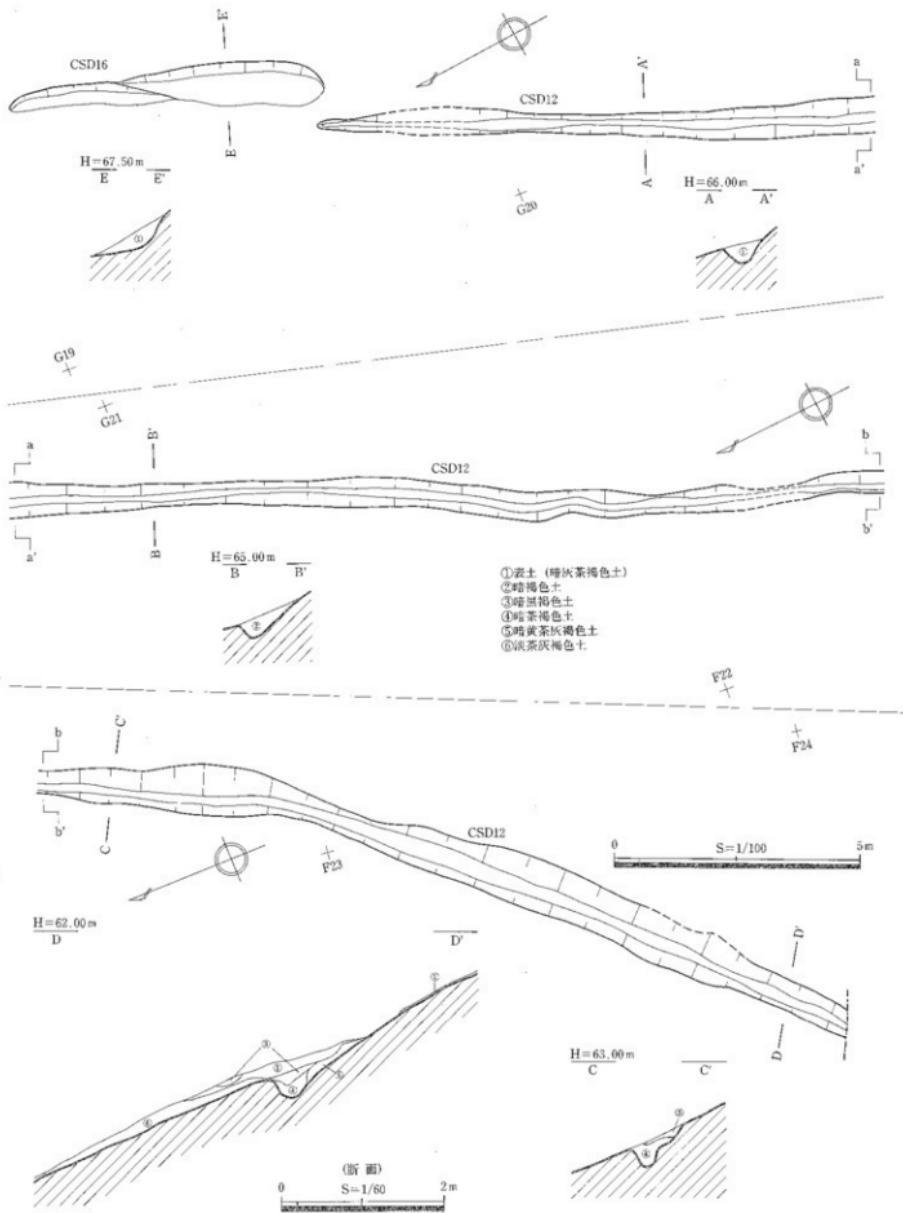


插图99 南谷大山遺跡CSD12・16遺構図

### 3. 造構外遺物について（挿図100～102、図版42・43）

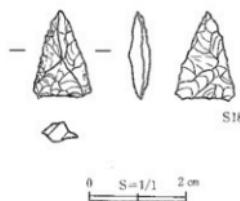
造構外からは、國化できたものに甕Po 1～Po17・Po23、底部Po18～Po20、肩部Po21・Po22、低脚杯Po24、蓋Po25・Po26、鼓形器台Po27、須恵器甕Po28、石鏃S18がある。

これらのうち、Po 1～Po 8・Po10～Po27・S18はH24・H25・G24・G25グリッドのC～IV区の斜面部の上方からまとめて出土している。また、Po 9はG25グリッドから、Po24・Po28はF23グリッドからそれぞれ出土している。

Po 1～Po 6・Po 8は、口縁部に施文が施され、口縁部下端がわずかに下垂することから大山II期、Po 7・Po 9・Po10は、口縁部に施文が施されるが、一部ナデ消されるもので、口縁部下端が水平方向にわずかに引き出されることから大山III期、Po11～Po16も、口縁部がやや厚手でナデのみになることから大山III期、Po24～Po27は大山III～IV期、Po27は、筒部が高くやや古い様相をもつものの、大山II期頃のものと考えられる。

H24・H25・G25グリッドから出土しているものは、大山II～III期にかけてのもので、CS S03の時期とはほぼ同時期であることから、大山IV期以降、CS S03の平坦部分に貯蔵穴・竪穴住居などが作られており、これらが作られる時にCS S03に付属した遺物が片づけられたものと考えられる。

須恵器甕Po28は、C～IV区のF23グリッド出土のものとC～V区のD22グリッド出土のものが接合している。



挿図100 南谷大山遺跡C～IV区造構外出土遺物実測図(1)

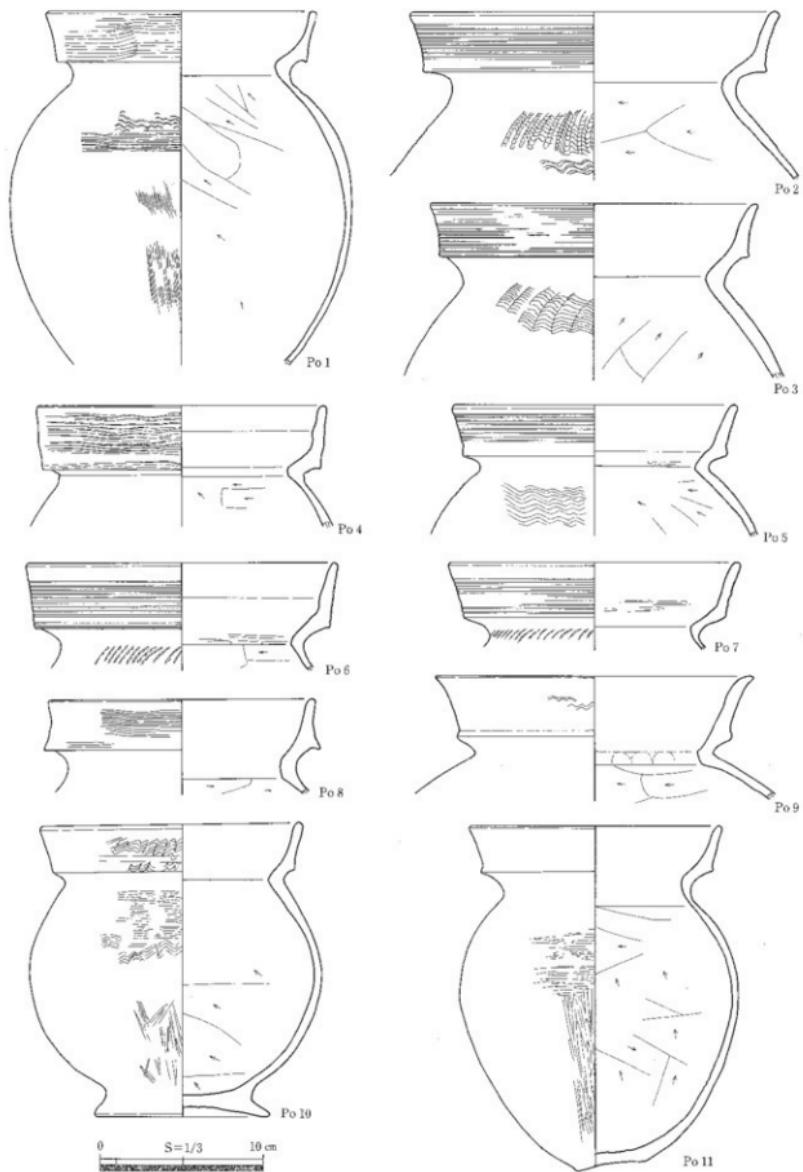
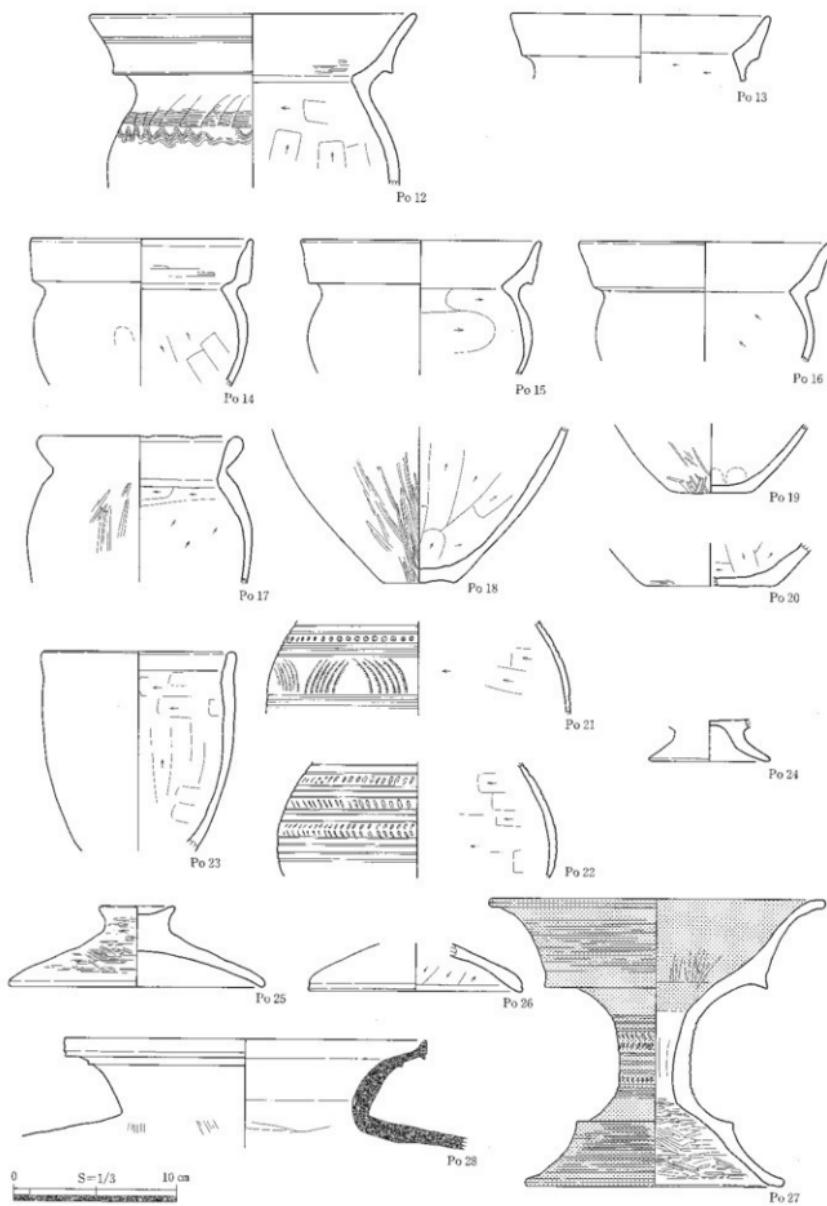


插圖101 南谷大山遺跡C-IV區遺物外出土遺物實測圖(2)



插図102 南谷大山造跡C-IV区造構外出土遺物実測図(3)

## 第9節 南谷大山遺跡C-V区の概要

- 位 置 C-V区は、1991~92年度調査区とC-IV区に挟まれた、標高56~62mの谷底部である。この地区は、調査区を設定するためのトレント調査で焼土面および土器が多数検出されたことから、急遽調査区とされた部分である。
- 遺 構 この地区では、古墳時代中期の竪穴住居跡CS I 17・18・19・20・21、不明土坑CS K18・19、時期は不明であるが溝状造構CS D10・11・13・14・15・17が作られている。このうち、竪穴住居跡は、1992年度調査区の住居跡とほとんど同じ時期のものかやや遅るものであり、古墳時代中期後半期には、尾根部・斜面部・谷底部に住居が同時に作られていることがわかった。また、CS I 19からは祭祀用と考えられる有孔円盤2個、白玉約350個が出土しており、谷底に營まれた住居の性格を考えるうえで、大変貴重な資料を提供することができた。また、CS I 20からは、意図的に破碎されたと考えられる大型の壺を含み、多量の土器がうち捨てられた状況で検出されている。
- 遺構外からは、近世と考えられる陶器片が出土しており、溝状造構・不明土坑がこの時期のもの可能性がある。

## 第10節 南谷大山遺跡C-V区の調査結果

### 1. 竪穴住居跡

CS I 17 (挿図103~106、図版21・43・44)

- 位 置 C-V区の西側のD21・D22・E21グリッドにあり、標高58.8~59.6mの平坦面に位置する。東側にはCS I 19、南東にはCS I 18が接している。
- 形 態 遺存状態は非常に悪く、東側はCS I 19と重複しており、その範囲は不明である。CS I 17は遺存する壁溝の様子。遺存する壁の状態から、4棟が重複しながら存在していたものと推察され、CS I 17-1~17-4として考えてみた。
- CS I 17-1 CS I 17-1は、最も西側にあり、東側はCS I 17-2によって削り取られている。西側周壁のみ検出され、壁溝・主柱穴は検出されなかった。平面は方形ないし長方形を呈すものと考えられる。規模は、東西0.5m以上、南北7.80mを測ると考えられ、残存壁高は、最も遺存状態の良い西壁で最大0.28mを測る。
- 西側壁寄りに(39×39-25)cmを測るP1がある。位置的に、いわゆる特殊ピットと考えられる。
- CS I 17-2 CS I 17-2は、壁溝・主柱穴が検出されている。平面は、壁溝の遺存状態から方形または長方形を呈すものと考えられる。規模は不明である。残存壁高は、最も遺存状態の良い西壁で最大0.06mである。
- 壁溝は南側・西側壁際のみで検出され、規模は幅12~15cm、深さ2~3cmを測り、断面「U」字状を呈す。
- 主柱穴は、P2~P5の4個で、それぞれの規模は、P2(54×52-68)cm、P3(50×45-59)cm、P4(43×40-42)cm、P5(59×50-18)cmを測る。主柱穴間距離は、P2



插図103 南谷大山遺跡CSII7遺構図

～P 3間から順に、4.4m、4.3m、4.2m、5.3mで、他の住居に比べて大きな住居である。

床面は、谷の中央部（東側）に向かって緩やかに傾斜している。

また、焼土が1カ所検出されているが、これは盛り上がるよう検出されており、焼け落ち焼土と思われる。

**CSI17-3** C S I 17-3は、C S I 17-2の北側に重複するように検出された。平面は、壁溝の遺存状態から方形を呈すものと考えられる。規模は不明である。

壁溝は西側のみで部分的に検出されている。規模は、幅12～22cmと広く、深さ2～10cmを測る。

主柱穴はP 6～P 9の4個で、それぞれの規模は、P 6 (50×43～44) cm、P 7 (42×40～74) cm、P 8 (29×27～29) cm、P 9 (43×26～20) cmを測る。主柱穴間距離は、P 6～P 7間から順に、5.2m、4.7m、4.9m、4.9mで、C S I 17-2同様大型のものである。

**CSI17-4** C S I 17-4は、部分的に壁溝が検出された事で住居として考えた。遺存状態は非常に悪く、平面形・規模とともに不明である。残存壁高は、最も遺存状態の良い西壁で、最大0.52mである。

壁溝は、西側および北側に部分的に2本ずつ検出されている。幅は17～25cm、深さ4～12cmを測り、断面「U」字形を呈す。

主柱穴と考えられるものは検出されなかったが、北側コーナー付近で (59×55～63) cmを測るP10が検出されている。

床面や南側には、焼土が盛り上がるよう1カ所検出されており、これは、焼け落ちた焼土と考えられる。

**埋 土** 埋土は5層に分層できた。これらは住居の中心に向かって堆積しており、自然堆積したものと考えられる。基盤層と考えられる③④層は、谷部に二次的に堆積したものであり、この層中には弥生時代後期～古墳時代前期の上器が含まれている。

**遺 物** 固化できたものには、甕Po 1～Po12、口縁部Po13、高杯Po14～Po18、鼓形器台Po19・Po20、出土状況 小型丸底壺Po21・Po22、低脚杯Po23、土玉Po24、黒曜石剣片S 11、鋳造鉄斧F 6がある。

このうちC S I 17-1からは、埋土中からPo 5・Po 8が出土している。

C S I 17-3からは、埋土中からPo11・Po13・Po22が出土している。

C S I 17-4からは、Po 1～Po 4・Po 6・Po 7・Po 9・Po 10・Po 12・Po 14～Po 21・Po 23・

Po 24・S 11・F 6が出土している。床面からはPo 7・Po 14・Po 17・Po 18が出土した。

その他はいずれも埋土①層中からの出土である。

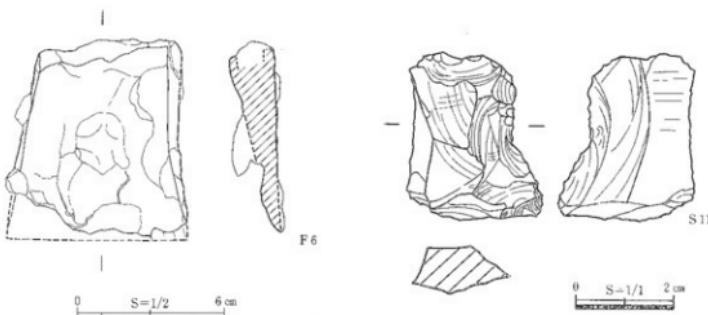
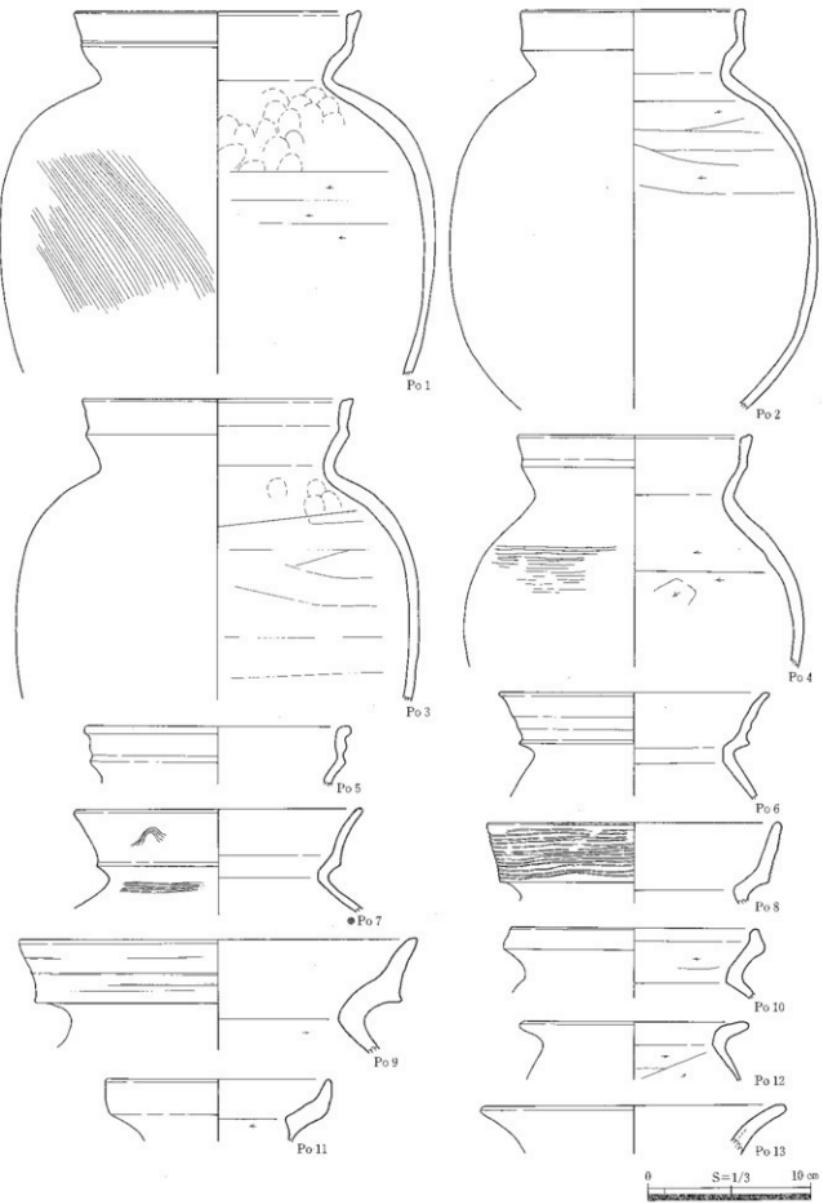


図104 南谷大山遺跡CSI17出土遺物実測図(1)



插図105 南谷大山遺跡CSII7出土遺物実測図(2)

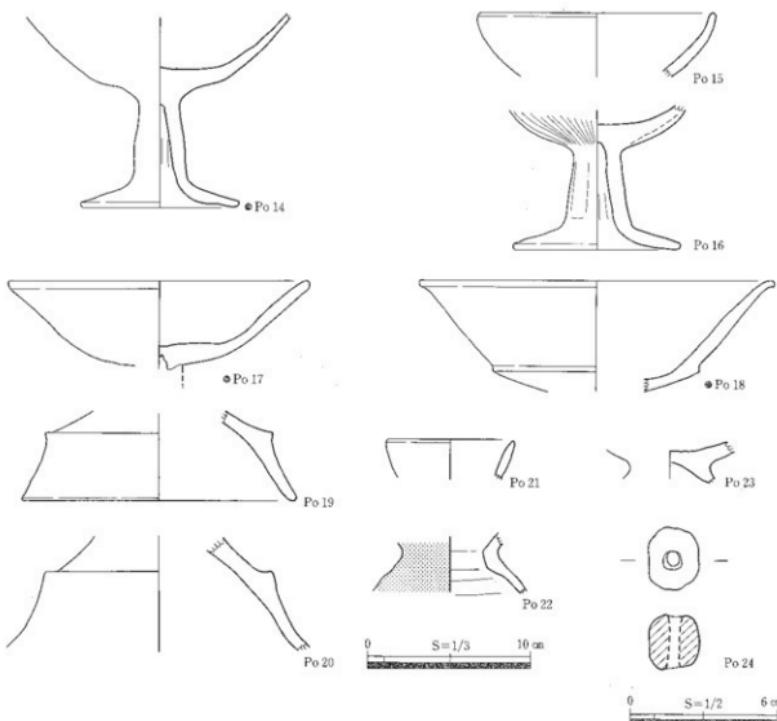


図106 南谷大山遺跡CSII7出土遺物実測図(3)

時 期 出土遺物から、CS II 17-1~17-4はいずれも大山晩期、古墳時代中期後半頃のものと考えられるが、CS II 17-1がこの中では若干遅るものと考えられる。

#### CS II 18 (挿図107・108、図版22・44)

位 置 CS - V 区の東側のE23グリッドにあり、標高58.5~59.1mの平坦面に位置する。北側にはCS II 19が接し、東側1.5mにはCS D13がある。

形 態 遺存状態は悪く、北側はCS II 19と切りあっており、また西側・南側は流失している。遺存する周壁・壁溝から、平面は隅丸方形を呈すものと考えられる。規模は、東西2.0m以上、南北3.5m以上を測る。残存壁高は、最も遺存状態の良い東壁で最大0.15mを測る。

壁溝は東壁際のみで検出され、規模は幅30~35cmと広く、深さ2~5cmを測り、断面「U」字状を呈す。

主柱穴と思われるものはP 1~P 3の3個で、本來は4個あったものと考えられる。それぞれの規模は、P 1 (30×28-16)cm、P 2 (42×32-13)cm、P 3 (35×32-25)cmを測り、主柱穴間距離は、P 1~P 2間から順に2.8m、2.9mである。

また、床面上には、(112 × 70-41)cmを測る土壌状のP 5がある。埋土は炭化物を含む③層のみである。埋土中から壺Po 1が出土しており、C S I 18以前に掘り込まれたピットと考えられる。

その他にも、床面上および周辺でピットが検出されているが、用途は不明である。

床面は、谷の中央部（西側）に向かって緩やかに傾斜している。

**埋 土** 埋土は①層のみで、よく縮まっている。

焼け落ちの焼土と考えられるものが、床面から浮いた状態で検出されている。

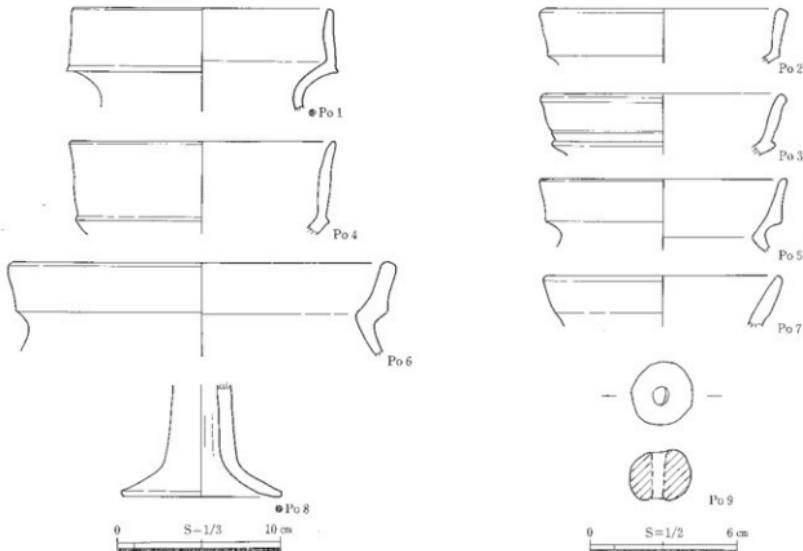
**遺 物** 図化できたものには、壺Po 1、甕Po 2～Po 7、高杯Po 8、土玉Po 9がある。

**出土状況** このうち床面からは、東壁際でPo 8が出土している。P 5内からPo 1が出土している。

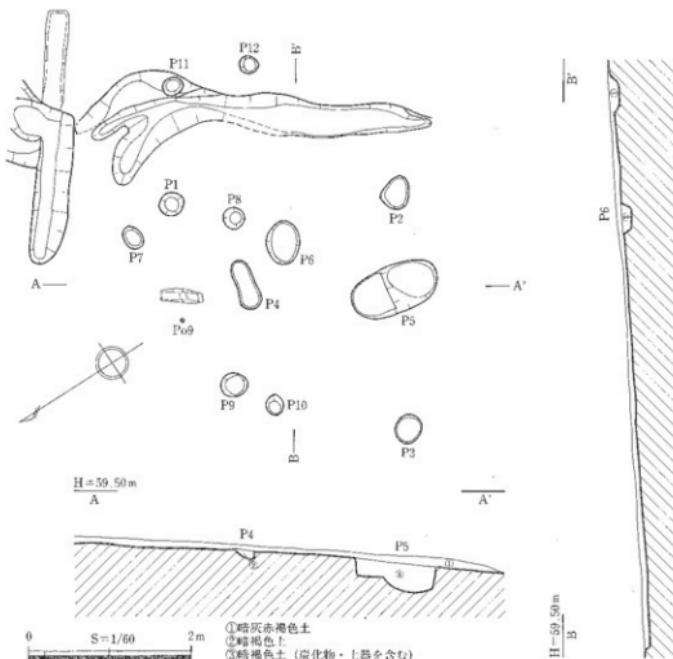
その他はいずれも埋土①層中からの出土である。

**時 期** Po 2・Po 3・Po 8から、C S I 18は大山Ⅶ期、古墳時代中期中葉頃のものと考えられるが、Po 4～Po 6は弥生時代後期の特徴をもつ。

また、P 5は、Po 1から大山Ⅳ～Ⅴ期のものと考えられ、C S I 18に伴うものではなく、古墳時代前期頃に掘り込まれたものと考えられる。



挿図107 南谷大山遺跡CSII 18出土遺物実測図



図版108 南谷大山遺跡CSII 18造構図

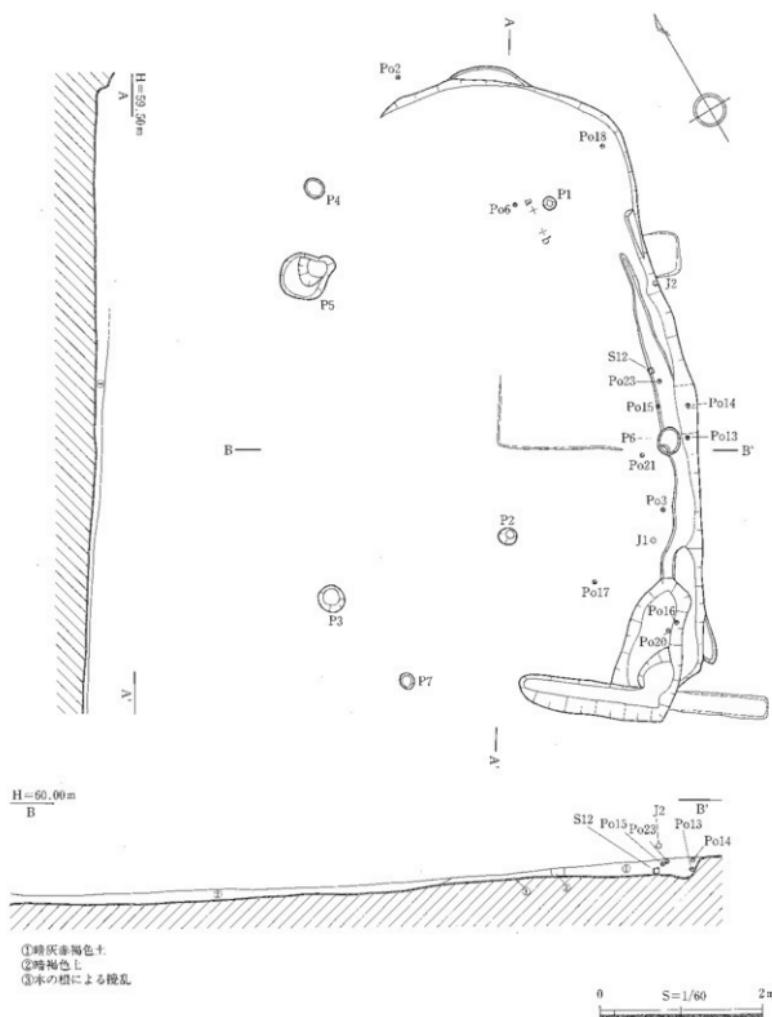
#### CSII 19 (挿図109~117、図版22・23・44~46)

- 位置** C-V区の東側のE22・E23グリッドにあり、標高59.1~59.5mの平坦面に位置する。西側にはCSII 17、南側にはCSII 18が接している。
- 形態** 遺存状態は悪く、西側はCSII 17によって削り取られているものと考えられ、また、南側も不明瞭である。遺存する壁から平面は隅丸方形を呈すものと考えられる。規模は、東西3.0m以上、南北7.50mを測り、床面積は25m<sup>2</sup>以上である。残存壁高は、最も遺存状態の良い東壁で最大0.28mを測る。
- 壁溝は東壁際のみで検出され、規模は幅18~25cmと広く、深さ1~3cmを測り、断面「U」字状を呈す。壁溝の南側は、土坑状に深くなる。
- 主柱穴と思われるものは検出されなかつたが、床面上ではP1~P5のビットが検出された。それぞれの規模は、P1 (16×16~12) cm、P2 (23×20~24) cm、P3 (33×32~18) cm、P4 (25×22~10) cm、P5 (75×60~20) cmを測る。
- 床面は、谷の中央部（西側）に向かって緩やかに傾斜している。
- 埋土** 埋土は2層に分層できたが、①層はよく締まっている。
- 焼土面・中央ビットはない。
- 遺物** 固化できたものには、甕Po1~Po10、底部Po11・Po12、高杯Po13~Po18、鼓形器台Po

出土状況 19. 小型丸底壺Po20・Po21、蓋Po22、台付小型鉢Po23、土玉Po24、石皿S12、有孔円盤J1・J2、白玉J3～J353がある。

このうち床面からは、東壁際でPo3・Po6・Po9・Po13～Po15・Po17・Po18・Po20・Po21・Po23・Po24・S12が比較的まとまって出土している。

その他はいずれも埋土①層中からの出土である。



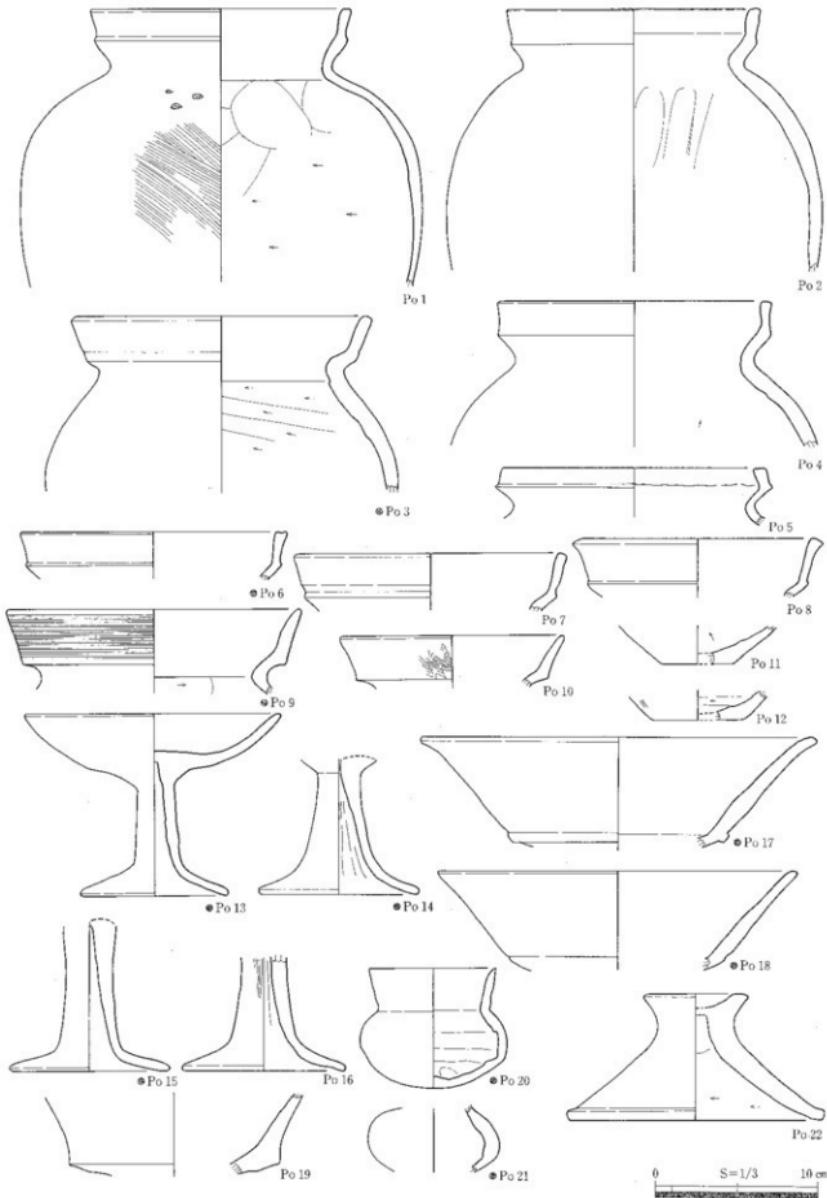
摺図109 南谷大山遺跡CSIIb遺構図

また、有孔円盤はやや離れて埋土中から出土し、白玉は、P 1付近でまとまって出土している。白玉の出土の範囲は床面上から約15cm浮いた状態のものが多くあった。出土状況を見ると、本来繋がっていたものと考えられ、住居の埋没につれて埋まつていった過程が窺われる。

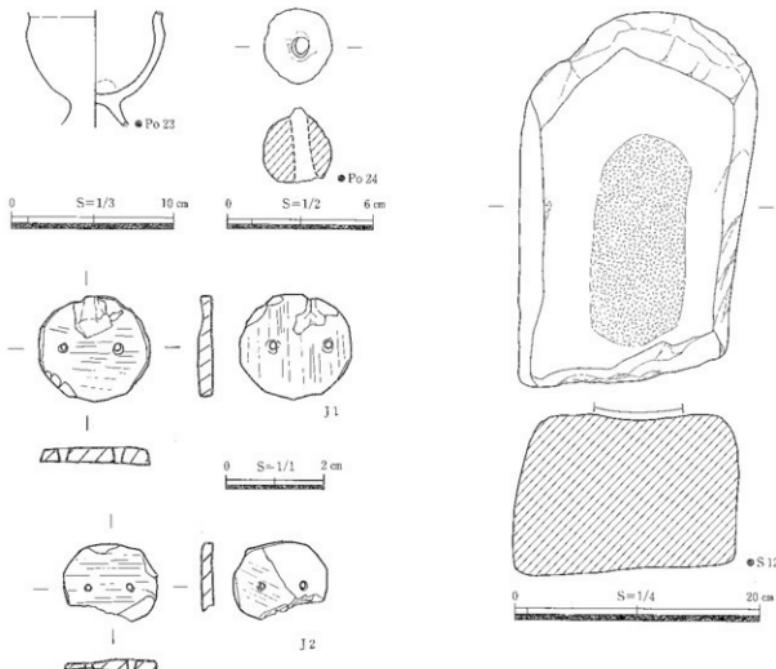
時 期 床面出土遺物から、C S I 19は大山Ⅶ期、古墳時代中期中葉頃のものと考えられる。



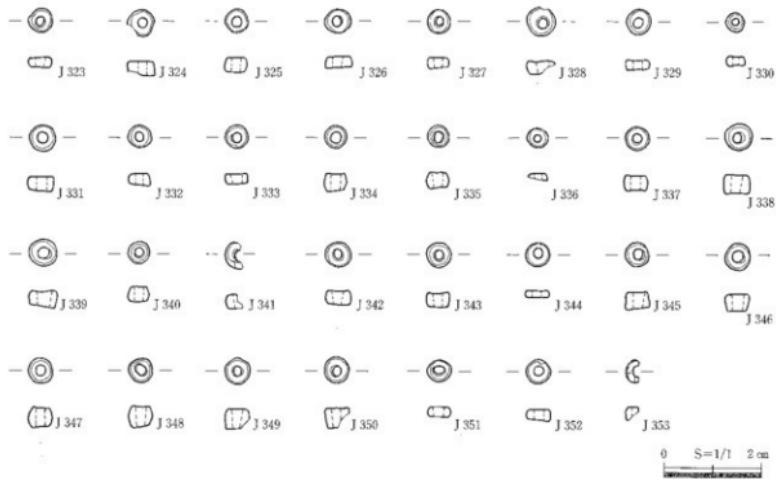
擇図110 南谷大山遺跡CSI19曰玉検出状況図



插図111 南谷大山遺跡CSII 19出土遺物実測図(1)



插図112 南谷大山遺跡CSII9出土遺物実測図(2)

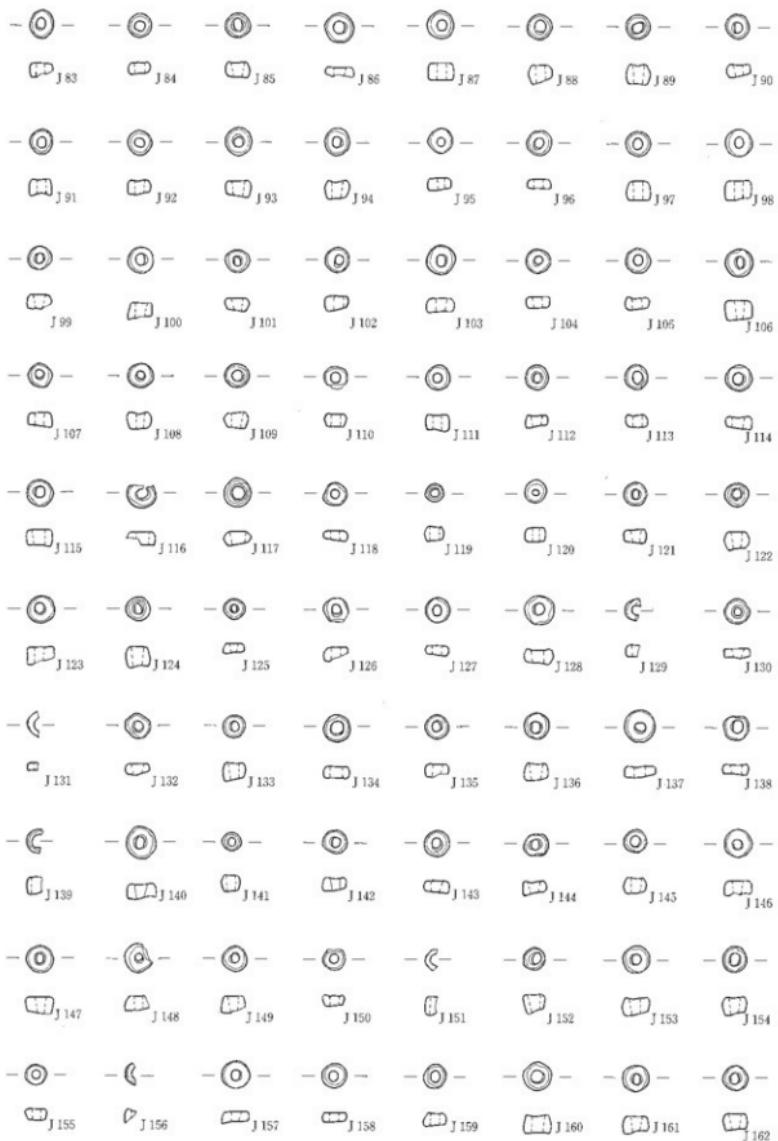


插図113 南谷大山遺跡CSII9出土遺物実測図(3)

-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -
-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -
-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -
-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -
-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -
-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -
-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -
-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -
-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -
-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -	-	○ -

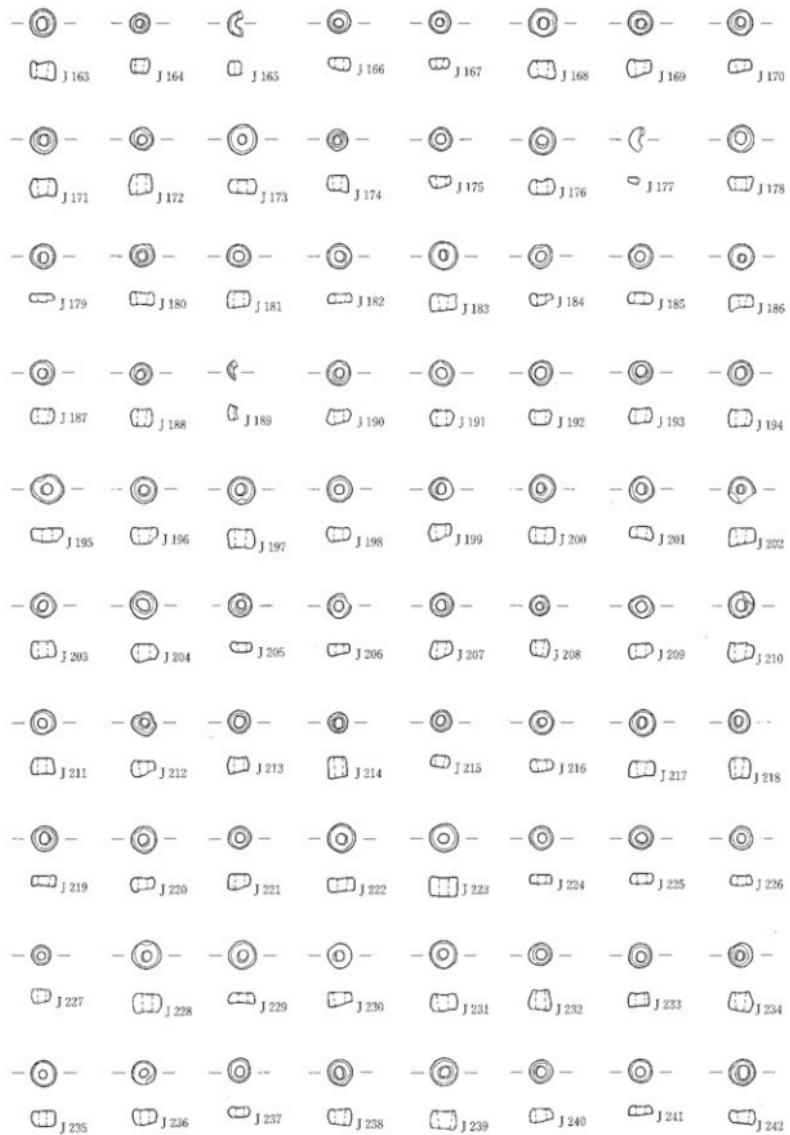
0 S=1/1 2 cm

挿図114 南谷大山遺跡CSII9出土遺物実測図(4)



0 S=1/1 2 cm

挿図115 南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(5)



0 S=1/1 2 cm

挿図116 南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(6)

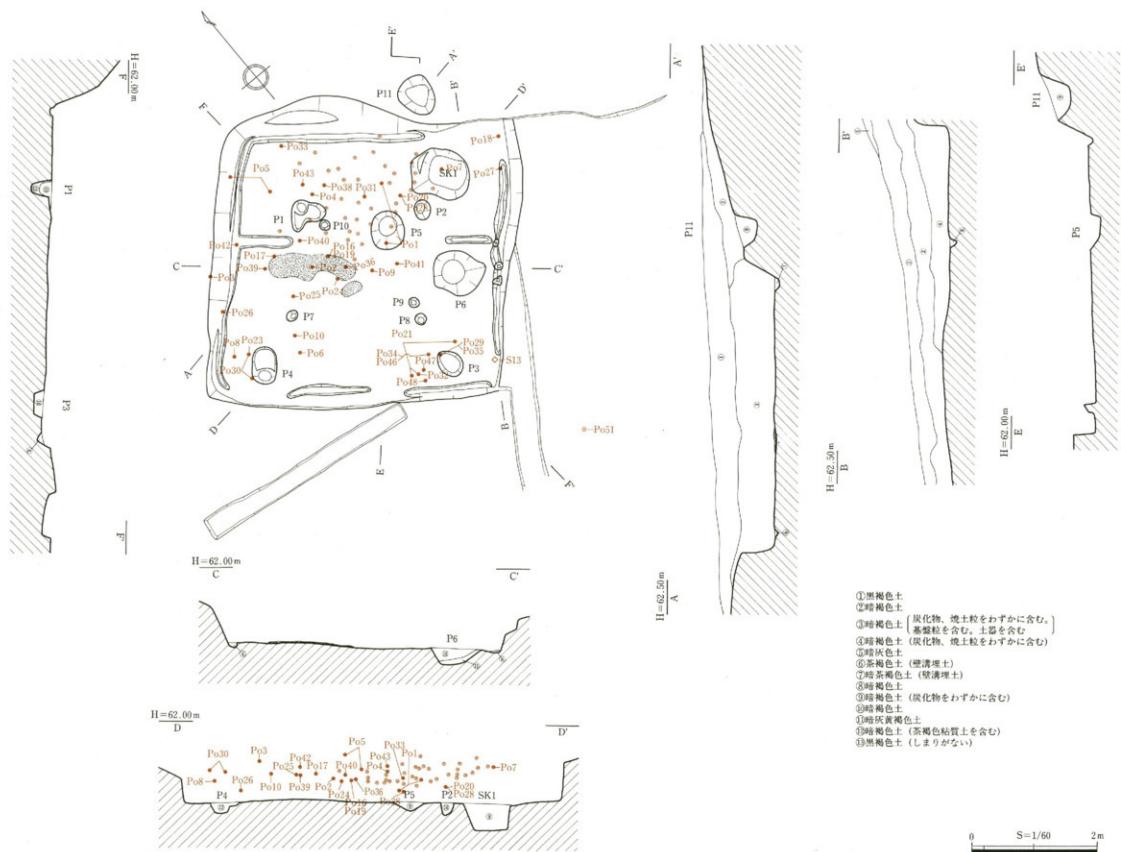
-	○	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-
■	J 243	■	J 244	■	J 245	■	J 246	■	J 247	■	J 248
-	○	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-
■	J 251	■	J 252	■	J 253	■	J 254	■	J 255	■	J 256
-	○	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-
■	J 259	■	J 260	■	J 261	■	J 262	■	J 263	■	J 264
-	○	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-
■	J 267	■	J 268	■	J 269	●	J 270	■	J 271	■	J 272
-	○	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-
■	J 275	■	J 276	■	J 277	■	J 278	■	J 279	■	J 280
-	○	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-
■	J 283	■	J 284	■	J 285	■	J 286	■	J 287	■	J 288
-	○	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-
■	J 291	■	J 292	●	J 293	■	J 294	■	J 295	■	J 296
-	○	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-
■	J 299	■	J 300	■	J 301	■	J 302	■	J 303	■	J 304
-	○	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-
■	J 307	■	J 308	■	J 309	■	J 310	■	J 311	■	J 312
-	○	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-
■	J 315	■	J 316	■	J 317	■	J 318	■	J 319	■	J 320
-	○	-	-	○	-	-	○	-	-	○	-
■	J 321	■	J 322								

0 S=1/1 2 cm

插図117 南谷大山遺跡CSI19出土遺物実測図(7)

C S I 20 (挿図118~122、図版23・46~49)

- 位 置 C-V区の最も北側のE20グリッドにあり、標高60.0~60.4mの平坦面に位置する。南側約6mにはC S I 21、西側約2mにはC S D 17がある。
- 形 態 遺存状態は非常によく、平面は方形を呈すものと考えられる。規模は、南東~北西4.03m、北東~南西3.96mを測り、床面積は16.8m<sup>2</sup>である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.64mを測る。
- 壁溝は、部分的にとぎれるもののはば全周し、規模は、幅9~17cm、深さ4~8cmを測り、断面逆台形状を呈す。東側壁溝内には、径10cm程度、深さ10cmの小ビットが2個あり、壁溝内に立てられた板状のものを支える杭跡と考えられる。
- 仕切り溝 また、東側・西側壁溝のやや北寄りに、住居中央部に向かって約80cmに延びる溝が接続している。幅・深さとも壁溝とはほとんど変わらない。この溝は、住居内を仕切るためのものと考えられる。
- 主柱穴はP 1~P 4の4個で、それぞれの規模は、P 1 (25×25~32) cm、P 2 (32×25~14) cm、P 3 (47×37~16) cm、P 4 (37×26~15) cmを測り、他の住居と比べて小さな主柱穴である。主柱穴間距離は、P 1~P 2間から順に1.9m、2.5m、3.0m、2.7mである。
- P 1~P 2間に (60×53~17) cmを測るP 5があるが、位置的に中央ビットと呼べるものではない。
- 特殊ビット 住居の東寄りにいわゆる特殊ビットと考えられるP 6がある。平面は不整形、断面台形状を呈し、規模は (84×70~26) cmを測る。埋土は炭化物を含む⑨層が単層で入る。
- 屋内土坑 また、住居の北東コーナー付近に、平面隅丸長方形、断面台形状を呈す土坑S K 1がある。規模は、(95×78~42) cmを測る。
- その他に、径20cm前後、深さ5cm前後を測るP 7~P 10があるが、用途は不明である。
- 焼 土 面 住居の西側仕切り溝付近に、長方形に広がる焼土面が検出されている。この焼土面は非常に固く、恒常に火が使用されていたものと考えられる。
- 埋 土 埋土は3層に分層できた。③層には炭化物・焼土粒がわずかに含まれている。
- 周辺ビット 住居北側には、(66×53~41) cmを測るP 11がある。
- 遺 物 固化できたものには、甕Po 1~Po17、高杯Po18~Po38、直口壺Po39~Po42・Po44・Po45~Po49・Po51・S 13は埋土③層中からの出土である。特に大型甕Po51は広い範囲に分布しており、故意に破碎され、他の土器と一緒に一括廃棄されたものと考えられる。
- 時 期 床面出土遺物はないが、出土遺物からC S I 20は大山田期、古墳時代中期後半頃の特徴をもち、C S I 20はこの時期に作られ、廃絶したものと考えられる。





插図119 南谷大山遺跡CS120出土遺物実測図(1)

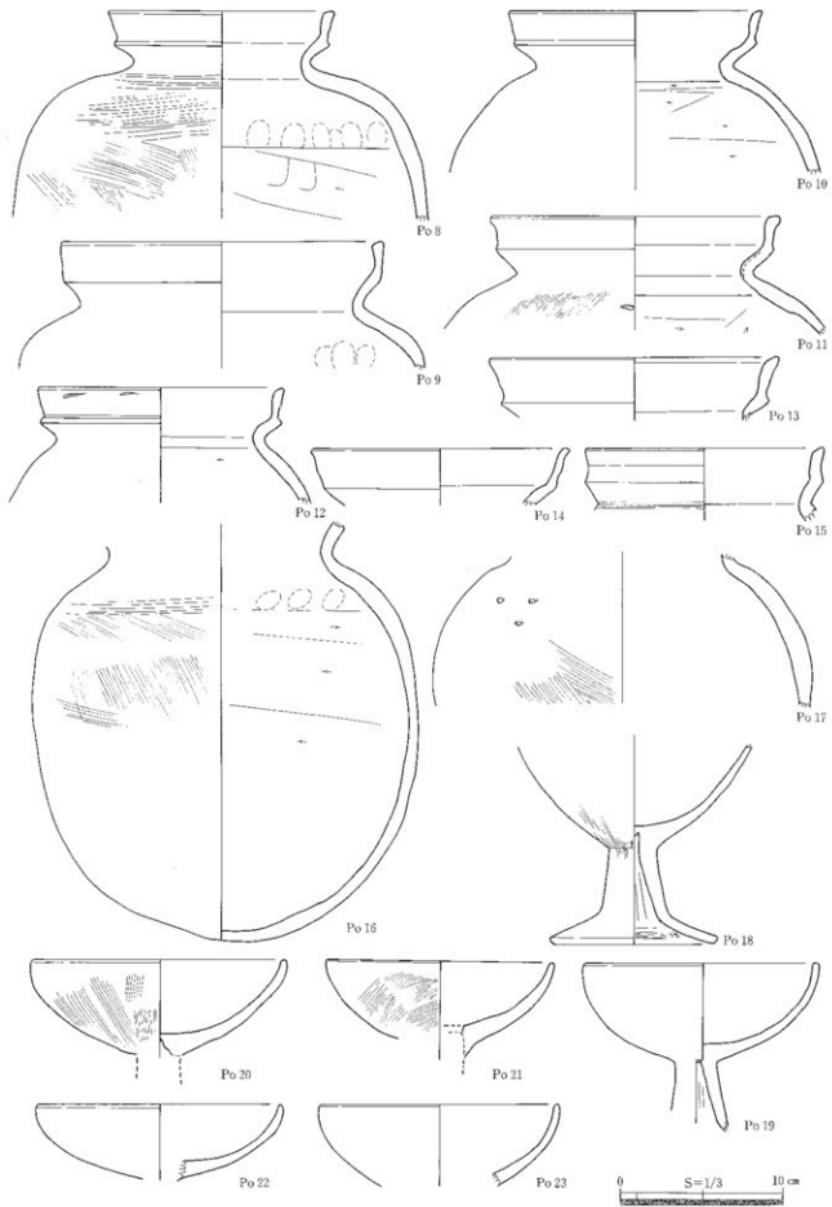
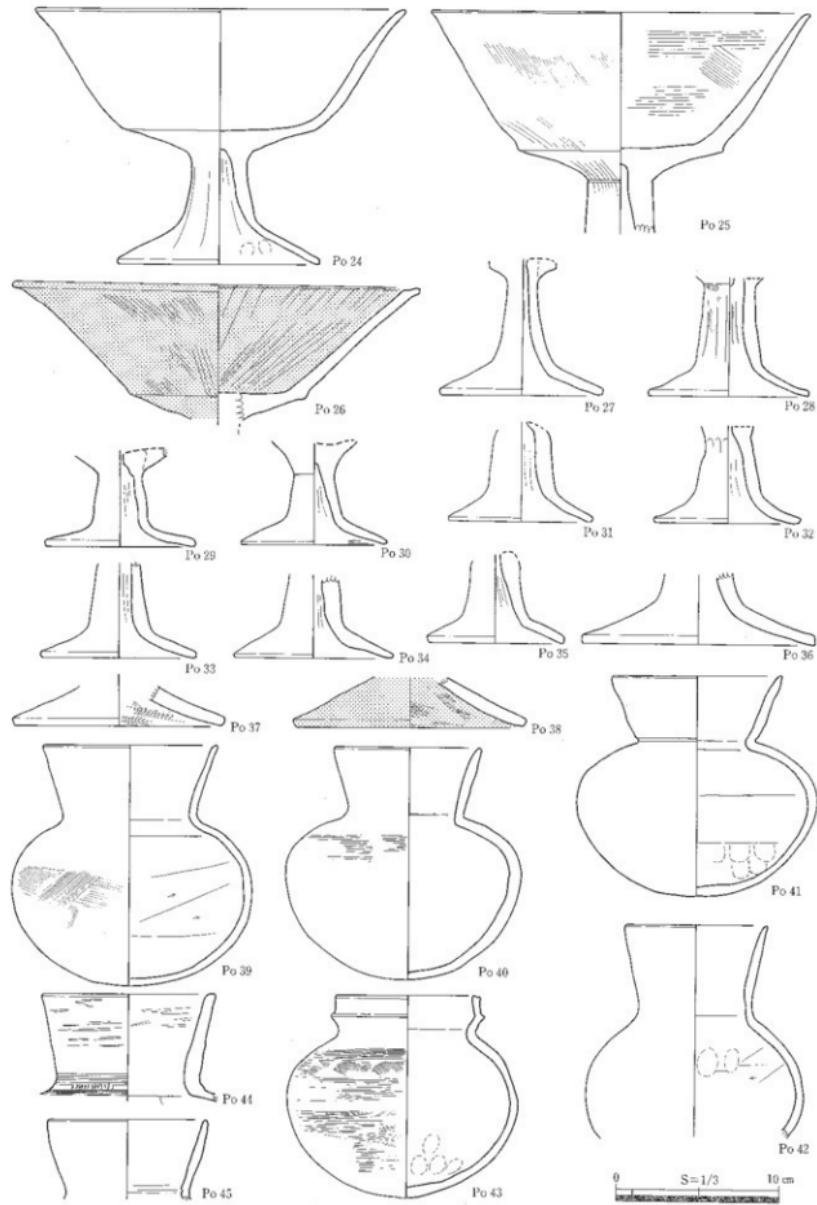
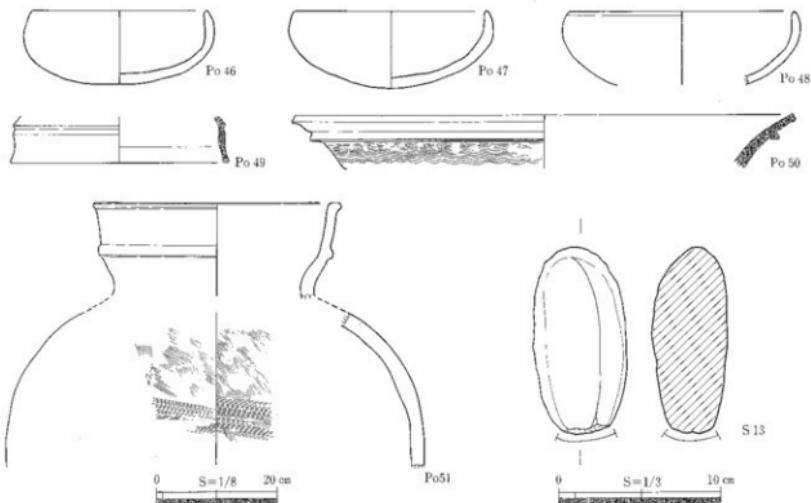


插图120 南谷大山遗址CS12B出土遗物实测图(2)



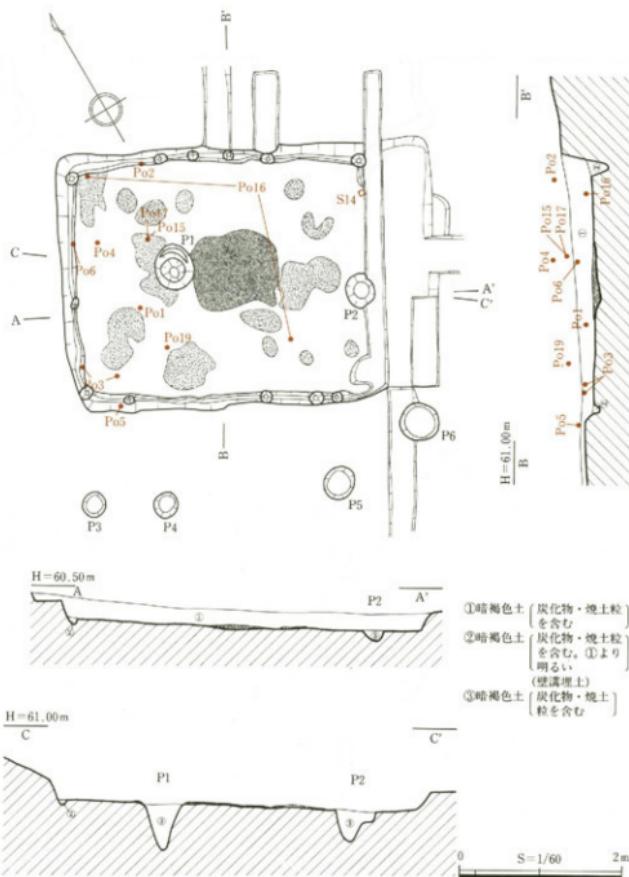
擇図121 南谷大山遺跡CSII20出土遺物実測図(3)



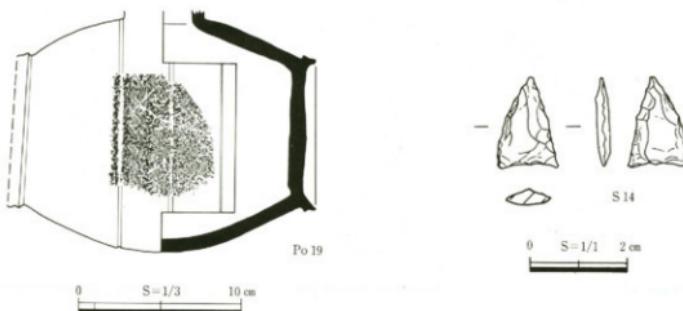
挿図122 南谷大山遺跡CSI20出土遺物実測図(4)

・ C S I 21 (挿図123~126、図版24・49・50)

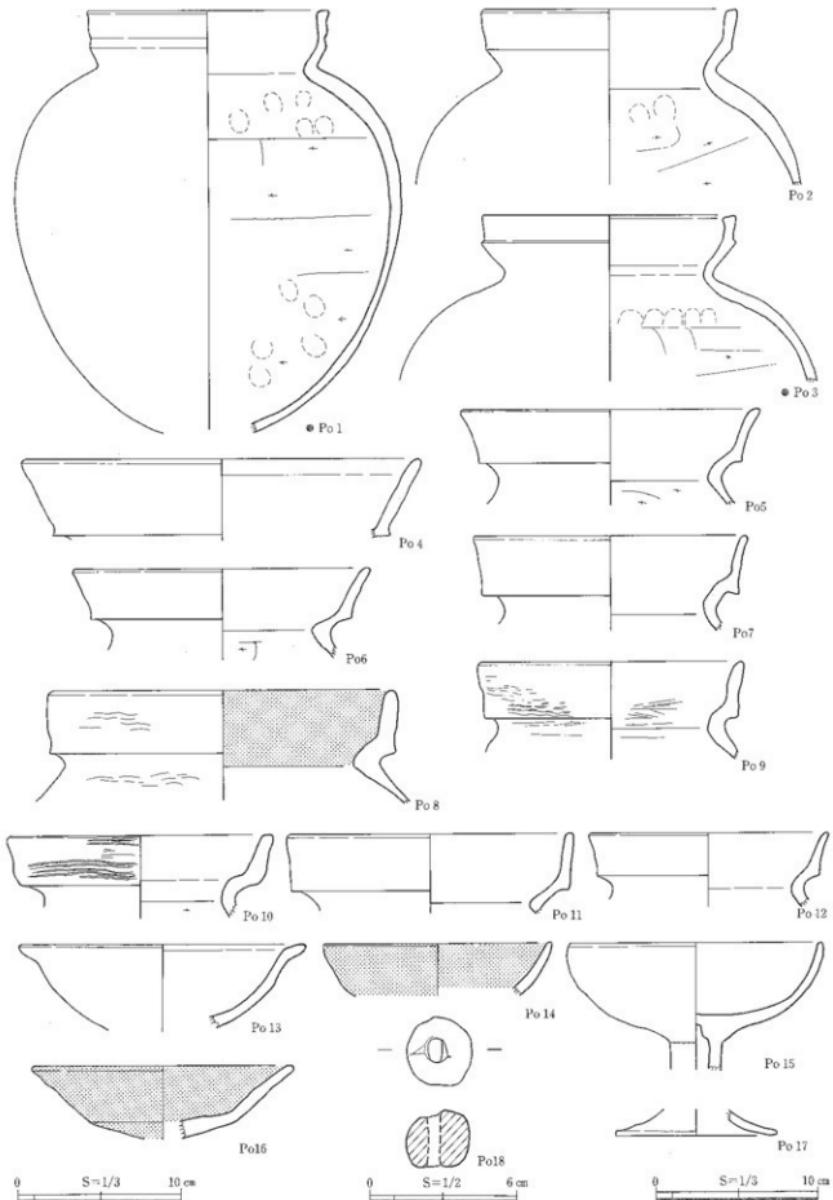
- 位 置** C-V区の北側のD21・E21グリッドにあり、標高60.0~60.4mの平坦面に位置する。北側約6mにはC S I 20、南側約6mにはC S I 17がある。
- 形 態** 遺存状態は比較的よく、東壁はサブトレンチのため確認できなかったが、平面は長方形を呈すものと考えられる。規模は、東西4.2m以上、南北2.90mを測り、床面積は11m<sup>2</sup>以上である。残存壁高は、最も遺存状態の良い北壁で最大0.43mを測る。
- 壁溝は、全周していたものと考えられ、規模は、幅7~12cm、深さ5~8cmを測り、断面「U」字状を呈す。壁溝内には、径15cm程度、深さ4~10cmの小ビットが計12個あり、壁溝内に立てられた板状のものを支える杭跡と考えられる。
- 主柱穴はP 1・P 2の2個で、それぞれの規模は、P 1 (56×44~58) cm、P 2 (45×35~40) cmを測る。主柱穴間距離は、2.4mである。
- 中央ビットはない。
- 周辺ビット** また、南側の住居外にP 3~P 6のビットが並んで検出された。それぞれの規模は、P 3 (32×29~42) cm、P 4 (32×29~33) cm、P 5 (42×38~16) cm、P 6 (49×46~43) cmを測る。これらは、杭列または庇を支えるためのものと考えられる。
- 焼 土 面** 住居の中央部に、西側はP 1に接して、広い範囲に不整形に広がる焼土面が1カ所検出されている。この焼土面は非常に固く、深いところで10cm土が焼けており、恒常的に火が使用されていたものと考えられる。
- 埋 土** 埋土は1層で、炭化物・焼土粒を含んでいる。



挿図123 南谷大山遺跡CSII21遺構図



挿図124 南谷大山遺跡CSII21出土遺物実測図(1)



插図125 南谷大山遺跡CS121出土遺物実測図(2)

**焼土** 床面には、ほぼ全面に  
**炭化物** わたって柔らかい焼上がりで盛り上る様に検出されている。また、西側壁寄りでは、垂木・木舞と考えられる炭化材が検出されており、CS I 21は焼失したものと考えられる。検出された炭化材は、樹種鑑定を依頼したところ、垂木はスダジイ、ホオノキ、板状のものはシラカシ、木舞はスダジイと同定された。

**遺物** 図化できたものには、  
**出土状況** 瓦Po1~Po12、高杯Po13  
 ~Po17、土玉Po18、須恵器樽型埴Po19がある。  
 このうち床面からは、  
 西側壁寄りでPo1~Po3が出土している。  
 その他は埋土からの出土である。

**時期** 床面出土遺物から、CS I 21は大山VII期、古墳時代中期後半頃のものと考えられる。なお、Po4~Po12は弥生時代後期後半の特徴をもっている。また、樽型埴Po19はTK208に並行するものと考えられる。

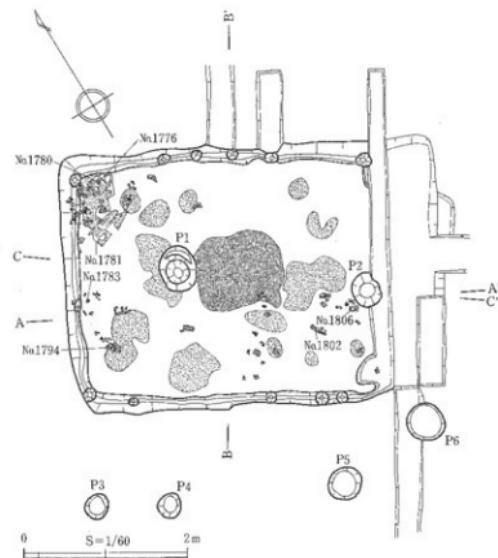
## 2. 土坑・土壤

CS K15 (挿図127、図版24)

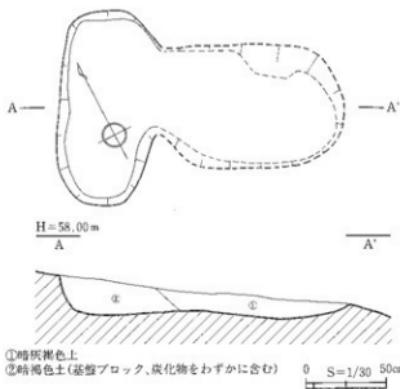
**位置** C-V区の南側のE23グリッドにあり、標高57.6~57.9mの緩やかに南に傾斜する斜面に位置する。付近には、CS D10があり、南側約4mにはCS K16がある。

**形態** 東側は擾乱を受けしており、遺存状態は悪い。平面は、上縁部・底部とも長楕円形を呈し、規模は、上縁部長径1.22m×短径0.6mを測る。深さは最大0.28mを測り、断面は逆台形状を呈す。

**埋土** 塚土は、暗褐色土が単層ではいる。



挿図126 南谷大山遺跡CS I 21炭化物出土状況図

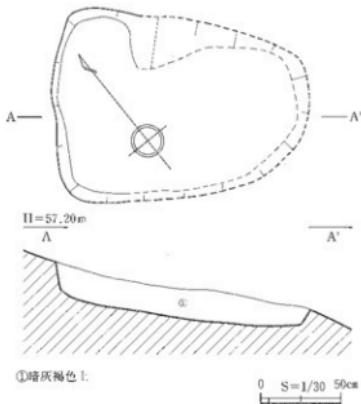


挿図127 南谷大山遺跡CS K15遺構図

- 時 期** 遺物は全く出土していないため、C S K15の時期は不明であるが、埋土がC-V区の溝状遺構と類似しており、ほぼ同時期のものと考えられる。
- 用 途** C S K15の用途は不明である。

#### C S K16 (挿図128、図版24)

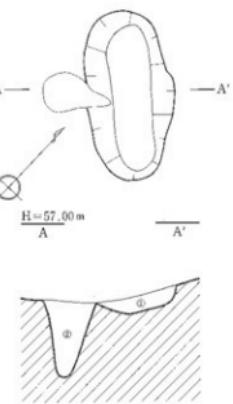
- 位 置** C-V区の南側のE24グリッドにあり、標高56.9~57.1mの緩やかに南に傾斜する斜面に位置する。南側約0.3mにはC S K17、北側約4mにはC S K15がある。
- 形 態** 東側は大きく擾乱を受けており、遺存状態は悪い。平面は、上縁部・底部とも長楕円形を呈し、規模は、上縁部長径1.22m×短径0.5m以上を測る。深さは、最大0.24mを測り、断面は逆台形状を呈す。
- 埋 土** 埋土は、暗灰褐色土が単層ではいる。
- 時 期** 遺物は全く出土していないため、C S K16の時期は不明であるが、規模がC S K15とはほぼ同じで、埋土がC-V区の溝状遺構と類似しており、これらとほぼ同時期のものと考えられる。
- 用 途** C S K16の用途は不明である。



挿図128 南谷大山遺跡CSK16遺構図

#### C S K17 (挿図129、図版25)

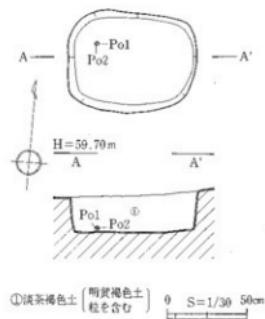
- 位 置** C-V区の最も南側のE24グリッドにあり、標高56.5~56.6mの緩やかに南に傾斜する斜面に位置する。北側約0.3mにはC S K16、北側約5mにはC S K15がある。
- 形 態** 遺存状態は比較的良好く、平面は、上縁部・底部とも長楕円形を呈し、規模は、上縁部長径1.05m×短径0.5mを測る。深さは、最大0.12mを測り、断面は皿状を呈す。
- 埋 土** 埋土は、暗灰褐色土が単層ではいる。
- 時 期** 遺物は全く出土していないため、C S K17の時期は不明であるが、埋土がC-V区の溝状遺構、C S K15・16と類似しており、これらとほぼ同時期のものと考えられる。
- 用 途** C S K17の用途は不明である。



挿図129 南谷大山遺跡CSK17遺構図

C SK18 (挿図130・131、図版25・50)

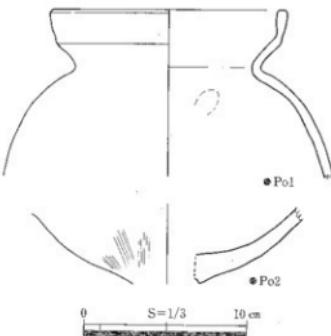
- 位 置** C SK18は、C-V区の東側のE22-E23グリッドにあり、標高約59.5mの平坦面に位置している。約0.9m北西にはC SK19が、約1m南東にはC SD13が、約8.3m南西にはC SK19が、それぞれ位置する。
- 形 態** 平面椭円形、断面長方形を呈する。規模は上縁部で長径0.8m×短径0.62m、底面で長径0.73m×短径0.54mを測る。深さは0.25mである。
- 埋 土** 埋土は、淡茶褐色土層のみである。
- 遺 物** 底面より甕Po1・高杯杯部Po2が出土している。
- 時 期** 甕Po1より、C SK18は大山IX期、古墳時代中期後半頃のものと思われる。
- 用 途** 用途は不明である。



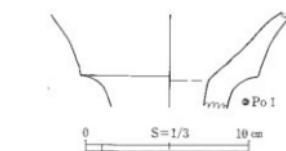
挿図130 南谷大山遺跡CSK18遺構図

C SK19 (挿図132・133、図版25・50)

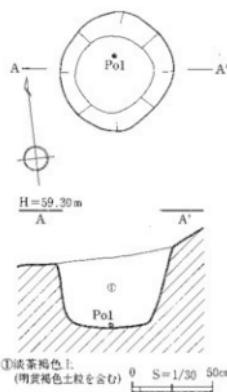
- 位 置** C SK19は、C-V区の東側のE23グリッドにあり、標高約59mの平坦面に位置する。約8.3m北東にはC SK18が、約1.2m北西にはC SK18が、約4.0m西にはC SD10が、約6.2m南東にはC SD12が、それぞれ位置する。一方、北東側でC SD13と接している。
- 形 態** 平面は円形を、断面は長方形を呈する。上縁部で長径0.75m×短径0.7m、底面で長径0.5m×短径0.47mを測る。深さは0.43mである。
- 埋 土** 埋土は、淡茶褐色土層のみである。
- 遺 物** 遺物としては、底面より鼓形器台Po1が出土している。また、円錐台状を呈す石材も一緒に出土している。
- 時 期** 鼓形器台Po1より、C SK19は大山III~IV期、弥生時代後期後半頃のものと思われる。
- 用 途** 用途は不明である。



挿図131 南谷大山遺跡CSK19出土遺物実測図



挿図133 南谷大山遺跡CSK19出土遺物実測図



挿図132 南谷大山遺跡CSK19遺構図

### 3. 溝状遺構

C S D 10・11 (挿図134・136、図版25・26・50)

**位置** C S D 10・11は、C-V区の南側のC23・D23・D24グリッドにあり、標高約56.5~58.7mの緩やかに南側に傾斜する斜面に位置している。

**形態** C S D 10は、部分的にとぎれるものの、C-V区の南側を「門」状に走る。東側を走る溝は、調査区外へ延びている。総延長約22m、幅約0.8~1.6m、深さ7~46cmを測り、断面は「U」字状を呈する。

C S D 11は、C S D 10の北側で接しており、南北方向に直線的に延びるもので、長さ約5m、幅0.2~0.44m、深さ2~6cmを測る。

**埋土** 埋土は、3層に分層でき、これらは自然堆積と考えられる。

**遺物** C S D 10の埋土中から甕Po 1が出土している。これは、大山唯期、古墳時代中期後半頃のものと考えられるが、直接この遺構に伴うものではない。C S D 11から遺物は出土していない。

**時期・用途** C S D 10・11とも、時期・用途は不明であるが、遺構外から近世の磁器が出土しており、この時期の耕作等に関わる遺構と考えられる。

C S D 13 (挿図135・136、図版50)

**位置** C S D 13は、C-V区の東側、D21・E21・E22・E23・F21・F22・F23グリッドに位置し、標高約59.50~61.25mの平坦面に位置する。約3.1m北にはC S I 21が位置する。約3.2m南東ではC S D 12が、当遺構にそれぞれ並行している。一方、北でC S D 15と接している。

**形態** C S D 13は、C-V区の東側斜面際をほぼ南北方向に走り、谷部中央では中断するものの、東西方向に横断し、C S I 17・18・19の外側を開んでいる。長さ約34.6m、溝の幅約0.55~2.55m、深さ約13~23cmを測る。断面は「U」字状を呈する。

**埋土** 埋土は3層に分層できた。

**遺物** 固化できたものは、甕Po 1・Po 2、土錘Po 3が挙げられる。これらのうち、土錘Po 3は明黄灰褐色土中より出土した。

**時期・用途** Po 1・Po 2は異なる時期のものであり、時期は不明であるが、C S D 10同様、近世頃の耕作等に関わる遺構と考えられる。



挿図134 南谷大山遺跡CSD10出土遺物実測図

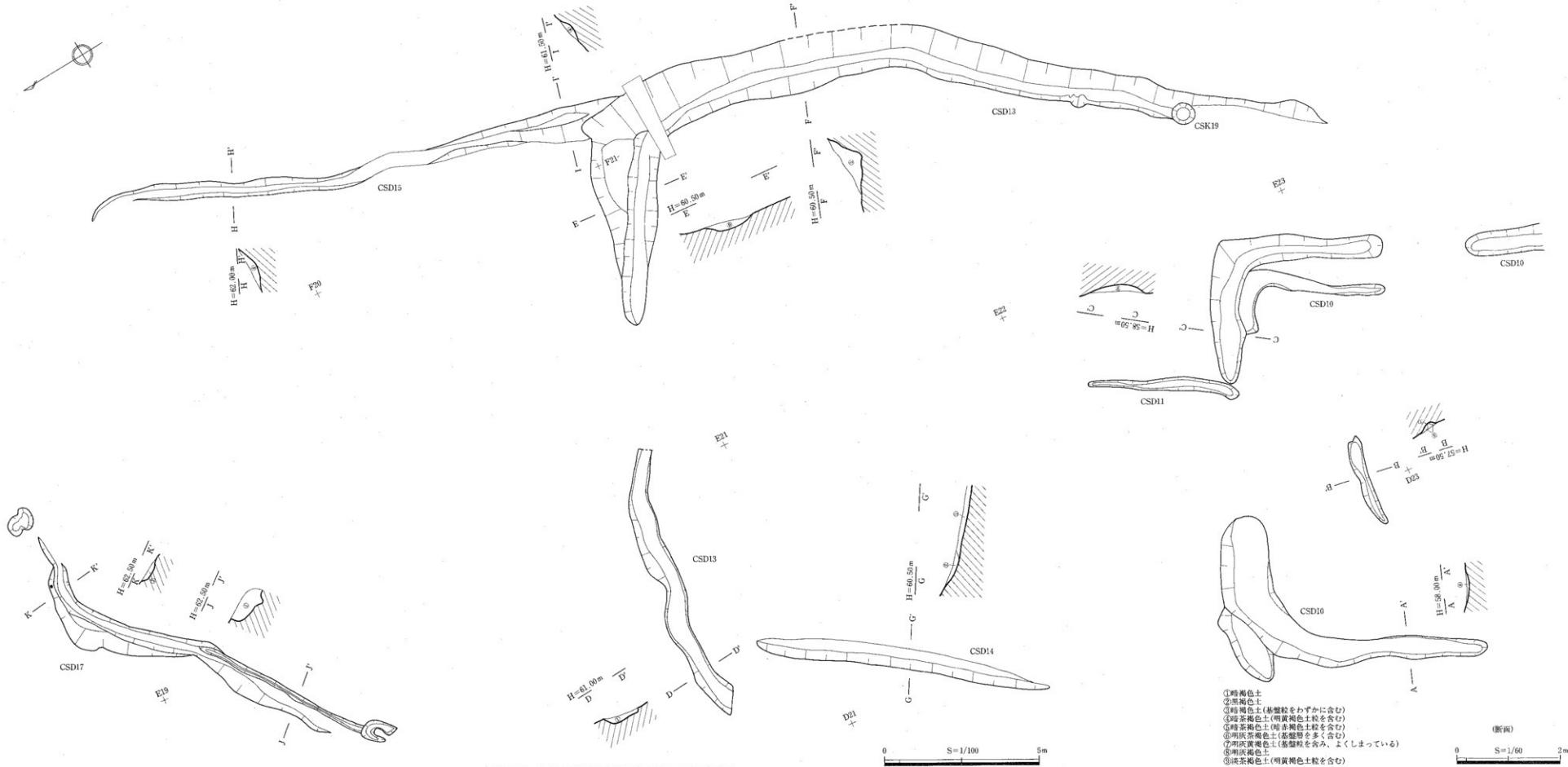


插图138 南谷大山造跡CSD10・11・13・14・15・17造構図

C S D14 (挿図136)

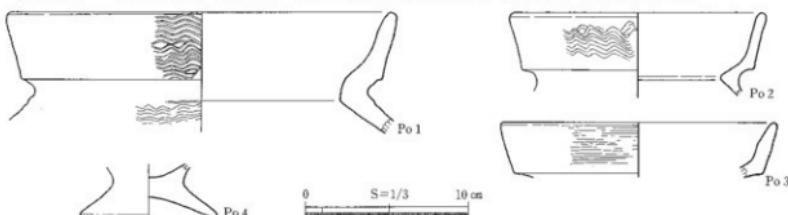
- 位 置** C S D14は、C-V区西側のC22・D21・D22グリッドにあり、標高60.1~60.6mに位置する。東側はC S I17の埋土を掘り込んでいる。
- 形 態** C S D14は、西側調査区際に沿って直線状に走り、長さ9.8m、幅0.6m、深さ10~15cmを測り、断面「U」字状を呈す。
- 埋 土** 埋土は、暗褐色土が単層ではいる。
- 遺 物・時 期** 遺物は全く出土していないため、時期は不明であるが、C S I17の埋土を切り込んでおり、古墳時代中期後半以降のものと判断される。
- 用 途** C S D14は、C S D10・13同様、近世頃の耕作等に関わるものと考えられる。

C S D15 (挿図136)

- 位 置** C S D15は、C-V区の北東側のF20・F21・F22グリッドにあり、標高約60.50~61.75mの平坦面に位置している。約7m北西にはC S I20が、約9m西にはC S I21が位置する。南側ではC S D13と接している。
- 形 態** C S D15は、C-V区の東側斜面をほぼ南北方向に走っている。長さ約17.7m、幅約0.15~0.6m、深さ約25~40cmを測り、断面は「U」字状を呈す。
- 埋 土** 埋土は、暗茶褐色土のみで、自然堆積と考えられる。
- 遺 物** 埋土中から土器片が出土しているが、図化できなかった。
- 時期・用 途** 時期・用途ともに不明であるが、C S D10・13同様、近世の耕作等にかかる遺構と考えられる。

C S D17 (挿図136・137、図版26・50)

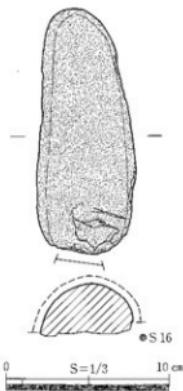
- 位 置** C S D17は、C-V区の北西側のD20・E19・E20グリッドにあり、標高61.5~62.5mに位置する。南東側約2mには、C S I20がある。
- 形 態** 調査区際を逆「L」字状に走り、南側は一段深く掘り込まれている。長さ約13.5m、幅0.14~0.9m、深さ5~50cmを測る。断面「U」字状を呈す。
- 埋 土** 埋土は2層に分層できた。
- 遺 物** 出土遺物には、図化できたものには甕Po 1~Po 3、低脚杯Po 4がある。いずれも、検出中および基盤層中からの出土である。これらは、大山II~III期、弥生時代後期後半頃のものと考えられるが、C S D17に直接伴うものではない。
- 時期・用 途** C S D17は、C S D13・15同様、近世頃の耕作等に関わるものと考えられる。



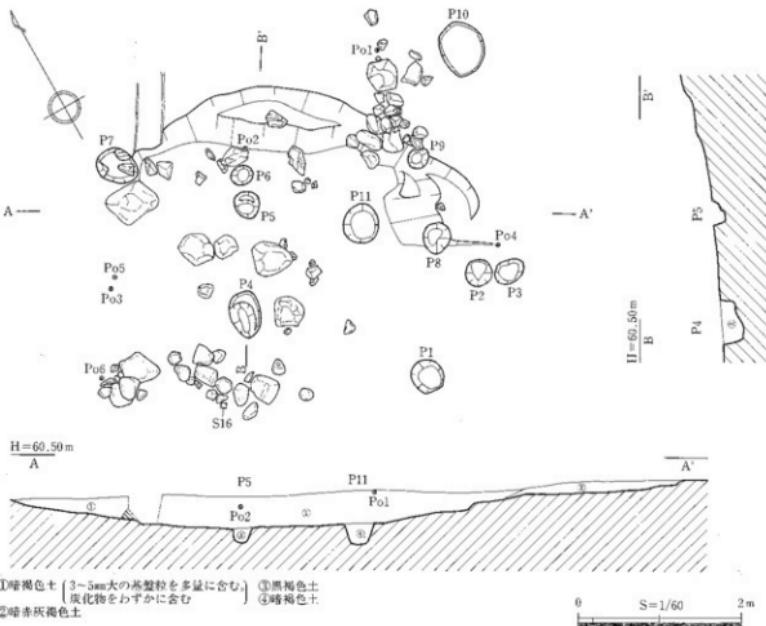
挿図137 南谷大山遺跡CSD17出土遺物実測図

#### 4. 集石・ピット群 (挿図138~140、図版26・51)

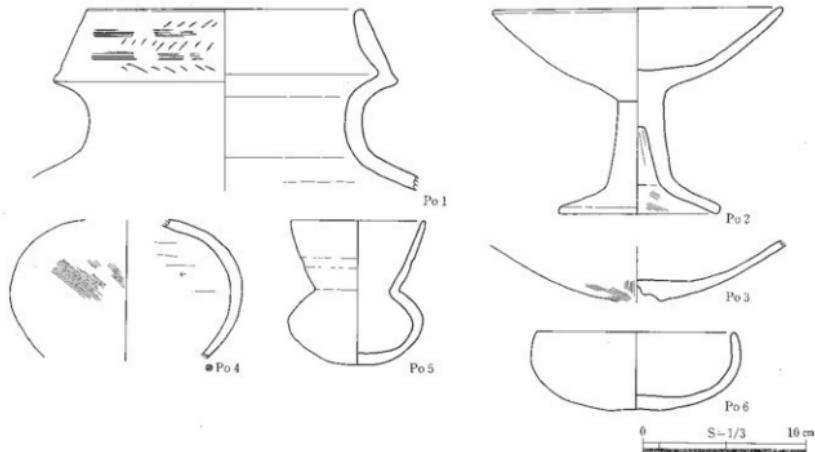
- 位 置** C-V区の中央やや北寄りのE21グリッドにあり、標高59.5~59.9mに位置する。南側はC S I 17に接しており、北西側約2mには、C S I 21がある。
- 形 態** この部分は、段状になっており、この部分にのみ、規則性はないが、大小の地山礫が密集している。また、計11個のピットが掘り込まれている。それぞれの規模は、P 1 (42×40~35) cm、P 2 (35×32~29) cm、P 3 (38×27~21) cm、P 4 (57×39~30) cm、P 5 (32×32~18) cm、P 6 (28×23~29) cm、P 7 (53×42~21) cm、P 8 (39×34~25) cm、P 9 (28×24~34) cm、P 10 (68×53~12) cm、P 11 (50×45~26) cmを測る。
- 埋 土** 埋土は、2層に分層できた。ピット内の埋土は、③・④層いずれかが単層で入り込むものである。
- 遺 物** 固化できたものには、壺Po 1、高杯Po 2・Po 3、直口壺胴部
- 出土状況** Po 4、小型丸底壺Po 5、楕円Po 6、敲石S 16がある。このうち、Po 4・S 16は底面から出土している。その他のものは、埋土下層中からの出土である。
- 時 期** 集石・ピット群の時期は、出土している土器から、大山V~VII期、古墳時代中期中葉~後半頃のものと考えられる。



挿図138 南谷大山遺跡C-V区  
集石・ピット群出土遺物実測図(1)



挿図139 南谷大山遺跡C-V区集石・ピット群造構図



挿図140 南谷大山遺跡C-V区集石・ピット群出土遺物実測図(2)

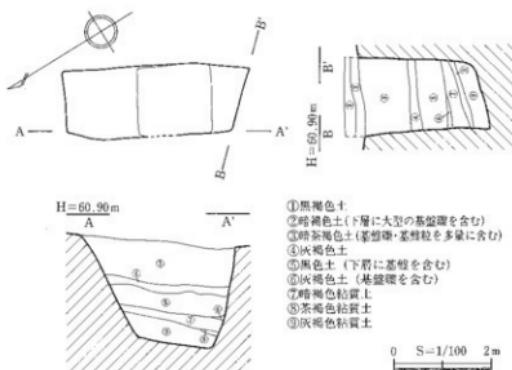
### 5. 造構外遺物について (挿図141~144、図版51~53)

造構外からは、図化できたものに壺Po1、甕Po2・Po3、高杯Po4~Po7、鼓形器台Po8、瓶形土器Po9、須恵器杯身Po10~Po13、須恵器無蓋高杯Po14、須恵器魁Po15・Po16、須恵器甕Po17、伊万里焼皿Po18、青磁香炉Po19、石鏸S19・S20、水晶石核S21、磨製石斧S22・S23、砥石S24、磨石S25、敲石S26・S27、石皿S28がある。

これらのうち、Po3・Po4・Po7は、D24グリッド調査区でまとまって検出された。

Po1~Po17は、大山VII~IX期、Po18・Po19は近世のものと考えられる。なお、須恵器類は、TK208~TK23並行期と考えられる。

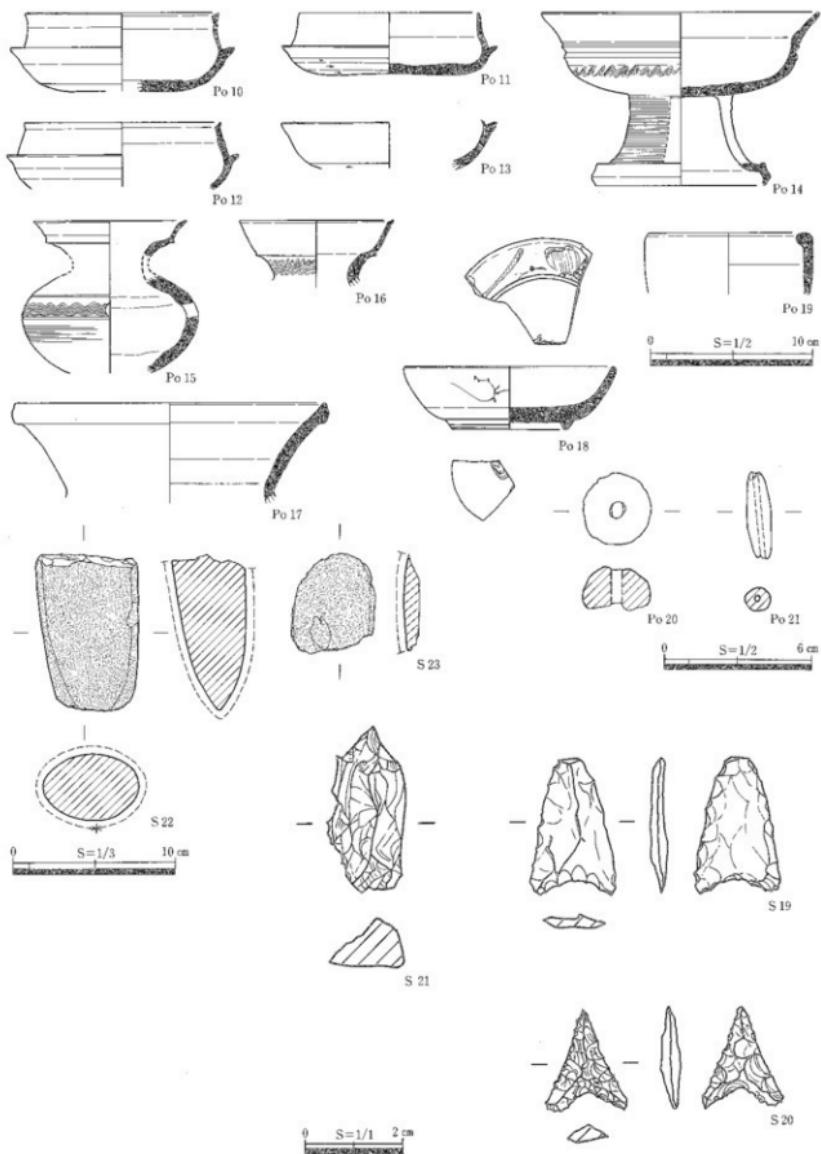
なお、C-V区のやや北側のE21グリッドにサブトレンチを設けて掘り下げたところ、造構検出面より約1m下で旧表土と考えられる⑤層が検出された。さらに、その下にもそれ以前の旧表土と考えられる⑨層がある。C-V区の造構の基盤層①・②層中には、弥生時代後期~古墳時代前期の遺物が含まれているが、それ以下の層には遺物は含まれていなかつた。



挿図141 南谷大山遺跡C-V区サブトレンチ土層断面図



插图142 南谷大山遺跡C-V区遺物外出土遺物実測図(1)



插図143 南谷大山遺跡C-V区遺構外出土遺物実測図(2)

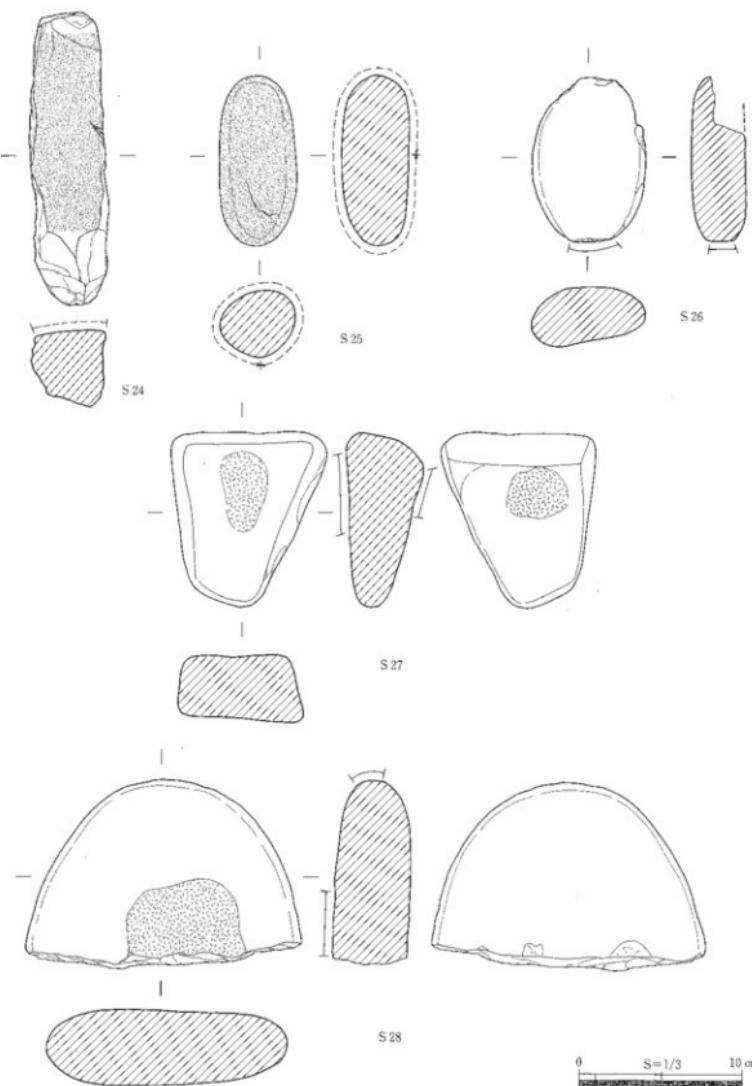


插图144 南谷大山遗址C-V区造物外出土造物实测图(3)

0 S=1/3 10 cm

## 第11節 南谷大山遺跡C-VI区の概要

位 置 C-VI区は、今年度調査区の中では最も高い位置にあり、標高84~87mの尾根頂部地区である。

遺 墓 この地区では、古墳時代前期の方墳である南谷29号墳が検出されている。

この古墳は、南谷古墳群中では南谷27号墳に次いで2例目となる古墳時代前期の方墳で、周溝の四隅がとざれている。主体部は旧表土面を掘り込んで作った箱式石棺で、石材の組み合わせが、東側では側板が小口石を挟んでいるのに対し、西側では小口石で側板を押える形に組まれている。

南谷古墳群では、見つかった古墳時代前期の古墳が、いずれも方形を呈す事がわかり、ほぼ同時期と考えられる橋津（馬ノ山）古墳群の前方後円形を呈す古墳との差を考えるうえで大変興味深いものである。

また、時期は不明であるが、段状遺構CSS01がある。

## 第12節 南谷大山遺跡C-VI区の調査結果

### 1. 段状遺構

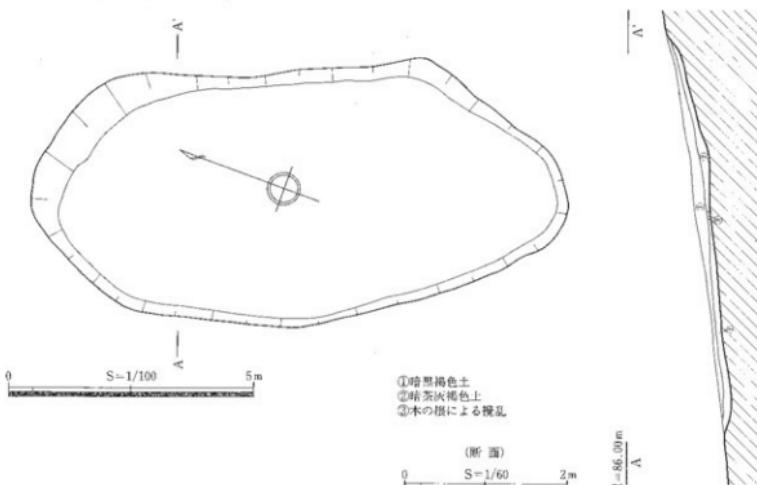
CSS01 (挿図145、図版27)

位 置 CSS01は、C-VI区のJ22・J23・K22・K23グリッドにあり、標高84.8~85.3mの緩やかに南西に傾斜する斜面に位置する。北東側約7mには南谷29号墳がある。

形 態 斜面を削り込み、平坦面を作っている。平坦面は、橢円形を呈し、東西約5.3m、南北約11mを測る。深さは最大20cmである。埋土は、3層に分層できた。

遺 物 埋土中から土器片が出土しているが、図化できなかった。CSS01の時期は不明である。

用 途 用途は不明である。



挿図145 南谷大山遺跡CSS01造構図

遺構名	形態	規模 (m)	横床面積 (m <sup>2</sup> )	残存壁高 (m)	主柱穴 (本)	棟持柱 (本)	遺物	時期	備考
C S I 01	隅丸方彌	4.20×3.90	17.0	1.02	4	—	甕・壺・延石・糕石	弥生時代後期後半	中央ピット・屋内貯藏穴
C S I 02	五角形	6.50×5.55	32.0	1.47	5	—	甕・高杯・鼓形器台・低脚杯・瓢	古墳時代前期前半	中央ピット・焼土面・土器溜り
C S I 03	隅丸方形	3.50×2.8†	8.5†	0.66	4	—	甕・壺・高杯・小型丸底甕	古墳時代前期前半	中央ピット
C S I 04	五角形	7.98×7.12	43.0	1.03	5	2?	甕・壺・高杯・鼓形器台・直口壺・低脚杯・小型丸底甕・七玉・黒曜石削片	古墳時代前期前半	中央ピット・焼土面
C S I 05	隅丸五角形	7.20×6.80	41.5	0.62	5	—	甕・壺・直口壺・高杯・鼓形器台・小型丸底甕・低脚杯・瓢・磨石・不明鉄器	古墳時代前期後半	中央ピット・焼土面・焼失か?
C S I 06	桔円形	5.80×4.90	24.2	0.69	5	—	甕・壺・高杯・鼓形器台・低脚杯・瓢・磨石・直口壺	古墳時代前期後半	中央ピット・焼土面・屋内貯藏穴・焼失か?
C S I 07	隅丸方形	5.80×5.80	38.6†	0.43	4	—	甕・壺・高杯・低脚杯・小型高杯形器台・糕石	古墳時代前期後半	中央ピット・焼土面・建て替え
C S I 08	六角形	5.50×2.5†	8†	0.61	6?	—	甕・上玉	弥生時代後期後半	
C S I 09	隅丸方形?	3.8†×2.0†	12^	0.3	—	—	甕	古墳時代前期前半	焼上
C S I 10	方形	3.6×2.9	10.6	0.22	—	—	甕・鼓形器台	古墳時代前期前半	
C S I 11	長方形	4.11×3.4†	14†	0.63	2	—	甕・壺・蓋・無頭甕・延石・糕石	弥生時代後期後半	中央ピット
C S I 12	長方形	4.90×3.7^	18†	1.30	4	—	甕・壺・高杯・低脚杯・瓢・不明鉄器	古墳時代前期前半	中央ピット・炭化材・焼失か?
C S I 13	隅丸方形	3.7×2.7^	10†	0.62	—	—	甕・鉢	弥生時代後期後半	焼上面・炭化材・焼失か?
C S I 14	長方形	2.68×2.23	5.6	0.19	2	—	甕・壺・高杯・脚付甕・手捏ね土器・上玉	弥生時代後期後半	焼失
C S I 15	長方形	6.00×2.8^	15†	0.67	4	—	—	弥生時代?	
C S I 16	隅丸方形	2.65×2.50	6.6	0.91	2	—	甕・鉢	弥生時代後期後半	
C S I 17-1	方形?	7.8×0.58†	—	0.28	—	—	甕・高杯・鼓形器台・小型丸底甕・低脚杯・七玉・黒曜石削片・鋸齿鉄斧	古墳時代中期後半	
-2	不明	—	—	—	—	—	—	—	
-3	不明	—	—	—	—	—	—	—	
-4	不明	—	—	—	—	—	—	—	
C S I 18	隅丸方形	3.5^×2.0†	—	0.15	—	—	甕・壺・高杯・七玉	古墳時代中期中葉	
C S I 19	隅丸方形?	7.5×3.0†	25†	0.28	—	—	甕・高杯・鼓形器台・小型丸底甕・蓋・台付無頭甕・七玉・白玉・有孔円盤・石皿	古墳時代中期中葉	
C S I 20	方形	4.03×3.96	16.8	0.64	4	—	甕・壺・高杯・大甕	古墳時代中期後半	特殊ピット・区画溝
C S I 21	長方形	4.2†×2.9	11^	0.43	2	—	甕・高杯・七玉・須恵器樽型・TK208	古墳時代中期後半	焼上面・炭化材

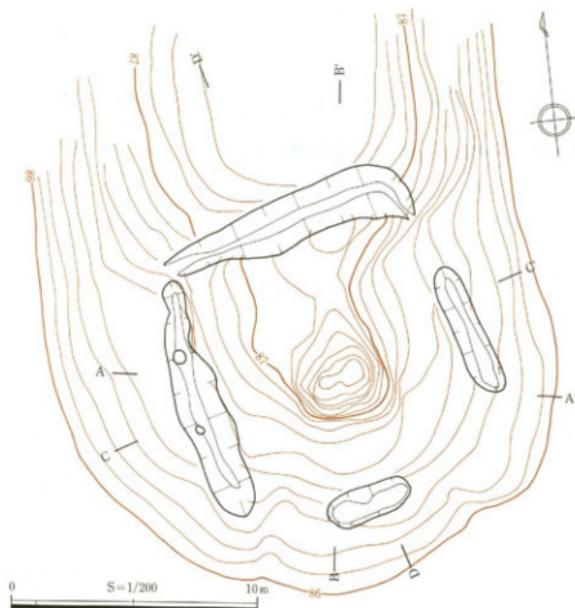
—は不明・無し †は数値以上

表4 南谷大山遺跡C区空穴住居跡一覧表

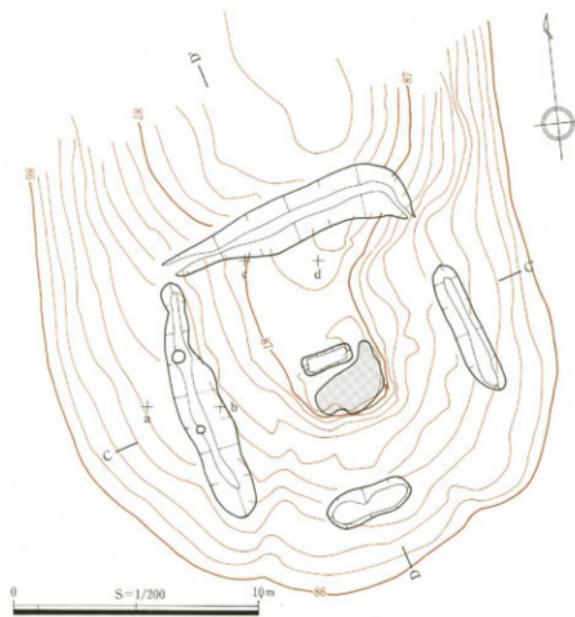
## 第4章 南谷29号墳の調査

### 第1節 南谷29号墳の調査結果 (挿図146~153、図版27・28・53)

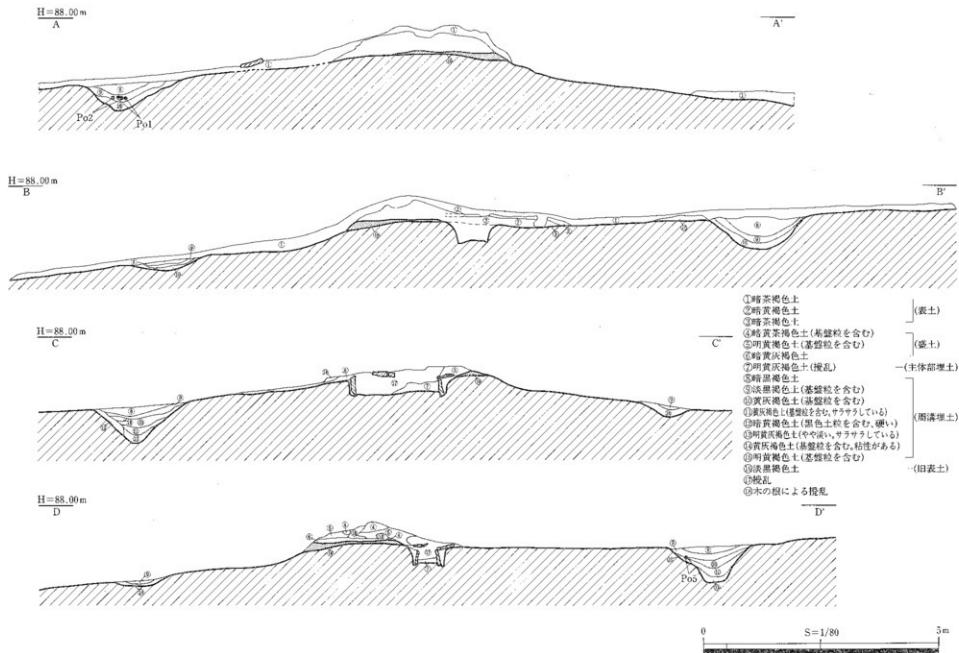
- 位 置** 南谷29号墳は、C-VI区のK21・L21・K22・L22グリッドに位置し、南・南東へ派生する尾根の基部となっている。標高は86.32~87.70mで、本年度の調査区内では最も高い地区である。
- 1990年度の羽合町教育委員会による試掘調査での第4トレンドで、周溝の北部が確認され、存在が確認された。
- 墳 丘** 南谷29号墳は1辺約10mの方墳である。墳丘は後世の擾乱により、かなりの削平を受けている。墳丘の規模は、主軸方向で東西約10.4m、南北約10.6mを測る。周溝底からの残存の高さは、東・西・南・北の順に、1.48m・1.99m・1.48m・1.51mである。
- 周 溝** 周溝は北側・西側のものが比較的遺存状態がよい。東側・南側のものは後世の削平で遺存状態は悪い。全周せず、北西コーナー・南西コーナー・南東部・北東部で途切れている。規模は東側で幅約1.30m、深さ26cm、西側で幅2m、深さ88cm、南側で1.44m、深さ26cm、北側で幅2.18m、深さ98cmである。
- 埋土は、暗黒褐色土が主流である。周溝内には埋葬施設はみられなかった。
- 盛 土** 盛土は④層~⑥層の3層で、黄褐色の基盤を主体としている。もっとも厚い所では42cmであった。
- 旧 表** 墳丘の旧表は、造構の南部でよく残っている。厚さは約17cmである。墳丘下には、造構がみられなかった。
- 主 体 部** 主体部は、旧表土面を掘り下げるかたちで検出された、墳丘のはば中央に位置する箱式石棺である。規模は石棺の内法で長さ1.74m、幅0.26m、墓蓋で東西2.14m、南北0.68m、深さ21cmを測る。主軸方向はN-77°-Eに振る。
- 当主体部では石棺の組み方に、特殊な例が見られた。まず東部では、南側の側板が土圧で内側へ倒れこんでいた。しかし、本来は側板が小口石を挟んでいたと思われる。これに対し西部では、小口石が側板をおさえていた。蓋石は擾乱を受けており、西側・東側にのみわずかに残っていた。
- 床面は中央~西部が擾乱されており、遺物等は検出されなかった。頭位については、東西いずれか不明である。
- 遺 物** 図化できたものには、長頸壺Po 1・甕Po 2~Po 3・小型丸底壺口縁Po 4・小型器台Po 5・
- 出土状況** 土鍾Po 6~Po 8・玉籠剥片S 29がある。
- これらのうち、Po 1・Po 2は西側周溝の淡黒褐色土中から出土している。一方、北側周溝からはPo 4とPo 5が出土している。また、土師器甕Po 3も周溝中より出土した。
- 盛土中からも土器片が見つかったが、図化できなかった。
- 時 期** Po 1・Po 3・Po 4・Po 5は、布留(中)並行期のものと考えられ、また、Po 2は、複合口縁をもつものの布留式甕の影響を受けたものと考えられ、口縁端部が内方へ肥厚している。これらの土器から、南谷29号墳は大山VI期、古墳時代前期後半頃のものと考えられる。
- 南谷古墳群内では、方墳は南谷27号墳と29号墳のみ確認されているが、いずれも古墳時代前期のものと考えられ、この地域では最大規模をもつ前方後円墳である鶴津4号墳(馬ノ山4号墳)とはほぼ同時期と考えられる。



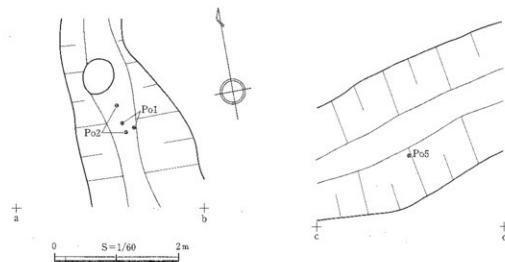
插図146 南谷29号墳墳丘測量図



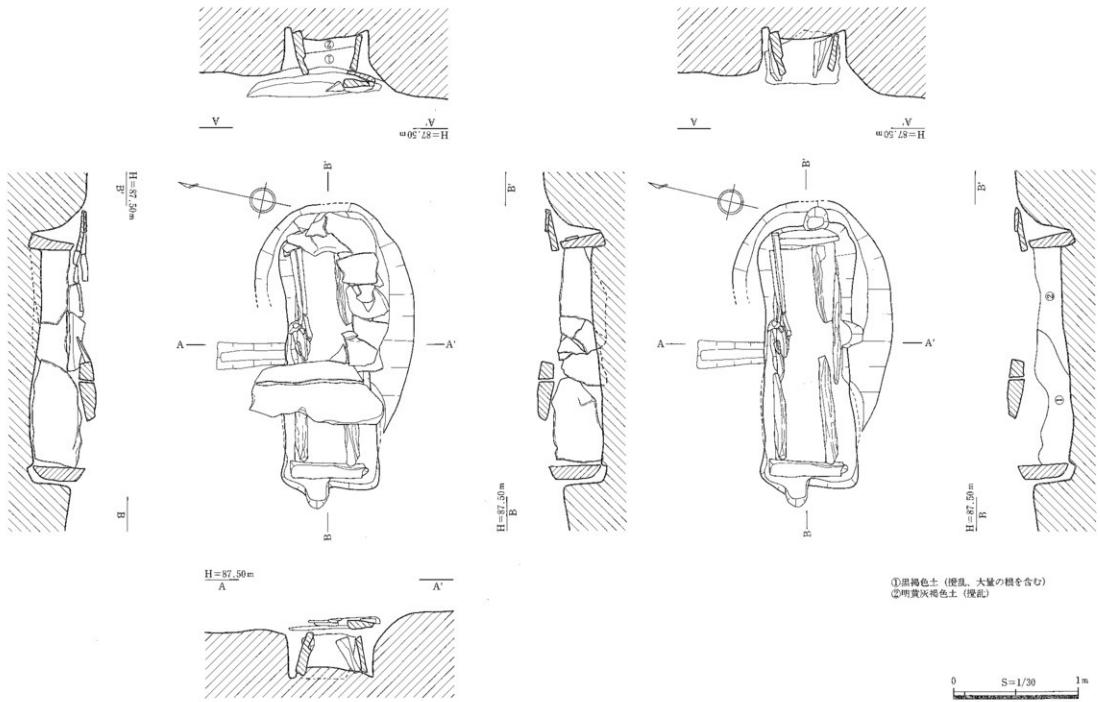
插図147 南谷29号墳盛土除去後平面図



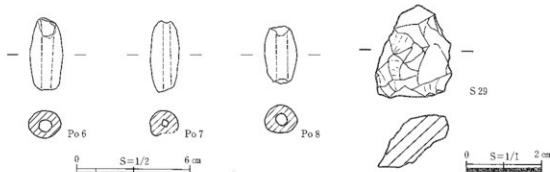
挿図148 南谷29号墳土層断面図



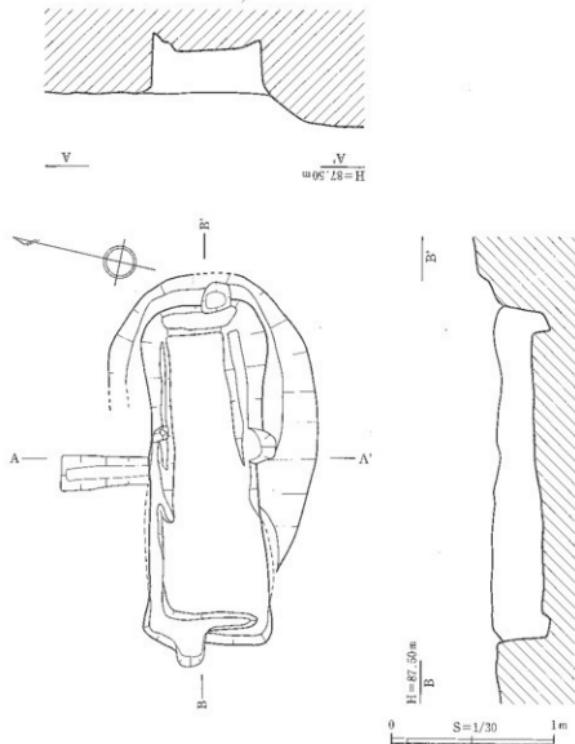
插図149 南谷29号墳周溝内土器検出状況図



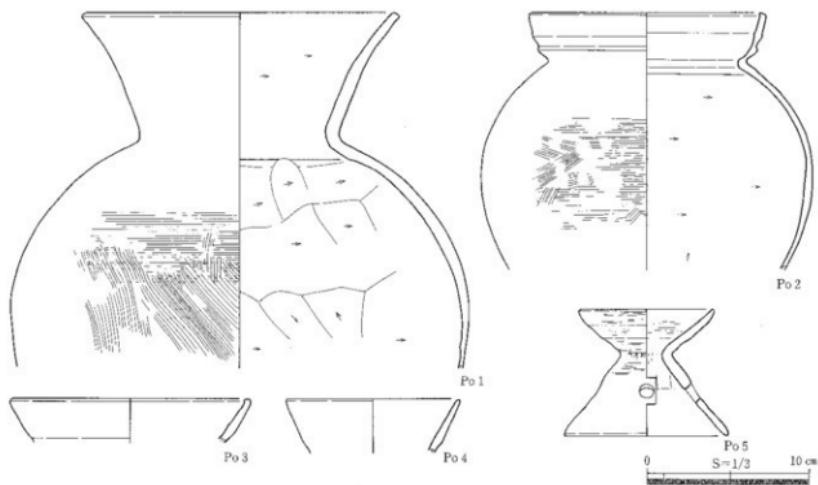
挿図150 南谷23号墳主体部造構図



挿図151 南谷28号墳出土遺物実測図(1)



插図152 南谷29号墳主体部墓塙実測図



插図153 南谷29号墳出土遺物実測図(2)

## 第5章 遺構・遺物の検討

### 第1節 土器編年について

1991年度～1993年度にかけて、発掘調査が行われた南谷大山遺跡から出土している土器は、総数約8000点において、弥生時代後期後半期～古墳時代中期にかけてのものが大部分を占める。特に、弥生時代後期～古墳時代初頭の土器及び古棺の須恵器を伴う上師器については、鳥取県中部地区においてかなり良好な資料を提供することができると考える。

従来、山陰地方のこの時期の土器編年は、山本清・東森市良・前島己基・松本岩雄氏等による鳥取県の研究成果が基礎となってきた。鳥取県内では、1960年代後半になると鳥取県西部地区において大規模な開発に伴う発掘調査が行われるようになり、米子市福市遺跡・青木遺跡のように、集落遺跡単位の編年が試みられるようになった。特に青木遺跡では、弥生時代中期末～奈良時代にかけての広範な一連の土器編年が発表されて以来、この時期の鳥取県内の土器編年か、青木遺跡の編年を基準とすることが一般的となっている。しかし、その土器の様相は、狭い鳥取県内においても東部・中部・西部で若干の違いが見られることが指摘されつつある。

そのため、鳥取県東部地区では鳥取市岩吉遺跡などの資料をもとに谷口恭子氏が(以下岩吉編年)、また、中部地区では倉吉市服部遺跡・阿弥大寺遺跡・長瀬高浜遺跡などの資料をもとに土井珠美氏が(以下土井編年)、それぞれの水系単位(東部は千代川、中部は天神川、西部は日野川)毎で編年作業を試みており、現在では鳥取県東部地区・中部地区・西部地区的土器編年が確立しようとしている。

また、従来古棺の須恵器を伴う土師器の編年については、あまり論じられるところがなく、中部地区では置田雅昭氏・清水真一氏、土井珠美氏が検討を行っている程度である。

さて、羽合平野周辺での編年については、古墳時代前期～中期にかけての大集落遺跡である長瀬高浜編年が、集落についてのみしか示されておらず、集落に続く古墳出土の土器を含めての編年が行われていないこと、また、この編年では、高橋謙氏が指摘するようにさまざまな形式の土器が一括資料として捉えられており、形式学的に問題があるだけではなく、各時期の土器の様相がはっきりしておらず、報告書ごとで時期の捉え方が異なることなどの問題が残る。

また、須恵器出現以降は須恵器の編年が中心となっており、この時期の土師器の様相は、必ずしも明らかになっている状況とはいえないと考える。

今回南谷大山遺跡の発掘調査をまとめるに当たって、土器の様相を概観し、不十分ではあるが南谷大山遺跡の土器編年案を公にしようと思う。この編年案が、今後の鳥取県中部地区の土器編年の参考になれば幸いである。

#### (1) 編年

各遺構の土器の構成は、必ずしも良好なものとは言えないが、共伴する土器形式を組み合わせ、従来の土器編年を参考に、最も器種の多い壺形土器・壺形土器(以下形土器を省略)がもつ諸特徴の変化を両期と捉えると、南谷大山遺跡の土器は、Ⅰ期～Ⅳ期に時期区分できると考える。(以下大山Ⅰ期～大山Ⅳ期とする。)

#### [大山Ⅰ期]

この時期には良好な一括資料は見られないが、壺(1)は、外反する口縁部をもつもので、壺口縁部(2・3・4)は、内傾する口縁部をもち、外面には擬円線が施される時期である。これらの土器は、確定な遺構に伴ってはいないが、南谷大山遺跡内においては最も闊るもので、BS I 10周辺、BS K19埋土上層出土のものがこれに相当する。

阿弥大寺Ⅰ期、青木Ⅱ期、岩吉Ⅱ(古)期に並行するものと考える。

### [大山Ⅱ期]

この時期は A S I 04、B S I 27 出土資料を指標とする。

壺・甕の複合口縁部立ち上がりは 3 ~ 4 cm と高く、口縁部に施文が施されるもの (5・8) と、ナデ消す (6・7) が共併する。端部は丸く仕上げられるものが多いが、平坦面をもつものもある。口縁部下端は下垂するものが多い。胴部は、最大径を中位以上にもち倒卵形を呈し、しっかりとした平底をもつ。外面肩部には施文が施されるものがある。内面は、頸部屈曲部は鋭く、以下ケズリが施される。ケズリの方向は上半「左」が主流である。

小型の胴部をもつ (9) は、胴部外面に加飾が施される。

「く」字状口縁をもつ甕 (10・11) は、端部に沈線が施されるものがこの時期のものである。

高杯は、良好な資料がないが、複合口縁状の杯部をもつ加飾された高杯 (12) がこの時期のものと思われる。

鼓形器台は、C-IV区造構外出土の (13) がこの時期と思われる。上台部・脚台部外面に沈線が施され、高い筒部をもつものである。このほかに、特殊器台と思われる (14) もこの時期と考えられる。

阿弥大寺Ⅲ期、青木Ⅲ（新）期、岩吉Ⅳ期に並行するものと考えられる。

### [大山Ⅲ期]

この時期は、B S I 01、B S I 02、C S I 11、C S I 14、B S K 04 出土資料を指標とする。

壺・甕は、やや肉厚で口縁部の形態もⅡ期のものに類似するが、口縁部下端は下垂するものは少なくなり、水平方向に突出するものが多くなる。(15・17~19) のように口縁部施文後ナデ消すものは大山Ⅱ期から引き続いているが、口縁部がナデのみの (16・20~22) が現れるのがこの時期で、この特徴をもつ土器が主流をなす。内面頸部屈曲部はなだらかになる。胴部のプロポーションもⅡ期のものと類似するが、肩部の張りが前段階に比べて弱くなる。底部は平底を呈すが、大山Ⅱ期に比べて不明瞭なものとなっている。内面は、大山Ⅱ期同様頸部屈曲部以下「左」方向ケズリが施されるものが主流である。

また、口縁部が厚手の作りとなる (23・24) もある。

口縁部が短く屈曲外反する甕 (26)、高い脚部をもつ甕 (27) などもこの時期である。小型品 (28) も、この時期までは不明瞭ではあるが平底を呈すものである。

また、「く」字状の口縁部をもつ甕 (29・30) は、端部は沈線がなくなり、Ⅱ期のものに比べ胴部がやや長膨化する。また、複合口縁状になり外面に凹線が施される (25) がある。

高杯は、屈曲外反する口縁部をもつ (31)、小型で直立気味の口縁部をもつ (32) がある。脚部 (33) は外面ミガキが施される。

低脚杯は杯部が椀状に深い (34) がこの時期で、蓋は中回みのつまみをもつ (35・36)、柱状のつまみをもつ (37) がこの時期に見られる。

この他の器形としては、大きく開く鉢 (38)、小型鉢 (39) がある。

土井編年上種第5遺跡貯藏穴7号・住居址27号段階、青木Ⅳ期、岩吉Ⅳ期に並行するものと考えられる。

### [大山Ⅳ期]

この時期は、B S K 06・B S K 07 出土資料を指標とする。

壺・甕は肉薄でシャープな作りとなり、(40~43) のように口縁端部は引き出された様に薄くなる。この時期は、口縁部に文様が施されるものではなくなり、完全にナデのみになる段階である。胴部は倒卵形を呈し、尖り気味の不明瞭な平底をもつ。肩部には波状文など施文が施されるものがある。内面は、頸部屈曲部以下ケズリが施されるが、前時期に比べて若干下がる傾向にある。また、胴部内面のケズリは、「右」方向が主流となる。

この時期になって、小型品は丸底になると考えられる (45)。短く屈曲外反する口縁部をもつ甕 (44) は、Ⅲ期のものに比べて胴部の張りが大きくなり、底部は丸味を帯びる。

鼓形器台は、施文が施されない（46）がこの時期のものであるが、器高はまだ高いと考えられる。

高杯に良好な資料はない。

そのほかの器種としては、緻密な胎土の脚付短頸壺（47）・無頸壺（48）などがこの時期のものと考えられる。

土井編年東高江遺跡2号貯蔵穴・櫛塚遺跡第2号貯蔵穴段階、青木V・VI期、岩吉V期に並行するものと考えられる。

#### 〔大山V期〕

この時期は、BSS04・CSI02・CSI04・CSI05出土資料を指標とする。

壺は、口縁部が大きく外反するようになり、端部が外方へ折れるもの（49）が現れる。胴部を残す良好な資料はないが、肩がやや張る倒卵形を呈すものと考えられ、外面には、波状文などが施されるものがある。

異形のものとしてBSI30出土の壺（50）があるが、この時期のものとしてよいであろう。

甕は肉薄で、シャープな作りはIV期と同様であるが、口縁部下端の突出度が増し、口縁端部が平坦面をもつものが現れる段階である。器壁が薄く口縁部立ち上がりが高い（51～54）と、口縁部立ち上がりは3cm以下とやや低くなる（55・56）が共存している。口縁部の文様はIV期同様施されず、ナテのみである。内面のケズリの範囲は肩部付近以下で、大山V期のものよりさらに下がる傾向にある。ケズリの方向は、「右」が主流である。胴部は倒卵形を呈し不明瞭な平底のものと、尖り気味の平底をもつものがある。外面は肩部に平行沈線・波状文・刺突文が施されるものがあるが、横方向ハケ目が主流で、胴部下半は縦方向ハケ目である。内面底部付近には指頭压痕が明瞭に残るものがある。

この時期から複合口縁をもつ直口壺（57）が現れる。

高杯は、この時期に胎土が浅黄橙色で、端部が外反し、やや深い皿状の杯部をもつ（58）、浅橙色の椀状を呈す杯部をもつ（59）が出土している。

鼓形器台（60・61）は筒部の縮約が進み、IV期のものに比べてさらに器高が低くなる。

低脚杯（62）は、やや深い杯部をもつもので、脚部もやや高く大きい。

さて、この時期になって、小型丸底鉢（64）、小型高杯形器台（65）など布留系の上器が現れるのが大きな特徴であるが、「く」字状口縁をもつ布留式甕は、良好な資料がない。

また、この時期に甕（63）が出現している。甕は体部が砲弾形を呈し、把手が4ヵ所つく。上部のものは器壁に対し平行につくが、下部のものはやや下向きに直角につく。下端部付近には、タガ状の突帯が巡る。外面縦方向ハケ目、内面上半部左方向ケズリ、下半部上方向ケズリが施される。

この時期は、甕の型式から高い口縁部をもつものと、口縁部の立ち上がりが低くなるものの2時期に分けることが可能であるが、良好な一括資料がないため同時期としてまとめた。将来的には細分できるものと思われる。

長瀬高浜編年I期、土井編年宮ノ下遺跡4・6号住居址段階、青木VII期（古）、岩吉VII期、布留（古）段階頃に並行するものと考えられる。

#### 〔大山VI期〕

この時期は、BSI14、BSI32、CSI06、CSI07、南谷29号墳出土資料を指標とする。

壺（66・67）は、複合口縁部が退化傾向を示し始め、口縁部の高さが低くなり、さらに口縁部下端の棱が鈍くなる。胴部は丸味をもつようになり、外面肩部横方向ハケ目、内面頸部以下右方向ケズリが施される。外面肩部には波状文が施されるものがある。大型品（68）は、内傾する複合口縁をもち、肩部には依然と施文が施され、丸味のある胴部に平底をもつ。

甕（69～71）は、口縁部の立ち上がりが3cm以下と低くなり、端部は平坦面をもつ。口縁部下端はV期同様鋭く突出するものもあるが、鈍くなるものも現れる。胴部は丸味を帯び、完全に丸底を呈すよう

になり、Ⅷ期に比べて全体的に器壁が厚くなる。また、外面上半部横方向ハケ目もやや粗くなり、下半部縦方向ハケ目も粗い。内面は、上半部右方向削り、底部付近は指頭圧痕が残る。

また、布留系土器の影響を受けたと考えられる、端部が内方へ肥厚する複合口縁をもつ甕(72)も現れる。大型品には、大きな平底をもつもの(73)、口縁部が内傾するもの(74)がある。

「く」字状口縁をもつ布留式甕(75)は、内湾気味に立ち上がり、端部が内方へ肥厚し、胸部は球形を呈すようになる。

長頸壺(76)は、胸部の大半を欠くが、球形を呈すものと考えられる。

高杯は、端部が外反しやや深い皿状の杯部をもつ(77)、胎土が浅橙色で椀状の杯部をもつ(78)がこの時期のもので、前時期のものと形態的には大きな違いは見られない。また、小型で平坦な底部から高く屈曲する口縁部をもつ(79)、低く大きく広がる裾部をもつ(80)がある。

鼓形器台(81・82)は、器壁が厚くなり、器高が低くなる。

低脚杯は、大きく浅い皿状の杯部をもつ(85)、やや深い皿状の杯部をもつ(86)、深い椀状の杯部をもつ(87)がこの時期のものと考えられる。

小型高杯形器台(83)は、退化傾向を示し、受け部の作りが雑になる。また、この時期に逆円錐形の受け部をもつ小型器台(84)が現れる。

小型丸底壺(88)は、口径が胸部最大径を上回るもので、複合口縁をもつ(89・90)も現れる。

長瀬高浜編年二期、土井編年宮ノ下3B・7号住居址段階、青木Ⅶ(新)期、岩吉Ⅷ期、布留(中)段階頃に並行すると考えられる。

#### [大山Ⅸ期]

この時期は、B S I 13-3、C S I 19出土資料を指標とする。

甕(91~93)は、口縁端部が外方へ肥厚して平坦面をもち、口縁部下端は鈍く突出する。胸部は球形を呈すものと考えられ、外面は粗い斜方向ハケ目、内面は肩部指頭圧痕が残る。また、(91)のように外面肩部には、棒状工具による逆三角形状に3カ所の刺突文が施されるものがある。

高杯(94・95)は、浅い皿状の杯部をもち、筒部が細く直線的なものである。大型のものは、有段の杯部をもつ(96)で、屈曲部には不明瞭ながらも稜がつく。

この時期までは小型丸底壺(97・98)が見られる。口縁部は短くなり、口縁部径が胸部最大径を下回るようになる。胸部の調整はハケ目となる。

その他の器形として、小型脚付鉢(99)がある。

青木Ⅷ(新)~Ⅹ(古)期、岩吉Ⅷ期に並行するものと考えられる。

#### [大山Ⅹ期]

この時期は、B S I 09、C S I 21出土資料を指標とする。

この時期に極めて大型の壺(100・101)が見られる。口縁部は複合口縁状を呈し、胸部は球形を呈すが平底をもつものである。内外面共に粗いハケ目調整である。

甕(102~105)は、複合口縁が顯著に退化傾向を示し、口縁部下端が下膨らみになる段階である。

この時期の甕は器壁が肉厚で、口縁部はほぼ直立し、口縁部の立ち上がりも3cm以下と低くなる。胸部は球形を呈し、外面肩部は横方向ハケ目が残るが、斜方向ハケ目が主流となる。内面肩部・底部には指頭圧痕が明瞭に残るものが多い。

布留系の「く」字状口縁をもつ甕(106・107)は、端部が肥厚するものから丸く収められるものに変化し、胸部の調整も粗い縦・斜方向ハケ目に変わる。

直口壺(108・109)は、やや高い頸部をもち、やや瘤球形の胸部をもつものである。

高杯は、椀状の杯部をもつ(110・111)が主流となるが、大型の(112・113)は平坦な底部から屈曲して外傾する杯部をもつもので、屈曲部の後はなくなる。

楕は橙色の胎土で、端部が内湾気味に立ち上がる(114)と、同様の体部に太く短い脚部をもつ(115)の2種類がある。いずれも、やや深い体部をもつ。

また、この時期に、陶邑編年TK208並行と考えられる須恵器が共伴する。

杯蓋(116・117)は天井部が低く、このうち回転カキ目調整される(117)がある。口縁端部は鑿齒状を呈す。全体にシャープな作りである。杯身(118)は、底部が扁平で、口縁部立ち上がりが高い。端部は杯蓋同様鑿齒状を呈す。

甕(119)は、頸部に1条の凸帯が巡りその下に波状文が施される。内面の叩き痕は半スリ消しされる。

無蓋高杯(120)は、杯部が深く、口縁部外面には凸線が2条巡りその下に波状文が施される。脚部には長台形の透かしが四方に入る。

梅型甕(121)は、口縁部を欠くが、丸みの強い橢型の胴部をもつものである。この他にも、小型甕(122)、大型甕(123・124)がある。

瓶部Ⅲ期、青木Ⅸ(新)期、岩吉Ⅷ期に並行するものと考えられる。

#### [大山Ⅹ期]

この時期は、BSI 13-2出土資料を指標とする。

甕(125~128)は、口縁部下端部がさらにも退化傾向を示し、丸みを帯び屈曲するだけになる段階である。胴部はやや長球形を呈し、外面は粗い横~斜方向ハケメ、内面は肩部・底部に指頭圧痕が明瞭に残る。直口壺(129)は、Ⅶ期のものに比べて口縁部の立ち上がりが低くなる。

高杯は、深い楕状の杯部をもつ(130・131)が主流で、屈曲部が鈍い有段の杯部をもつ(132・133)も共伴している。

楕(134)は、形態的には前時期のものと類似するが、Ⅷ期に比べて器高が低くなる傾向がある。

須恵器はTK23~TK47並行のものが共伴している。杯蓋(135・136)は、天井部が高くなり全体的に丸みを帯びる。天井部との境には明瞭な稜をもつ。口縁端部は鑿齒状を呈す。杯身(137)も全体的に丸みを帯び、高い立ち上がりをもつ。

無蓋高杯(138)は、外反する口縁部をもつもので、脚部は短脚で、三方に透かしが施されるものである。この時期は良好な資料がなく、資料の増加を待って細分できるものと考える。

青木Ⅹ期(古)、岩吉Ⅺ期に並行するものと考えられる。

南谷大山遺跡の土器編年を試みてきたが、このうち、弥生時代後期後半期における壺・甕についてみると、施文をスリ消す手法をもつものは、施文をスリ消さないもの、ナデのみで仕上げるものと共に伴していることが指摘できる。

従来この点について指摘した土井珠美氏は、<sup>66</sup>阿弥大寺Ⅲ期段階と、次段階である上種第5遺跡貯藏穴7号・住居址27号段階を、壺・甕口縁部の施文をスリ消す手法の導入で明瞭に区分できるとしている。

この手法の土器は、鳥取県東部では岩吉遺跡・秋里遺跡など、中部では南谷大山遺跡・觀音堂遺跡・上種第5遺跡など、また、従来この手法は認められていなかった島根県でも鹿島町・佐太前遺跡・出雲市・西谷3号墓などで確認されている。これらの遺跡では、この手法の土器は、施文がスリ消されない壺・甕、肉厚でナデのみで仕上げられる壺・甕と共に伴しておらず、型式分類は可能であるが、現段階では、この手法が明確に時期区分の要素となる状況ではないと考える。むしろ従来言われているように、器壁が極めて薄手となり、口縁部には施文が施されず、全体的にシャープな作りとなる段階を画期と考えた方が良いと思われる。

施文のスリ消しは、(A) 口縁部の上下2カ所に施されるもの(写真11)、(B) 中央に1カ所施されるもの(写真12)、(C-1) 口縁端部に1カ所施されるもの(写真13)、(C-2) 口縁部下端部に1カ所施されるもの(写真14)がある。このように見ると、スリ消しの技法も装飾の一環の技法と考えられ、施文消失の過渡的様相を示しているものとも考えられる。

以上、大山Ⅰ期～Ⅸ期の土器編年を試みたが、それぞれの画期をまとめると、大山Ⅰ期は口縁部が発達はじめ、外面に擬回線が施される時期、大山Ⅱ期は、口縁部の装飾が最も多くなり、スリ消す技法が一部に現れる時期、大山Ⅲ期は、口縁部ナデのみのものが現れる時期、大山Ⅳ期は、口縁部の作りがよりシャープになる時期、大山Ⅴ期は、口縁部の高さが低くなり始め、端部に平坦面をもつ時期で、布留（古）段階に並行する時期、大山Ⅵ期は、口縁部が退化傾向を示しはじめ、胸部が球形になり、布留（中）段階に並行する時期、大山Ⅶ期は口縁部が退化し、器壁が厚くなる時期、大山Ⅷ期は、さらに口縁部が退化し、定型化した須恵器が出現する時期、大山Ⅸ期は、口縁部下端が屈曲するのみになり、胸部が長胴化する時期となる。さて、従来の編年観に照らし合わせると、すべての時期が連続しているとは言えない。つまり、大山Ⅰ期と大山Ⅱ期の間、大山Ⅵ期と大山Ⅷ期との間には、空白の期間がある事が指摘できる。

前者の空白期間を埋めるものは、阿弥大寺Ⅱ期・岩吉Ⅲ期と考えられる。また、後者の空白期間を埋めるものは長瀬高浜編年Ⅲ期と考えられる。

## (2) 他地域からの影響

また、大山Ⅲ期以降に他地域からの影響をもつ土器が出土しており、特に畿内・吉備との並行関係を考える上で貴重な資料がある。

大山Ⅲ期・Ⅳ期の「く」字状口縁部をもつ甕のうち、端部に施文が施されるものは、管見に触れるかぎりでは岡山県上東遺跡・東鬼川市溝2出土のもの、端部の施文がなくなるものは、上東遺跡オノ町P-1イ出土のものに類似している。備中の編年では、前者は備中V-3様式の新相、後者は備中V-4～5様式に並行するものと考えられ、南谷大山遺跡の編年と対比させて、編年観に合う資料である。

また、大山Ⅲ～Ⅳ期の、短く外反する口縁部をもつC S I 14出土の(25)(26)、B S K 06出土の(44)は、岡山県・奥坂遺跡Na109袋状土壙、Na140袋状土壙などで出土しているものに類似している。

また、同時に特殊器台と思われる破片が出土しており、いずれも吉備地方との交流が窺える。

大山Ⅳ期の、B S I 25出土脚付短頸壺、1992年度遺構外出土の高杯も胎土が緻密で橙褐色を呈し、この地方のものと異なっており、他地域からの影響が窺われる。

しかし、大山Ⅴ期には、小型丸底壺・小型丸底鉢・小型高杯形器台などの布留式の影響をもつ土器が出土し始め、さらに大山Ⅵ期では、布留式土器の影響が在地の土器にも及ぶようになる。

また、大山Ⅶ期の壺胴部外面の刺突文は、布留式土器によく見られるものである。<sup>29</sup> この種の刺突文は、長瀬高浜Ⅲ期並行と考えられる宇谷第1遺跡S I 03出土のものにも見られる。

これら他地域の影響をもつ土器が、搬入されたものか、プロポーションを模倣して当地で作られたものは明らかでなく、今後胎土分析等によって解決されなければならない問題である。

## (3) 土器の様相から見た時代の画期

土器編年が時代を区分する手段となるかどうか見解が分かれるところであるが、あえてここでは土器の様相から画期が探れないかどうか、簡単に触れてみたい。

鳥取県中部地区の土器編年を唱えた土井珠美氏は、「口縁部は完全に横ナデする、ハケ目が多用される、ヘラ削りが顯著で器壁が薄い、全体に器形は球形化してくる」段階を弥生土器と土師器の画期と捉

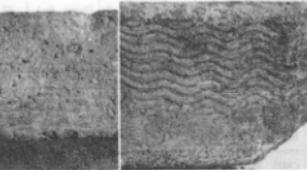


写真11 スリ消しA BSS01  
写真12 スリ消しB CSI11  
写真13 スリ消しC-1 CSI11  
写真14 スリ消しC-2 CSI01

Po8 Po4 Po7 Po1

え、土井編年・東高江2号貯蔵穴の段階から古墳時代と考えている。

鳥取県東部地区で、岩吉遺跡編年を唱えた谷口恭子氏は、「平行線の有無は大きな変革であり差異であり、この二者は区別するべきものであるが、現時点では模索中の段階であり、今後流動的な部分である」とし、鳥取県東部地区的布留（古）段階の土器の様相が明瞭ではないことと考え合せ、庄内（古）段階＝岩吉IV期までを弥生時代としている。

一方、清水真一氏は、氏の従来の考えを訂正し庄内式並行＝VI-2様式までを弥生時代としながらも、口縁部に施される土器と、施されない土器の差は大きいと考え、今後の課題としている。

このように、鳥取県内では、在地の土器の変化が著しく変化する時期をもって時代を画する考え方、他地域（畿内）の土器との並行関係を探ることで、時代を画する手段としている考え方がある。後者の場合、庄内並行期をもって画するものと、布留式並行期をもって古墳時代と考えるものとの両者があり、方法論としても一致した見解にはいたっていない。

南谷大山遺跡の土器の様相を見ると、大山III～IV期までは古備～美作地方の影響をもつ土器が出土しているのに対し、大山V期に入ると、布留並行期の畿内系の土器が出現するようになるという大きな変化があることに注目したい。土井氏は、布留式の影響の始まりは、宮ノ下4号・6号住居址期（大山V期並行期）と考えているが、南谷大山遺跡を含め、この時期の布留（古）段階の資料は極めて少なく、鳥取県東部と同様、いまだはっきりとしているとは言えない状況といえ、今後流動的である。

しかし、古墳時代が前方後円墳の成立・波及をもって始まるとなれば、古墳出現の担い手となった畿内勢力の影響を持った土器が、この地域においても出現するのは当然のことであり、布留式並行期の土器が出現する大山V期をもって古墳時代と考えたい。

番号	出土遺構	番号	出土遺構	番号	出土遺構	番号	出土遺構	番号	出土遺構	番号	出土遺構	番号	出土遺構	番号	出土遺構
1	BSH19 Po69	19	BSH19 Po2	37	BSK09 Po10	55	BSN04 Po2	73	BSH22 Po2	91	CS119 Po1	109	CS119 Po39	127	BSH13 Po1
2	BSK19 Po11	20	CSH14 Po2	38	CSH16 Po5	56	BSH04 Po3	74	BSH22 Po18	92	CSH19 Po3	110	BSH09 Po27	128	BSH13 Po2
3	BSK19 Po15	21	CSH11 Po9	39	BSK10 Po1	57	BSS04 Po53	75	南谷29号墳 Po3	93	BSH13 Po43	111	南谷25号墳 Po3	129	BSH13 Po50
4	BSH12 Po69	22	CSH14 Po3	40	BS127 Po1	58	BSH12 Po19	76	南谷29号墳 Po1	94	CSH19 Po13	112	BSH09 Po116	130	BSH13 Po64
5	南谷24号墳 Po49	23	BSK04 Po11	41	BSK07 Po1	59	BSH04 Po21	77	CSH06 Po17	95	BSH13 Po68	113	CSH20 Po24	131	BSH13 Po67
6	BSH27 Po2	24	CSH16 Po3	42	BSK07 Po2	60	CSH02 Po10	78	CSH05 Po31	96	CSH19 Po17	114	BSH09 Po48	132	BSH44 Po11
7	BSS04 Po9	25	CSH14 Po6	43	BSK06 Po2	61	BSH15 Po3	79	BSH14 Po69	97	BSH13 Po67	115	BSL22 Po23	133	BSH13 Po61
8	南谷24号墳 Po11	26	CSH14 Po5	44	BSK06 Po3	62	CSH12 Po29	80	BSH32 Po21	98	CSH19 Po20	116	BSH10 Po87	134	BSH10 Po38
9	南谷24号墳 Po12	27	CSH14 Po13	45	BSK06 Po6	63	BSH20 Po31	81	CSH06 Po23	99	CSH19 Po23	117	BSH10 Po66	135	BSH28 Po4
10	AS104 Po1	28	BSK01 Po22	46	BSH25 Po18	64	BSH44 Po15	82	CSH05 Po35	100	BSH16 Po1・2	118	南谷25号墳 Po1	136	BSH19 Po47
11	A区遺構外 Po46	29	BSH22 Po11	47	BSH23 Po19	65	BSH20 Po28	83	CSH07 Po16	101	BSH遺構外 Po66	119	BSH01 Po18	137	BSH13 Po104
12	B区遺構外 Po45	30	BSH01 Po27	48	BSH25 Po20	66	CSH05 Po1	84	南谷29号墳 Po3	102	BSH09 Po1	120	BSH09 Po24	138	C-V遺構外 Po14
13	C-N遺構外 Po27	31	CSH14 Po14	49	BSS04 Po1	67	CSH06 Po1	85	BSH12 Po12	103	BSH10 Po2	121	CSH21 Po19		
14	BSDE3 Po44	32	BSH04 Po34	50	BSH30 Po27	68	BSH22 Po17	86	CSH05 Po42	104	CSH20 Po1	122	BSH19 Po95		
15	BSK04 Po2	33	BSH03 Po7	51	CSH04 Po5	69	CSH06 Po15	87	CSH06 Po28	105	CSH21 Po1	123	BSH10 Po93		
16	BSK04 Po1	34	BSK04 Po56	52	BSH03 Po1	70	BSH14 Po13	88	BSH14 Po41	106	BSH09 Po84	124	BSH10 Po94		
17	BSH02 Po2	35	BSH02 Po18	53	BSS04 Po9	71	BSH06 Po3	89	CSH03 Po9	107	BSH09 Po2	125	BSH10 Po1		
18	CSH11 Po4	36	BSH03 Po8	54	BSH04 Po8	72	南谷29号墳 Po2	90	BSH14 Po37	108	BSH22 Po19	126	BSH13 Po12		

挿表5 土器編年要素対照表

注1) 69-160  
145 = 1/12  
631-5 = 1/16  
その他のもの  
については  
S=1/6

	蓋	底	柄	基台	その他
I 期	1	2 3 4			
II 期	5 6	7 8 9 10 11	12	13 14	
III 期	15	16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33		34 35 36 37 38 39	

插図154 南谷大山遺跡土器編年表(1)

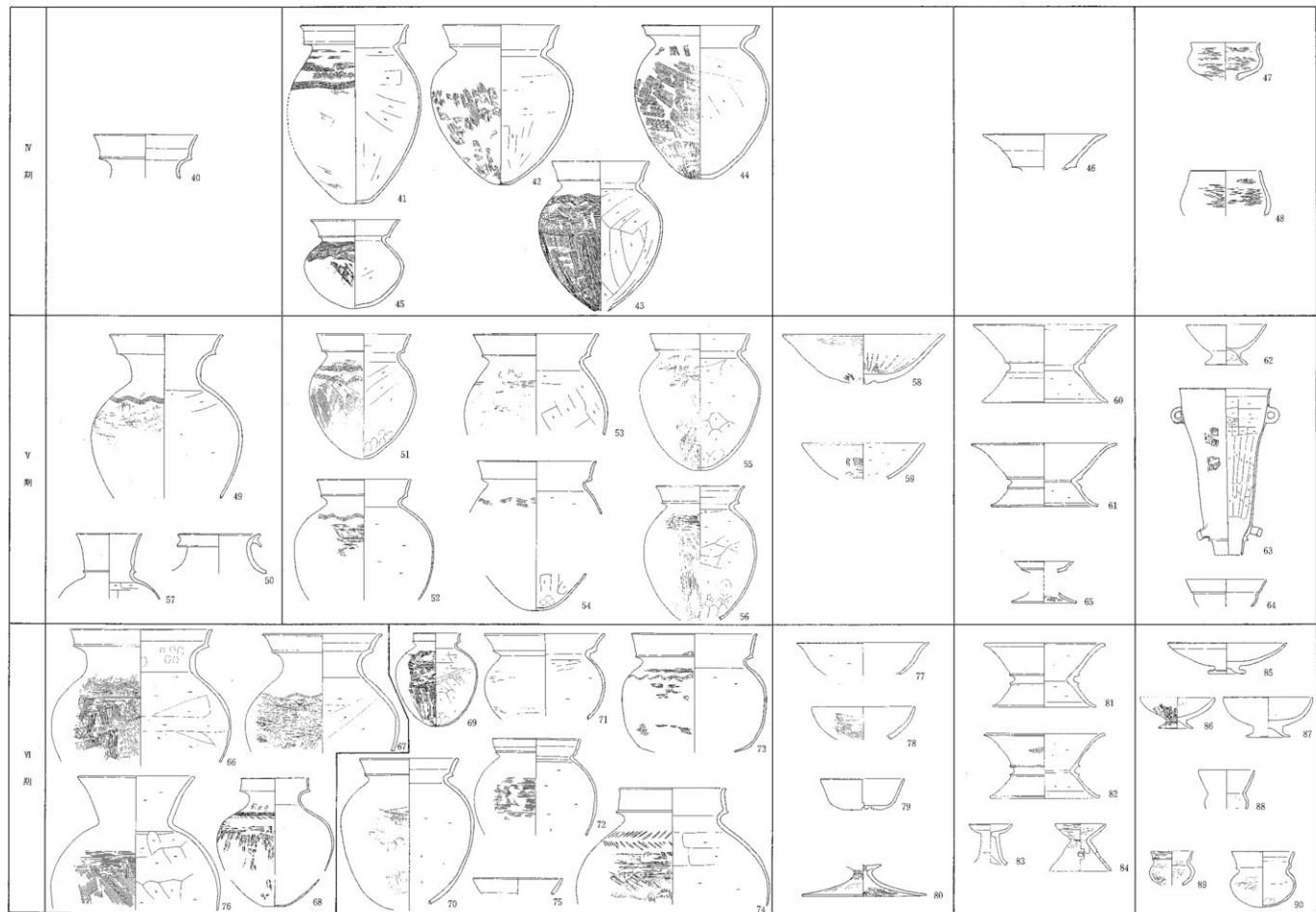


插图155 南谷大山遺跡土器編年表(2)

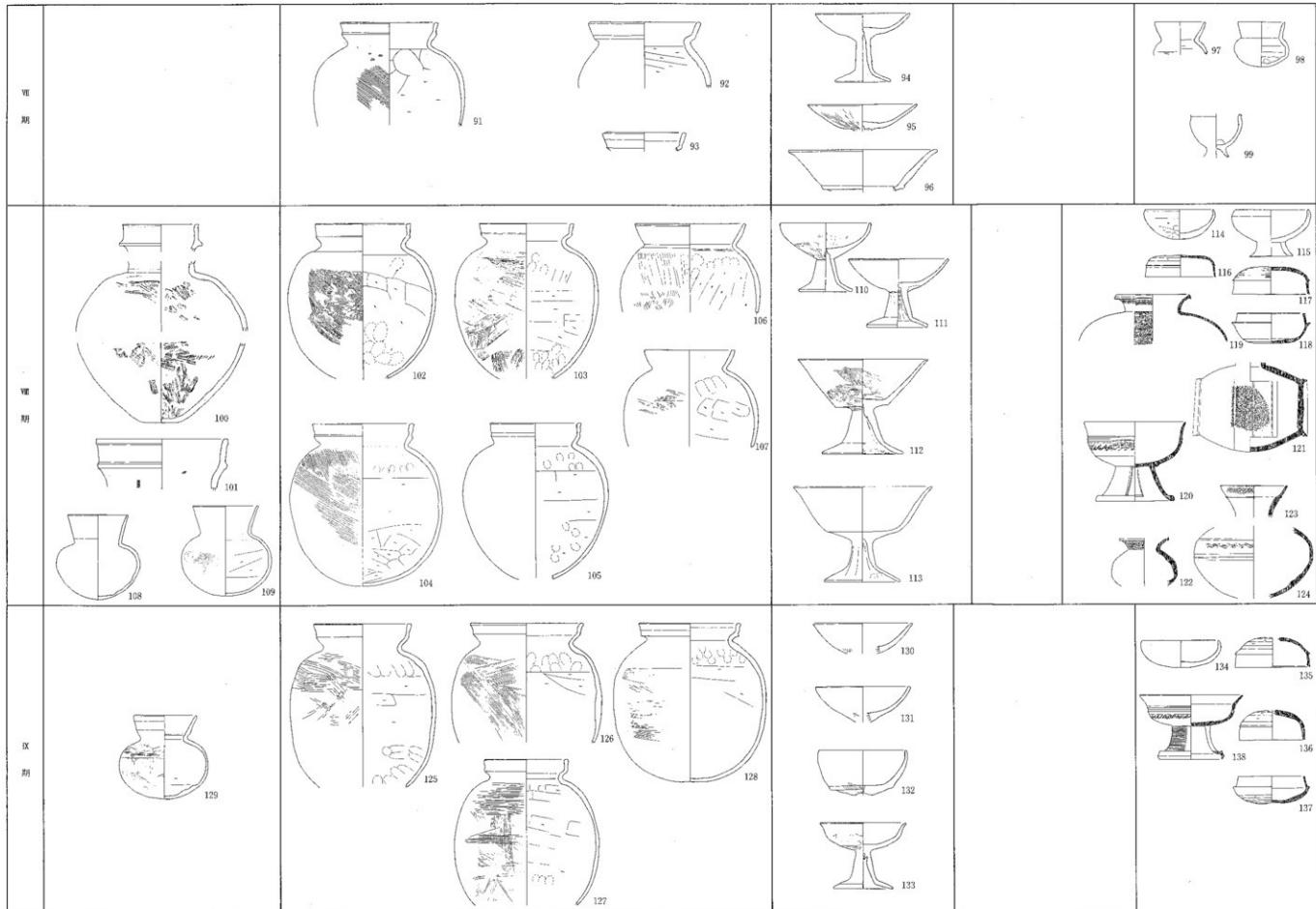


插圖156 南谷大山遺跡土器編年表(3)

## 第2節 玉製品について

古墳副葬品を除いて、竪穴住居跡からは、上器類の他に、勾玉・管玉・有孔円盤・白玉などの玉製品が出土している。

### (1) 勾玉・管玉

勾玉は、A S I 01・B S I 09から出土している。A S I 01のものは、流紋岩質凝灰岩製で、頭部に溝が切られる丁字頭勾玉で、長さ5.2cmと大型である。B S I 09のものは、蛇紋岩製で、扁平な作りである。A S I 01は大山Ⅱ期、B S I 09は大山Ⅶ期である。

管玉は、B S I 14の埋土中から出土している。碧玉製で非常に小型のものである。

### (2) 有孔円盤・白玉

有孔円盤は、B S I 38・C S I 19から計3個出土している。いずれも蛇紋岩製で、ほぼ円形を呈し径約2cm、厚さ3~4mm大である。中央部には径2mm大の穿孔が2カ所ある。表面には、加工の際の擦痕が明瞭に残る。B S I 38・C S I 19とも、古墳時代中期後半のものである。

白玉は、C S I 19から計351個出土している。いずれも蛇紋岩製である。平面円形または梢円形を呈し、径5mm・厚さ3mm程度のものが多い。側面には、加工の際の擦痕が残る。

断面の形態から4類に分類できる。(a) 断面がそろばん玉形を呈すもの、(b) 断面が長方形を呈すもの、(c) 径に比べて著しく厚さが薄く、扁平で長方形を呈すもの、(d) 断面が五角形状を呈すものの4類に分類できる。大半が(a)類である。

有孔円盤・白玉共祭祀遺物と考えられ、これらの住居跡は、集落内祭祀に関連した遺構といえる。

この他にも、B S I 14から碧玉の石核、また、遺構外からではあるが、B区では玉砾石が出土している。明らかな玉作遺構は検出されなかったが、集落内で玉製品を生産していた可能性がある。



插図158 白玉分類図

## 第3節 鉄製品について

南谷大山遺跡からは、竪穴住居跡を中心にして総数41点の鉄製品が出土している。

### (1) 農工具

弥生時代後期の農工具には、鉄斧・斂・刀子がある。

鉄斧は、C S I 01から出土した袋状鉄斧F1がある。袋部が密着しないb類である。袋部には幅1cmの鉄板が巻かれており、柄が抜けない工夫がなされている。刃部幅が狭い。

斂は、B S I 23、C S I 11から出土した2点がある。B S I 23出土のものは、刃部に反りをもじ組みである。C S I 11出土のものは、先端部を欠くものの、刃部は裏面が凹んだ逆「V」字形を呈す。いずれも身部断面が矩形を呈するもので、刃と柄が機能的に分化するb類である。

刀子は原形を残しているものはないが、いずれも茎刀子と考えられる。このうち、比較的残りの良いB S K 04出土のものは、茎が扁平で短く、片闇のa類である。

古墳時代後期後半の農工具には、鎌・鍬（鋤）先がある。

鍬は、B S I 10-B S I 11-B S I 13-2-B S I 14から計5本出土している。完存品はないが、B S I 13-2のF 6を除いていずれも小型である。刃部の形態は直刃のものではなく、いずれも曲刃のB類と考えられる。また、装着部が残るものは、いずれも柄が直角に装着されるものである。

鍬（鋤）先は、B S I 13-4からのみ1本出土している。刃部は「U」字状を呈し、木台挿入部は、端部を折り返すものである。一般的な「U」字刃先の木台挿入部とは形態が異なる。B S I 13-4出土のF 5は、方形板刃先と「U」字刃先の折衷形と考えられ、また、方形板刃先は「U」字状刃先に比べて早くから出現しており、「U」字状刃先へ変化する、過渡的なものと考えてもよいと思われる。

### (2) 鋳造鉄斧

農工具には、鍛造品と鋳造品がある。上記のものはいずれも鍛造品であるが、C S I 17-4からは、全国でも管見に触れるかぎり30例しか出土していない鋳造鉄斧が出土している。C S I 17-4出土のF 6は、長さ8.2cm、幅7.5cmを測るもので、刃部に向かってわずかに撥形に開き、断面は梯形となる。側面は楔状を呈す。袋部と刃部を欠損し、全体にヒビ割れが進んでいる（X線写真図版44）。また、錆化の状況は、はがれるような状況ではなく、形態的特徴と合せて鋳造鉄斧と判断した。

鋳造鉄斧は、県内では古墳時代中期の里仁33号墳から2例出土しているが、それに次いで3例目、住居跡から出土しているものでは初例である。全国的に見ても、出土地は古墳・埋葬構造・祭祀遺構に限られており、集落遺跡での出土例としては、弥生時代後期の兵庫県・会下山遺跡出土以外は知られておらず、極めて稀なものである。

鋳造鉄斧は、鍛造のものに比べて脆弱で、実用には向かないものとされるが、多くの鋳造鉄斧が、古墳・墳墓に関わる遺跡から出土している事、周溝内またはその周辺から出土している事などから、祭祀的意味合いをもつものと考えられ、「斎斧」として使用されたとも考えられている。

C S I 17-4が立地する場所は、尾根に挟まれた谷底部で、周辺には、祭祀関係と考えられる蛇紋岩製の有孔円盤・臼玉351個が出土したC S I 19があり、その特異な立地と考え合せて、この鋳造鉄斧も祭祀的な意味合いをもつものと考えられる。

また、鋳造鉄斧を含めた鋳造品は、朝鮮・中国から輸入されたものと考えられており、今後、化学的分析により、產地の同定を考えていかなければならない。

### (3) 武器

武器類には、鉄鎌のみ検出されている。

原形がわかるものは、古墳時代中期後半のB S I 09・B S I 14出土の鉄鎌がある。その他にも鉄鎌茎部と思われるものが出土している。

B S I 09からは、無茎鎌が2本ある。いずれも無茎鎌D形式第III形式第2型式A類にあたる。この型式は、T K 73-T K 216・208並行期に見られるもので、時期的には矛盾しない。

B S I 14出土のものは、腸抉三角形鎌A形式第1型式B類にあたる。この型式は、T K 23・47並行期以降に見られるものである。B S I 14は古墳時代前期後半頃のものと考えられるが、F 2は、埋土中からの出土であり、この住居に伴うものとは考え難い。同じ土層中から古墳時代中期後半の土器が出土しており、ほぼこの時期のものと考えてよいだろう。

### (4) 鉄鋤

B S I 13-3から、鉄鋤と考えられる鉄器が出土している。完存ではないが、形態は一方端が撥形に開く、扁平な長方形を呈す。現存長12.9cm、最大幅5.6cm、最小幅3.6cm、厚さは2mm、重量は42.0gである。木質が付着しているが、刃がつけられていないこと等、形態上の特徴から鉄鋤と判断した。

この鉄鋤は、東潮氏の分類によれば小型鉄鋤に分類できる。

鉄鋤は、管見に触れるかぎりでは全国で28遺跡・1147枚が知られており、長崎県・沖ノ島の祭祀遺跡

出土のものを除いて、そのほとんどが古墳・埋葬施設に副葬されたものである。県内では、倉吉市・高畠2号墳から2枚出土しているにすぎない。住居跡からの出土は、千葉県・南二重堀24号住居址、東京都・氷川神社北方・岡山県・崖木蓮師遺跡からそれぞれ1枚が出土しているに過ぎないという。

B S I 13-3は、古墳時代中期後半頃の堅穴住居跡で、南側壁際には、底面に砂利が敷かれた特殊ピットが作られている。土器類・鉄器類の他には製鐵鍛冶具などではなく、鍛冶遺構とは考えられない。

鉄錠は、鉄素材と考えられており、南谷大山遺跡において、鉄器の生産が行われていた可能性があるが、B S I 13-3は鍛冶を行っていた痕跡がないため、遺跡内の鉄器生産については慎重にならなければならない。また、産地の同定など問題も多く、今後化学的分析が待たれる。

#### 第4節 竪穴住居跡について

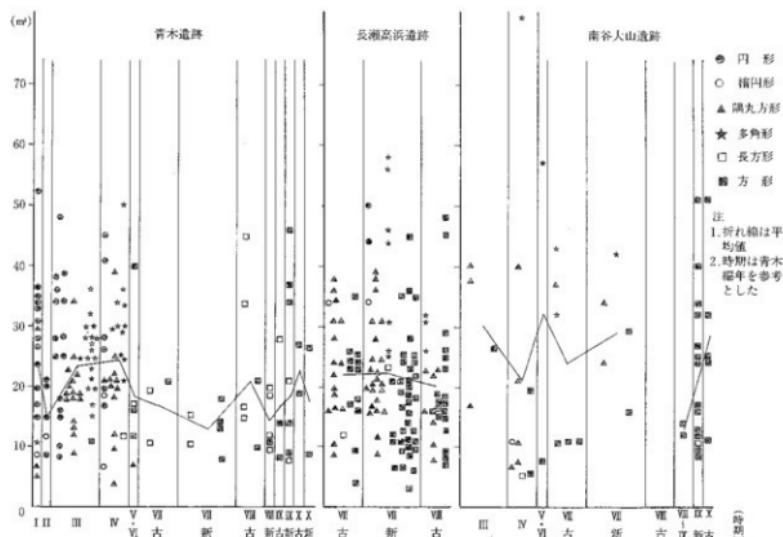
南谷大山遺跡では、建て替え・重複しているものも入れると、96棟もの竪穴住居跡が調査された。時期も一部中断はあるものの、弥生時代後期後半、大山Ⅱ期（青木Ⅲ期新並行）から古墳時代中期後半、大山Ⅳ期（青木Ⅳ期古並行）にわたる。

本稿では、これらの資料に加え米子市・青木遺跡・羽合町・長瀬高浜遺跡の竪穴住居跡も参考にして、  
1. 平面形の変遷・2. 住居の規模・3. 中央ピットと特殊ピットについて考察したい。

### 1. 平面形

遺跡・時期別住居分布表（挿表6）を参照されたい。

南谷大山遺跡では全時期を通じて方形住居の占める割合が多い。弥生時代後期の大山II～III期（青木III～IV期並行）でも、方形のものが4割以上を占める（挿表6は床面が完全に検出された住居のみ載せ



插表 6 遺跡・時期別住居分布表

たため、方形住居が実際より少なくなっている）。しかし、古墳時代中期・大山Ⅸ～Ⅺ期（青木Ⅹ期新～Ⅹ期古並行）になども、僅かではあるが隅丸方形の住居が存在する。円形・橢円形の住居が極めて少ない（橢円形のA S I 02のみ）のも、一つの特徴である。

また、南谷大山遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期にかけて、多角形住居が概して規模が大きい傾向にある。

同じ、天神川下流域の長瀬高浜遺跡においても、長瀬Ⅲ期（青木Ⅹ期古並行）まで隅丸方形・多角形が残る。時期が下るにつれて、非方形住居の割合は減っているものの、古墳時代中期までそれらの住居が存続するのは、この地域の特記すべき傾向である。

しかし、青木遺跡では、青木Ⅶ・Ⅷ期（大山Ⅸ期並行）より、方形住居に画一化され、それ以前の非方形プラン住居と完全に区分される。

鳥取県西部の青木遺跡では、弥生時代終末～古墳時代初頭で非方形と方形にきれいに分かれるのに対し、天神川下流域の長瀬高浜遺跡・南谷大山遺跡では、古墳時代中期まで非方形住居が残存するという違いが見られ、地域的な特色が現れている。

## 2. 規 模

南谷大山遺跡では、大山Ⅲ期（青木Ⅳ期並行）のB S I 21 (82.8m<sup>2</sup>以上)・大山Ⅳ期（青木Ⅴ・Ⅵ期並行）のB S I 26 (57.1m<sup>2</sup>) のように、超大型の住居がある。このような超大型の住居は、首長クラスの居館または集会所と考えられ、集落内でも特別な位置を占めるものと思われる。超大型住居は、弥生時代終末期の限られた時期にのみ出現している。

また、排表6を見ると、大山Ⅲ期・大山Ⅳ期を除けば青木遺跡の住居よりも、南谷大山遺跡のそれの方が、規模が大きいといえ、同時期の長瀬高浜遺跡と比べても若干規模が大きい。この傾向は、集落全体の規模が小さいためと思われる。しかし、弥生時代終末期の最大規模の住居を比較してみると、青木遺跡のものよりはるかに大きい住居が出現しており、集団間の格差が、南谷大山遺跡の方が大きかったものと思われる。また、長瀬高浜遺跡では、長瀬Ⅱ期には棟数も爆発的に増え、50m<sup>2</sup>以上の住居が出現しており、S B 40など特異な建物が出現することとあわせ、この時期になって、何らかの権力の集中があったものと思われる。

前項で、長瀬高浜遺跡・南谷大山遺跡双方とも、古墳時代中期まで非方形住居が残ると述べた。しかしながら、35m<sup>2</sup>以上の大型住居に注目するとその形態が多角形から方形に変わっており、古墳時代中期後半の住居が方形を指向している事は共通していると思われる。

## 3. 中央ピットと特殊ピット

鳥取県内で調査された弥生時代～古墳時代にかけての竪穴住居に、特徴的に見られるものに、床面中央に柱穴とは考えられないピットがある。このピットは中央ピット・特殊ピットと呼ばれるもので、特に特殊ピットという名称は、そのピットが持つ性格（祭祀的性格）を考慮して呼ばれるものである。

また、このピットは、時期が下るにつれて、弥生時代終末～古墳時代前期には、中央部にあったものが壁際中央に位置を変え、形態も円形のものから方形のものへ変化していくものと考えられている。

しかし、現在のところはっきりした用途はつかめないため、主にその位置的特徴から、ここでは、中央ピットは中央に位置するピット、特殊ピットはおもに壁際中央に寄っており、高杯等の遺物を伴うこともあるピットと分けて呼んでおきたい。

なお、屋内貯蔵穴が掘り込まれる住居があるが、おむね屋内貯蔵穴がコーナー付近にあり、形態も長方形で特殊ピットより大型のものが多い特徴があり、これについても分けて呼ぶことにしたい。

### (1) 中央ピット

南谷大山遺跡では、大山Ⅲ期（青木Ⅹ期古並行）～大山Ⅸ期（青木Ⅺ期新並行）まで残っている。総数は24で、時期別には大山Ⅲ期（青木Ⅹ期新並行）には3、大山Ⅳ期（青木Ⅺ期並行）には6、大山Ⅴ

期（青木V・VI期並行）には1、大山V期（青木VII期古並行）には5、大山VI期（青木VII期新並行）には7、大山VII期～Ⅷ期（青木VII期新～Ⅷ期古並行）には2である。大山V期には、B S I 18のように、中央ピットと特殊ピットと双方を有する遺構もある。中央ピットの形態は、おむね、平面が楕円形・不整形を呈し、一段掘りのものが18例、二段掘りのものは6例ある。また、段状の高まりをもつものが4例ある。その他には、蓋を使用したと考えられるものが1例ある。埋土中には、炭化物が含まれるもののが16例あり、なかでも、C S I 01の中央ピットからツバキ・クスノキ、C S I 15の中央ピットからも、ツバキ・クスノキなど複数の樹種が含まれるものがある。特にクスノキやツバキは、本遺跡の住居用構造材の樹種とは異なることが注目される。

中央ピットの用途については、さまざまな見解があり、いまだはつきりとはしていないのが現状である。鳥取県内の中央ピットを概観してその用途について考えてみたい。

中央ピットの形態は、平面形は円形・楕円形を呈するものが多く、方形を呈するものもある。断面は、一段掘りのもの、二段掘りのものがある。また、ピットの周囲には土壇状のものをもつものがある。さらに、中央ピットに溝が接続するものもある。

弥生時代ではさまざまな形態の中央ピットが現れており、南谷大山遺跡・長瀬高浜遺跡・青木遺跡の中央ピットの形態を見ると、時期が下るにつれて単純な形態になるようである。

また、埋土状態を見ると、大半のものが皿状の堆積をしており、柱穴とは異なる層が堆積しているものが多く、用途を考えるうえで示唆的である。特に、南谷大山遺跡の中央ピットから出土した炭化物は、明らかに火を受けたもので、ツバキ・クスノキ・ツバキと、複数の樹種が出土しており、中央ピット内で燃えたものか、炭が詰まっていた可能性があり、周囲は焼けてはいないが炉として機能したものと考えられる。陰田遺跡群では、ほとんどの中央ピットから灰・焼土・炭化物が出土しており、炉として機能した可能性が指摘されていると同時に、防湿用等多用途に供されたものとも考えられている。

青木遺跡では、中央ピットが祭祀用のピットと考えられており、床面中央楕円→中央方形（二段）→壁際（二段）と変遷し、青木V・VI期に竪穴方形化とあいまって壁際に固定されるものと考えており、時期ごとにその形態が異なり、位置も変化していくとされる。しかし、中央ピットをもつ97遺構を再度検討してみると、H S I 60のように鏡が出土しているものもあるが、大半のものは上器が出土するものの、これが祭祀用のものとは断定できない。位置的には上記のような変遷が窺われるが、中央ピットと壁際に移動するピットが同じ用途であるとは、必ずしも言えるとは思われない。

南谷大山遺跡・長瀬高浜遺跡など、天神川下流域では、青木遺跡のような中央ピットの位置的変化は窺われない。長瀬高浜遺跡では、長瀬I期～III期まで中央ピットが見られ、時期が下るにつれて中央にあるものから、主柱穴の間に位置が変わっていくようであるが、青木遺跡の特殊ピットのように壁際に位置するものはみられない特徴がある。中央のものも主柱穴間にあるものも、埋砂は黒く、主柱穴との判別は容易であることから、両者は同様の用途であった可能性がある。

また、青木遺跡F S I 14の中央ピット内では直立の炭化した柱痕が、検出されており、中央ピットが支柱穴的役割を果たしたものとも考えられている。

さらに、中央ピットに向かって溝が掘り込まれているものもあり、特に、淀江町・福岡小真石清水遺跡のS I 01では、中央ピットから屋外に延びる暗渠状の溝が確認されており、排水機能を考えられるものがある。

以上、県内の中央ピットを概観すると、その用途は、祭祀用施設・支柱穴・炉・排水用など状況に応じて、複数の用途に供されたと考えることができる。しかし、中央にこのような施設をもたなければならなかった事は共通しており、住居の中央がもつ意味は地域を超えて共通しているといえよう。この状況は、中央ピットが本来的にはある特定の機能を持っていたものが、本来の意味をなくし、各住居でさまざまに使用されたものと考えられる。

## (2) 特殊ピット

南谷大山遺跡では、総数14例である。時期的には、大山Ⅶ期・大山Ⅷ期・大山Ⅸ期にみられ、それぞれ、1例・10例・3例で、古墳時代中期に多く出現している。形態は、楕円・円形のものがほとんどで、方形や二段掘りのもの、溝で囲まれるものは皆無である。特殊ピットの約半数から、高杯・須恵器蓋杯などが検出されている。南谷大山遺跡では、中央ピットがほとんど遺物をもたないのに対し、特殊ピットは高杯などの遺物をもつものが多く、用途的には異なるものが考えられる。

特殊ピットの用途については、青木遺跡では、CS I 01より滑石製勾玉・小型丸底壺、CS I 19より手握ね土器など、特別な遺物が出土していることから、祭祀用と考えられている。南谷大山遺跡についても同様の傾向があり、祭祀用と考えてもよいのではなかろうか。

では、鳥取県内の特殊ピットを概観してみたい。

特殊ピットの形態は、平面は円形・楕円形（不整形を含む）・方形を呈し、断面形は一段掘りになるもの・二段掘りになるものがある。また、溝によって区画されるものもある。

それぞれの時期についてみても、中央ピットが弥生時代全般～古墳時代中期まで長期間存在するのに対し、特殊ピットは弥生時代終末～古墳時代後期までとその存続期間は短くなっている。

青木遺跡では、特殊ピットが出現するのは青木V・VI期以降であるが、数が多くなるのは青木Ⅹ～Ⅺ期で、形態も平面方形・断面一段掘りを呈するものがほとんどである。

その他の遺跡についてみても、古墳時代中期に最も多く出現しているようである。

特殊ピットには、溝で区画されるものや特殊な遺物をもつもの、蓋が使用されたものなどがあり<sup>80</sup>、祭祀用と考えることができる。特殊ピットは、中央ピットが多用途に供された可能性があるのに対し、ある特定な用途（祭祀用）として使用されたものと考えられる。

## 第5節 南谷大山遺跡の変遷・性格と集団の動向

### 1. 南谷大山遺跡の変遷

南谷大山遺跡は、1991年～1993年にかけての調査で、70棟の竪穴住居跡（建て替え・重複を含めると96棟）、掘立柱建物跡5棟、屋外貯蔵穴と考えられる袋状土坑26基、不明土坑21基、段状造構11基、溝状造構25条、ピット群5カ所、古墳5基、埋葬施設3基が検出された。遺跡の総面積は27358m<sup>2</sup>以上である。

南谷大山遺跡を出土土器からI期～IX期に時期区分したが、ここで南谷大山遺跡全体を概観し、それぞれの時期における集落の変遷を考えてみたい。なお、竪穴住居の規模については、30m<sup>2</sup>以上のものを大型、20～25m<sup>2</sup>程度のものを中型、15m<sup>2</sup>程度以下のものを小型として考えた。

#### 〔大山I期〕

大山I期の上器は、B区の中央部にのみ出土しているが、確実な造構に伴ってはいなかったため、集落の様相は不明である。しかし、この位置にあった造構が、後世の造構によって壊されたと考えると、古相の土器が出土していてもおかしくはない。

#### 〔大山II期〕

大山II期では、A区、B区、C区のそれぞれの尾根上に集落が形成される。A区では標高85～90m付近の高い位置に、AS I 01、AS I 03、AS I 04がある。竪穴住居は、平面形がいずれも隅丸方形と考えられ、床面積も35m<sup>2</sup>以上と大型のものである。AS I 03・AS I 04は、屋内貯蔵穴を有するものである。

B区では中央部の標高68～78mのやや低い位置に、BS I 07、BS I 10-4、BS I 23、BS I 27、BS I 33を中心に、貯蔵穴と考えられる土坑4基、段状造構2基、溝状造構2条、ピット群1カ所で構成される。

成される。

堅穴住居は、床面積35m<sup>2</sup>以上の大型で隅丸方形を呈すもの2棟、25m<sup>2</sup>程度の中型のものは隅丸方形・方形各1棟、10m<sup>2</sup>以下と小型で方形を呈すもの1棟である。B S I 23からは、彷彿重圓文鏡の破片(破鏡されたもの?)が出土しており、この時期の住居では中心的な位置をなすものと考えられ、大型のB S I 10-4・B S I 33は、B S I 23を中心にしてほば等間隔に並んでいる。

貯蔵穴は、BSK22がBSI23に近接して作られているが、その他のものは、住居から離れて作られており、規則性は認められず散在する。これら、屋外貯蔵穴は共同管理されたものと理解できよう。

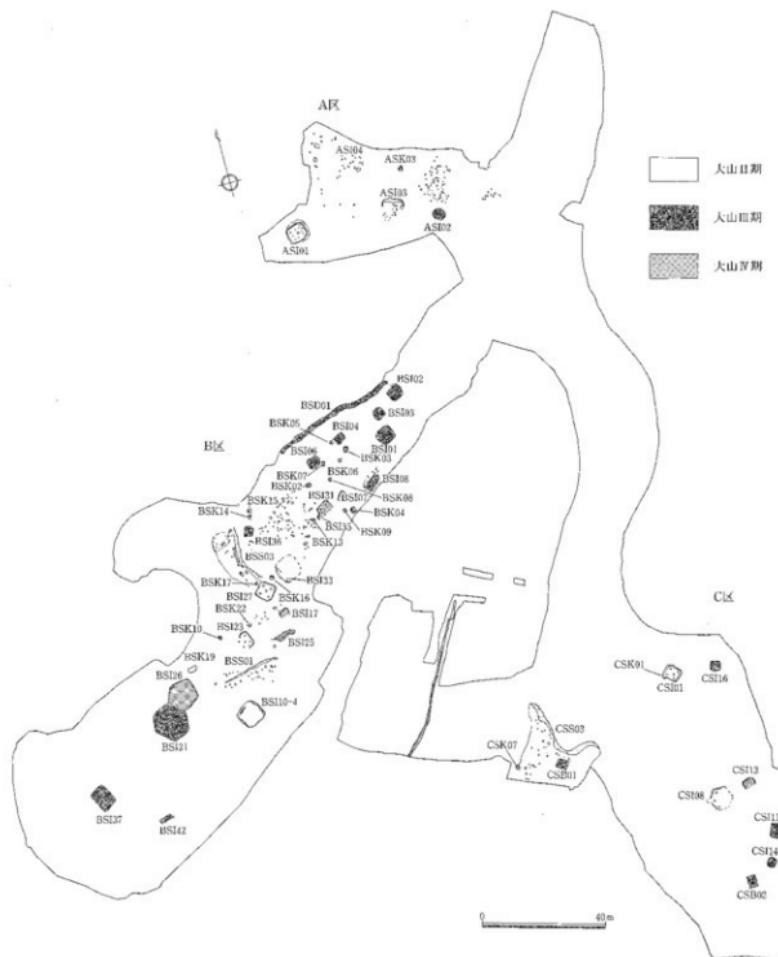


插図159 南谷大山遺跡遺壙配置図

段状造構は性格は不明であるが、BSS03からは、焼土面が2カ所で検出されており、簡単な住居状のものがあった可能性がある。

さてC-I区では、標高83mと高い位置に中型で隅丸方形を呈するCS I 01、標高73mとやや低い位置に大型で六角形を呈すと考えられるCS I 08が作られている。CS I 01には、屋内貯蔵穴と考えられるCS K 01が掘り込まれている。

A区・C-I区では、屋内貯蔵穴が出現しており、貯蔵施設の管理形態は個別管理といえるが、B区の屋外貯蔵穴は、共同管理下にあったものと考えられ、異なる様相がある。



插図160 南谷大山遺跡遺構配置図(弥生時代後期)

### [大山Ⅲ期]

A区では急激に集落の規模が縮小し、AS 102、ASK03のみとなる。AS 102は平面は、橢円形を呈し、床面積も11m<sup>2</sup>と小型である。貯蔵穴は、住居から離れた位置に作られている。

B区では、9棟の竪穴住居を中心に、貯蔵穴7基、溝状造構1基が作られている。竪穴住居は、東側のBS I 01~04・06・08・36、西側のBS I 21、さらに西側のBS I 37・42の3グループに分けることができる。東側のグループは、中型のものは隅丸方形のもの2棟、方形のもの1棟である。小型のものは隅丸長方形、隅丸方形のもの各1棟、方形のもの2棟である。西側のグループは、大型で隅丸方形を呈すBS I 37、小型で方形を呈すBS I 42からなる。このうち、BS I 21は、六角形を呈し床面積が82m<sup>2</sup>以上と、県内のこの時期のものとしては最大規模を測るもので、平面形の特殊性・卓越した床面積をもっており、集会場等特別な意味合いをもった建物と考えられる。BS I 21は、東側のグループからは約60m、西側のグループから約25m離れており、単独の建物と考えてよいであろう。

貯蔵穴は、住居から離れた位置に作られたものが多く、東側からBS K04・09・13・16・10とほぼ一直線状に並んでいる。BS I 36の北側には、近くにBS K14・15が作られている。このうち、BS K04からは、大量の土器と共にヤマトシジミが出土しており、貯蔵穴として使用された後に、ゴミ捨て場として再利用されたものと考えられる。この時期の屋外貯蔵穴については、共同管理されたものといえ、前時期と異なる管理形態を示しているといえる。

また、東側グループに伴うと考えられるBS D01がある。これは、西側が流失しており全容は不明であるが、道路として使用されたものと考えられる。

C-I区では、高い位置に小型で隅丸方形を呈するCS I 16、さらに東側斜面には小型で方形を呈するCS I 11・CS I 14、標高70mの平坦部のCS B02を中心には集落が営まれている。

C-II区では、CS B01が作られている。この地区では、この時期の竪穴住居は検出されていないが、調査区外(南側)に存在していると推定される。

C区の獨立柱建物跡は、住居とは離れた位置にあり、居住以外の目的で使用されたものと考えられ、この時期、C区に屋外貯蔵穴が見られない事を考慮すると、高床式の倉庫であった可能性もある。

大山Ⅲ期は、いずれの小区間に集落も住居と貯蔵施設をセットで備えており、それぞれの尾根で独立した経営状態を示しているといえ、B区の集団が優位であった事が窺われる。貯蔵施設の管理形態は、大山Ⅱ期同様、共同管理が基本となっていると思われる。

### [大山Ⅳ期]

この時期になると、A区では集落がなくなり、B区・C区のみに集落が営まれている。B区では、5棟の竪穴住居を中心に貯蔵穴7基が作られている。大山Ⅲ期と同様に、竪穴住居は東側のBS I 31・35、中央南側のBS I 17・25、西側のBS I 26の3グループに分けることができる。東側のグループは、中型で方形を呈すもの1棟、小型で方形を呈すもの1棟である。しかし、BS I 31・35は切りあっており、同時に併存していない。中央南側のグループは、小型で方形を呈すもの1棟、不明1棟である。西側のものはBS I 26のみで、平面隅丸五角形・床面積57m<sup>2</sup>と大型で、大山Ⅲ期のBS I 21と同様特別な建物として使用されたものと推定される。

貯蔵穴は、東側グループに密集している。このうち、BS K05はBS I 04に接続している。また、BS K07を中心にしてBS K02・08・06は弧を描くように配置されている。BS K03は底面が長方形を呈し、他のものと異なるが、上種第5遺跡でも同様の形態の貯蔵穴があり、貯蔵穴と判断した。

C-II区では、CS K07が検出されており、この時期の住居が調査区外に存在する可能性がある。

大山Ⅲ期・Ⅳ期は、超大型の多角形住居とそれより小型の住居の構成は同様であるが、Ⅲ期は、おおむね大型住居と小型住居がセットで構成されているが、Ⅳ期では、Ⅲ期に比べてやや小型の住居の構成であり、前時期に比べて集団の勢力の低下が窺われる。

また、貯蔵施設のあり方を見ると、III期・IV期とも共同管理化の傾向が窺われるが、III期のものは住居から離れ散在し、IV期のものは比較的住居に近接し密集している違いがある。

#### [大山V期]

この時期も、B区・C区で集落が営まれている。B区では、5棟の竪穴住居BSI10-3・15・18・20・30-5、BSB03を中心に集落が営まれている。この地区では、標高77m付近の平坦面に大型で隅丸方形を呈すBSI20と、標高72~75mの斜面部に小型で方形を呈すBSI15・18、標高68m付近の急斜面にBSI30-5、標高70m付近の平坦面にBSI10-3、BSB03、標高66m付近の斜面にBSS04がある。

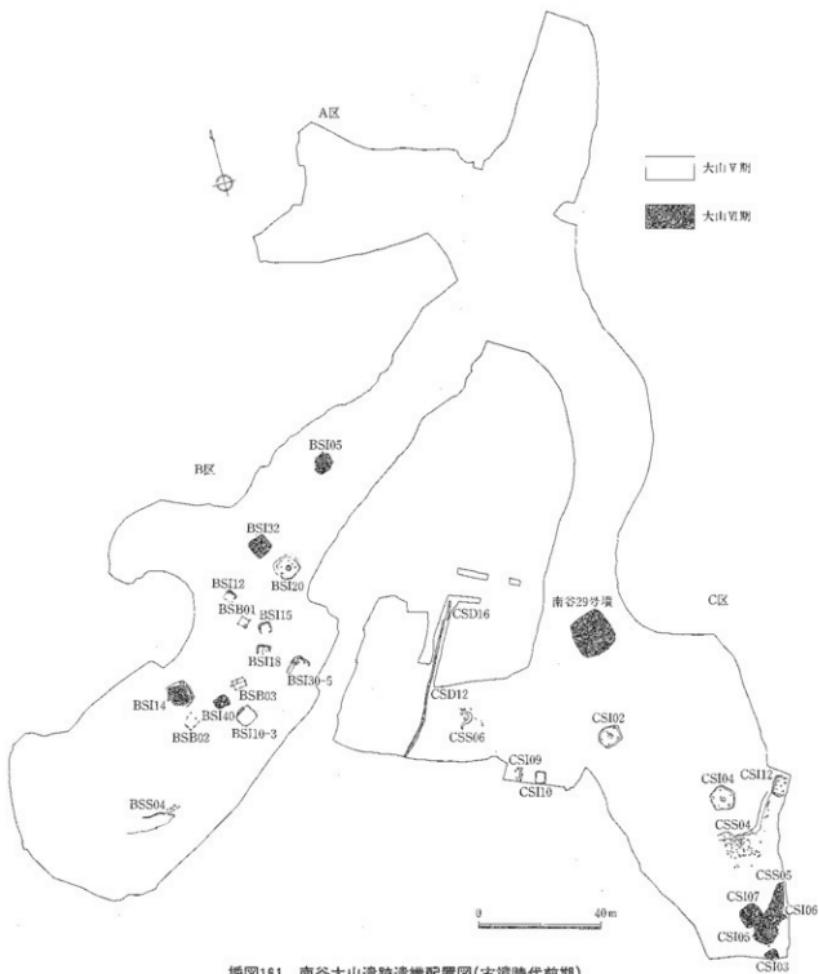


図161 南谷大山遺跡遺構配置図(古墳時代前期)

大型のものは高い位置にあり、小型のものは大型のものからやや離れて位置している。

また、B区では、この時期になって掘立柱建物が現れる。時期がわかるものは、B S B03のみであるが、B S B01・02もほぼ同時期に作られたものと考えてもよいであろう。これらは、主軸がそれぞれ異なっており規則性は見られないが、ほぼ等間隔に配置されている。B区の竪穴住居跡と掘立柱建物跡は立地場所を異にしており、掘立柱建物跡が住居以外の目的で作られたものと考えられる。

C-I区では、竪穴住居は、標高73mの平坦面にあり大型で五角形を呈すC S I 04、東側斜面にあり中型で長方形を呈すC S I 12の2棟が確認されている。

C-II区では、3棟の竪穴住居が確認されている。大型で五角形を呈するC S I 02、隅丸方形を呈すと考えられるC S I 09、方形を呈し小型のC S I 10が作られている。このうち、C S I 02は、斜面を大きく加工して作っており、その構築の際には大掛かりな土木工事がなされている事がわかった。

C-IV区では、急斜面にC S S 06があり、祭祀的な意味合いをもったものと思われる。

大山V期では、大型住居がB区では方形ないし隅丸方形、C区では五角形を呈す。規模的には五角形を呈すものの方がやや大きく、当遺跡内では中心集落がC区に移動していくものと考えられる。また、この時期以降屋外貯蔵穴は見られなくなり、この時期で大きく貯蔵形態が変化している。

#### [大山VI期]

この時期はB区・C-I区で遺構が確認されている。いずれも前時期と比べて集落の規模は極めて小さくなっている。B区では、5棟の竪穴住居が作られる。標高79m付近の平坦面に大型で隅丸方形を呈すB S I 05、標高77m付近の平坦面に大型で方形を呈すB S I 32、斜面には小型で方形を呈すB S I 12、標高69m付近の平坦面に大型で隅丸方形を呈すB S I 14、中型で長方形を呈すB S I 40が作られている。B S I 32にはベッド状造構、また、B S I 14内には、方形プランの屋内貯蔵穴が付設されている。

C-I区では、標高68~69mの平坦面に4棟の竪穴住居が作られている。C S I 05は大型で隅丸五角形、C S I 06は中型で楕円形を呈し、方形プランの屋内貯蔵穴が付設されている。C S I 07は大型で隅丸方形を呈す。これらは重複しているが、C S I 05→C S I 06→C S I 07の順で作られており、同時に併存していない。また、小型で隅丸方形を呈すC S I 03が調査区際で検出されている。また、これらの住居とは離れて、C S S 04・ピット群があり、平地式の住居があった可能性がある。

C-VI区には、一辺約11mの方墳の南谷29号墳があり、居住区と墓域が比較的近接している。

この時期以降、一時期集落の造営が途絶える。

#### [大山VII期]

一時期途絶えた集落が再び営まれるようになる。集落の範囲は、B区の標高65~71mの平坦面、C-V区の谷部にまで及ぶ。B区では、小型で方形を呈すB S I 13-3・13-4が作られ、C-V区ではC S I 18・19が作られている。この時期は、小型住居が主流であるが、C S I 19はこの中では大型である。C S I 19からは、祭祀用と考えられる蛇紋岩製の有孔円盤2個、白玉351個がまとまって出土しており、谷底部の住居の性格を考えるうえで興味深い資料である。また、住居内出土例としては、県内では初めての鉄鋤と考えられる鉄製品が、B S I 13-3から出土しており、集団内で鉄製品(農耕具か)の生産にあたっていたものと推察される。

#### [大山VIII期]

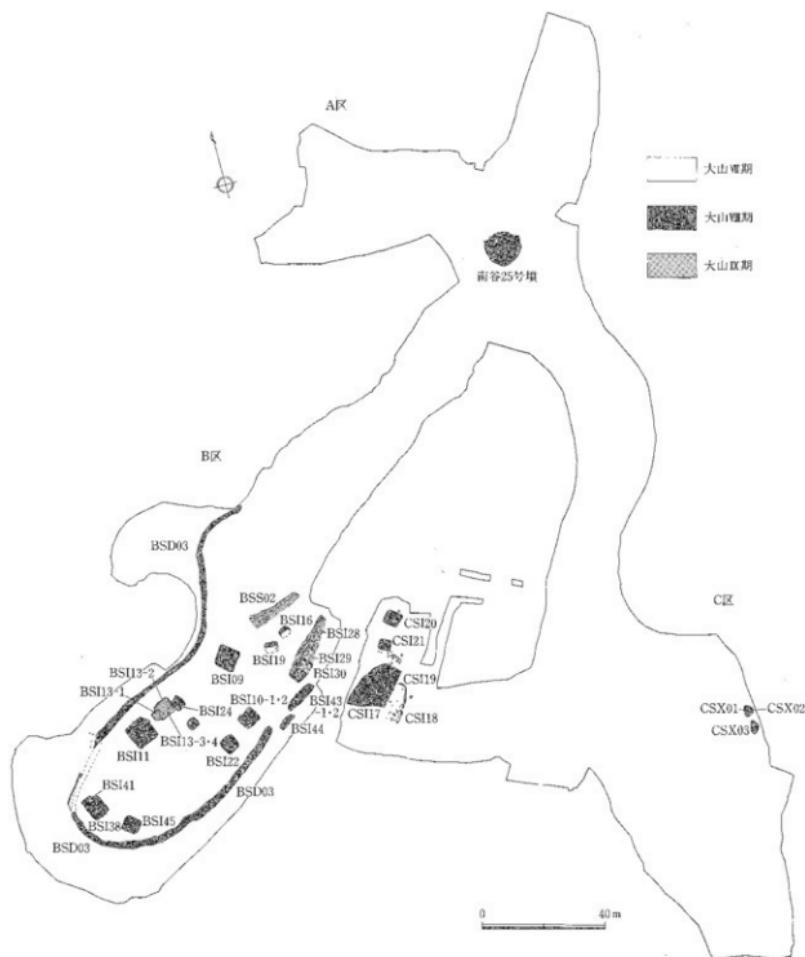
この時期は、集落の規模が大きくなり、B区の標高65~71mの平坦面・斜面、および、C-III区の標高57~60mの谷底部に集落が営まれている。B区では、B S I 09・10-1・10-2・11・16・19・22・24・38・39・41・43-1・43-2・44・45の15棟が作られている。しかし、B S I 11は7回の建て替えがあり、これらは同時に建てられたものではなく、1時期の集落の構成は、数が示すものより若干少なくなる。これらは、方形を呈し大型のもの2棟、方形を呈し中型のもの3棟、方形を呈し小型のもの6棟、隅丸方形を呈し中型のもの2棟、隅丸方形を呈し小型のもの3棟で、方形住居が主流を示す。

なお、この時期の竪穴住居内からは、曲刀鎌・「U」字状鋤（鍬）先など比較的多くの鉄製農耕具が検出されており、南谷大山遺跡の集団が、これらを使用して農耕に従事していたことが推察される。

また、B区の丘陵斜面にはBSD03が掘り込まれており、集落を区画するものと考えられる。

C-V区では、CSI17-1~17-4、CSI20、CSI21が作られている。CSI17は、少なくとも4回の建て替えがあり、同時に併存していない。

C-I・II区では集落はなくなり、古墳・埋葬施設群が作られている。A区の最も高い位置には南谷25号墳、C-I区の標高76~77mの東側斜面には、鎌状の溝をもつ土壙墓CSI02・03が検出されている。



挿図162 南谷大山遺跡遺構配置図(古墳時代中期)

る。その他に小口石を立てる石蓋土壙墓であるCSX01があるが、CSX02に削り取られていることから、若干遡るものと考えられる。

この時期特徴的な遺物は、谷底部のCSI17-4から出土した鋳造鉄斧である。鋳造鉄斧の出土は大変少なく、全国でも數十例が知られるのみであり、県内では3例目、住居内からの出土では初例である。

#### [大山Ⅸ期]

この時期になるとB区にのみ集落が営まれる。堅穴住居は、BSI13-1・13-2・28・29・30-1・30-2・30-3の7棟である。しかし、BSI28・29・30のように3回以上の建て替えが見られることから、大山Ⅷ期同様同時に建てられたものではなく、1時期の集落の構成は、数が示すものより少なくなる。

これらは、方形を呈し中型のもの1棟、方形を呈し小型のもの5棟、長方形を呈し中型のもの1棟で、すべて方形系である。建て替えの住居を見ると、縮小傾向を示すこともⅧ期と同様の傾向である。

大山Ⅷ期では大型の住居が作られ、1時期の集落では最も棟数が多く、集落を区画する溝も作られるなど完成された集落の形態を示す。これに対し、Ⅸ期になると中型の住居と小型住居の構成に変化している。この現象は、集団の勢力の衰えを示しているものと考えられ、この時期以降、この遺跡内では集落は営まれなくなり、小規模ながら古墳群が形成されるようになる。

古墳は南谷古墳群に属し、標高91mの高い位置には、TK10並行期に径約22mの円墳である南谷26号墳が、TK43並行期には標高89mの高い位置に、径約10mの円墳である南谷24号墳、標高68mのやや低い位置に径約10mの円墳である南谷28号墳が作られている。なお、南谷28号墳は横穴式石室が内包されていたものと推察されている。

### 2. 南谷大山遺跡の性格

丘陵上に展開する南谷大山遺跡は、標高60~90mにあり、現在の水田面からの比高差は約58~88mである。南谷大山遺跡は、立地的には広義の高地性集落と考えてよいが、武器等の出土が少なく、また防御施設等が確認されていない事から、瀬戸内地域の高地性集落とは性格が異なるものといえる。

弥生時代の集落からは、漁撈具として使用されたと考えられる土玉が比較的多く検出されている事、また、BSK04からは眼下の東郷池・日本海から獲ったと考えられるヤマトシジミ・カキなどが検出されている事、さらに、磨製石庖丁が出土している事から、稻作および漁撈に従事していたものと推定でき、低地の集落と基本的には共通する生活が営まれていたものと考えられる。

古墳時代中期の集落では、曲刀鎌・「U」字状鉤（鉤）先などの鉄製農耕具が検出されており、やはり農耕に従事していたものと考えられ、弥生時代の集落と基本的には変わらない生活が営まれていたものと推察される。

### 3. 若干の考察

以上、南谷大山遺跡の変遷・性格について述べてきたが、問題となるのは弥生時代と古墳時代の両期をどこに求めるかである。

集落の変化によって時代区分が考えられている青木遺跡では、①住居の平面形がほぼ方形に統一される、②いわゆる特殊ピットが壁際に固定される、③か跡が中央に固定化される、④ベッド状遺構が出現するというあり方から、青木V・VI期をもって古墳時代への両期と考えている。なお、青木V・VI期は庄内（新）並行と考えられている。

しかし、南谷大山遺跡では、青木遺跡のIV期で見られなくなるという多角形住居（五角形）が、大山VII期（青木VII~Ⅷ期並行）まで存続すると共に、方形住居が主流になりつつも、隅丸方形住居が依然として残り続けるという違いがある。また、中央ピットは大山Ⅷ期までは残っており、いわゆる特殊ピットと考えられるものは大山VII期にならないと現れてはいない。このように、鳥取県西部の青木遺跡の集

落の変化と、中部の南谷大山遺跡の変化とは若干異なっていることが指摘できる。

南谷大山遺跡において、集落構成の中で最も変化していることは、屋外貯蔵穴と考えられる土坑が大山Ⅳ期まで姿を消しているということである。屋外貯蔵穴の消失は、生産物の所有形態の変化であり、集団内部での生活様式の変化が見受けられる。

また、土器の様相から見ると、大山Ⅶ期に畿内系（布留式）の土器が出土しており、大きな変化が大山Ⅶ期にあった事が推察される。

このように見ると、南谷大山遺跡の集落構成での変化と、土器の様相の変化はほぼ一致しており、大きな変化が大山Ⅶ期にあり、この時期をもって古墳時代と考えたい。

さて、大山Ⅵ期と大山Ⅶ期との間には、数段階の空白がある事が土器編年で指摘できる。この間の時期には、長瀬Ⅲ期が入るものと考えられる。大山Ⅵ期並行と考えられる長瀬Ⅱ期では、長瀬高浜遺跡が最も繁栄する時期であるのに対し、南谷大山遺跡では、6棟の竪穴住居、南谷29号墳が営まれる程度であり、低地の長瀬高浜遺跡がこの地域の中心集落として発展していったものと考えられる。

天神川下流域の集落の関係を考えると、長瀬Ⅰ期並行と考えられる大山Ⅶ期では、低地には長瀬高浜遺跡が、丘陵上には南谷大山遺跡・南谷ヒシリ遺跡があり、それぞれに別々の集団が存在していたと考えられる。大山Ⅶ期の南谷大山遺跡では13棟、南谷ヒシリ遺跡では3棟の住居が営まれているのに対し、長瀬Ⅰ期の長瀬高浜遺跡では、南谷大山遺跡を上回る32棟の竪穴住居が営まれている。

このように見ると、丘陵上の集落より、長瀬の集団が明らかに優位に立っていたといえる。しかし、集落の構成を見ると、大型の竪穴住居を中心にして、小型の住居が付属するという形は共通している。また、大型の住居の規模も40m前後であり、それぞれの有力層の力関係は均質なものといえよう。

また、丘陵上の南谷ヒシリ遺跡（標高23m）では、この時期に集落に近接して一辺約14mを測る方墳の南谷27号墳が築造されている。

さて、次の時期（長瀬Ⅱ期＝大山Ⅵ期）では、低地の集落と丘陵上の集落とでは、集落の内容・規模において極端な差が現れる。丘陵上の遺跡は、南谷大山遺跡では極端に集落の規模が縮小し、南谷ヒシリ遺跡においては、また、周辺の泊村・宇谷第1遺跡においても、この時期の遺構は確認されていないのである。この現象は、単に自然環境の変化などではなく、何らかの政治的・社会的影響があったものと考えられる。

これに対し、同時期（長瀬Ⅱ・Ⅲ期）の長瀬高浜遺跡では、130棟以上の竪穴住居が作られるとともに、巨大な掘立柱建物跡S-B40など特異な遺構があり、この地域に巨大な権力の集中があったものと考えられる。

丘陵上の集落が極端に縮小し、低地の集落が隆盛を極めるといった現象は、果たしてどういった背景があったのであろうか。古墳時代前期前半の集団間の動向を考えると、南谷大山遺跡をはじめとする丘陵上の集団が、低地の長瀬高浜遺跡の集団に帰属・吸収されたため、長瀬高浜遺跡が、爆発的な発展を見せせるようになったと考えてはどうであろうか。この点については、更に資料の増加をもって検討しなければならない問題である。

さて、長瀬高浜遺跡では、調査された範囲内では、古墳時代中期中葉～後半にかけて集落が廃絶し、古墳が築造されるようになる。

ところが、この時期に、南谷大山遺跡B区・C～V区において、再び集落が営まれるようになる。また、ほぼ同時期には、付近に南谷25号墳・宇野3～9号墳などの古墳が築造され、集落と墓域が近接するあり方を示すようになる。集落と古墳が近接するという状況は、南谷大山遺跡・南谷ヒシリ遺跡のように古墳時代前期から見られるもので、天神川下流域ではこのような状況が一般的なものと考えられる。このように考えると、長瀬高浜遺跡では全く集落がなくなるのではなく、近辺に集落の移動があったと考える方がよいと思われる。

古墳の規模・副葬品等を見ると、径約30mの円墳である長瀬高浜1号墳を筆頭にし、90基からなる長瀬高浜古墳群のものの方が、丘陵上のものに比べてはるかに優位にあり、一貫して長瀬の集団の優位性を裏付けるものといえる。

しかしながら再び南谷大山遺跡に集落が営まれるようになるのであろうか。長瀬高浜遺跡の性格がはっきりとしていないこと、低地での古墳時代中期後半の集落が検出されていない状況では、不明といわざるを得ない。

古墳時代前期～中期にかけての集団の動向については、集落遺跡の調査が丘陵部において見られる程度であり、不明の点が多い。しかし、この地域の古墳の変遷を考えると、ある程度の動向が推察できるものと思われる。

東郷池周辺には大型前方後円墳が累々と築造されており、古墳時代<sup>初期</sup>から中期にかけて、この地域が東伯耆の中心地であったことは、従来の研究からでも明らかである。大型前方後円墳の変遷を見ると、馬ノ山4号墳は長大な堅穴式石室内に4面の鏡と共に多量の石製腕飾類が副葬されており、その時期は、副葬品のセット関係から古墳時代前期でも後半に位置付けられている。宮内狐塚古墳・野花北山古墳は、埴輪の様相から古墳時代中期のものと考えられていることから、時期が下るにつれて橋津（馬ノ山）2号墳→橋津（馬ノ山）4号墳→宮内狐塚古墳→野花北山古墳と、東郷池北部から東側丘陵部を回って南岸に変遷していると考えられている。

時期の経過と共に、古墳時代前期に隆盛を誇った長瀬高浜遺跡から、大型前方後円墳が遠ざかっているという興味深い事実があり、これらの大規模な遺跡の変遷と集落の変遷を合せて考えると、古墳時代前期から中期にかけての東郷池周辺のダイナミックな歴史像が浮かび上がってくるであろう。大胆に想像するならば、古墳時代前期に隆盛を誇った長瀬高浜の集落が、古墳時代中期後半に勢力が衰えると共に分社化の傾向が強まり、こうした状況のもと、再び丘陵上に集落が営まれるようになると考えてはどうであろうか。

従来、天神川下流域では弥生時代中期～古墳時代前期にかけて、丘陵上から低地に集団の移動があったと考えられてきたが、1990年から1993年にかけて行われた南谷大山遺跡をはじめとする丘陵部の調査と長瀬高浜遺跡の調査結果を見る限りでは、そのような集団の移動と考え得る資料はなく、むしろ、丘陵部・低地にはそれぞれ異なる集団が存在していたものと推察されるのである。しかし、古墳時代前期後半には、急速に力をもってきた低地の集団に、丘陵部の集団が吸収されていく様相が窺われるのである。

また、低地の集団の勢力の衰えから再び丘陵部に集落が営まれるようになると仮定したが、今後資料の増加を待ってさらに検討しなければならない。

以上、1991年度から1993年度にわたって行われた南谷大山遺跡をまとめるにあたって、若干の考察を行ってきたが、不十分な点は否めない。さらに資料の増大に期待すると共に、今後の課題としたい。

## むすびにかえて

南谷大山遺跡の発掘調査は、1991年～1993年にかけて行われ、原始・古代の集落のほぼ全容が明らかとなった。羽合町内では、長瀬高浜遺跡以来の大規模な発掘調査であったが、関係各位のご協力により、ここに、ようやく1993年度調査の報告書をまとめることができた。本報告書は、事実記載に力点を置き、報告の責を果たすよう努めたつもりである。本報告書に収めた内容が、研究の一助となれば幸いである。最後に、調査の実施、報告書の作成にあたり、指導・協力・助言をいただいた各位に深く感謝申し上げたい。

## 註・参考文献

- 註 1 羽合町教育委員会『羽合町内遺跡発掘調査報告書』1989
- 2 羽合町教育委員会『羽合町内遺跡詳細分布調査報告書(乳母ヶ谷、大山所在遺跡群)』1991
- 3 烏取県教育文化財団『南谷大山遺跡・南谷ヒシリ遺跡・南谷22・24~28号墳』1993
- 4 新日本海新聞社『鳥取県大山百科事典』1984
- 5 羽合町『羽合町史』前編 1967
- 6 東郷町『東郷町史』1987
- 7 烏取県教育研修センター『天神川流域とその周辺』1983
- 8 稲田孝司『旧石器集団の行動軌跡』『古代史復元 旧石器人の生活と集団』講談社 1988
- 9 烏取県埋蔵文化財センター『旧石器・绳文時代の鳥取県』1988
- 10 倉吉市教育委員会『高岸2号墳(瀬手2号墳)発掘調査報告書』1982
- 11 倉吉市教育委員会『伯耆国序跡発掘調査概報(第3次)』1975
- 12 倉吉市教育委員会『中尾遺跡発掘調査報告書』1992
- 13 倉吉市教育委員会『立絆遺跡群 取木遺跡・一反半田遺跡発掘調査報告書』1984
- 14 烏取県教育文化財団『南谷ヒシリ遺跡・南谷夫婦塚遺跡・南谷19~23号墳・乳母ヶ谷第2追跡・宇野3~9号墳』1991
- 15 烏取県教育文化財団『圓山西遺跡・圓7号墳・原第2遺跡』1993
- 16 北条町教育委員会『鳥遺跡発掘調査報告書第1集』1983
- 17 名越勉『原始・古代』『倉吉市史』1973
- 18 倉吉市教育委員会『津田峰遺跡発掘調査報告書』1986
- 19 東伯町教育委員会『森藤第1・森藤第2追跡発掘調査報告書』1987
- 20 関金町教育委員会『横峯遺跡発掘調査報告書』1986
- 21 山陰考古学研究所『山陰の前朝古墳文化の研究I』1978
- 22 山陰中央新報社『さんいん古代史の周辺ー上ー』1978
- 23 烏取県教育文化財団『久古第3追跡・貝田原遺跡・林ヶ原遺跡発掘調査報告書』1984
- 24 烏取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』II~VI 1981~1983
- 25 北条町教育委員会『北尾追跡発掘調査報告書』第1集 1987
- 26 治村『治村註』1989
- 27 米子市教育委員会『日久美遺跡』1986
- 28 佐々木謙他『倉吉福庭遺跡』1970
- 29 烏取県教育委員会『東郷町大鼻遺跡』『埋蔵文化財発掘調査概報』1973
- 30 烏取県教育文化財団『宇谷第1遺跡・南谷大ナル遺跡発掘調査報告書』1992
- 31 烏取県埋蔵文化財センター『弥生時代の鳥取県』1985
- 32 名越勉・甲斐忠彦『鳥取県東郷町出土の小銅鐸』『考古学雑誌』第59巻2号 1973
- 33 烏取県教育委員会『鳥取県文化財調査報告書第1集』1960
- 34 倉光清六『伯耆八幡町銅鐸出土遺跡』『考古学雑誌』第23巻4号 1933
- 35 倉吉市教育委員会『上米積遺跡発掘調査報告書II-阿弥大寺地区-』1980
- 36 東森市良『四隅突出型埴丘墓』ニューサイエンス社 1989
- 37 北条町教育委員会『土下古墳群発掘調査報告書第1集』1983
- 38 北条町教育委員会『曲古墳群発掘調査報告書』1981
- 39 烏取県教育文化財団『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』IV 墳輪編 1982
- 40 東郷町教育委員会『津浪遺跡発掘調査報告書』1974
- 41 東郷町教育委員会『佐美4・13号墳発掘調査報告書』1979
- 42 原田雅弘『治村出土の子持勾玉』『鳥取埋文ニュース』23 1989
- 43 倉吉市教育委員会『大宮古墳発掘調査概報』1979
- 44 近藤哲雄『東伯耆における横穴式石室の様相』『鳥根考古学会誌』第4集鳥根考古学会1987
- 45 東郷町教育委員会『片平5号墳発掘調査報告書』1977
- 46 烏取県教育委員会『鳥取県装飾古墳分布調査概報』1981
- 47 梅原未治『因伯二国に於ける古墳の調査』『鳥取県史跡勝跡調査報告書』第二冊 1924
- 48 羽合町教育委員会『馬ノ山古墳群』1961
- 49 治村教育委員会『圓古墳群発掘調査報告書』1990
- 50 烏取県教育委員会『鳥取県生産遺跡分布調査報告書』1984
- 51 真出廣幸『伯耆国大御堂廃寺考』『山陰考古学の諸問題』1986
- 52 真田廣幸『奈良時代の伯耆国に見られる軒瓦の様相』『考古学雑誌』66-2 1980
- 53 倉吉市教育委員会『史跡大原廃寺跡第2次発掘調査概報』1988  
倉吉市教育委員会『史跡大原廃寺跡第3次発掘調査概報』1991
- 54 倉吉市教育委員会『伯耆国序跡発掘調査概報』第3次・第5次・第6次 1975~1978
- 55 倉吉博物館『伯耆国分寺』1983
- 56 倉吉市教育委員会『伯耆国分尼寺発掘調査概報』1973
- 57 佐々木謙・龜井黒人『原始古代編』『鳥取県史』1鳥取県 1972
- 58 羽合町教育委員会の御好意により、「天正14年河村郡

- 南谷田畠地続全図』を拝見させていただいた。
- 59 羽合町教育委員会『南谷貝塚発掘調査報告書』1991
- 60 田辺昭三『陶邑古窯址群I』 平安学園考古クラブ  
1966  
田辺昭三『須恵器大成』 角川書店 1981
- 61 山本清『山陰の須恵器』鳥根大学開学10周年記念論文集』人文科学編 1960
- 62 山本清『山陰の土師器』『山陰文化研究紀要』6号島根大学 1965  
東森市良・前島己基・松本雄基『弥生式土器集成』『八雲立つ風土記の丘研究紀要』I 1978  
その他にも以下のような研究成果がある。  
房宗寿雄『「山陰地域」における古墳形形成期の様相』『鳥根考古学会誌』第1号 1984  
赤沢秀則『出雲地方古墳出現前後の土器編年私案』『松江考古』第6号 1985  
花谷めぐむ『山陰古式土師器の形式学的研究』『鳥根考古学会誌』第4号 1987
- 63 米子市教育委員会『福市遺跡』1968
- 64 鳥取県教育委員会『青木遺跡発掘調査報告書』I~III 1976~1978
- 65 谷口泰子『土器』『岩吉遺跡Ⅱ』鳥取市教育委員会 1991
- 66 土井珠美『鳥取県下の状況』『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について』第18回埋蔵文化財研究会事務局 1986
- 67 薩田雅昭『服部遺跡出土遺物の諸問題』『倉吉市服部遺跡発掘調査報告書・遺物編』倉吉市教育委員会 1974
- 68 清水真一『鳥取県長瀬浜遺跡出土の初期須恵器とその時期』『古文化談叢』第15集 九州古文化研究会 1985
- 69 高橋謙『土師器の編年中国・四国』『古墳時代の研究』6 土師器と須恵器』 1991
- 70 鳥取県教育文化財団『秋里遺跡』1990
- 71 倉吉市教育委員会『倉吉堂遺跡発掘調査報告書』1985
- 72 大栄町教育委員会『上種第5遺跡発掘調査報告書』 1985
- 73 赤沢秀則氏よりご教示して頂いた。
- 74 松本岩雄・大谷晃二『出土遺物(1) 第1主体上方の一括土器』『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』鳥根大学法文学部考古学研究室 1992
- 75 高畑知功『備中地域』『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—』木耳社 1992
- 76 岡山県教育委員会『天神坂遺跡・奥坂遺跡・新屋敷古墳』1983
- 77 次山淳『布留式土器における精製器種の製作技術』『考古学研究』第40巻第2号 1993
- 78 清水真一『因幡・伯耆地方』『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—』木耳社 1992
- 79 岡村秀典『鉄製工具』『弥生文化の研究5 道具と技術 I』雄山閣 1985
- 80 古瀬清秀『農耕具』『古墳時代の研究8 古墳II副葬品』雄山閣 1991
- 81 都出比呂志『農具鉄器化の初段階』『日本農耕社会の成立過程』岩波書店 1989
- 82 岡崎敬『铸造梯形鉄斧』『沖ノ島』1979
- 83 平井勝『铸造铁斧』『殿山遺跡・殿山古墳群』岡山県教育委員会 1982
- 84 鳥取県教育文化財団『里仁古墳群』1985
- 85 村川行弘『会下山遺跡出土の鉄器について』『たたら研究』12号 1965
- 86 川越哲志『弥生時代の铸造鉄斧をめぐって』『考古学雑誌』65巻4号 1980
- 87 杉山秀宏『古墳時代の鉄器について』『櫛原考古学研究所論集』8 1989
- 88 東潮『鉄鋤の基礎的研究』『櫛原考古学研究所紀要考古学論稿』第12集 1987
- 89 東潮『鉄素材論』『古墳時代の研究5 生産と流通II』雄山閣 1991
- 90 米子市教育委員会『陰田』1984
- 91 淀江町教育委員会『福岡小真石清水遺跡発掘調査現地説明会資料』1993
- 92 鳥取県教育文化財団『湖山第1遺跡』1989
- 93 名越勉『東伯耆の古墳文化』『歴史手帳』7巻4号 1973

遺物番号	出土地点	器種類	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
P o 1	床面	甕	①15.8cm ②7.7cm ③3.2	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は、下垂する。 などらかな肩部を持つ。	外面…口縫部平行状一端ナデなし。 肩部形状が施され、一部ナデされる。 内面…口縫部ナデ。 腹部側出部は左下方ケズリ。	密 (1~2mm 大的砂粒を含む。)	良好	内外面とも よい黄褐色	O-4
P o 2	埋土下層	甕	①14.5cm ②5.2cm ③3.0	口縫部は肉厚で、外反して立ち上がる複合口縫。端部は引き出される。 口縫部下端は既く下垂する。	外面…口縫部平行状後一端ナデ消し。 端部形状が施され、一部ナデされる。 内面…口縫部ナデ。 腹部側出部は左下方ケズリ。	密 (0.5~1mm 程度の石英、 砂粒を含む。)	良好	内外面とも よい黄褐色	T-4
P o 3	埋土上層	甕	①14.2cm ②4.2cm ③3.3	口縫部は肉厚で外反気味に立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は既く屈曲する。	外面…ヨコナヂ。 内面…口縫部ヨコナヂ。 腹部以降下ズリ。	密 (2mm程度 の石英含む。)	良好	内外面とも 良色	口縫部外面ス 太有り S-22
P o 4	床面	瓶	② 2.4cm ④ 3.5cm	平底を呈す直底。	外面…直角方向ケズリ。 内面…上方方向ケズリ。	密 (1~2mm 大的石英、砂 粒を含む。)	良好	内外面とも よい黄褐色	外腹ス付着 底面へラ記号 O-8
P o 5	埋土下層	甕	② 2.1△ ④ 14.4cm	大きく「ハ」字に刻まれた体部。端部 は丸い。	内外面ともナヂ。	密 (1~3mm 大的石英含 む。)	良	内外面とも明 黄褐色	O-7

遺物番号	出土地点	器種類	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
P o 1	床面	甕	①17.4cm ②5.7cm ③3.6	口縫部は厚手で、外反して立ち上がる複合口縫。端部は外方へ折れ、丸い。口縫部下端は既く引き出される。	外面…黒化著しい。ナヂ。 内面…黒化著しい。口縫部ナヂ。 腹部以下右方向ケズリ。	やや粗 (0.3~ 1.0mm程度の 砂粒、1.0~ 3.0mm程度の 石英含む。)	不良	内外面にも よい黄褐色	I-3
P o 2	P3内	甕	①15.2cm ②3.7cm ③3.4	口縫部は外反して立ち上がる複合口縫。端部は平底両ともつ。口縫部下端は既く引き出される。	外面…ともに、ヨコナヂ。 内面…ヨコナヂ。	やや粗 (1mm 以上の石英、 砂粒を含む。)	良	内外共に、黄 褐色	S-15
P o 3	床面	甕	①15.0cm ②4.7cm ③3.2	口縫部は厚手で、外反して立ち上がる複合口縫。端部は引出される。 口縫部下端は既く突出する。	外面…黒化著しい。ナヂ。 内面…黒化著しい。口縫部ナヂ。 腹部以下突起。	やや粗 (1~ 2mmの石英含 む。)	やや不良	内外共、褐色	S-16
P o 4	床面	甕	①13.9cm ②4.8cm ③3.6	口縫部は厚手で、外反して立ち上がる複合口縫。端部は平底両ともつ。 口縫部下端は既く突出する。	外面…ヨコナヂ。 内面…ヨコナヂ。 腹部以降下ズリ。	密 (0.2~1.0 mm程度の砂 粒、石英含む。)	良	内面…灰褐色 外面…灰白色	外腹ス付着 I-1
P o 5	埋土下層	甕	①15.4cm ②4.3cm ③3.7	口縫部は厚手で、外反して立ち上がる複合口縫。端部は既く引出される。 口縫部下端は既く突出する。	外面…口縫部工具によるヨコナヂ。 内面…口縫部ヨコナヂ。	密 (石英を多 く含む。)	良好	内外共、褐 褐色	F Y-2
P o 6	埋土上層	甕	①16.5cm ②5.3cm ③3.7	口縫部は厚手で、外反して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は既く引出する。	外面…内外共にヨコナヂ。	密	良好	内外共、褐 褐色	Y-2
P o 7	埋土下層	甕	①17.8cm ②4.2cm ③3.2	口縫部は厚手で、わざかに外反して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は既く下垂する。	外面…口縫部平行状後ナヂ消し。 腹部ヨコナヂ。 内面…口縫部ヨコナヂ。 腹部側出部以降右ケズリ。	やや粗 (0.5~ 1.5mm程度の 砂粒、石英含 む。)	良	内面…に よい黄褐色 外面…明黄褐 色	口縫部外面ス 太有り I-2
P o 8	埋土上層	甕	①19.2cm ②5.8cm ③3.7	口縫部は厚手で、外反して立ち上がる複合口縫。端部は平底両ともつ。口縫部下端は既く下垂する。	外面…口縫部底部強熱による形状変 化後、一部ナヂ消し。 腹部に施されるヨコナヂ。 内面…口縫部ヨコナヂ。 腹部側出部以降左下方ケズリ。	密 (1~2mm の石英を含 む。)	良好	内外共、褐 褐色	Y-3
P o 9	床面	高杯	②10.7cm ④14.4cm	肩部は柱状で、腹部で大きく聞く。 端部は内縮する面をもつ。	外腹…ヨコナヂ。 腰部は既く引出される。 内面…肩部ヨコナヂ。 腹部側出部以降左下方ケズリ。	密 (1mm以下 の砂粒を多く 含む。)	良好	内外共、淡 褐色	肩部外面底 有 S-12
P o 10	床面	鼓形器	①24.0cm ②13.1 ④20.8cm	口縫部は複合口縫状を呈し、大き く外反して開き、口縫部付近で厚壁を 持す。端部は丸い。 肩部は想い。 脚部は、上台面に比較して高く、複合 口縫部を呈し、大きく聞く。端部部分 近くで肥厚する。	外腹…ヨコナヂ。 内面…口縫部一筋脚ケズリ後ナヂ。 腹部右方向ケズリ。	密 (1mm前後 の砂粒を含 む。)	良好	内外共に黄 褐色	S-17
P o 11	床面	鼓形器	② 3.7cm ④ 17.8cm	肩手で、やや高い鼓形器台脚部と おわれる。端部は丸い。	内外面ともにナヂ。	やや粗 (小 さな砂粒を含 む。)	やや不良	内外共、淡 黄色	N-15
P o 12	P3内	低脚杯	② 1.9cm ④ 7.6cm	低く、タッパ状に大きく聞く低脚杯 脚部。	内外共に、ヨコナヂ。	やや粗 (1mm 大の砂粒を含 む。)	やや不良	内外共に、 淡黄褐色	N-14
P o 13	床面	甕	①24.6cm ②10.2cm	内側外に立つ瓶底。瓶底は外方へ 削れ平底面をもつ。	内面…ケズリ後ナヂ。 外面…黒化著しい。	粗 (3mm大の 砂粒を多く含 む。)	やや不良	内外共に、 褐色	N-16
P o 14	床面	甕	①41.4cm ②12.5cm	ラノ状を呈す窓と思われる。端部 は丸い。	外腹…黒化著しく断続不 整。 内面…瓶底より既 に削付ナヂ。	やや粗 (5mm大の 石英を含む。)	良好	内外共に、 褐色	S-18

挿表 7 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (1)

P o 15	土器底	茎	①17.2mm ②7.6△ ③3.8	口縁部は外反して立ち上がる複合口縫。端部は先端りしきい。口縫部下端は斜く突出する。	外面…風化著しい。ナヂか。内面…ヨコナデ。	やや粗(1~4mmの石英・長石を含む。)	良好	内外面とも浅黄色	S-11
P o 16	土器底	茎(洞部)	②15.0△	やや長い頭部-球形を呈す頭部の瓶片。	外面…深部ヨコナデ。内面…頭部の平行沈積の間に、波状又がきされる。内面…深部ヨコナデ。内面…頭部指揮と抜く方向ケズリ。以下に直角ケズリ。	やや粗(1~2mmの砂粒・玉砂を多く含む。)	やや不良	内面…浅黄色～褐色 外面…深黄色	S-12
P o 17	土器底	茎	①16.4mm ②15.8△ ③3.8	口縫部は外反気味に立ち上がる複合口縫。端部は片割れをもつ。口縫部下端は斜く突出する。肩部はなだらかで倒影形を呈す。	外面…(1)頭部ヨコナデ。内面…頭部の平行沈積の間に、波状又がきされる。内面…頭部ヨコナデ。頭部以下直角ケズリ。	やや粗(1mmの砂粒を多く含む。)	やや不良	内外面共、所 在褐色	N-11
P o 18	土器底	茎	① 8.7 ②12.8△ ③ 3.4	口縫部は肉厚で、口縫部は外反気味に立ち上がる複合口縫。端部は平和面をもつ。口縫部下端は斜く突出する。頭部は頭部形を呈す。	外面…(1)頭部ヨコナデ。内面…頭部ヨコナデ。頭部以下直角ケズリ。	粗(0.5~1mmの石英を含む。)	良好	内外面共に よい黃色	F Y-3
P o 19	土器底	茎	①20.0 ② 8.1△ ③ 4.2	口縫部はあく外反して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端はわざかに下垂し、丸味をもつて頭部は頭部形を呈す。	外面…ヨコナデ。肩部に沈積。内面…(1)頭部ヨコナデ。頭部以下直角ケズリ。	粗(1~2mmの石英・小石を含む。)	良好	内外面共、褐 色	O-3
P o 20	土器底	茎	①19.0mm ② 6.7△ ③ 3.7	口縫部は肉厚で、外反して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は斜く突出する。	外面…黒化のため調節不明。内面…頭部ヨコナデ。頭部以下左方向ケズリ。	やや粗(1~2mmの石英及び雲母を含む。)	良好	内外面共、黃 褐色	S-1
P o 21	土器底	実	①14.8mm ② 8.4△ ③ 3.2	口縫部は外反して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は斜く引き出される。肩部はなだらか。	外面…頭部ヨコナデ。頭部以下左方向ケズリ。	粗(1~4mmの大石英を多く含む。)	やや不良	内面…棕色 外面…褐色～黑褐色	S-4
P o 22	土器底	茎	①13.8mm ② 6.7△ ③ 3.5	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は平和面をもつ。口縫部下端は斜く突出する。	外面…ヨコナデ。内面…口縫部ヨコナデ。頭部以下直角ケズリ。	やや粗(1mmの砂粒を含む。)	良好	内外面とも棕 色	N-13
P o 23	土器底	茎	①18.2mm ② 4.4△ ③ 3.7	口縫部は肉厚で外傾して立ち上がる複合口縫。端部は先端りしきい。口縫部下端は斜く突出する。	内面…ヨコナデ。	やや粗(1~3mmの大石英・長石を含む。)	良好	内外面とも浅 黄色	外面ス付普 S-8
P o 24	土器底	茎	①14.2mm ② 2.3△	外反気味の「く」字状口縫部をもつ。端部は丸い。	外面…ヨコナデ。内面…(1)頭部ヨコナデ。頭部以下ケズリ。	やや粗(1mmの砂粒を多く含む。)	良好	外面…によい 褐色～黑色 内面…によい 褐色	外反ス付普 CSB2貼版下 出土のものと 接合 S-9
P o 25	土器底	茎	①16.4mm ② 3.0△ ③ 2.4	口縫部はやや内厚で、外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は斜くわずかに下垂する。	外面…ヨコナデ。内面…頭部ヨコナデ。	やや粗(2mm前後の石英を含む。)	良	外面…棕色 赤褐色 内面…浅い黃 褐色	S-3
P o 26	土器底	茎	①17.4mm ② 3.1△ ③ 2.7	口縫部は肉厚で、程よく外傾して立ち上がる複合口縫。端部はない。口縫部下端は斜くわざかに下垂する。	内面ともヨコナデ。	粗(1mmの大石英・黒雲母を含む。)	良好	内外面とも黃 褐色	S-7
P o 27	土器底	茎	①16.6mm ② 7.2△ ③ 3.9	口縫部は外反気味に立ち上がる複合口縫。端部はない。口縫部下端は斜く突出する。肩部はなだらか。	外面…口縫部平行沈積後一部ナヂ消 し。内面…頭部下端と下方尚ケズリ。頭部平行沈積が施される。	やや粗(2mmの大石英を含む。)	不良	内外共褐色	S-2
P o 28	土器底	底部	② 3.7△ ④ 5.2	手縫を尾す底部。底壁は薄い。	外面…一方尚ケズリ。内面…頭部下端と下方尚ケズリ。底部平行沈積が施される。	粗(1~2mmの石英・砂粒を含む。)	良好	内外面共に よい黃色	外反側面あり O-2
P o 29	土器底	低脚杯	①13.2mm ② 6.7 ④ 7.2△	脚部は深く椀状を呈し、脚部は太く短い立脚状を呈す。	外面…一時代のため調節不明。ナヂか。内面…(1)頭部1本をヨコナデ。脚部指揮岸根残る。	粗(少よりの砂 粒を含む。)	やや粗	内外面共、明 顯褐色	Y-1
P o 30	土器底	低脚杯	①13.2mm ② 5.4△ ④ 5.8	やや深い体部に、「ハ」字状に開くやや高めの脚部がつく。	外面…ヨコナデ。内面…黒化のため調節不明。ナヂか。	粗	良好	内外面共に よい黃色	F Y-1
P o 31	土器底	脚	② 6.9 ④ 5.8△	深く、内溝気味に開く体部に、平底をもつ。端部は丸い。	外面…ヨコナデ。内面…ケズリ後ナヂ。底部指揮岸根残る。	粗(1~3mmの石英・砂粒を多く含む。)	良好	内外面共に よい棕色	外表面有 O-1

插表 8 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (2)

遺物番号	出土地点	器種類	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
P o 1	埋土上層	甕	①19.6 ②10.2 ③ 3.7	外反気孔に立ち上がる複合口縫を有する。端部は丸い。下端は外方へ突出し、底部へ至る。	外面…ヨコナデ。内面…口縫から頸部、ヨコナデ。頸部指輪状・横残る。	密 (1~2mm 大的砂粒を含む。)	良好	内外面赤、浅黄褐色	N-8
P o 2	埋土上層	甕	①13.6 ②13.6 ③ 2.7	外反気孔には立ち上がる複合口縫をもつ。端部は切妻形をもつ。口縫部下端は外方へ突出し、底部は球形を呈すものと思われる。	外面…口縫と頸部、ヨコナデ。肩部に平行彫れ。横窓、側窓かいひヶき。 内面…口縫一部、ヨコナデ。頸部以下右方向でいねいなケズり。	密 (1~3mm 大的砂粒を含む。)	良好	内面…浅黃褐色 外側…淡黃褐色 —橙色	外曲ス付青 N-9
P o 3	埋土上層	甕	①15.2 ② 5.3 ③ 3.1	外反気孔に立ち上がる複合口縫をもつ。端部は丸く、口縫部下端は丸く、外方へ突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	やや粗 (1mm 大的砂粒を含む。)	良	内外面赤、淡黃褐色	N-6
P o 4	埋土下層	甕	①16.6 ② 4.2 ③ 3.3	外反気孔に立ち上がる複合口縫をもつ。端部は丸く、口縫部下端は丸く、外方へ突出する。	内面裏ともヨコナデ。	密	良好	内外面赤、淡黃褐色	外曲面に風痕 有 外曲ス付青 N-1
P o 5	埋土下層	甕	①13.4 ② 5.6 ③ 2.5	外反気孔に立ち上がる複合口縫を有する。端部は丸く、口縫部下端は丸く、外方へ突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…ヨコナデ。頸部以下ケズリ。	有 (わずかに 砂粒を含む。)	良好	内外面赤、青い褐色	聯合外曲ス付青 N-4
P o 6	埋土下層	甕	①14.8 ② 3.6 ③ 2.7	外反気孔に立ち上がる複合口縫をもつ。端部は丸く、口縫部下端は丸く、外方へ突出する。	内面裏共にヨコナデ。	有 (ごくわずかに 砂粒を含む。)	良好	内面…淡黃褐色 外側…にじみ 淡黃褐色	口縫部内面無 風痕有 N-2
P o 7	埋土下層	甕	①14.0 ② 3.8 ③ 2.8	外反気孔に立ち上がる複合口縫を有する型。底盤は平底で、口縫部下端は丸く、外方へ突出する。	内面裏共、ヨコナデ。	有 (1mm 大的砂粒を含む。)	良好	内外面赤、棕色	N-3
P o 8	埋土下層	高杯	①22.8 ② 4.0	高杯特徴。端部はやや外反し、丸くおさまっている。	外面…ハケ目の後、横方向ミガキ。 内面…横方向ミガキ。	密 (1~2mm 大的砂粒を含む。)	良好	内面…灰黃褐色 外側…棕色	N-10
P o 9	埋土上層	小型丸底盆	① 6.8 ② 5.8 ③ 1.4	やや外反気孔に立ち上がる複合口縫をもつ。大型丸底盆。端部は丸く、口縫部下端は丸く、外方へ突出するが、丸味をもち、底部に平ら。制部は墨跡模様を呈し、最大径を中央部にもつ。	外覆…口縫部ヨコナデ。 頸部以下横方向ミガキ。底部付近横方向ハケ目。 内面…口縫一部、横方向ミガキ。 底部以下横方向ミガキ。	密 (1~2mm 大的砂粒を含む。)	良好	内外面赤、淡黃褐色	ス付青 N-7

遺物番号	出土地点	器種類	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
P o 1	床面	甕	①17.4 ② 5.2 ③ 2.3	口縫部は外反気孔に内縮する複合口縫を呈す。底部は内收するやや突出する。端部は丸く、口縫部下端は丸く、外方へ突出する。	内面裏ともヨコナデ。	密 (0.5~1mm 大的砂粒を含む。)	良好	内外面赤淡黃褐色	S-26
P o 2	床面	甕	①16.5 ② 23.9 ③ 20.9 ④ 3.4 ⑤ 2.8	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸く、口縫部下端は丸く、外方へ突出するが、丸味をもち、底部に平ら。制部は墨跡模様を呈し、最大径を中央部にもつ。表はわざかに平底を呈す。	外面…口縫部ヨコナデ。 胸部肩部底面に向ハケ目後横方向ハケ目が施され、側腹部は側面彫れを呈し、側面部の大径をよりやや下方に持つ。表はわざかに平底を呈す。 内面…口縫部ヨコナデ。底盤付近横方向ハケ目。 中位以下斜方彫り。側面下上方向ケズリ。	密	良好	内外面共棕色	制部外曲ス付青 S-23
P o 3	床面	甕	①14.8 ② 22.5 ③ 2.5	口縫部は外反して立ち上がる複合口縫。端部はわざかに平底を呈す。口縫部下端は丸く、外方へ突出する。制部は側面彫りを呈し、最大径を半位にもつ。	外面…口縫部…底盤ヨコナデ。 制部肩部底面に向ハケ目後横方向ハケ目。 中位以下斜方彫り向ハケ目。 内面…口縫部…底盤ヨコナデ。 底盤周囲部下上方向ケズリ。側面下上方向ケズリ。	密 (1mm 後の砂粒多く含む。)	良好	外面…淡褐色 内面…にじみ 淡褐色	外曲全般ス付青 S-30
P o 4	床面	甕	①16.8 ② 24.4 ③ 22.0 ④ 3.2	口縫部は外方気孔に立ち上がる複合口縫。端部は丸く、口縫部下端は丸く、外方へ突出する。制部は側面彫りを呈し、底盤はわざかに平底を呈す。	外面…口縫部ヨコナデ。 制部肩部底面に向ハケ目。以下横方向ハケ目。 内面…口縫部ヨコナデ。 底盤付近横方向窓残存。	密 (1mm 後の石英を含む。)	やや不良	外面…にじみ 棕色 内面…にじみ 淡褐色	内外面共ス付青 S-32
P o 5	P 4 内	甕	①15.4 ② 21.1 ③ 17.3 ④ 3.9	口縫部は外反気孔に外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸く、口縫部下端は丸く、外方へ突出する。制部は側面彫りを呈し、底盤はわざかに平底を呈す。	外面…口縫部…底盤ヨコナデ。 制部肩部底面指向ハケ目。 内面…口縫部…底盤ヨコナデ。底盤以下ケズリ。	密 (2~3mm 大的砂粒をわざかに含む。)	良好	内外面共に 棕色	制部外曲ス付青 N-50
P o 6	床面	甕	①15.8 ② 22.3 ③ 3.2	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸く、口縫部下端は丸く、外方へ突出する。などなるか部につぶす。	外面…ナデ。底盤はわざかにハケ目の痕。	有 (0.5mm 大的砂粒を含む。)	やや粗	内外面共棕色	N-29
P o 7	床面	甕	①16.9 ② 6.3 ③ 3.8	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸く、口縫部下端は丸く、外方へ突出する。	外面…口縫ナデ。 内面…口縫部…底盤ヨコナデ。制部以下右方向ケズリ。	やや密	良好	内外面共淡黃褐色	外曲ス付青 S-25
P o 8	床面	甕	①17.8 ② 6.8 ③ 3.9	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸く、口縫部下端は丸く、外方へ突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部…底盤ヨコナデ。以下右方向ケズリ。	密	良好	内外面共淡黃褐色	外曲ス付青 S-24

挿表 9 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (3)

P 09	堆土層 表	表	①14.0m ②5.0△ ③3.6	口縫部はほぼ直立する複合口縫。端部は外方へ折れ、外側に平坦面をもつ。口縫部下端は強く突出する。	内外面ともヨコナデ。 内面・ヨコナデ。	密(微砂含む。)	良好	外面部灰褐色 内面部にぼい 褐色	N-26
P 010	堆土上層 表	表	①15.0m ②4.6△ ③3.2	口縫部は外側にして立ち上がる複合口縫。端部は外方へ折れ、口縫部下端は強く突出し、丸みをもって彌漫へ至る。	外面部・ヨコナデ。口縫部下端付近化粧面が施される。 内面・ヨコナデ。端部粗面部以下ヨケズリ。	密(微砂含む。)	良好	内外面共にぼい 褐色	N-21
P 011	堆土上層 表	表	①16.6m ②4.4△ ③3.3	口縫部は外側にして立ち上がる複合口縫。端部は外方へ折れ、丸みをもって彌漫へ至る。	外面部・ヨコナデ。 内面・ヨコナデ。端部粗面部以下ヨケズリ。	密(1~2mm 大的の砂粒を含む。)	良好	内外面共浅黃 褐色	N-18
P 012	P 2 内 裏	裏	①16.6m ②6.0△ ③3.4	口縫部は外側にして立ち上がる複合口縫。端部は外方へ折れ、丸みをもって彌漫へ至る。	内外面ともヨコナデ。 内面・ヨコナデ。端部粗面部以下ヨケズリ。	やや粗(砂粒 多く含む。)	やや不良	内外面とも淡 黄色	口縫部外表面 スカベ N-22
P 013	堆土下層 表	表	②4.2△ ④16.8m ⑤3.8	外気風化による外側への複合口縫。端部には内側に肥厚し、平坦面をもつ。口縫部下端は強く突出する。	内外面共ヨコナデ。	密	良好	内外面共褐色 内面部 N-43	口縫部内面に 黒斑
P 014	堆土上層 表	表	①16.7m ②3.3△ ③2.6	口縫部は外気風化に立ち上がる複合口縫。端部は外方へ折れ、丸みをもって彌漫へ至る。	外面部・ヨコナデ。 内面・ヨコナデ。端部粗面部以下右方向ケズリ。	密(0.5mm以下 の砂粒を多く 含む。)	良好	内外面共灰褐色 内面部 S-27	口縫部外表面 スカベ N-19
P 015	堆土上層 表	表	①16.1m ②5.5△ ③3.6	口縫部は外側にして立ち上がる複合口縫。端部は外方へ折れ、丸みをもって彌漫へ至る。	内外面とも風化著しい。ナテカ。	密	やや不良	内外面共浅黃 褐色	口縫部外表面 スカベ N-19
P 016	堆土上層 表	表	①16.4m ②5.1△ ③3.2	口縫部は外気風化に立ち上がる複合口縫。端部は外方へ折れ、丸みをもって彌漫へ至る。	内外面ともヨコナデ。 内面・ヨコナデ。端部粗面部以下左方向ケズリ。	密(砂粒を すかに含む。)	良好	内外面共褐色 内面部 N-25	黒斑有 N-25
P 017	堆土上層 表	表	①15.4m ②4.0△ ③3.2	口縫部は外側にして立ち上がる複合口縫。端部は外方へ折れ、丸みをもって彌漫へ至る。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面共浅黃 褐色	N-20
P 018	堆土上層 表	表	①17.0m ②4.5△ ③3.2	口縫部は外側にして立ち上がる複合口縫。端部は丸みをもって彌漫へ至る。	外面部・ヨコナデ。内面・ヨコナデ。端部粗面部以下左方向ケズリ。	密	良好	内外面共淡黃 褐色	外気スカベ N-17
P 019	堆土上層 表	表	①16.0m ②4.2△ ③2.6	口縫部は外側にして立ち上がる複合口縫。端部は外方へ折れ、丸みをもって彌漫へ至る。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面共褐色 内面部 N-24	口縫部外表面 スカベ N-32
P 020	堆土上層 表	表	①16.6m ②5.7△ ③4.0	口縫部は外側にして立ち上がる複合口縫。端部は押さえられており、口縫部下端は強く突出する。	外面部・ヨコナデ。端部粗面部以下左方向ケズリ。	密(0.5~1mm 大的の砂粒を含む。)	良好	内外面共褐色 内面部 N-34	口縫部外表面 スカベ N-32
P 021	床面 表	表	①15.6m ②5.4△ ③3.5	口縫部は外気風化に立候して立ち上がる複合口縫。端部は押さえられており、口縫部下端は下垂する。	外面部・ヨコナデ。端部粗面部以下左方向ケズリ。	密(砂粒を 多く含む。)	良好	内外面共灰褐色 内面部 N-34	口縫部外表面 スカベ N-34
P 022	床面 表	表	①16.2m ②5.3△ ③3.2	口縫部は外気風化に立候して立ち上がる複合口縫。端部は丸みをもつて外方へ突出する。	外面部・ヨコナデ。端部粗面部以下左方向ケズリ。	密(かかず に残る。) 内面・ヨコナデ。 端部左方向ケズリ。	良好	内外面共褐色 内面部 N-31	外気スカベ N-31
P 023	堆土上層 表	表	①16.2m ②4.6△ ③4.3	口縫部は外側にして立ち上がる複合口縫。端部は丸みをもつて外方へ突出する。	外面部・ヨコナデ。端部粗面部以下左方向ケズリ。	密(0.5mm大的 の砂粒を含む。)	良好	内外面共浅黃 褐色	N-33
P 024	床底内 表	表	①13.4m ②3.1△	やや外側にして立ち上がる複合口縫。端部は外方へ折れ、丸みをもつて外方へ突出する。	外面部・ヨコナデ。端部粗面部以下左方向ケズリ。	密	良好	内外面共褐 褐色	外気スカベ N-33
P 025	堆土上層 表	表	①15.6m ②4.4△ ③3.2	口縫部は手で、外側にして立ち上がる複合口縫。端部は丸みをもつて外方へ突出する。	外面部・ヨコナデ。 内面・ヨコナデ。端部粗面部以下左方向ケズリ。	密(1~2mm 大的の砂粒を含む。)	良好	内外面共にぼい 褐色	口縫部外表面 スカベ N-27
P 026	堆土上層 表	表	①14.6m ②5.7△ ③2.3	口縫部は外気風化に立候して立ち上がる複合口縫。端部は丸みをもつて外方へ突出する。	外面部・ヨコナデ。 内面・ヨコナデ。端部粗面部以下左方向ケズリ。	密(砂粒を含む。)	良好	内面部にぼい 褐色 外面部にぼい 褐色	N-30
P 027	堆土上層 表	表	①15.8m ②8.8△ ③3.5	口縫部はやや外側にして立ち上がる複合口縫。端部は丸みをもつて外方へ突出する。	外面部・ヨコナデ。端部粗面部以下左方向ケズリ。	密(1~2mm 大的の砂粒を含む。)	良好	内外面共褐色 内面部 N-28	口縫部外表面 スカベ N-28
P 028	床面 表	表	①10.6m ②3.4△ ③2.5	口縫部はやや外側にして立ち上がる複合口縫。端部は丸みをもつて外方へ突出する。	外面部・ヨコナデ。端部粗面部以下左方向ケズリ。	密(1~2mm 大的の砂粒を含む。)	良好	内外面共褐色 内面部 N-23	口縫部外表面 スカベ N-23
P 029	堆土上層 底部	底部	② 5.0△ ④15.6m	平底の底部を有する。	外面部・ミガキ。 内面・上方向のケズリ。	やや粗(1~ 3mm大的 の砂粒を含む。)	良好	内外面共にぼい 褐色	外気スカベ N-37
P 030	堆土上層 底部	底部	② 1.7△ ④ 2.4	平底の底部を有する。	外面部・ミガキ。 内面・下方向のケズリ。	やや粗(1~ 3mm大的 の砂粒を含む。)	良好	内外面共にぼい 褐色	N-38
P 031	床面 高杯	高杯	①29.4m ② 6.1△	人きく模様を呈す高杯部、端部は丸みをもつて外方へ突出する。	外面部・下方向ハゲ目後ヨコナデ。 内面・下方向ハゲ目後ヨコナデ。	密(2mm大的 の石粒を含む。)	良好	内外面共黃褐色 内面部 S-31	外気黒斑有 N-35
P 032	堆土上層 高杯	高杯	①16.8m ② 4.5△	深い模様を呈す高杯部と思われる。端部は肥厚し、丸み。	外面部・ミガキ。 内面・ヨコナデ。	密	良好	内面部・淡黃褐色 外面部・褐灰色	外気スカベ P 031と同一 個体。
P 033	床底内 高杯	高杯	①15.1m ② 5.1△	深い模様を呈す高杯部と思われる。端部は肥厚し、丸み。	外面部・ヨコナデ。 内面・端部付近ミガキ。以下ケズリ 後ヨコナデ。	密(1mm大的 の石粒を含む。)	良好	内外面とも褐色 内面部 N-32	外気スカベ P 031と同一 個体。

標表10 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (4)

P o 34	埋土上層	高杯	② 7.7△	杯上半を欠く。底部は丸地をもつ。底部は直線的にわざかに開く。	外側二絆、風化著しく不明。ナデ か?	密	やや不良	内外面共橙色	N - 46
P o 35	埋土下層	舷形器台	② 5.0△ ③ 18.6△	大きく「ハ」字状に開く。舷形器台 脚台部。	内外面共ナデ。	密(微砂粒を含む。)	良好	内外面共お い褐色	N - 48
P o 36	埋土下層	舷形器台	② 3.2△ ③ 18.4△	大きく「ハ」字状に開く。舷形器台 脚台部。	外側一面コナデ。 内面一面半、ケズリ。 下半、ヨコナデ。	密	良好	内外面共淡黃 色	N - 44
P o 37	埋土上層	舷形器台	② 3.6△ ③ 14.2△	大きく「ハ」字状に開く。舷形器台 脚台部。 堆積は内構する面をもつ。	外側一面コナデ。 内面一面半、ケズリ。 下半、ヨコナデ。	密(1mm以下 の砂粒を含む。)	良好	内外面共淡黃 色	S - 29
P o 38	埋土上層	直口夢	① 10.4△ ④ 6.7△ ⑤ 5.0	やや外反気味に立ちちる直口。口 縁部は直線的で、下端は外方へ突出 している。	外側一面に風化著しく不明。 ナデか?	密	不良	内外面共淡黃 色	N - 49
P o 39	床面	底脚杯	② 6.1△ ④ 5.6△	やや歪な様形をもつ。底脚を欠く。 脚部は小さく低い。	外側一面脚部方向にガタが認められ る。 脚部ヨコナデ。	やや粗(微 砂粒を多く含 む。)	良好	内外面共黑色	N - 47
P o 40	埋土上層	小型丸底金	② 4.5△ ④ 9.8△	輪形形を呈す小型丸底金脚部。	外側一面脚部上方による斜突文。 以下後方ケズリ。 内面一面脚方向ケズリ。	密(1~2mm の大砂粒を含む。)	良好	内面…橙色 外側…淡黃褐色	内面ス付青 N - 49
P o 41	床面	小型丸底金	② 4.6△ ④ 11.2△	輪形形を呈す小型丸底金脚部。	外側一面コナデ。脚部に波状紋が施 されている。 内面一面脚部ナデ。脚部以下右方向ケ ズリ。	やや粗(2~ 3mmの大砂 粒を含む。)	良好	内外面共お い褐色	N - 39
P o 42	埋土上層	袖杯	② 21.7△ ③ 5.3△	直立する口縁を有する盤前焼の袖杯。	外側一面回転ナデ。口縁部に2条の凹 溝を有する。 内面一面回転ナデ。体部に縱方向の指 印。	密	良好	内面…明赤 外側…褐色	N - 42
P o 43	埋土七層	土玉	径 2.6 穴径 0.6 重さ 15.8 g	ほぼ球形を呈す。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	橙色	N - 51
P o 44	床面	土玉	径 3.3 穴径 0.9 重さ 29.1 g	ほぼ球形を呈す。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	やや粗(砂 粒を多く含む。)	良好	におい黄褐色	N - 54
P o 45	埋土上層	土鉢	長 3.9 巾 2.6 穴径 0.9 重さ 2.4 g	直筋形を呈し、断面は円形。 中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	橙色	N - 55
P o 46	埋土上層	土鉢	長 4.5 巾 3.8 穴径 0.8 重さ 2.7 g	長筋形を呈し、断面は円形。中心 に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	橙色	N - 56
P o 47	埋土上層	土鉢	長 3.3 巾 2.0 穴径 0.3 重さ 2.9 g	長筋形を呈し、断面は円形。中心 に孔有。	手捏ね成形後ナデ。風化著しい。	粗	やや不良	褐色	N - 59
P o 48	埋土上層	土鉢	長 2.8△ 巾 1.8△ 穴径 0.8 重さ 1.9 g	長筋形を呈し、断面は円形。内縁 部を欠く。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	やや不良	橙色	N - 57
P o 49	埋土上層	土鉢	長 2.8△ 巾 1.8△ 穴径 0.8 重さ 1.3 g	長筋形を呈し、断面は円形。底部 を欠く。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	暗橙色	N - 60
P o 50	埋土上層	土鉢	長 2.4△ 巾 1.0△ 穴径 0.2△ 重さ 1.7 g	長筋形を呈し、断面は円形。内縁 部を欠く。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	やや粗(砂 粒を含む。)	良好	橙色	N - 58
P o 51	埋土下層	甕	① 16.2△ ② 5.6△ ③ 3.2△	口縁部は厚く、外輪する直口。口 縁部は大きい。口縁部下端は直線的 に削す。	外側一面脚部平行沈線が施される。 内面一面脚部横方向ミガキ。 強張り以下左方向ケズリ。	密(1~2mm の大砂粒を含 む。)	良好	内外面とも橙 色	N - 81
P o 52	床面	甕	② 3.9△	複合口縁をもつ。口縁部下端は下端 を削す。	外側一面口縁部波文又は集される。 内面一面口縁部ヨコナデ。	やや粗(2~ 3mmの大砂 粒を含む。)	良好	内外面とも淡 黄色	口縫部外露ス 付青 N - 82
P o 53	P22内	底部	② 1.8△ ③ 5.4△	平底を呈す底部。	外側一面右方向ハケ目。 内面一面左方向ケズリ。	密(砂粒をわ ずかに含む。)	良好	外面…灰黃褐色 内面…にじみ 黃褐色	外露ス付青 N - 85
P o 54	P22内	底部	② 1.5△ ③ 4.2△	平底を呈す底部。	外側一面縱方向ハケ目。 内面一面左方向ケズリ。	密(砂粒を含 む。)	良好	外側…暗黃褐色 内面…にじみ 黃褐色	外露ス付青 N - 84
P o 55	床面	底部	② 1.1△ ③ 3.2△	平底を呈す底部。	外側一面ナデ。 内面一面ケズリ。	密(1~2mm の大砂粒を含 む。)	良好	内外面とも橙 色	N - 83
P o 56	床面	土玉	径 3.2 穴径 0.7 重さ 25.6 g	ややいびつな球形。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	におい褐色	外露黑斑有 N - 85
P o 57	床面	土玉	径 3.4 穴径 0.6 重さ 33.8 g	ややいびつな球形。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	橙色	外露に黒斑有 N - 87

擇表11 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (5)

遺物番号	出土地点	岩種類	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
P 01	床面	夢	①23.8 ②22.0△ ③2.8	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は半埋頭をなし、自縫部下端は端をなし、外方へ突出する。端部は長く肉厚である。右はあまり張らず、左は崩壊してつぶく。	外面…口縫…頭部ナデ。 頭部、波状文及び2条の洗線。 内面…頭部…縫…押縫さえ。 頭部上ナデリ後右方向ナデ。 下平左方向ナデ。	密	良好	内面…淡黄色 — 黒褐色 外面…淡黃色 — 黄褐色	S-65
P 02	埴土上層	甕	①16.2△ ②4.8△ ③3.2	口縫部は外反側時に外傾しながら立ち上がる複合口縫。端部は少しんみをなび、わざかに半埋頭をもつ。口縫部下端は跳き、突出する。肩部は大きく張る。	外面…ヨコナデ。 内面…ヨコナデ。 頭部ケズリ。	密 (1 mm弱の石英・玄武を含む。)	良好	内面…淡青色 外面…付着	口縫部下端ス ス多葉に付着 S-44
P 03	埴土上層	甕	①16.0△ ②7.6△ ③2.5	口縫部は外反気味に立ち上がる複合口縫。端部はえさられ、半埋頭を有する。下端は棱をなし、強く突出する。右縫部は強らゆるやか。	外面…口縫部…肩部ヨコナデ。 内面…口縫…頭部ヨコナデ。 以下右方向ヘラケズリ。	密	良好	内面…淡青黃 棕色	S-55
P 04	埋土下層	甕	①17.2△ ②16.5△ ③23.1 ④2.9	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部はえさられ、半埋頭を有する。下端は棱をなし、強く突出する。右縫部は強らゆるやか。	外面…口縫部ヨコナデ。 頭部ナデ。 頭部横拂引洗線、波状文。 内面…口縫部…頭部押縫。 口縫…頭部ヨコナデ。 頭部…右方向ケズリ。 下平左方向ケズリ。	やや粗 (1- 2 mmの砂粒、 5 mmの大穂を含む。)	やや不良	内面…淡青棕 色 外面…よい 黄褐色	頭部外側、ス ス多葉に付着 S-66
P 05	埋土下層	甕	①16.8△ ②9.5△ ③3.2	口縫部はやや外反気味に外傾して立ち上がる複合口縫。端部は内方に凹進する。左縫部は強らゆるやか。右縫部下端は外方に凹進する。右縫部は強らゆるやか。	外面…口縫部ヨコナデ。 内面…口縫部…頭部押縫。 頭部…右方向ケズリ。	密 (1-2 mmの 石英を多く 含む。)	良好	内面…淡青黃 棕色	S-51
P 06	埋土上層	甕	①15.5△ ②6.5△ ③2.5	口縫部は人字形で、立ち上がる複合口縫。端部は径に押さえられ、半埋頭をもつ。口縫部下端は跳き、突出する。右縫部は強らゆるやか。	外面…ヨコナデ。口縫部下端附近に 2条の洗線が施される。 内面…口縫…頭部ヨコナデ。 以下右方向ケズリ。	密	良好	内面…淡青 色	口縫部、右部 外側スス付着 S-59
P 07	床面	甕	①17.4△ ②21.0△ ③3.0	口縫部は外反気味に外傾して立ち上がる複合口縫。口縫部下端は跳き、突出する。右縫部は強らゆるやか。	外面…口縫部…頭部ナデ。 頭部、胸部洗線並用。 内面…口縫部…頭部ナデ。 肩部右方向ヘラケズリ。	やや粗	不良	内面…淡青黃 棕色	頭部外側ス ス少量付着 S-67
P 08	埴土上層	甕	①13.6 ②3.3△ ③3.2	口縫部は外反気味に外傾して立ち上がる複合口縫。端部は半埋頭をもつ。口縫部下端は跳き、突出する。	内面表面ヨコナデ。	密 (1 mm大的 の石英を含む。)	良好	内面…淡青黃 棕色	S-54
P 09	埴土下層	甕	①16.8△ ②9.3△ ③3.2	口縫部は外反気味に立ち立てる複合口縫。端部は少しあとを含む。右縫部下端は跳き、突出する。	外面…ヨコナデ。口縫部一部斜方面 ナデ。 内面…白縫部ヨコナデ。頭部ケズリ。	密	良好	内面…淡褐色 外面…よい 黄褐色	S-47
P 10	P 3 内	甕	①16.2△ ②3.5△ ③2.9	口縫部はやや外反気味に立ち立てる複合口縫。端部は少しあとを含む。右縫部下端は跳き、突出する。	内面共にヨコナデ。	やや粗 (1 mm の大砂粒を多 く含む。)	良好	内面…淡青黃 棕色	口縫部外側 現有 S-50
P 11	埋土上層	甕	①15.2 ②4.5△ ③2.6	口縫部はやや外傾して立ち上がる複合口縫。端部は少しあとを含む。右縫部下端は跳き、突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…ヨコナデ。頭部以下右方向 ケズリ。	密 (1 mm大的 の石英有。)	良好	内面…淡青棕 色	S-43
P 12	埴土下層	甕	①15.4△ ②6.5△ ③2.7	口縫部は外反気味に外傾して立ち立てる複合口縫。端部は少しあとを含む。右縫部下端は跳き、突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…ヨコナデ。頭部洗線並用。 内面…口縫部ヨコナデ。頭部ケズリ。	密	良好	内面…淡青黃 外面…淡黃色 — 黑褐色	口縫部外側 現有 S-49
P 13	埋土下層	甕	①17.6△ ②5.5△ ③4.6	口縫部は外傾して立ち立てる複合口縫。端部は少しあとを含む。右縫部下端は跳き、突出する。	内面共ともヨコナデ。	密	良好	内面…よい 黃褐色 外面…よい 黃褐色	口縫部外側 現有 S-53
P 14	堆土上層	甕	①15.4△ ②3.3△ ③2.7	口縫部は外傾して立ち立てる複合口縫。端部は半埋頭をもつ。口縫部下端は跳き、突出する。	外面…口縫部波状文が施される。 内面…ヨコナデ。	密 (露骨、鮮 石を含む。)	良好	内面…褪 色 外面…褪 色	口縫部外側 付着 S-60
P 15	埋土上層	甕	①15.5△ ②4.9△ ③3.0	口縫部は外反気味に立ち立てる複合口縫。端部は軽く押さえられ、角ばっている。口縫部下端は跳き、外方へ突出している。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫…頭部ヨコナデ。 頭部以下右方向ケズリ。	やや密	良好	内面…淡黃色 外面…淡黃 色	口縫部外側 現有 S-42
P 16	埴土下層	甕	①17.4△ ②4.3△ ③3.0	口縫部は外傾して立ち立てる複合口縫。端部は少しあとを含む。右縫部下端は跳き、突出する。	内面共にヨコナデ。	密 (3 mm大的 の石英を含む。)	良好	内面…淡青黃 棕色	S-46
P 17	埋土上層	甕	①15.5△ ②3.9△ ③3.1	口縫部は外傾して立ち立てる複合口縫。端部は半埋頭をもつ。右縫部下端は跳き、突出する。	内面共ともヨコナデ。	やや密 (0.5 mm の大砂粒を多 く含む。)	良好	内面…淡黃 色	口縫部外側ス ス付着 S-58
P 18	埋土上層	甕	①16.0△ ②4.3△ ③2.9	口縫部は外傾して立ち立てる複合口縫。端部は半埋頭をもつ。右縫部下端は跳き、突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部ヨコナデ。 頭部以下右方向ケズリ。	密 (2-7 mm の石英を含 む。)	良好	内面…淡黃色 — 褐色 外面…淡黃色	口縫部外側 現有 S-57
P 19	堆土下層	甕	①12.2△ ②4.6△ ③3.6	口縫部はわざかに外傾しながら外傾して立ち立てる複合口縫。端部は半埋頭をもつ。右縫部下端は跳き、突出する。	内面共ヨコナデ。	密 (1-2 mm 人の石英を含 む。)	良好	内面…淡褐色 外面…淡黃色 — 黑褐色	外側ス付着 S-48

擲表12 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (6)

P-020	埋土下層	葉	①14.6cm ②3.7cm ③2.9	口縫部は外側して立ち上がる複合口縫。端部は内方へわざかに屈り、下凹部をもつ。口縫部下端はほく突する。	外縁…口縫部ヨコナデ。 内縁…ヨコナデ。	密 (1mm大の石英有。) 内面…良好	内外曲共彩色	外因スス付着 S-52	
P-021	埋土下層	葉	①16.8cm ②5.3cm ③2.9	口縫部は外側して立ち上がる複合口縫。端部は下凹部をもつ。口縫部下端はほく突する。	外縁…口縫部のみだれた波状文様。一部ナテナデ。 内縁…口縫部方向ミガキ。	密 (1~2mm大の石英を多く含む。) 内面…良好	内外曲共彩色	口縫部外因ス ス付着 S-61	
P-022	床面	底部	②12.2cm	わずかに手浜の底底部。やや肉厚。	外縁…一定方向ケタ後、斜方向にハサ。 内縁…網目、斜方向ヘラカリ。 内縁…斜方ケタ後、ナテナデ。 底面…底正規アリ。	密	内面…浅黄色 外縁…褐色	外因に黒斑有 S-66	
P-023	埋土下層	底部	②12.3cm ③3.7cm	わずかに手浜の底底部。丸みを帯びている。内縁。	外縁…一部部ハケ目。 内縁…一部部…底部斜方ケタリの後…押縫。	密 (1~2mm大の石英を含む。) 内面…良好	内面…黄褐色 外縁…褐色	内外曲共にス ス付着に付着 S-70	
P-024	埋土下層	底部	②9.5cm ④5.0	環形を呈す高杯…底部の破片。底部は不明瞭な底底を呈す。	外縁…斜方方向のハケ目。 内縁…系化のため認識不明。	密 (4mm大の砂粒有。) 内面…良好	内面…淡黃褐色 外縁…淡黃褐色	外因スス付着 S-59	
P-025	埋土下層	高杯	①24.4 ⑤6.6cm	やや深い皿状を呈す高杯杯部。端部付近で大きめ外反する。端部は半圓弧をもつ。	外縁…横方向ミガキ。 内縁…端部付近ヨコナデ。 下凹方向ミガキ。	密	内面…青褐色	外因黒斑有 S-41	
P-026	埋土下層	高杯	①22.4cm ④4.2cm	やや深い皿状の高杯杯部。端部は外反している。	内外曲共にナデ。	密	内面…青褐色	S-71	
P-027	床面	高杯	②11.4cm ②4.0cm	やや深い皿状の高杯杯部。端部は外反し、丸みを帯びている。	内外曲共にナデ。	密	内面…青褐色	S-74	
P-028	埋土下層	高杯	①19.6cm ⑤5.2cm	やや深い皿状の高杯杯部。端部は外反し、平坦面をもつ。	外縁…ミカキ。 内縁…ナデ。	密	内面…褐色 外縁…淡黃褐色	S-76	
P-029	埋土下層	高杯	①20.9cm ④7.7cm	やや深い皿状の高杯杯部。端部は外反し、丸みを帯びている。	内外曲共にナデ。	密	内面…淡黃褐色	S-75	
P-030	埋土下層	高杯	①19.6cm ⑤5.8cm	深い皿状の高杯杯部。端部はやや外反する。	外縁…口縫ナデ。ハケ目。杯部ナデ。 内縁…ミカキ。	密 (砂粒をた くさん含む。) 内面…良好	内面…淡黃褐色	S-72	
P-031	床面	高杯	①17.2cm ②5.5cm	深い皿状を呈す高杯杯部。端部は丸い。	外縁…ヨコナデ後斜めハサ。 内縁…ナデ。	密 (3mm大の石英を含む。) 内面…良好	内面…淡黃褐色 外縁…褐色	外因スス付着 S-64	
P-032	埋土下層	高杯	①15.9cm ④5.7cm	深い皿状を呈す高杯杯部。端部は丸い。	内外曲共にナデ。	密	内面…良好	内外深灰褐色	S-63
P-033	埋土下層	高杯	②3.4cm ④10.6cm	大きく広がる複合部をもつ高杯杯部。	外縁…ミカキ。 内縁…ナデ。ハケ目。	密	内面…良好	内外曲共彩色	S-68
P-034	埋土下層	器部	①19.2cm ②3.1cm ⑤1.7	高く立ち上がる複合部の口縫部をもつ器部上台面と見られる。端部は丸く、下凹部はわざかに下凹する。	外縁…山根部波状紋。 内縁…ナデ。	密 (1~2mm大の石英を含む。) 内面…良好	内外曲共彩色	S-62	
P-035	埋土下層	鼓形器部	①20.2cm ②10.5cm ④17.8	上部は大きく外反して開く。端部はよく伸びて丸みをもつ。横縫部をよく然る。筒部は短く、端部は幅広で平坦面に向く。	外縁…ヨコナデ。上部に波状文。 内縁…上台部先端部。 内縁…斜方ケタリ後ミカキ。 筒部…斜方ケタリ後ナデ。	密 (4mm大の砂粒有。) 内面…良好	内面…橙色 外縁…黃褐色	外因に黒斑有 S-36	
P-036	埋土下層	鼓形器部	①29.9cm ②10.5cm	上部は大きく外反して開く。端部はよく伸びて丸みをもつ。横縫部をよく然る。筒部は短く、端部は幅広で平坦面に向く。	外縁…ヨコナデ。 内縁…上台部方向ケタリ後、丁寧なヨコナデ。 筒部…台面部方向ケタリ。	密 (1~3mm大の砂粒を含む。) 内面…良好	内面…淡黃褐色 外縁…淡黃褐色	S-33 S-38	
P-037	埋土下層	鼓形器部	①20.2cm ②5.3cm	大きく外反して開く鼓形器部上台部。端部はやや外方に斜め。平坦面をもつ。	外縁…ヨコナデ。 内縁…丁寧なヨコナデ。	密 (1mm以下 の砂粒を含む。) 内面…良好	内面…青褐色 外縁…褐色	外因黒斑有 S-35	
P-038	埋土下層	鼓形器部	②6.6cm ④23.6cm	大きく「ハ」字形に開く鼓形器部上台部。端部付近で大きく外反する。端部は幅広で平坦面をもつ。	外縁…ヨコナデ。 内縁…上台部右方向ケタリ。 下部…ヨコナデ。	密 (2mm大の石英を含む。) 内面…良好	内面…青褐色 外縁…黑褐色	黒斑有 S-34	
P-039	埋土下層	小型丸底盤	②4.4cm	裏面を呈する小型丸底盤。約「く」字形に凸凹する頭部が、大きく張る脚部を持つ。	外縁…削痕。横方向斜方のあらいハケ目。 内縁…頭部。ナデ。 脚部左方向ケタリ後指ナデ。	密 (1mm大の砂粒有。) 内面…良好	内外曲共彩色	S-79	
P-040	埋土下層	小型丸底盤	②5.8cm ③12.8	觸頭部を呈する小型丸底盤。	外縁…切削縫方向ケタリ。 内縁…斜方方向ハケ目。以下斜…縫方向ハケ目。 内縁…頭部ナデ。以左下方向ケタリ。	密	内面…良好	内外曲共彩色	S-40
P-041	埋土下層	小型丸底盤	①8.2cm ②2.7cm ⑤1.2cm	口縫は複合口縫部を呈し、わずかに外輪しながら立ち上がる。	内外曲共にナデ。	密	内面…良好	内外曲共彩色	S-78
P-042	床面	低脚杯	①12.5 ②9.3 ④5.3cm	やや深い複合口縫部をもつ低脚杯。端部は丸みを帯びている。端部は大きめに押出している。	外縁…口縫。 内縁…一杯部ハケ目。 内縁…斜方ハケ目。 内縁…口縫部押出。斜方ハケ目。 体部…左方向ケタリ。	密	内面…良好	内外曲共彩色	S-73
P-043	床面	瓶	①26.4cm ②8.7cm	円筒形の体部をもつ瓶と見られる。端部は肉厚で、平底面を有する。体部には焼成跡、火が開けられている。	外縁…口縫。左方向ナデ。 体部…斜方ハケ目。 内縁…口縫部押出。斜方ハケ目。 体部…左方向ケタリ。	やや密	内面…良好	内外曲共彩色	S-77

挿表13 南谷大山遺跡出土遺物観察表(7)

遺物番号	出土地点	器種類	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	輪 士	焼 成	色 調	備 考
P o 1	床面	灰	①19.6 ②20.0 ③25.5 ⑤ 3.0	口縁部は大きく外傾して立ち上がる複合口縁。端部は外反し、平坦面をもつ。口縁部下端は既に突出する。端部は底形を呈すものか。	外縁…口縫部一部ヨコナデ。腹部波状底が施され、以下腰一斜方向ケイド。 内縁…口縫部一部ヨコナデ。腹部以下右方向ケイド。	密 (1mmの大石英・長石を含む。)	やや不良	内外面とも淡黄褐色	網部外側付 日本 S-80
P o 2	埋土層	灰	①18.0 ② 4.4 ④ 2.8	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は底形を呈すものか。	内外面ともヨコナデ。	密 (1mm前後 の砂粒を含む。)	良好	内外面とも淡黄褐色	S-93
P o 3	埋土層	灰	①17.8 ②20.8 ③22.0 ⑤ 3.0	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は底形を呈すものか。	外縁…口縫部ヨコナデ。下縫部付近に2条の凹線。肩部波状底が施され、中位付近横方向ケイド。 内縁…口縫部一部ヨコナデ。腹部以下右方向ケイド。	密 (1mm以下 の砂粒を含む。)	やや不良	内外面とも淡黄褐色	外側ス付 S-105
P o 4	埋土層	灰	①15.6 ② 7.7 ③ 3.4	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は底形を呈すものか。	外縁…口縫部ヨコナデ。 腹部波状底が施され、以下右方向ケイド。	密 (1~2mm の大石英・長石を含む。)	良好	内外面とも淡黄褐色 内面黒斑有 S-103	外側ス付 内面黒斑有 S-103
P o 5	埋土層	灰	①17.4 ② 4.5 ③ 2.7	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は底形を呈すものか。	外縁…ヨコナデ。 内縁…口縫部一部ヨコナデ。腹部以下右方向ケイド。	密	良好	内外面とも淡黄褐色	外側ス付 S-94
P o 6	埋土層	灰	①17.4 ② 5.4 ③ 3.1	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は底形を呈すものか。	外縁…ヨコナデ。 内縁…口縫部一部ヨコナデ。腹部以下右方向ケイド。	密 (1mm以上 の砂粒を多く含む。)	良好	内外面とも淡黄褐色	外側ス付 S-101
P o 7	埋土層	灰	①14.0 ② 4.9 ③ 2.1	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は底形を呈すものか。	外縁…ヨコナデ。 内縁…口縫部一部ヨコナデ。腹部以下右方向ケイド。	密	やや不良	内外面とも淡黄褐色	口縫部外側付 S-107
P o 8	埋土層	灰	①16.4 ② 5.0 ③ 2.7	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は底形を呈すものか。	外縁…ヨコナデ。 内縁…口縫部一部ヨコナデ。腹部以下右方向ケイド。	密	良好	内外面とも淡黄褐色	外側ス付 内面黒斑有 S-95
P o 9	床面	灰	①16.0 ② 5.3 ③ 2.5	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は底形を呈すものか。	外縁…ヨコナデ。 内縁…口縫部一部ヨコナデ。腹部以下右方向ケイド。	密 (1~3mm の大石英・長石を含む。)	良好	内外面とも淡黄褐色	外側ス付 内面黒斑有 S-96
P o 10	埋土層	灰	①16.0 ② 5.6 ③ 3.0	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は底形を呈すものか。	外縁…ヨコナデ。 内縁…口縫部一部ヨコナデ。腹部以下右方向ケイド。	密	やや不良	内外面とも淡黄褐色	外側ス付 S-106
P o 11	床面	灰	①15.2 ② 3.5 ③ 2.3	口縫部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は外反し、平坦面をもつ。口縫部下端は既に突出する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面とも淡黄褐色	口縫部外側付 S-99
P o 12	床面	灰	①15.0 ② 3.8 ③ 2.8	口縫部は外反気味に立ち上がる複合口縁。端部は外反し、平坦面をもつ。口縫部下端は既に突出する。	外縁…ヨコナデ。 内縁…口縫部一部ヨコナデ。腹部以下右方向ケイド。	密	良好	内外面とも淡黄褐色	S-102
P o 13	埋土層	灰	①17.0 ② 4.5 ③ 2.8	口縫部は厚手で、外傾して立ち上がる複合口縁。端部は底形を呈すものか。	外縁…ヨコナデ。 内縁…口縫部一部ヨコナデ。腹部以下右方向ケイド。	密	良好	内外面とも淡黄褐色	口縫部外側付 S-100
P o 14	埋土層	灰	①18.0 ② 4.2 ③ 3.6	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は底形を呈すものか。	外縁…口縫部平行沈降後波状。 内縁…ヨコナデ。	密 (1mmの大 石英・長石を含む。)	良好	内外面とも淡黄褐色	外側ス付 S-104
P o 15	床面	灰	①15.9 ②32.8 ③28.0 ⑤ 2.7	口縫部は厚手で、外傾して立ち上がる複合口縁。端部は底形を呈すものか。	外縁…口縫部ヨコナデ。 内縁…腹部波状底が施され、腹部以下右方向ケイド。	密	良好	内外面とも淡黄褐色	S-108
P o 16	床面	大型甕	①25.6 ②42.9 ③35.1 ⑤ 5.0	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は外反し、平坦面をもつ。口縫部下端は既に突出する。端部は底形を呈すものか。	外縁…口縫部ヨコナデ。 内縁…腹部波状底が施され、腹部以下右方向ケイド。	密	良好	外側…和色 内面…淡黄褐色 内面…暗色	網部外側周 S-80
P o 17	埋土層	高杯	①22.0 ② 5.4△	やや深い底形を呈す高杯形部。端部は外反し。	外縁…ヨコナデ。 内縁…ミガキ。	密	良好	内外面とも淡黄褐色	外側黒斑有 S-88
P o 18	埋土層	高杯	①18.0 ② 4.2△	やや深い底形を呈す高杯形部。端部は外反し、平坦面をもつ。	外縁…ト半ヨコナデ。下平幅方向ミ カギ。 内縁…一様方向ミガキ。	密	良好	内外面とも淡黄褐色	内面黒斑有 S-89
P o 19	埋土層	高杯	①16.4 ② 4.7△	やや深い底形の部をもつ高杯。端部は外反し、平坦面をもつ。	外縁…上半部ヨコナデ。下半部波状方向 ハゲ目。 内縁…ハゲ目後端方向ミガキ。	密	良好	内外面ともよい黄褐色	S-81
P o 20	埋土層	高杯	①18.4 ② 6.1△	高杯形部。やや丸味をもった底部からなるやかに曲曲し、外傾する口縫部をもつ。端部は丸味。	内外面とも横方向ミガキ。	密	良好	外側…淡黄褐色 内面…淡褐色	内面黒斑有 S-87

插表14 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (8)

P o 21	埴土上層	高杯	①14.8cm ②4.8cm	深い墨状を呈する縁部をもつ高杯と思われる。底部は丸い。	内外面ともミガキ。	密（1mm以下 の砂粒を含む。）	良好	内外面ともに よい質感色 —薄褐色	内外面黒帯有 S - 84
P o 22	表面	高杯	② 8.7cm ③ 11.3cm	高杯脚部分、底部は比較的に削り、脚部で大きく広がる。縁部は平坦面をもつ。	外面部—脚部下方ハケ目。 脚部ナデ。 内面部—脚部シボリ目をケズリ来る。 底部ハマ目。	密	良好	内外面とも薄 褐色	内外面黒帯有 S - 86
P o 23	床面	鼓形器台	①20.4cm ②31.0cm ③17.2cm	上部面は複合口跡部を呈し、大きく外反して開き、口縁部で外反、下脚部をもつ。底部は丸い。縁部は上部面より低く、複合口跡部を呈し、大きく開き、底部で大きく開き平坦面をもつ。	外面部—ヨコナデ。 内面部—上部—脚部ケズリ後ナデ。 脚部部方方向ケズリ。	密（1~5mm の大粒石を含む。）	良好	内外面とも薄 褐色	S - 83
P o 24	埴土上層	鼓形器台	①21.8cm ②3.8cm	大きく開き、鼓形器台と上部部、縁部で大きく外反ぞれし、下脚面をもつ。	外面部—ヨコナデ。 内面部—横方向ミガキ。	密	良好	内外面とも褐色	内外面黒帯有 S - 91
P o 25	埴土上層	鼓形器台	①19.4cm ②3.6cm	大きく外反ぞる鼓形器台と上部部、縁部は肥厚し、平坦面をもつ。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面とも質 感色	内外面スス付 S - 85
P o 26	床面	鼓形器台	② 5.3cm ④ 11.0cm	大きく「ノ」字状に開く、鼓形器台 脚部、底部は平坦面をもち、同様 が入る。	外面部—ヨコナデ。 内面部—上半右半方向ケズリ。 下ヨコナデ。	密（1mm以下 の砂粒含む。）	良好	内外面とも質 感色—白目～よい 質感色	内面ヌヌ付青 S - 82
P o 27	埴土下層	鼓形器台	② 3.8cm	鼓形器台の脚部断面、上部部、脚部 とも複合口跡部を呈し、底部は短 い。	外面部—ナデ。 内面部—上部部ナデ。脚部部方方向ケ ズリ。	密	良好	内外面とも暗 赤褐色	内外面黒帯有 S - 90
P o 28	床面	低脚杯	①15.0cm ② 6.7cm ④ 6.2cm	脚部は板状で大きく、底部は丸い。 脚部は大きく開く、底部が大きくなる がる。	外面部—ヨコナデ。 内面部—一杯部下大ヨコナデ。	密（1~2mm の大粒石、長 石を含む。）	良好	内外面とも淡 黄色	S - 92
P o 29	床面	盤	①18.8cm ②25.6	円筒状の体部をもつと考へられる。 上半部に把手を差し込むため穴を もつ。	外面部—縦方向ハケ日。 内面部—左方向ケズリ。	やや湿（2~ 3mmの大粒石 含む。）	良好	外面部—淡黄 色 内面部—淡黄 色—褐色	外面部黒帯有 S - 192

遺物番号	出土地点	器種類	法算(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
P o 1	床面	壺	①14.0cm ②10.5cm ③ 2.4	口縁部は外反気味に外側しながら立ち上るかの複合口縫。底部はわすかに見えさせられている。下部は純く実ら、肩部はあまり張らない。	外面部—口縫ヨコナデ。 肩部縫方ハケ目段横方向ハケ目。 以下脚部ハケ目。 内面部—口縫部—脚部ヨコナデ。 脚部部下右方向ケズリ。	密（砂粒を含む。）	良好	内外面とも淡 褐色	内外面律部に 黒斑 N - 70
P o 2	床面	壺	①12.6cm ② 6.4cm ⑤ 2.5	口縫部は外反気味に外側しながら立ち上るかの複合口縫。底部は丸みを帯びており、口縫部下端は強く突出する。	外面部—ヨコナデ。 内面部—口縫—頭部ヨコナデ。 脚部以下右方向ケズリ。	密	良好	内外面とも淡 褐色	N - 71
P o 3	埴土下層	壺	①17.4cm ② 3.3cm ⑤ 2.9	口縫部外反気味に立ち上がる複合口縫。底部はささえられており、下端は純く外方に突き出る。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面とも淡 黄色	口縫部外筋ス 付青 N - 63
P o 4	埴土上層	壺	①17.2cm ② 3.2cm ⑤ 2.6	口縫部は外側して立ち上がる複合口縫。底部はねじれで引きされている。口縫部下端はむずかに突出する。	内外面ともヨコナデ。	密	良	外面部—灰褐色 内面部—淡黄色	外筋部外筋ス 付青 N - 64
P o 5	床面	壺	①16.9cm ② 4.5cm ⑤ 3.9	口縫部は外反しながら外側して立ち上がる複合口縫。底部はおきえられていっている。口縫部下端はむずかに突出する。	外面部—ヨコナデ。 内面部—口縫部—脚部ヨコナデ。 脚部以下ケズリ。	密（1~2mm の大粒石を含む。）	良好	外面部—淡黃褐色 内面部—淡黃色	N - 62
P o 6	埴土上層	壺	①14.4cm ② 7.2cm ⑤ 3.4	口縫部は外反気味に立ち上がる複合口縫。底部は丸みを帯びており、口縫部下端は純く突出する。	外面部—ヨコナデ。 内面部—口縫—頭部ヨコナデ。 脚部以下ケズリ。	密（砂粒を含む。）	良好	外面部—淡黃褐色 内面部—褐色	N - 65
P o 7	埴土上層	壺	①12.0cm ② 2.9cm ⑤ 2.3	口縫部は外側して立ち上がる複合口縫。底部は丸みを帯びており、口縫部下端は純く突出する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	外面部—淡黃色 内面部—褐色	口縫部外筋ス 付青 N - 61
P o 8	埴土上層	壺	①17.6cm ② 4.1cm	外側して立ち上がる複合口縫と思われる。底部は粗面をもつ。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	外面部—淡黃褐色 内面部—褐色	口縫部外筋ス 付青 N - 66
P o 9	埴土上層	壺	①7.1cm	球形を呈す変形壺。丸底を呈す。	外面部—頭部ヨコナデ。 脚部—脚部横方向ハケ目。 脚部—底部風化化し不明。 ナデ。	やや粗（砂粒 を多く含む。）	やや不良	内外面共褐色	変形外筋ス 付青 N - 72
P o 10	埴土上層	高杯	①16.2 ②11.0 ③ 9.8	杯部は浅い墨状を呈す。底部は丸い。脚部は「ノ」字状に聞き、脚部で大 きく広がる。	外面部—一杯部、風化せししく不規。ナデ 脚部、かすかにハケ目のあと が見られる。ケズリ抜ナデ。 内面部—一杯部、脚部—底部横方向ケズリ 脚部—底部近縁面底陥凹。	密（1mm以下 の砂粒を含む。）	やや小不良	内外面共褐色	N - 76

插表15 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (9)

## C S I 07

P 011	地上上層	高杯	①17.0 ②16.0 ③10.0	深い皿状の杯部を有する高杯。縁部はわずかに外傾している。杯加中央に孔を有する。杯部と脚部を接するためのものと思われる。脚部は「ハ」字形を開き、底部は大きく広がる。	外縁…鋸歯、ナデ。 脚部…ヨコナデ。凹線あり。 内面…杯部、ナデ。 脚部、シボリ目残る。 脚部、斜方角ヶ口。	密	やや不良	内外面共褐色	南面内面へラ 記号あり スス付着 N-75
P 012	P 3 内	高杯	①21.6△ ② 4.6△	やや深い皿状の高杯杯部。底部は平坦面をもつ。	外縁…斜方角ヶ口。ハケ日。 内面…斜方角ヶ口の底とガキ。	密	良好	外縁…浅黄色 内面…おおい 黄褐色	N-73
P 013	堆土上層	高杯	② 1.7△ ④15.4△	大きいく広がる高杯堆錐。	外縁…ナデ。 内面…風化著しい。ナデか。	粗	不良	内外面とも該 黄色	N-75
P 014	堆土上層	高杯	② 2.0△ ④12.8△	大きいく広がる高杯の堆錐。	外縁…瓶方角ヶ口。 内面…瓶方角ヶ口。	密 (わざかに 砂粒を含む)	良	内外面共褐色	N-74
P 015	床面	低脚杯	①17.0 ② 7.2 ④ 7.0	横状の杯部をもつ低脚杯。脚部はく内外に張り出る。	外縁…風化著しく不明。ナデか。 内面…ナデ。	密 (砂粒をわ ざかに含む)	やや不良	内外面共褐色	N-78
P 016	P 3 内	小袋窓附 器台	① 5.2△ ② 9.0△	めずらしく円曲する底面から外傾する内縫部をもつ。杯部中央に突出部が作られた孔を有する。脚部はよく中空。「ハ」字形に開き堆錐へとつなぐ。	外縁…鋸歯、ナデ。 脚部…瓶方角ヶ口。 内面…杯部、ヨコナデ。 脚部、ケズリ。	密	良	内外面共褐色	N-77

## C S I 09

遺物番号	出土地点	器種類	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
P 01	P 1 内	甕	①16.9△ ②16.9△ ⑤ 3.6	口縁部は外反気味に外傾して立ち上がる収合口縁。底部は丸く、口縁部下端は丸く外方に突出。肩部はあまり張らない。	外縁…口縁…瓶口ナデ。 肩部、崩落き沈灰文。 脚部、不規則なハケ目。 内面…口縁…脚部ヨコナデ。 肩部以下斜方向ケズリ後ナデ。	やや粗 (微砂 粒を含む)	良	内外面共褐色	口縁…瓶内 面に黒斑 内外面上に赤 色塗装 N-142
P 02	床面	甕	①17.6△ ② 5.2△ ⑤ 3.7	口縁部は外反気味に外傾しながら立ち上がりながら複合口縁。底部は丸く、下端は外方に突出する。	外縁…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 脚部以下ケズリ。	密	良好	内面…浅黃 色 外表面…瓶 色	N-141
P 03	堆土下層	甕	①18.8△ ② 4.8△ ⑤ 3.8	口縁部は外傾しながら立ち上がる複合口縁。底部は丸く、口縁部下端は丸く突出。	外縁…口縁…瓶口ナデ。 内面…ともにヨコナデ。	密	良	内面…青色 外表面…淡褐色	N-140

## C S I 10

遺物番号	出土地点	器種類	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
P 01	P 1 内	甕	①15.6 ②22.0 ③20.6 ⑤ 2.6	口縁部は外反気味に外傾しながら立ち上がりながら複合口縁。底部は丸く、下端は丸く突出。肩部はくずかに張り、脚部は少しまりの倒影形を呈する。最大径は脚部上端。脚部に崩落痕が見られる。底面は丸味のかき平底を有する。底面は丸味のかき平底を有する。	外縁…口縁…脚部ヨコナデ。 内面…口縁…脚部ヨコナデ。 下端…脚部ケズリ。 内面…口縁…脚部ケズリ後ナデ。	密 (砂粒をわ ざかに含む)	良好	内外面共褐色	スス付着 N-147
P 02	堆土下層	甕	①15.8△ ② 4.5△ ⑤ 3.4	口縁部は外傾しながら立ち上がる複合口縁。底部は丸く、下端は外方に突出する。	外縁…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 脚部以下ケズリ。	密	良好	内外面共褐色	口縫部下面下 邊スス付着 N-143
P 03	堆土下層	甕	①15.4△ ② 4.2△ ⑤ 3.2	口縁部は外反気味に外傾しながら立ち上がりながら複合口縁。底部は丸味をもち、下端は丸く突出する。	内面…脚部ヨコナデ。	密	良好	内外面共褐色	N-145
P 04	堆土下層	甕	①15.6△ ② 3.0△ ⑤ 2.4	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縁を有する。底部は平底面をもち、下端は丸く突出する。	内面…ともにヨコナデ。	密 (微砂 粒を含む)	良好	内外面共褐色	口縫部外側に スス付着 N-144
P 05	床面	跳ね台	①17.8△ ② 5.3△	大きいくなく跳ね台上部。脚部は外傾し、丸い。下端は腰をなし、純く外方に突出。	外縁…ヨコナデ。 内面…左方向ケズリ後ナデ。	密	良好	内外面共褐色	N-146

擲表18 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (10)

遺物番号	出土地点	器種・様	法量 (ca)	形態上の特徴	手法上の特徴	施上	焼成	色調	備考
P o 1	埋土下層	甕	①19.0cm ②6.3△ ③3.6	口縁部は外反して立ち上がる複合口縫。底部は平坦をもつ。腹部が入る。口總部下端は下垂する。	外面…口總部12条の平行沈線。 内面…口總部ヨコカナ。 腹面方向にカギキ。	密 (1~2mm 大的砂粒を含む。)	良好	内外面とも暗 灰褐色	S - 114
P o 2	埋土下層	甕	①14.0cm ②5.3△ ③2.8	口縁部は外反して立ち上がる複合口縫。底部は平坦をもつ。腹部が入る。口總部下端は下垂する。	外面…口總部平行沈線。 内面…口總部ヨコカナ。 腹面方向にカギキ。	中や粗 (1~ 2mmの砂粒 を多く含む。)	良好	内外面とも棕 褐色	外表面ス付査 S - 122
P o 3	床面	甕	①17.0cm ②8.6△ ③3.2	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縫。底部は平坦をもつ。腹部が入る。腹部はなだらか。	外面…口總部複数次回り。一部ナガシ 口縫部上部は波状文。下部に平行沈 線が施される。 内面…口總部ヨコカナ。 腹面…口總部下端を左方ケズリ。	密 (1~2mm 大的石英を含 む。)	やや小糞	内外面とも淡 灰褐色	口縫部外面ス 付査 S - 117
P o 4	床面	甕	①16.4cm ②6.9△ ③2.5	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縫。底部は平坦をもつ。腹部が入る。腹部はなだらか。	外面…口總部複数次回り。一部ナガシ 口縫部上部は波状文。下部に平行沈 線が施される。 内面…口總部ヨコカナ。 腹面…口總部下端を左方ケズリ。	密 (1~2mm 大的石英を含 む。)	良好	内外面とも淡 灰褐色	口縫部外面ス 付査 S - 111
P o 5	床面	甕	①16.5cm ②6.0△ ③3.7	口縁部はほぼ直立する複合口縫。底部は丸い。口總部下端はくびれをもつ。腹部はなだらか。	外面…山根部9条の波状文。 腹面…波状文。 内面…口總部ヨコカナ。 腹面…口總部下端を左方ケズリ。	密 (1~2mm 大的石英を多 く含む。)	良好	内外面とも黄 褐色	口縫部外面ス 付査 S - 109
P o 6	床面	甕	①16.4cm ②7.5△ ③3.6	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縫。底部は丸い。口總部下端はくびれをもつ。腹部が張る。	外面…口總部16条の平行沈線。一部 ナガシ。口縫部上部は波状文。下部に平行沈 線が施される。 内面…口總部ヨコカナ。 腹面…口總部下端を左方ケズリ。	密 (1mm大 きな石英を含む。)	良好	内外面とも淡 灰褐色	外表面ス付査 S - 110
P o 7	埋土下層	甕	①15.0cm ②7.2△ ③2.5	口縁部はほぼ直立する複合口縫。底部は外反し、丸い。口總部下端はくびれをもつ。腹部が張る。	外面…山根部9条の波状文。 内面…口總部ヨコカナ。 腹面…口總部下端を左方ケズリ。	密 (1~3mm 大的石英・長 石を含む。)	良好	内外面ともに よい黄褐色 ～黒褐色	口縫部外面ス 付査 副外表面施 有 S - 120
P o 8	埋土下層	甕	①17.2cm ②4.8△ ③3.4	口縁部はほぼ直立する複合口縫。底部は丸い。口總部下端は下垂する。	外面…口總部16条の平行沈線。一部ナガシ。 内面…口總部ヨコカナ。 腹面…口總部下端を左方ケズリ。	密 (1mm大 きな石英を含む。)	良好	外表面…淡黄 褐色 内面…褐色	外表面ス付査 S - 119
P o 9	床面	甕	①19.5cm ②30.5 ③22.0 ④5.7△ ⑤4.1	口縁部は大きく外反して立ち上がる複合口縫。底部は丸い。口總部下端はくびれをもつ。腹部が張る。	外面…口總部ヨコカナ。 内面…口總部引込式沈線。波状文が施 される。 腹面…山根部9条の波状文。 内面…口總部ヨコカナ。 腹面…口總部曲部以下左方ケズリ。 軸部…口總部上端を左方ケズリ。	密 (1~2mm 大的石英・長 石を含む。)	やや不良	外表面…にい き青褐色 ～淡黃褐色 内面…にい き褐色	外表面ス付査 S - 120
P o 10	埋土下層	甕	①18.0cm ②8.2△ ③2.9	口縁部は外反して立ち上がる複合口縫。底部は丸い。口總部下端はくびれをもつ。腹部が張る。	外面…口總部ヨコカナ。 内面…口總部引込式沈線。波状文が施 される。 腹面…口總部曲部以下左方ケズリ。 内面…口總部ヨコカナ。 腹面…口總部曲部以下左方ケズリ。	密 (1~2mm 大的石英・長 石を含む。)	良好	内外面とも淡 灰褐色	S - 118
P o 11	埋土下層	甕	①10.8cm ②3.7△ ③2.2	小型甕。口縁部は外反気味に立ち上 がらる複合口縫。底部は丸い。口總部下端はく びれをもつ。腹部が張る。腹部には丸い。	外面…ヨコカナ。 内面…口總部ヨコカナ。 腹面…口總部曲部以下左方ケズリ。	密	良好	内外面とも淡 灰褐色	外表面ス付査 S - 120
P o 12	埋土下層	甕	①17.6cm ②4.1△ ③3.2	口縁部は外反して立ち上がる複合口縫。底部は丸い。口總部下端はくびれをもつ。腹部が張る。	外面…ヨコカナ。 内面…口總部ヨコカナ。	良好	内外面ともに よい黄褐色	外表面ス付査 S - 113	
P o 13	埋土下層	甕	①16.6cm ②5.1△ ③1	口縁部は外反して立ち上がる複合口縫。底部は丸い。口總部下端はくびれをもつ。腹部が張る。	外面…ヨコカナ。 内面…口總部ヨコカナ。 腹面…口總部下端を左方ケズリ。	密 (石英・長 石・雲母を多 く含む。)	良好	内外面ともに よい黄褐色	外表面ス付査 S - 113
P o 14	埋土下層	甕	①15.6cm ②4.6△ ③3.5	口縁部は外反して立ち上がる複合口縫。底部は丸い。口總部下端はくびれをもつ。腹部が張る。	外面…ヨコカナ。 内面…口總部ヨコカナ。 腹面…口總部下端を左方ケズリ。	やや粗 (石英 と云母を多く 含む。)	やや不純	内外面とも灰 褐色	外表面ス付査 S - 121
P o 15	埋土下層	甕	①15.4cm ②8.3△ ③2.0	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縫。底部は丸い。口總部下端はくびれをもつ。腹部が張る。	外面…ヨコカナ。 内面…口總部ヨコカナ。 腹面…口總部曲部以下左方ケズリ。	密 (1~3mm 大的石英・長 石を含む。)	良好	内外面とも赤 褐色	外表面ス付査 S - 115
P o 16	埋土下層	甕	①13.6cm ②5.3△ ③2.5	口縁部は外反する複合口縫。底部は平判をもつ。口總部下端はくびれをもつ。腹部が張る。	外面…風化しているヨコカナと見 われる。 内面…口總部ヨコカナ。 腹面…口總部曲部以下左方ケズリ。	密 (1~3mm 大的石英・長 石を含む。)	不良	内外面とも淡 灰褐色	S - 124
P o 17	床面	甕	①14.0cm ②5.0△ ③1.2	口縁部は「く」字状口縫をもち。底 部は上方へ傾かされ、外反気味に立 つ。腹部は丸い。なだらかな腹部をもつ。	外面…口總部2条の波状文が施される。 内面…口總部ヨコカナ。 腹面…口總部ヨコカナ。 内面…口總部下端を左方ケズリ。	密 (1~3mm 大的石英・長 石を含む。)	良好	内外面とも淡 灰褐色	口縫部外面ス 付査 S - 112
P o 18	埋土下層	甕	①14.4cm ②3.0△ ③1.6	底部が厚壁化した「く」字状口縫。下 端はすこし下垂している。	外面…ナナ。 内面…口總部ヨコカナ。 腹面…口總部下端を左方ケズリ。	密 (0.5~1mm の砂粒を含む。)	良好	内外面とも暗 灰褐色	口縫部外面ス 付査 S - 123
P o 19	埋土下層	底盤	②3.0△ ④4.0△	底盤の底盤。	外面…ミガキ。 内面…滑溜。	密 (1mm大 きな石英を含む。)	良好	内外面褐色	外表面ス付査 S - 122
P o 20	埋土下層	底盤	②2.9△ ④3.0△	底盤の底盤。	外面…ミガキ。 内面…滑溜。	密 (1mm大 きな石英を含む。)	良好	内外面褐色	S - 127
P o 21	埋土下層	底盤	②3.3△ ④15.2△	直線的に広がる底盤。	外面…ナナ。 内面…アクリルナナ。	密	良好	内外面褐色	S - 128
P o 22	埋土下層	脚	②2.2△ ④13.2△	直線的に広がる脚部をもつ。焼成 後から割られた形と思われる造 しき者。	外面…ともにナナ。	密	良好	内外面共褐色	S - 129
P o 23	埋土下層	無頭蓋	①11.0cm ②5.2△	内側気味の脚部をもつ無頭蓋。底部 は丸い。	外面…ナナ。 内面…頭蓋ナナ。以下斜上方ケズ リ。	やや粗 (1~ 2mmの大砂粒 を含む。)	良好	内外面とも暗 灰褐色	N - 116

插表17 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (1)

遺物番号	出土地点	器種類	法量 (cm)	形態上の特徴	子法上の特徴	動土	況成	色調	備考	
P o 1	埋土下層	壺	①15.0△ ②5.5△ ③5.6	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縁部下端はわずかに下垂する。	外唇・口縫部平行斜側後次収矢。 内唇・口縫部ヨコナデ。 縫部横曲面以下ケズリ。	やや粗 (2~3 mmの大の石英を多 く含む。)	良好	内外面ともに ぶい黄褐色	S-136	
P o 2	床面	壺	①15.4△ ②7.0△ ③5.6	口縁部はやや内傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縁部下端は強く突出する。	外唇・ヨコナデ。 内唇・口縫部・頭部ヨコナデ。 縫部以下ケズリ。 頭部以下ケズリ。	密	良好	内外面とも青 褐色	S-134	
P o 3	床面	壺	①21.8△ ②21.5△ ③28.5△ ④3.8	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は半垂面をもつ。口縁部下端は強く突出する。肩部は側削形を呈すもの。	外唇・ヨコナデ。 肩部波状面が彫され、そのド に平行凹溝がある。肩部僅 後横方向ハゲ目。 内唇・口縫部・頭部ヨコナデ。 縫部以下ケズリ。 頭部と底部化粧面。	やや粗	不良	内外面とも浅 黄褐色	S-153	
P o 4	床面	壺	①18.8△ ②12.8△ ③5.8	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は半垂面をもつ。口縁部下端は強く突出する。肩部は側削形を 呈すもの。	外唇・口縫部ヨコナデ。 内唇・口縫部・頭部ヨコナデ。 縫部以下ケズリ。	密	やや不良	内外面ともに ぶい黄褐色	外面ス付有 S-154	
P o 5	埋土下層	壺	①16.4△ ②7.3△ ③2.8	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は半垂面をもつ。口縁部下端はわずかに突出する。ならだかな 肩部をもつ。	外唇・口縫部ヨコナデ。 内唇・口縫部・頭部ヨコナデ。 縫部横方向ハゲ目後端方向ハ ゲ目。 底部化粧面。	密	良好	内外面ともに ぶい赤褐色	外側黒斑有 S-135	
P o 6	床面	壺	①18.0△ ②6.0△ ③3.1	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縫。端部は半垂面をもつ。口縁部下端は強く突出する。	外唇・ヨコナデ。 内唇・口縫部・頭部ヨコナデ。 縫部以下ケズリ。	やや粗	良好	内外面とも浅 黄褐色	口縫部外面黑 斑有 S-145	
P o 7	埋土下層	壺	①17.4△ ②5.8△ ③2.5	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は半垂面をもつ。口縁部下端は強く突出する。	外唇・ヨコナデ。 内唇・口縫部・頭部ヨコナデ。 縫部以下ケズリ。	密	良好	内外面ともに ぶい黄褐色	S-132	
P o 8	埋土上層	壺	①16.5△ ②3.6△ ③2.8	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縫。端部は外腹。平面面をもつ。平面部下端は強く突出する。	外唇・ヨコナデ。 内唇・口縫部・頭部ヨコナデ。 縫部横方向ハゲ目。	内外面ともヨコナデ。	密 (1mmの大 の石英を含む。)	良好	内外面とも青 褐色	S-142
P o 9	埋土上層	壺	①17.2△ ②3.7△ ③2.9	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は外方へ折れ。平底面をもつ。口縫部下端は強く突出する。	外唇・ヨコナデ。	やや粗	良好	内外面とも青 褐色	口縫部黒斑有 S-137	
P o 10	埋土下層	壺	①19.4△ ②6.5△ ③3.9	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は強く突出する。	外唇・口縫部15条の平行凹溝。 縫部は丸い。口縫部下端は強く 突出する。	やや粗 (1~3 mmの大の石英を含む。)	良好	内外面とも橙 色	口縫部外表面 仕上げ S-131	
P o 11	埋土下層	壺	①18.0△ ②4.4△ ③3.2	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端はわずかに下垂する。	外唇・口縫部平行凹溝。後一基ナデ 消し。 縫部に刻文有。	密 (1~2 mm の大の石英を多 く含む。)	不良	内外面とも赤 褐色	外面ス付有 S-138	
P o 12	埋土上層	壺	①17.6△ ②3.6△ ③3.1	口縁部は厚肉で外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は下垂する。	外唇・口縫部横曲面左向ヶ ミ。 縫部ヨコナデ。 縫部横曲面以下左方ケズリ。	密 (2mmの大 の石英を含む。)	良好	内外面とも青 褐色	外側ス付有 S-140	
P o 13	埋土上層	壺	①16.4△ ②3.4△ ③3.0	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は下垂する。	外唇・ヨコナデ。 内唇・口縫部ヨコナデ。 縫部横曲面以下左方ケズリ。	密 (2mmの大 の石英を含む。)	良好	内外面とも青 褐色	S-133	
P o 14	埋土上層	壺	①24.4△ ②3.0△	口縁部は「△」字状口縫をもち、縫部は内凹気味に上方へ引き立たせられる。	外唇・ヨコナデ。 内唇・口縫部ヨコナデ。 縫部横曲面以下ケズリ。	やや粗 (1~2 mmの大の石英・ 黄石を含む。)	良好	外側・にぶい 褐色 内側・青褐色～ ぶい褐色	外側ス付有 S-143	
P o 15	埋土下層	壺	①29.0△ ②3.4△ ③3.2	口縁部は肉厚で外反気味に立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は強く突出する。	外唇・ヨコナデ。	密 (1mmの大 の石英を含む。)	良好	内外面とも青 褐色	外面ス付有 S-139	
P o 16	埋土下層	瓶	②2.5△ ④3.6△	平底を呈す底部。	外唇・偏方向ミガキ。 内唇・上方向ケズリ。	密 (1~2 mm の大の石英・ 黄石含む。)	良好	内外面とも青 褐色	S-146	
P o 17	埋土上層	瓶	②2.9△ ④5.8△	平底を呈す底部。	外唇・偏方向ハゲ目後ケズリ。 内唇・上方向ケズリ。	密 (1~2 mm の大の石英・ 黄石含む。)	良好	内外面とも赤 褐色	S-147	
P o 18	埋土上層	瓶	②2.4△ ④3.2△	平底を呈す底部。	外唇・偏方向ミガキ。 内唇・偏方向横後ケズリ。	密 (2mmの大 の石英・ 黄石を含む。)	良好	内外面とも浅 黄褐色	外面ス付有 S-148	
P o 19	床面	高杯	①27.0△ ②8.5△	やや深い直底を呈す大型の高杯形杯。端部は平底面をもつ。縫造部は内凹 変形される。	外唇・偏方向ハゲ目後ケズリ。 内唇・上部ナデ。 下平部ハゲ目後偏方向ミガキ。 縫部ミガキ。	密	良好	内外面とも浅 黄褐色	外側黒斑有 S-151	
P o 20	埋土下層	高杯	①24.0△ ②4.3△	深い直底を呈す大型の高杯形杯。端部は外反し、平底面をもつ。	外唇・ヨコナデ。ヘラ彫が認めら れる。 内唇・ヨコナデ。	密	良好	内外面とも浅 黄褐色	外面に赤色塗 刷り? S-152	
P o 21	床面	低脚杯	②2.6△ ④6.4△	低い太い脚部が脚部。底部は大きく 広がり端部は丸い。	内外面ともナデ。	やや粗 (2~ 3mmの大の石英 を含む。)	やや不良	内外面とも浅 黄褐色	S-150	
P o 22	埋土下層	瓶	①32.4△ ②4.5△	口縫部の破片と思われる。端部は平底面をもつ。	内外面ともヨコナデ。	密 (砂粒を多 く含む。)	良好	外側・にぶい 藍褐色 内側・淡黄色	内側黒斑有 外側ス付有 S-141	
P o 23	埋土下層	把手	品大型 1.9	断面円形。半環状を呈す把手の把手と 思われる。	手握ね底面後ナデ。	密	良好	内外面ともに ぶい黄褐色	S-149	

拂表18 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (II)

遺物番号	出土地点	器種類	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
P o 1	埋土上層	甕	①16.6 ②5.3 ③3.9	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縫。端部は平坦である。口縁部下端は丸く突出する。	外面…口縁部ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頭部以降ケズリ。	密	良好	内外面ともに よい黄褐色	内面黒斑有 N-149
P o 2	埋土上層	甕	①16.4 ②4.6 ③3.6	口縁部は外反して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縁部下端は丸く突出する。	外腹面ともヨコナデ。	密	良好	内外面ともに よい黄褐色	N-148
P o 3	埋土上層	甕	①16.0 ②4.4 ③3.5	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縁部下端は丸く突出する。	内外面とも風化者しい。ナデか。	密	やや不良	内外面とも淡 褐色	N-151
P o 4	埋土上層	甕	①16.0 ②3.7 ③2.7	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縁部下端は丸く突出する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面ともに よい黄褐色	外側スス付有 N-150
P o 5	埋土下層	甕?	①5.3 ②5.3 ③5.3	泥「ハ」字軸に開く深い伴物をもつ 件と思われる。	外面…ケズリ後縦方向ミガキ。 内面…上方ケズリ。	密(1~2mm 大的砂粒を含む。)	良好	内外面とも微 色	外側黒斑有 N-152

遺物番号	出土地点	器種類	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考	
P o 1	床面	甕	①15.8 ②22.4 ③18.4 ④3.1	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縁部下端は丸く突出する。肩部は削り目を呈し、小さな不整をもつ。最大径は中位にもつ。	外面…口縁部ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ後縦方向鉄工具による削突文。 肩部上半下半逆縦方向ハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 頭部曲面以下右方向ケズリ。 肩部下半左方向ケズリ。 頭部斜面ケズリ。	密	良好	内外面共褐色	内外面共スス付有 S-157	
P o 2	床面	甕	①17.4 ②27.3 ③20.0 ④2.8 ⑤3.4	口縁部は外反して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縁部下端は丸く突出する。肩部は削り目を呈し、小さな不整をもつ。最大径は中位以上にもつ。	外腹…口縁部ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頭部曲面以下右方向ケズリ後縦放抜抜抜。 肩部下半逆縦方向ハケ目。 内面…口縁部ヨコナデ。 頭部斜面ケズリ。	密(1mm前後の 石英を含む。)	良好	内外面共にス ス付有	外側全体にス ス付有	S-155
P o 3	床面	甕	①15.6 ②23.0 ③17.8 ④2.8 ⑤2.6	口縁部は外反気味に立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縁部下端は丸く突出する。肩部は削り目を呈し、小さな不整をもつ。最大径は中位以上にもつ。	外腹…口縁部ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頭部曲面以下右方向ケズリ。 肩部下半左方向ケズリ。 頭部斜面ケズリ。	密	良	内外面共褐色	頭部外側スス 付有	S-158
P o 4	床面	甕	①16.2 ②21.6 ③16.2 ④4.3 ⑤2.5	口縁部は内面外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縁部下端は丸く突出する。肩部は削り目を呈し、しっかりとした平底をもつ。削底大径は中位以上にもつ。	外腹…口縁部ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頭部曲面以下左方向ハケ目。 内面…頭部ヨコナデ。 頭部曲面以下左方向ハケ 目。 肩部下半左方向ケズリ。	密	良好	内外面共浅黃 色	削部外側にス ス付有 外翁一部赤走 S-156	
P o 5	床面	甕	①15.7 ②23.3 ③19.9 ④6.7 ⑤1.3	口縁部は強く外反気味に立つ。端部は丸い。削底鋭削跡を呈し、上げ方の不整がある。底部をもつ。最大径は中位以上にもつ。	外腹…口縁部ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頭部曲面以下左方向ハケ目。 内面…頭部ヨコナデ。 頭部曲面以下左方向ハケ 目。 肩部下半左方向ケズリ。	密	良好	内外面共褐色	外曲にスス 付有	S-159
P o 6	床面	甕	①16.0 ②22.6 ③18.3 ④5.1 ⑤1.2	短く外反気味に立ち上がる複合口縫。端部は丸い。削底鋭削跡を呈し、上げ方の不整がある。底部をもつ。最大径は中位以上にもつ。	外腹…口縁部ヨコナデ後縦放抜後縦放抜。 内面…口縁部ヨコナデ。 頭部曲面以下左方向ケズリ。 内面…頭部ヨコナデ。 頭部曲面以下左方向ケズリ。 下半ヒラヒラケズリ。	やや粗(0.2~ 3.0mm程度)の 砂粒・石英を含む。	良好	内外面共深黃 色	頭部外側にス ス付有	I N - 6
P o 7	床面	甕	①17.8 ②14.9 ③23.6 ④5.9 ⑤2.9	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。削底鋭削跡を呈し、上方外へ突兀。肩部は丸形を呈すものか。	外腹…口縁部ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。	やや粗(0.2~ 2.0mm程度)の 砂粒を含む。 石英・苔母等を 少しある。)	良好	内外面共深黃 色	外曲スス付有	I N - 5
P o 8	床面	甕	①16.6 ②7.2 ③2.7	口縁部は内面外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縁部下端は丸く曲面する。肩部は強張る。	外腹…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。	(1mm以下 の砂粒。)(1~ 2mm程度の砂 粒を含む。)	良好	内外面共にス ス付有	口縫部外側に スス付有	C H - 41
P o 9	床面	甕	①17.8 ②7.2 ③3.3	外傾して立ち上がる複合口縫を有する。端部は丸く、口縁部下端は丸く屈曲する。	外腹…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頭部斜面以下左方向のケズリ。	(1mm程の 石英を多く含む。)	良好	内外面共にス ス付有	外面にスス付 有	C H - 10
P o 10	床面	甕	①17.4 ②4.2 ③2.5	やや外反気味で外傾して立ち上がる複合口縫を有する。端部は丸く、口縁部下端は丸く屈曲している。	外腹…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 頭部斜面以下左方向のケズリ。	(0.5~1mm 程度の砂粒を 含む。)	良好	内外面共にス ス付有	CH - 9	
P o 11	埋土上層	甕	①16.2 ②4.8 ③2.7	口縁部はほぼ直立する複合口縫。端部は丸い。口縁部下端は丸く屈曲する。	外腹…口縁部皮抜灰一部ナデ消し。 内面…ヨコナデ。	密	良好	外腹…褐色 内面…明黃褐 色	口縫部外側有 Y-6	

標表19 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (13)

P o 12	床面	底部	② 2.1△ ④ 4.8	手状の底部。	外面…ハサ目底。 内面…底面尚マゼリ。	密	良好	外面部にS-15 内面…S-16 壁…C-II-13	外面上ス材 合
P o 13	床面	脚付窓	①14.5 ②18.6 ③42.2 ⑤ 2.5	複合口縫を有する脚付窓。脚部は外反して立ち上る複合口縫。端部は2つ並み引き出された。口縫部下部は下垂する。脚部は脇がやや張り、両側を握ります。脚部は手状の底部。	外面…口縫部平行先端。 内面…上半ヨコカナ。脚部は下垂する。脚部は2つ並み引き出された。口縫部下部は下垂する。脚部は脇がやや張り、両側を握ります。脚部は手状の底部。	密・中密	良	外面部共底質 色	外面上黒斑有 S-164
P o 14	床面	窓枠	①20.6 ② 5.7△	やや渋曲する底部から回曲外反する口縫部をもつ窓枠部。端部は丸い。	外面…横方向ミガキ。 内面…ヨコナデ。	密	良好	外面部とも相 似色	外面上ともス 材合 C-II-14
P o 15	埋土下層	窓枠	①19.4 ② 5.4△	やや渋曲する底部から回曲外反する口縫部をもつ窓枠部。端部は丸い。	外面…口縫部ヨコナデ。 内面…ヨコナデ。	密	良好	外面部共底質 色	S-160
P o 16	床面	窓枠	② 9.2△ ④14.6	開閉部はやや短く「ハ」字形に聞く。端部は大きくて広がり後成形で穿孔された円錐透かしを4ヶ所有。	外面…口縫部ミガキ。 内面…ナデ。	密	良好	外面部共底質 色	外面上黒斑有 S-163
P o 17	F'2 内	窓枠	② 3.1△ ④13.0	脚部が大きく開く脚。端部前面に穿孔された円錐透かしを2ヶ所有。	外面…横方向ミガキ。 内面…ヨコナデ。	密 (1 mm 以下の の砂粒・算石 を含む。)	良好	内外溝共滑 色	C-II-15
P o 18	F'2 内	窓枠	② 6.0△	肉厚で、直線的に「ハ」字形に聞く 窓枠部。	外面…横方向ミガキ。 内面…ヨコナデ。	密	良好	外面上…相 似色 内面…に付 色	S-161
P o 19	床面	手摺ね土器	② 3.5	小型で、つまみ状を呈する手摺ね土器。	外面…手摺ね土器形後ナデ。爪跡残る。 内面…シボリ後残る。	密	良	外面部共底質 色	S-162
P o 20	床面	土玉	径 2.6 穴径 0.6 重さ 7.6 g	ややいびつな球形。ほぼ中心に穿孔してある。	手摺ね後ナデ。	密 (右表・算 石・雲母片を 含む。)	良	暗黄灰褐色	S-165

遺物番号	出土地点	器種 種類	理 法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎 土	焼成	色調	備考
P o 1	床面	甕	①14.8 ②18.5 ③15.0△ ④ 1.8 ⑤ 3.0	口縫部は外反して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下部は丸味をもつて突出する。脚部はやや直角となり。大きな平底を呈す底部をもつ。瓶底はほぼ中位にもつ。	外面…口縫部ヨコナデ。 内面…口縫部下垂ヨコナデ。	やや板 (1~3 mm の石英、 長石含む。)	良好	外面上とも相 似色	外面上ス材合 N-185
P o 2	埋土下層	甕	①16.4△ ②20.8 ③17.0△ ④ 6.8△ ⑤ 2.5	口縫部は外反して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下部は丸味をもつて突出する。脚部はやや直角となり。大きな平底を呈す底部をもつ。	外面…口縫部ヨコナデ。 内面…口縫部横方向ハケ目。下半 部ナデ。	やや板 (1~2 mm の石英、 長石含む。)	やや不良	外面部共底 色	外面上部ス材 合一部赤変 N-186
P o 3	床面	甕	①13.2△ ②23.2 ③15.8△ ④ 4.0△ ⑤ 2.5	口縫部は外反して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下部は丸味をもつて突出する。脚部はやや直角となり。大きな平底を呈す底部をもつ。瓶底最大径はほぼ中位にもつ。	外面…口縫部ヨコナデ。 内面…口縫部横方向ハケ目。 脚部屈曲部…中央左方向ケズ ミ。 以下上方向ケズ ミ。	やや板 (2 mm の大石英を多 く含む。)	良好	外面上…相 似色 内面…一色	外面上ス材合 一部赤変 内面黒斑有 N-187
P o 4	床面	瓶部	② 1.7△ ④ 4.0	平底をもつ底部。	外面…ナデ。 内面…上方削ケズリ。	密 (砂粒を含 む。)	良好	内外深とも相 似色	N-188
P o 5	床面	甕	①20.6△ ②12.6△	やや内凹気味に沿「ハ」字形に聞く 外縫部。口縫部は肥厚し、丸い。瓶 部は上げ施になると想われる。	外面…口縫部横方向ミガキ。 内面…口縫部横方向ハケ目。 以下ケズリ。	密 (1~2 mm の砂粒を多 く含む。)	良好	内外深とも相 似色	外面上ス材合 一部赤変 内面黒斑有 N-189

插表20 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (14)

遺物番号	出土地点	器 種 類	法量(㌘)	解説上の特徴	手法上の特徴	胎 上	焼 成	色 調	備 考
P o 1	堆土下層	甕	①18.0㌘ ②22.6㌘ ③27.2㌘ ④2.1	口縁部は近く、外縁して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚して平坦面をもち、凹部が造る。口縁部下端は丸く、頭部も丸く、下部は丸く、下部は直角である。肩部は頗る堅く、太底はほぼ中央位にある。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部風化がしいが、粗い斜方面でハサツアラされる。 内面…口縁部ヨコナデ。 肩部削除跡。中位傾て左下方ケズリ。	やや粗(砂粒を多く含む)	やや不良	外裏…赤褐色 内裏…灰褐色	N-199
P o 2	堆土下層	甕	①14.0㌘ ②25.0㌘ ③2.3	口縁部はやや外縁して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚して平坦面をもち、凹部が造る。口縁部下端は丸く、頭部も丸く、下部は丸く、下部は直角である。肩部は頗る堅く、太底はほぼ中央位にある。	外面…風化がしい。 内面…風化がしい。口縁部…肩部ヨコナデか。 肩部削除跡。	やや粗(大粒の砂粒を多く含む)	良	内外面共淡黃褐色	N-192
P o 3	堆土上層	甕	①16.8㌘ ②19.3㌘ ③2.3	口縁部はやや外縁して立ち上がる複合口縁。端部は肥厚して平坦面をもち、凹部が造る。口縁部下端は丸く、頭部も丸く、下部は丸く、下部は直角である。肩部は頗る堅く、太底はほぼ中央位にある。	外面…風化がしい。 内面…風化がしい。口縁部ナデか。 内面…風化がしい。口縁部ナデ。 肩部削除跡が現れる。頭部は以下傾て左下方ケズリ。	やや粗(1~2mmの石英を多く含む)	やや不良	内外面共淡褐色	N-193
P o 4	堆土上層	甕	①14.6㌘ ②14.5㌘ ③21.2㌘ ④2.0	口縁部はやや外縁して直立する複合口縁。端部は肥厚して平坦面をもち、凹部が造る。口縁部下端は丸く、頭部は頗る堅く、太底を呈す。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部削除跡。頭部は以下傾て左下方ケズリ。	密(砂粒をわずかに含む)	良好	内外面とも淡黄褐色	N-191
P o 5	堆土上層	甕	①16.6㌘ ②19.5㌘ ③2.3	口縁部はほぼ直立する複合口縁。端部は外方に肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は丸く、頭部をもって突出する。	内外面とも風化のため調節不順。	やや粗(1㌢ 大的の石英を含む)	良好	内外面共によい橙色	N-194
P o 6	堆土上層	甕	①16.8㌘ ②9.5㌘ ③3.2	口縁部はやや直立する複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は丸く、頭部をもって突出する。	内外面共風化がしい。	やや粗(わざかに砂粒を含む)	やや不良	外裏…によい淡黄色 内裏…によい橙色	N-195
P o 7	床面	甕	①18.0㌘ ②6.3㌘ ③3.5	口縁部は外縁して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は丸く、頭部をもって突出する。	外面…口縁部削除。肩部平手沈又は波状が施される。 内面…風化のため凹凸不順。	密	やや不良	内外面共によい橙色	N-292
P o 8	堆土下層	甕	①18.4㌘ ②4.9㌘ ③3.7	口縁部は外縁して立ち上がる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は丸く、頭部をもって突出する。	外面…口縁部上部波状。 内面…口縁部ヨコナデ。	やや粗(砂粒を多く含む)	良好	内外面共に淡褐色	N-203
P o 9	堆土下層	甕	①24.8㌘ ②6.8㌘ ③4.0	口縁部は手厚で、外縁して立ち上がる複合口縁。端部を大きく、口縁部下端は丸く、頭部は頗る厚くなる。	外面…口縁部上部波状が施される。 内面…口縁部ヨコナデ。 肩部削除跡以下右方向ケズリ。	粗(2mmの石英・砂粒を多く含む)	良好	内外面共によい橙色	N-201
P o 10	堆土下層	甕	①15.4㌘ ②4.1㌘	口縁部は「く」字状口縁をもち、頭部は上に直角である。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 肩部削除跡以下ケズリ。	やや粗(2~3mmの砂粒を含む)	やや不良	内外面共によい橙色	N-197
P o 11	堆土下層	甕	①14.0㌘ ②3.9㌘ ③2.2	口縁部は上方へ引き出される。端部は丸い。下端部は丸味をもつ。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 肩部削除跡以下ケズリ。	やや粗(2mmの石英を含む)	やや不良	外裏…ややによい黄褐色 内裏…によい橙色	N-198
P o 12	堆土上層	甕	①14.2㌘ ②3.7㌘	口縁部はゆるやかに「く」字状を呈す。端部は丸い。ならかな腹部をもつ。	外面…ヨコナデ。 内面…口縁部ヨコナデ。 肩部削除跡以下右方向ケズリ。	密(砂粒をわずかに含む)	良好	内外面共橙色	口縁部スス 付着 N-196
P o 13	堆土上層	口縫部?	①19.0㌘ ②3.0㌘	外反して「く」字状に届く口縫部。	内外面ともヨコナデ。	密(石英・雲母を含む)	やや不良	内外面共によい橙色	N-299
P o 14	床面	高杯	②11.9㌘ ③10.0㌘	杯部は浅い、直底を呈す。脚部は細く直線的で、無脚で大大く広がる。	内外面ともに風化がしく不明。 ナナダ。	密	不良	内外面共橙色	N-213
P o 15	堆土上層	高杯	①14.8㌘ ②4.0㌘	碗形足を見る高杯形脚。端部は丸い。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面共橙色	N-206
P o 16	堆土上層	高杯	② 8.5㌘	杯部は壺状になるものか。脚部は直線的に開き、端部で大きく広がる。脚部は平底をもつ。	外面…一杯部端方向傾いハゲ目。 脚部斜面。 内面…杯部ナダ。 脚部シボリ目ナダ消す。 脚部ハサカガスに残る。	密	良好	内外面共橙色	N-214
P o 17	床面	高杯	①18.8㌘ ②5.6㌘	やや深い直底を呈す高杯形脚。端部は直底をもつ。	内外面とも風化のため不明。 ナナダ。	やや粗(石英・砂粒を多く含む)	不良	内外面共橙色	N-211
P o 18	床面	高杯	①22.0㌘ ②7.0㌘	平坦な直底から弧曲し、大きく外反する口縫部をもつ高杯形脚。端部は外反し、平底面をもつ。直底部は純段がつく。	内外面ともナナダ。	密	やや不良	内外面共橙色	N-212
P o 19	堆土下層	鼓形器台	② 5.7㌘ ③17.0㌘	柄曲して「ハ」字状に聞く鼓形器台脚部。	外面…風化のため調節不明。 内面…ケズリ。	密	良好	内外面ともによい橙色	N-207
P o 20	堆土下層	鼓形器台	② 6.8㌘	外反風味に「ハ」字状に聞く鼓形器台脚部。	外面…平行沈痕がすかに残る。 風化がしい。 内面…ケズリ。	密	やや不良	内外面ともに淡褐色	N-209
P o 21	堆土上層	小型丸底盆?	① 8.0㌘ ② 2.5㌘	内面丸底盆と思われる肩部破片。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部ヨコナデ。 肩部右側面ケズリ。	やや粗	やや不良	内外面共橙色	N-205
P o 22	堆土上層	小型丸底盆?	② 2.8㌘	小型丸底盆と思われる肩部破片。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部ヨコナデ。 肩部右側面ケズリ。	密	良好	外裏…赤褐色 内裏…灰褐色	N-199
P o 23	堆土下層	低脚杯?	② 2.4㌘	太く低い脚部をもつ低脚杯。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面共橙色	N-210
P o 24	堆土上層	七玉	径 2.0 火候 0.7 重さ 9.8g	やや低い脚部をもつ低脚杯。 ややいびつな球形。中心に孔あり。 子母ね形底なしナダか。風化がしい。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面共橙色	N-215

擲表21 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (19)

遺物番号	出土地点	基 礎 種 類	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	粘 土	焼 成	色 調	備 考
P o 1	P12内	茎	①16.2cm ②6.3cm ③4.0	口縁部はやや内傾気味に立ち上がる複合口縫。底盤は平坦面をもつ。口縁部下端は斜く突出する。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面ともに ぶい黄褐色	N-238
P o 2	埋土下層	茎	①15.4cm ②3.5cm ③2.8	口縁部はやや外傾して立ち上がる複合口縫。底盤は厚岸で、口縁部下端は斜く突出する。 口縁部は斜めに立てる形をもつ。口縁部下端は丸く突出する。	内外面ともヨコナデ。	密 (右英・砂 粒を含む。)	良好	内外面ともに ぶい黄褐色	口縫部外側 底盤有 N-232
P o 3	埋土下層	茎	①14.5cm ②3.8cm ③2.6	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縫。底盤は厚岸で、口縁部下端は斜く突出する。 口縁部は斜めに立てる形をもつ。口縁部下端は丸く突出する。丸味をもって底盤へ至る。	内外面とも風化著しい。ナデ。	密 (1~2mm 大的の石英を含 む。)	良好	内外面ともに ぶい褐色	N-235
P o 4	埋土下層	茎	①16.6cm ②5.8cm ③5.0	口縁部は高く、やや外傾して立ち上がる複合口縫。底盤は丸く、口縁部下端は斜く突出する。 口縁部下端は丸く、底盤部は丸く突出する。	内外面とも風化著しい。ナデ。	密	良好	内外面ともに 淡 灰褐色	N-233
P o 5	埋土下層	茎	①13.2cm ②4.2cm ③2.6	口縁部は外傾気味に立ち上がる複合口縫。底盤は丸い。口縁部下端は斜く突出する。	内外面とも風化著しい。ナデ。	やや粗 (2~3 mm大的の石英・ 貝壳を含む。)	良好	内外面ともに ぶい褐色	N-234
P o 6	埋土下層	茎	①24.0cm ②5.7cm ③2.8	口縁部は高めで、外傾気味に立ち上がる複合口縫。底盤は厚岸で、口縁部下端は丸く突出する。 口縁部下端は丸く、底盤部は丸く突出する。	内外面とも風化著しい。	やや粗 (砂 粒を含む。)	良好	内外面ともに ぶい黄褐色	N-237
P o 7	埋土下層	茎	①14.8cm ②3.2cm	口縁部は内傾気味に外傾する「く」字状口縫。底盤は丸い。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面とも灰 褐色	N-236
P o 8	床面一部	高杯	②7.0cm ④10.0cm	口縁部は直線的に開き、底部で大きく広がる高脚製。	内外面とも風化したため調整不明。 内面シボリ有。	密	やや平良	内外面とも淡 褐色	N-239
P o 9	埋土下層	土玉	径 2.5 高さ 0.7 重さ 11.8g	やや扁平な球形を呈す。中心に孔あ り。	手捏ね成形模様ナデ。	密	良好	灰褐色	裏面有 N-240

遺物番号	出土地点	基 礎 種 類	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	粘 土	焼 成	色 調	備 考
P o 1	埋土下層	茎	①16.2cm ②17.4cm ③25.0cm ④2.0	口縁部は高く、外傾して立ち上がる複合口縫。底盤は肥厚し、口縁部下端は斜く突出する。 口縁部下端は丸く、底盤部は丸く突出する。底盤部は斜めに立てる形を呈す。	外面…口縁部ヨコナデ。 肩部斜方より長いハケ型。後脚 状工具による突起文様(逆三角 形状)に2ヶ所有。 内面…口縁部は斜めに立てる形を呈す。 肩部斜方より長いハケ型。	密 (1~3mm 大的の石英を含 む。)	良好	外面…暗褐色 内面…淡 灰褐色	S-178
P o 2	埋土下層	茎	①15.8cm ②15.5cm ③22.0cm ④2.2	口縁部は高く、やや外傾して立ち上がる複合口縫。底盤は肥厚し、口縁部下端は斜く突出する。 口縁部下端は丸く、底盤部は丸く突出する。底盤部は斜めに立てる形を呈す。	内外面とも風化著しい。内面口縁部 底盤部は斜く突出する。	やや粗 (2~3 mm大的の石英を含 む。)	不良	内外面とも淡 灰褐色	S-223
P o 3	床面	茎	①18.7cm ②11.0cm ③2.5	口縁部は高めで、外傾して立ち上がる複合口縫。底盤は肥厚し、口縁部下端は丸く突出する。 口縁部下端は丸く、底盤部は丸く突出する。底盤部は斜めに立てる形を呈す。	外面…風化著しい。開窓不明。 内面…口縁部…複合ヨコナデ。 底盤部以下左方向ケズリ。	密 (1~3mm 大的の石英含 む。)	良好	内外面とも淡 黃褐色	S-179
P o 4	埋土下層	茎	①17.0cm ②9.1cm ③2.2	口縁部は低めで、外傾して立ち上がる複合口縫。底盤は肥厚し、口縁部下端は丸く突出する。 口縁部下端は丸く、底盤部は丸く突出する。底盤部は斜めに立てる形を呈す。	外…口縁部ヨコナデ。 肩部斜方ハケ状後脚斜方ハ ケ型。 内面…口縁部…複合ヨコナデ。 肩部斜方より長いハケ型。刺折下端 …左方向ケズリ。	密	不良	内外面とも灰 白色	S-180
P o 5	埋土下層	茎	①16.3cm ②5.6cm ③1.2	口縁部は高く、内傾して立ち上がる複合口縫。底盤は肥厚し、口縁部下端は丸く突出する。 口縁部下端は丸く、底盤部は丸く突出する。底盤部は斜めに立てる形を呈す。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面ともに ぶい黄褐色	S-172
P o 6	床面	茎	①16.6cm ②3.0cm ③2.1	口縁部は高めで、内傾して立ち上がる複合口縫。底盤は肥厚し、口縁部下端は丸く突出する。 口縁部下端は丸く、底盤部は丸く突出する。底盤部は斜めに立てる形を呈す。	内外面ともヨコナデ。	やや粗 (1~ 2mm大的の石英 を多く含む。)	良好	内外面とも黄 褐色	S-171
P o 7	埋土下層	茎	①17.0cm ②3.7cm ③2.5	口縁部は高めで、外傾して立ち上がる複合口縫。底盤は肥厚し、口縁部下端は丸く突出する。 口縁部下端は丸く、底盤部は丸く突出する。底盤部は斜めに立てる形を呈す。	内外面とも風化著しい。ナデ。	やや粗 (1~ 2mm大的の石英 を多く含む。)	やや不良	内外面とも黄 褐色	S-170
P o 8	埋土下層	茎	①15.6cm ②3.7cm ③2.5	口縁部は高めで、外傾して立ち上がる複合口縫。底盤は肥厚し、口縁部下端は丸く突出する。 口縁部下端は丸く、底盤部は丸く突出する。底盤部は斜めに立てる形を呈す。	内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面ともに ぶい褐色	S-174
P o 9	床面	茎	①15.4cm ②3.3cm ③2.3	口縁部は高めで、外傾して立ち上がる複合口縫。底盤は丸い。口縁部下端は丸く、底盤部は丸く突出する。	外面…口縫部13枚の平行沈痕。 内面…口縫部ヨコナデ。 肩部斜方より長いハケ型。	やや粗 (1~ 3mm大的の石英 を含む。)	良好	内外面とも淡 黃褐色	内面裏板有 外曲スラブ有 S-190
P o 10	床土下層	茎	①14.0cm ②3.3cm ③2.3	口縁部は外傾気味に内傾して立ち上がる複合口縫。底盤は丸い。口縁部下端は丸く、底盤部は丸く突出する。	外…口縫部設柵文。 内面…ヨコナデ。	密	良好	内外面とも明 顯な褐色	口縫部底盤 S-175
P o 11	埋土下層	底部	②2.2cm ④4.4cm	底盤を呈す底盤。	外…風化著しい。 内面…ケズリ。	密	良好	外…にぶい 赤褐色 内面…にぶい 黄褐色	S-176

擇表22 南谷大山進跡出土遺物観察表 (16)

P o 12	埋土下層	底部	①1.8△ ④5.6△	平底を呈する底。	外面一面傾方向ハケ目。 内面一面ケズリ。	否	良好	内外面とも よい黄褐色	S - 177
P o 13	床面	高杯	①15.9 ②11.5 ③9.2	杯部は洗い状底を呈し、端部は丸い。 器部は削く直線的で、底部で大きく広がる。	外面部とも黒化のため調整不明。 内面部とも黒化する。	否	やや不良	内外面とも浅 褐色	S - 185
P o 14	床面	高杯	②8.8△ ④10.0△	器部は削く直線的で、底部で大きく広がる。	内外面とも黒化しない。 底部内面シボリ残る。	否	不良	内外面とも黄 褐色	S - 188
P o 15	床面	高杯	②9.5△ ④10.0△	器部は削く直線的で、底部で大きく広がる。	内外面とも黒化のため調整不明。	否	不良	内外面とも浅 黄褐色	S - 194
P o 16	埋土下層	高杯	②7.2△ ④10.2△	器部は直線的に「ハ」字状に開き、 底部で大きく広がる。	外面部一面傾方向ハ ケ目が認める。 内面部黒化しない。 高部シボリ残る。	否	良好	内外面とも浅 褐色	S - 186
P o 17	床面	高杯	①24.6△ ④6.9△	平らな底から垂直して大きく開く 斜部をもつ形。底部外反し丸い。 器部には不明瞭な侈みつく。	内外面とも黒化のため調整不明。 内面部沙粒を含む。	否(1mmの 砂粒を含む)	良好	内外面とも深 褐色	S - 184
P o 18	床面	高杯	①22.4△ ④6.2△	に付いた曲面をもつ高杯形。細部 は無い。	内外面とも黒化のため調整不明。	否	不良	内外面とも浅 黄褐色	S - 191
P o 19	埋土下層	鉢形基台	④4.9△	大きさ外洋する鉢形基台・台座と思 われる。	内外面ともヨコナテ。	否	良好	外面部一面 内面部浅黃褐色 灰褐色	S - 193
P o 20	床面	小型丸底	①7.9 ②7.5 ③9.2	口縁部はわざかに外縁する「く」字 状底。器部は削くまろあられら れる。柄部は直線形を呈す。柄部大 径が口径と半位する。	外面部一面ナテ。 内面部一面縁部ヨコナテ。 脚部ケズリ。底部指捺痕残 る。	否	やや不良	内外面とも暗 赤褐色	S - 181
P o 21	床面	小型丸底	②4.2△ ④3.7	圓錐形の胴部をもつ小型丸底。	外面部一面黒化のため調整不明。 内面部一面黒化する。	否	やや不良	内外面とも深 褐色	S - 182
P o 22	埋土下層	蓋	②7.9 ④16.0△	器部は「ハ」字状に大きく開き、 底部は平坦面をもつ。つまりは大きく 中団みとなる。	外面部一面ナテ。 内面部一面ケズリ付ナテ。	否	良好	外面部一様 褐色 内面部一様 褐色 灰色	外部外黒斑 者 S - 189
P o 23	床面	骨付小型卦	②7.2△ ③8.6	体部は削形を呈し、側面して直立気 味の口縁部をもつ。底部には低い脚 をもつ。	外面部一面黒化のため調節不明。 内面部一面ナテ。底部指捺痕残る。	やや粗(1~2 mmの右夷、 良石を含む)	良好	外面部一様 褐色 内面部一様 褐色 内面部に付 けた骨	内部外黒斑 者 S - 183
P o 24	床面	土玉	径 2.8~3.0 穴径 0.7~1.2	いびつな西洋なし形を呈す。中心に 孔あり。	手捏ね成形。黒化しない。	粗(1~3 mm の砂粒を多 く含む)	不良	浅黃褐色 褐色	裏面有 S - 187

遺物番号	出土地點	器 種 類	規 格 寸 法 cm	形態上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	胎 土	焼 成	色 画	備 考
P o 1	埋土下層	甕	①17.2 ②27.1 ③25.4 ④2.3	口縁部は短くやや外縁して立ち上がる複 合口縁。器部は平底面をもつ。 口縁部下部は削く、底部は丸い。 器部は球形を呈す。 最大径はほぼ半位にある。	外面部一面ヨコナテ。 脚部一面傾方向ハケ目。 内面部一面ヨコナテ。 底部内面シボリ残る。 底部外付付近脚部正直痕 ある。底部左方向ケズリ。	やや粗(砂粒 を多く含む)	やや不良	内外面とも よい褐色	山崎部一部 外面部斑斑 N - 249
P o 2	埋土下層	甕	①16.0△ ②24.7△ ③26.6△ ⑤2.0	口縁部は削く外縁して立ち上がる複合 口縁。器部は削く、底部は丸い。 器部は球形を呈す。 最大径はほぼ半位 にある。	外面部一面ヨコナテ。 脚部一面傾方向ハケ目。 内面部一面ヨコナテ。 底部及ぶ底付付近脚部正直痕 ある。底部左方向ケズリ。	やや粗(2 mm の大右夷、砂 粒を含む)	良好	内外面とも よい褐色	脚部下平外 面スリット 口縫部、底部 底成有 N - 254
P o 3	埋土下層	甕	①19.8△ ②18.1△ ③27.2△ ⑤2.4	口縁部は外縁して立ち上がる複合 口縁。器部は削く、底部は丸い。 器部は球形を呈す。	外面部一面ヨコナテ。 脚部一面傾方向ハケ目。 内面部一面ヨコナテ。 底部以下脚部ケズリ。	やや粗(右夷、 砂粒多く含 む)	良好	内外面とも淡 褐色	脚部外黒斑 者 N - 267
P o 4	埋土下層	甕	①13.9△ ②19.7△ ③22.8△ ⑤1.8	口縁部は短く、口縁直下する複合口 縁。器部は削く、底部は丸い。 器部は球形を呈す。 最大径は半位にある。	外面部一面ヨコナテ。 脚部一面傾方向ハケ目。 以下脚部ケズリ。 内面部一面ヨコナテ。 底部以下脚部ケズリ。	否	やや不良	内外面とも よい褐色	脚部外黒斑 者 S - 227
P o 5	埋土下層	甕	①16.4△ ②17.9△ ③24.3△ ⑤2.0	口縁部は短く、外縁して立ち上がる複合 口縁。器部は削く、底部は丸い。 器部は球形を呈す。	外面部一面ヨコナテ。 脚部一面傾方向ハケ目。 以下脚部ケズリ。 内面部一面ヨコナテ。 底部以下脚部ケズリ。	やや粗(右夷 を多く含む)	良好	内外面とも淡 褐色	器部外黒斑 者 N - 259
P o 6	埋土下層	甕	①16.8△ ②15.0△ ③21.8△ ⑤2.2	口縁部は外縁して立ち上がる複合 口縁。器部は削く、底部は丸い。 器部は球形を呈す。	外面部一面ヨコナテ。 脚部一面傾方向ハケ目。 内面部一面ヨコナテ。 底部以下脚部ケズリ。	否	良好	内外面とも淡 褐色	N - 266

插表23 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (1)

P o 7	埋土下層	表	①15.4cm ②15.3cm ③22.1cm ④2.4	口縫部はやや外傾して立ち上がる複合口縫。端部は肥厚し、平坦面をもつ。口縫部下端は縮り(次第に)下がらみとなる。端部は球形を呈す。	外側…風化のため調節不明。 端部下平縫方向ハケ目が認められる。 内面…口縫部-頭部ヨコナデ。 頭部側面斜方ケリ。 以下左方向ケリ。	やや粗(右英 移紋多く含む。)	やや不良	内外面とも黄 褐色	口縫部・頭部 外表面黒有 N-257
P o 8	埋土下層	表	①14.0cm ②13.0cm ③2.2	口縫部は短く、外傾して立ち上がる複合口縫。端部は肥厚し、内傾する下平縫をもつ。口縫部下端は強く突出する。頭部は肩が大きくなりる。	外側…口縫部ヨコナデ。 頭部下平縫-斜方ケリ。内面…口縫部-頭部ヨコナデ。 頭部側面斜方ケリ。 以下左方向ケリ。	やや粗(2mm 人の砂粒を含む。)	良好	内外面とも黄 褐色	頭部外表面黒 有 N-260
P o 9	埋土下層	表	①29.0cm ②8.0cm ③2.5	口縫部はほぼ直立する複合口縫。端部は肩が厚い平面をもつ。口縫部下端は強く屈曲する。	外側…ヨコナデ。 内面…口縫部-頭部ヨコナデ。 肩部側面斜方ケリ。	密	やや不良	内外面とも浅 褐色	N-264
P o 10	埋土下層	表	①15.6cm ②10.2cm ③2.0	口縫部はよく外傾して立ち上がる複合口縫。端部は内傾する下平縫をもつ。口縫部下端は強く突出する。頭部は球形を呈す。	外側…風化のため調節不明。 内面…口縫部-頭部ヨコナデ。 頭部側面斜方ケリ。	やや粗(1mm 人の砂粒を多 く含む。)	良好	外一面-浅灰色 内面…に近い 黃褐色	N-256
P o 11	埋土下層	表	①18.0cm ②7.0cm ③2.1	口縫部は短くやや外傾して立ち上がる複合口縫。端部は肥厚し、平面をもつ。大きな張る口部をもつ。	外側…口縫部ヨコナデ。 頭部側面斜方ケリ。内面…口縫部-頭部ヨコナデ。 頭部側面斜方ケリ。	やや粗(2mm 人の砂粒を含む。)	やや不良	外一面-褐色 内面…に近い 褐色	N-258
P o 12	埋土下層	表	①15.2cm ②9.3cm ③2.3	口縫部は短く外傾して立ち上がる複合口縫。端部は肥厚し、内傾する下平縫をもつ。頭部は球形を呈す。口縫部下端は強く突出する。なだらかな肩部をもつ。	外側…口縫部ヨコナデ。端部付近削 支え。 内面…ヨコナデ。 内面…口縫部-頭部ヨコナデ。 頭部側面斜方ケリ。	やや粗(2mm 人の砂粒を多 く含む。)	良好	内外面ともに 近い褐色	N-253
P o 13	埋土下層	表	①18.0cm ②3.7cm ③2.7	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は内傾する下平縫をもつ。口縫部下端は強く突出する。	外側…内面ともヨコナデ。	密	良好	内外面とも黄 褐色	N-263
P o 14	埋土下層	表	①16.0cm ②3.6cm ③2.4	口縫部は直立して立ち上がる複合口縫。端部は半球形をもつ。口縫部下端は強く屈曲する。	外側…内外面ともヨコナデ。	密	良好	内外面とも黄 褐色	N-262
P o 15	埋土下層	表	①14.8cm ②3.9cm ③2.1	口縫部は短く外傾気味に立ち上がる複合口縫。端部は内傾する平坦面をもつ。口縫部下端は強く屈曲する。	外側…内面ともヨコナデ。	密	良好	内外面とも黄 褐色	N-261
P o 16	埋土下層	表	②26.1cm ③23.9	やや長脚の球形を呈す要頭部。部頭は丸巻となる。	外側…複数方向凹いハケ目。 口下平縫方向凹いハケ目。 内面…対称指輪状。以下様な方向凹り。 以下左方向ケリ。	密(砂粒を含 む。)	良好	内外面ともに 近い褐色	外一面スサ有 N-268
P o 17	埋土下層	表	② 9.5cm	球形を呈する要頭部。	外側…頭方横凹いケリ。頭部に 削工具有する造三角形附近 3ヶ所の削痕が残される。 内面…風化のため調節不明。	密(右英 移紋を含む。)	良好	内外面とも浅 黃褐色	N-265
P o 18	埋土下層	高杯	②12.4cm ③29.4	杯部は深い複状を呈す。頭部はやや肥厚的で圓錐形、頭部で大きく広がる。頭部は半球形をもつ。	外側…風化のため調節不明。 内面…頭部ヨコナデ。 頭部ヨコナデ自消。	密	やや不良	内外面とも褐 色	N-279
P o 19	埋土下層	高杯	①14.4cm ②20.2	深い複状の杯部をもつ高杯。端部は丸い。頭部の一部を欠く。	外側…ヨコナデ。 内面…複数ヨコナデ。 頭部ヨコナデ自消。	密	良好	内外面とも褐 色	N-246
P o 20	埋土下層	高杯	①11.8cm ② 6.0cm	深い複状を呈す高杯部。端部は丸い。	外側…頭方横凹ハケ目。 内面…ヨコナデ。	密	良好	内外面とも褐 色	N-247
P o 21	埋土下層	高杯	①14.2cm ② 6.0	複状を呈す高杯部。端部は丸い。	外側…頭方横凹ハケ目。 内面…ヨコナデ。	密(砂粒を含 む。)	やや不良	内外面とも褐 色	N-244
P o 22	埋土下層	高杯	①15.4cm ② 4.8cm	深い複状を呈す高杯部。端部は丸い。	外側…内外面ともナデ。	密	良好	内外面とも褐 色	N-283
P o 23	埋土下層	高杯	①14.8cm ② 5.2cm	深い複状を呈す高杯部。端部は丸い。	外側…内面とも風化のため調節不明。	密(1~4mm の大の石英を含 む。)	やや不良	内外面とも褐 色	YM-13
P o 24	埋土下層	高杯	②23.0cm ②16.0 ③12.4cm	杯部は半球形底盤から内面気味に脇曲げ持する複状部をもつ。端部はやや外反し、丸く収める。頭部は頭部で大きく広がる。頭部に開口部がある。頭部は半球形をもつ。	外側…風化のため調節不明。ナデか。 内面…風化著しい。頭部シボリ自消。	密	良好	内外面とも褐 色	N-245
P o 25	埋土下層	高杯	①23.6cm ②13.7cm	頭部は平底から脇曲げ持する複状部をもつ。頭部はやや外傾し、丸く収める。頭部は直錐形の開口部がある。	外側…一杯脚長い斜方ハケ目。 頭部ナデ。抜頭部による削頭。 内面…杯脚長い斜方凹いハケ目。 頭部ヨコナデ自消。	密	良好	内外面とも褐 色	N-248
P o 26	埋土下層	高杯	①25.1cm ② 8.7cm	やや開口部のある複状部から大さく開口部で持する口縫部をもつ。頭部は直錐形の開口部がある。頭部は半球形をもつ。	外側…複数方向凹口。 内面…複数方向凹口。	密	良好	内外面とも褐 色	内外面とも褐 色 YM-225
P o 27	埋土下層	高杯	② 8.3cm ④10.0cm	頭部は開く、直錐形の開口部、両端で大きく広がる。端部は平坦面をもつ。	外側…内外面とも風化のため調節不明。 内面…頭部ヨコナデ自消。	密	やや不良	内外面とも褐 色	N-276
P o 28	埋土下層	高杯	② 7.4cm ④10.0cm	直錐形頭部。頭部は直錐形の開口部、両端で大きく広がる。端部は平坦面をもつ。	外側…頭部ヨコナデ自消。 内面…頭部ヨコナデ自消。	密	良好	内外面とも褐 色	N-270
P o 29	埋土下層	高杯	② 5.7cm ④ 8.8cm	頭部は短く、内面気味に開き、両端で大きく広がる。	内外面とも風化跡が著しい。 両面内面シボリ自消。	やや粗(2mm の大砂粒を含 む。)	不良	内外面とも浅 黃褐色	N-280

插表24 南谷大山遺跡出土遺物觀察表 (18)

P-030	埋上下層	高杯	② 6.5△ ④ 9.0△	縁部は短く、「ハ」字状に開き、兩部で大きく広がる。	内外面とも風化のため凹凸不明。縁部外面わずかにぼけ面ハケ目。縁部内面ハサギ目認められる。	やや粗（2 mm 大の砂粒を含む。） 密（石英・砂粒を含む。）	良好	内外面とも褐色	N-281
P-031	埋土下層	高杯	② 5.7△ ④ 9.0△	縁部は短く、底部的に開き、縁部で大きく広がる。縁部は平坦面をもつ。	内外面とも風化のため凹凸不明。縁部内面シボリ目残る。	密（石英・砂粒を含む。）	良好	内外面とも褐色	N-274
P-032	埋土下層	高杯	② 5.7△ ④ 9.0△	縁部は短く、「ハ」字状に開き、縁部で大きく広がる。縁部は平坦面をもつ。杯底面部中央に孔有。	内外面とも風化のため凹凸不明。縁部内面シボリ目残る。	やや粗（石英・砂粒を多く含む。）	やや不良	内外面とも褐色	N-271
P-033	埋土下層	高杯	② 6.0△ ④ 9.6△	縁部はやや短く、「ハ」字状に開き、縁部で大きく広がる。	外面部一ナチュラル 内面部一第部シボリ目残る。 縁部ナチュラル。	粗	良好	内外面とも褐色	N-275
P-034	埋土下層	高杯	② 5.0△ ④ 10.0△	縁部は短く、「ハ」字状に開き、縁部で大きく広がる。縁部は平坦面をもつ。	外面部一ナチュラル 内面部一第部シボリ目残る。 縁部ナチュラル。	粗	良好	内外面とも褐色	N-272
P-035	埋土下層	高杯	② 5.2△ ④ 8.6△	縁部は短く、「ハ」字状に開き、兩部で大きく広がる。縁部は平坦面をもつ。	内外面とも風化のため凹凸不明。縁部内面シボリ目残る。	やや粗（砂粒を多く含む。）	やや不良	内外面とも褐色	N-273
P-036	埋土下層	高杯	② 4.5△ ④ 14.1△	大きく広がる高杯部部。縁部は平坦面をもつ。	内外面とも風化度高い。ヨコナテカ。	密	良好	内外面とも褐色	N-269
P-037	埋土上層	高杯	② 2.5 ④ 13.2	大きく広がる高杯部部。縁部は平坦面をもつ。	外面部一ナチュラル 内面部一ハケ目。	密	良好	内外面とも褐色	N-272
P-038	埋土下層	高杯	② 3.2△ ④ 14.4△	大きく広がる高杯部部。縁部は平坦面をもつ。	外面部一ナチュラル 内面部一クモの巣状ハケ目。	密	良好	内外面とも褐色	N-278
P-039	埋土下層	直口壺	① 10.8 ② 15.2 ③ 14.9	口縁部はよく外傾する「く」字状口縫。縁部は丸い。胴部は扁球形を呈す。	外面部一口縁部コナヂ 胴部半円状近斜方面ハケ目。 内面部一口縁部コナヂ。 胴部右肩ナチュラル。	粗	やや不良	内外面とも褐色	N-252
P-040	埋土下層	直口壺	① 9.6 ② 14.5 ③ 19.1	口縁部は高く外傾する「く」字状口縫。縁部は丸い。胴部は扁球形を呈す。	外面部一口縁部コナヂ 胴部翼状傾向短いハケ目。 以下ナチュラル。 内面部一口縁部コナヂ。 胴部風化したため凹凸不明。	やや粗（砂粒を含む。）	やや不良	内外面とも褐色 内面外側に黒青	N-251
P-041	埋土下層	直口壺	① 10.6△ ② 13.9△ ③ 14.9△	口縁部は高く外傾する「く」字状口縫。縁部は丸い。胴部は扁球形を呈す。底径はほぼ半中位にある。	外面部一風化度高い。ナチュラル。 内面部一口縁部コナヂ。 胴部より底部付近斜面に残れ。	粗	やや不良	内外面とも褐色	N-243
P-042	埋土下層	直口壺	① 8.8△ ② 18.4△	口縁部は高く外傾する「く」字状口縫。縁部は丸い。胴部はやや扁球形を呈す。	外面部一風化度高い。ナチュラル。 内面部一口縁部コナヂ。 胴部部付近斜面に残れ。 後左肩ナチュラル。	やや粗（砂粒を含む。）	やや不良	内外面とも褐色	N-284
P-043	埋土下層	小型瓶	① 8.8△ ② 12.8△ ③ 14.3△ ④ 1.4	口縁部は短くやや内傾して立ち上がる複合口縫。縁部は半球面をもち、凹凸が強まる。口縫部下端は強く突出する。胴部は扁球形を呈す。	外面部一口縫部一頭部コナヂ。 胴部翼状傾向ハケ目。 一部底面ハケ目。 中位以下トーレ状方向ハケ目。 内面部一口縫部一頭部コナヂ。 胴部ケズリ後ナチュラル。 軽微擦痕は残れ。	密	良好	内外面とも褐色 外側一部黒斑有 一部赤斑有	N-250
P-044	埋土上層	直口壺	① 10.8△ ② 5.2△	口縫部はやや外傾する「く」字状口縫。縁部は平坦面をもつ。	外面部一口縫部傾向ミカギ。 胴部内面3条の凹間。 以下半球状變形。凹縫が施される。 内面部一横方向ミカギ。	粗	良好	内外面ともに よい褐色	N-253
P-045	埋土下層	直口壺	① 9.8△ ② 5.1△	やや内浦気味に高く立つ「く」字状口縫をもつ直口壺。縁部は丸い。	内外面とも風化のため凹凸不明。 内面部内面3条の凹間。	密（石英・砂粒を含む。）	やや不良	内外面とも褐色	Y-M-14
P-046	埋土下層	瓶	① 10.8 ② 4.7 ③ 1.0	口縫部は内傾して立ち、全体は扁平。縁部は丸い。	内外面とも風化のため凹凸不明。ナチュラル。	やや粗（石英・砂粒を含む。）	やや不良	内外面とも褐色	N-241
P-047	埋土下層	瓶	① 12.0△ ② 4.8△	口縫部は内浦気味に立ち、全体は扁平。縁部は丸い。	内外面とも風化のため凹凸不明。ナチュラル。	密（砂粒を含む。）	良好	内外面とも褐色	N-242
P-048	埋土下層	瓶	① 14.2△ ② 4.6△	口縫部は内傾して立ち、全体は扁平。縁部は丸い。	内外面とも風化のため凹凸不明。ナチュラル。	やや粗（2 mm 大の砂粒を多く含む。）	やや不良	内外面とも褐色	N-282
P-049	埋土下層	瓶底器皿	① 13.6△ ② 2.5△ ③ 12.3△ ④ 2.3	口縫部は外板気味に下り、縁部は平坦面をもつ。内縫部付近に裂い突起をもつ。	内外面とも同板ナチュラル。	微密	良好	内外面とも灰色	C H-26
P-050	埋土下層	瓶底器皿	① 31.2△ ② 3.2△	口縫部は大きく外反し、縁部は平坦面をもつ。内縫部付近に裂い突起をもつ。	外面部一8条の波条文が施される。 内面部一頭部ナチュラル。	密	良好	外面部一暗青灰色 内面部一にい 黄褐色	O-31
P-051	埋土下層	大型壺	① 42.0△ ② 41.8△ ③ 79.5△	口縫部はやや外傾して立ち、口縫部は半球状を呈す。天井部と口縫部の縫は強く膨がつく。	外面部一頭部コナヂ。 瓶底部氣味が強い長い斜方向ハケ目。 内面部一頭部コナヂ。 胴部粗いハケ目。	密	良好	外面部一褐色一 内面部一にい 黄褐色 内面部一暗赤褐色	内面スラッシュ 外面部黒斑有 S-224

標表25 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (1)

遺物番号	出土地點	器種類	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
P o 1	店舗	甕	①15.2△ ②26.2△ ③12.1 ④2.3	口縁部は短く、ほぼ直立する複合口縁。端部は肥厚し平坦面をもつ。口縁部下端は短く、下膨らみとなる。腹部は下締形を呈す。	外面部・風化著しい。ナデか。 内面部・口縁部ヨコナデ。 端部指鉗压が残る。 胴部中辺は方角ケズリ。 底部足跡付底付が残る。	やや粗(石英・砂粒を多く含む。)	やや不良	内外表面明褐色 又付着 N-226	脚部外表面ス 付着 N-226
P o 2	埋土上層	甕	①6.0△ ②11.0△ ③2.5	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縁。端部は平底面をもつ。口縁部下端は短く屈曲する。腹部は張り、底形が尖る。	外面部・風化著しい。ナデか。 内面部・風化著しい小窓部指鉗压底正。	やや粗(石英・砂粒を多く含む。)	やや不良	内外表面灰褐色 N-225	
P o 3	床面	甕	①45.8△ ②20.3△ ③1.7	口縁部は短く立ち立てる複合口縁。端部は内方に肥厚し、平坦面をもつ。口縁部下端は短く膨らみとなる。大きく重なる脚部をもつ。	外面部・風化のため調節不良。 内面部・口縁部から断節ヨコナデ。 腹部指鉗压が残る。 以下左方向ケズリ。	やや粗(石英・砂粒を多く含む。)	良好	内外表面に古 い褐色	口縫外表面黑 斑有 N-224
P o 4	埋土上層	甕	①25.5△ ②4.9△ ③4.7	口縁部は外傾して立ち立てる複合口縁。端部は平底面をもつ。口縁部下端は短く屈曲する。	外面部とヨコナデ。	やや粗	やや不良	外面部に古 い褐色	N-208
P o 5	基盤層中	甕	①18.6△ ②5.9△ ③3.3	口縁部は外反気味に立ち立てる複合口縁。端部は肥厚し、丸い。口縁部下端は短く屈曲する。	外面部・口縫部風化著しい平行斜擦 面が認められる。 内面部・口縫部ヨコナデ。 端部屈曲部以下左方向ケズリ。	粗(石英・砂 粒を多く含む。)	やや不良	外面部に古 い褐色	N-219
P o 6	基盤層中	甕	①18.6△ ②5.9△ ③3.1	口縁部は外傾して立ち立てる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は短く屈曲する。	外面部・口縫部ヨコナデ。 内面部・口縫部ヨコナデ。 端部屈曲部以下左方向ケズリ。	やや粗(石英・砂 粒を多く含む。)	良好	内外表面に古 い褐色	口縫外表面黑 斑有 N-218
P o 7	基盤層中	甕	①17.0△ ②5.5△ ③3.7	口縁部は外反気味に立ち立てる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端はわずかに下垂する。	外面部とヨコナデ。 内面部・口縫部ヨコナデ。	やや粗(1~2 mm大的石英・ 砂粒を多く含む。)	良好	内外表面灰褐色	N-217
P o 8	埋土下層	甕	①21.8△ ②7.0△ ③3.9	口縁部は円弧で立ち立てる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は短く屈曲する。	外面部・口縫部波状紋後一部ナテ消し。 内面部・口縫部ヨコナデ。	やや粗	やや不良	内外表面灰褐色 内面部赤褐色 形成 N-221	
P o 9	埋土下層	甕	①16.4△ ②5.7△ ③3.6	口縁部はほぼ立てる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は短く屈曲する。ながらな耳部をもつ。	外面部・口縫部波状紋後一部ナテ消し。 内面部・口縫部ヨコナデ。 端部屈曲部以下ケズリ。	粗(砂粒をわ ずかに含む。)	良好	外面部灰褐色	N-222
P o 10	埋土下層	甕	①16.6△ ②4.4△ ③3.1	口縁部は厚手で外反気味に立ち立てる複合口縁。端部は平底面をもつ。口縁部下端は短く屈曲する。	外面部・口縫部波状紋後一部ナテ消し。 内面部・口縫部ヨコナデ。 端部屈曲部以下ケズリ。	粗(砂粒をわ ずかに含む。)	良好	外面部下褐色	N-223
P o 11	埋土下層	甕	①17.8△ ②4.7△ ③3.5	口縁部はほぼ立てる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端はわずかに下垂する。	外面部・風化著しいが、口縫部平行洗 面が認められる。 内面部・口縫部ヨコナデ。 端部屈曲部以下ケズリ。	やや粗(砂 粒を多く含む。)	やや不良	外面部に古 い褐色	N-220
P o 12	埋土下層	甕	①25.0△ ②4.3△ ③2.7	口縁部は外反気味に立ち立てる複合口縁。端部は丸い。口縁部下端は短く屈曲する。	外面部と風化のため調整不明。	粗(1~2mm大的 石英を多く含む。)	良好	内外表面灰褐色	N-216
P o 13	埋土下層	高杯	①17.8△ ②5.3△	脚部を呈す高脚杯形。端部は大きく外方に折れる。	外面部とヨコナデ。	粗	良好	内外表面灰褐色	N-238
P o 14	埋土下層	高杯	①14.2 ②3.3△	脚部を呈す高脚杯形。	外面部と風化著しい。ナデか。	粗	良好	内外表面に古 い褐色	古色剥離 N-227
P o 15	埋土上層	高杯	①15.6 ②8.0△	脚部を呈す高脚杯形。端部は丸い。筒部は細い。	外面部と風化著しい。ナデか。	粗(石英・砂 粒を含む。)	やや不良	外面部・褐色 内面部・赤褐色	杯部外表面黑 斑有 VM-12
P o 16	基盤層中	高杯	①16.2△ ②4.6△	やや丸味をもつ底部から大きくなる脚部を呈す。外縁部をもつ高脚杯形。底部は丸い。	外面部とヨコナデ。	粗(微細被をわ ずかに含む。)	やや不良	内外表面に古 い褐色	内外表面赤褐色 N-229
P o 17	埋土上層	高杯	②1.6△ ④30.0	大きめに広がる高脚瓶形。	外面部と風化著しい。	粗	良好	外面部灰褐色	N-230
P o 18	基盤層中	L 瓶	径 2.7 穴径 0.8 壁厚 14.4mm	いびつな環形を呈す。中心に孔あり。	手捏ね成形後ナデ。	粗	良好	に古い褐色	N-231
P o 19	埋土上層	持手瓶	②15.1△ ③18.1△ 側縫径 9.4 mm	口縁部を欠損する。底部は柄を標にしたような形を呈す。全体側縫部は被覆され、蓋蓋合部に突起をもぐらす。	外面部・裏部に周縁約3cm周間に3 条通らしの間に1~2条本体の 波状紋を2条ずつ施す。 後は固結ナデ。 内面部・内輪ナデ。	粗(1~2mm 大的砂粒をわ ずかに含む。)	良好	内外表面とも淡 褐色	O-25

## 獨立柱建物跡

遺物番号	出土地點	器種類	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
P o 1	C S B 01 P 6 内	甕	② 2.6△	口縁部は外傾する複合口縁。端部は丸く。口縁部下端は短く屈曲する。	外面部・口縫部波状紋。 内面部・ヨコナデ。	粗(砂粒を含 む。)	良好	外面部・淡褐色 内面部・黒褐色	口縫外表面ス 付着 N-172
P o 2	C S B 01 P 2 内	鼓形器	①16.0△ ②3.5△	外反気味に「ハ」字形に両く鼓形形古面白部と思われる。端部は丸い。	外面部・ヨコナデ。 内面部・一方角ケズリ。 端部ヨコナデ。	粗(1~2mm 大的砂粒をわ ずかに含む。)	良好	内外表面とも黃 褐色	N-171

挿表26 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (20)

# 土壤・土壌

遺物番号	出土地点	基種類	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
P-1	C SK01 堆上下層	甕	② 3.4△	口縁部は内面で外気気孔に立ち上がる複合口縁を有する。堆部を丸く。口縁部下端は扁出する。	外面…口縫部淡灰状。 内面…ヨコナギ。	密(1mm前後 の右糞を多く含む。)	良好	内外面とも橙色 外面スス付着 S-21	
P-1	C SK04 堆上下層	甕	② 3.5△	ほぼまっすぐにして立ち上がる複合口縁を有する。堆部は直進する。	外面…柄縫き平背沈済。 内面…口縫部。 頭部左方向ケズリ。	密(砂粒をわ すかに含む。)	良	内外面共橙色 外面スス付着 N-153	
P-1	C SK05 堆上上層	甕	② 1.9△	蓋のつまみ。	外面…ヨコナギ。 内面…右方向ケズリ。	やや粗(砂粒 を含む。)	良	内外面共にふ い橙色	N-154
P-1	C SK07 堆上上層	甕	① 17.4△ ② 11.3△ ③ 3.9	外気気孔に外傾して立ち上がる複合口縁を有する。堆部は丸く下端は外方に突出。なだらかな肩部をもつ。	外面…口縫部…頭部ヨコナギ。 肩部斜め右方向ケズリ。 底部以降ドーム。 内面…口縫部…頭部ヨコナギ。 頭部右方向ケズリ。	密(砂粒を含 む。)	良好	内外面共橙色	N-169
P-2	C SK07 堆面	甕	① 17.0△ ② 9.1△ ③ 3.7	外気気孔に外傾して立ち上がる複合口縁を有する。堆部は丸く下端は既く外方に突出。	外面…口縫部ヨコナギ。 肩部斜め右方向ケズリ。 堆部右方向ケズリ。 内面…口縫部…頭部ヨコナギ。 頭部右方向ケズリ。	密(砂粒を含 む。)	良好	内外面共淡黃 色	N-179
P-3	C SK07 堆上上層	甕	① 15.0△ ② 7.0△ ③ 3.3	外気気孔に外傾して立ち上がる複合口縁を有する。堆部は丸く下端は既く外方に突出。	内外面共に風化質しく不明。	やや粗	不良	内外面共淡黃 色	N-168
P-4	C SK07 堆上上層	高杯	② 18.2△ ③ 6.2△	複状の杯部を有する高杯杯部。堆部は丸く。	内外面共にナメ。	密(砂粒を含 む。)	良好	内外面共赤褐色	N-166
P-5	C SK07 堆上上層	匙形杯	① 13.2 ② 5.6 ③ 10.0	やや深い直壁の杯部をもつ底膨らむ。堆部は丸くや外傾する。低い脚部は大きく「ハ」字状に広がる。	外面…ヨコナギ。 内面…堆部ヨコナギ。 脚部左方向ケズリ後ナデ。	密(砂粒をわ すかに含む。)	良好	内外面共赤褐色	N-167
P-1	C SK18 堆面	甕	① 14.6△ ② 10.5△ ③ 2.2	わずかに内傾して立ち上がる複合口縁を有する。堆部は丸く肥厚し、押さえられている。下端は純く曲曲する。肩部はやや膨らむ。	外面…口縫部…頭部ヨコナギ。 肩部風化が著しく不明。ハケ はか。 脚部ナメ。 内面…口縫部…頭部ナメ。 脚部ケズリ後ナデ。指揮正直 有。	密(1~2mm の大右糞を含 む。)	良好	内外面共赤褐色 外面…にい橙色	N-173
P-2	C SK18 堆面	高杯	② 4.1△ ③ 2.2	複状の杯部を有する高杯杯部。	外面…口縫ナメ。 肩部わざかにハケの跡がみ られるが風化が質しく不明。 脚部ナメ。 内面…口縫ナメ。 脚部ケズリ後ナデ。指揮正直 有。	密(砂粒をわ すかに含む。)	良好	内外面共赤褐色 外面…紫褐色	N-174
P-1	C SK19 瓶底	逆「ハ」字形	② 5.7△	逆「ハ」字形に広がる瓶底器を右向 き。全体的に厚手。	外面…ナデ。 内面…ケズリ後ナデ。	やや粗(砂粒 を多く含む。)	良好	内外面共赤褐色	N-175

## 段状遺構

遺物番号	出土地点	基種類	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
P-1	C SS03 P269	甕	① 14.8 ② 9.2△ ③ 5.4△ ④ 17.8 ⑤ 2.6 ⑥ 3.0	外気気孔に立ち上がる複合口縁を有する。堆部は少し突り口縫部下端は下張する。堆部は平底。	外面…口縫部押打平行沈済。 堆部吹き出し口縫部下端は下張する。 脚部は押打後ナメ。堆部左方向ケズリ。 内面…口縫部ヨコナギ。 肩部左方向ケズリ。堆部上方向へラグアリ。	やや粗	良好	内外面とも橙 色	内外面共ス ス付着有 S-166
P-2	C SS03 堆上上層	甕	① 20.0△ ② 5.4△ ③ 5.6	外気気孔に立ち上がる複合口縁を有する。堆部は外傾する平底面をもつ。堆部下端はわざかに下張する。	外面…口縫部ヨコナギの平行沈済。 内面…口縫部…頭部ヨコナギ。 頭部左方向ケズリ。	密(1mm大の 砂粒を含む。)	良好	内外面ともに ふい黄褐色	外側ス付着 K-2
P-3	C SS03 堆上下層	甕	① 19.6△ ② 4.6△ ③ 3.3	外傾して立ち上がる複合口縁を有する。堆部下端は下張する。	外面…口縫部ヨコナギの平行沈済。 内面…口縫部ヨコナギ。 頭部左方向ケズリ。	密(1~2mm 人の右糞含 む。)	良好	内外面ともに ふい黄褐色	口縫部外側ス ス付着 T-1
P-4	C SS03 堆上上層	甕	① 13.2△ ② 5.1△ ③ 2.7	ほぼ直立する複合口縁を有する。堆部は丸く。口縫部下端はわざかに下張する。	外面…口縫部ヨコナギの平行沈済。 内面…口縫部ヨコナギ。 頭部左方向ケズリ。口縫部下端以降ケズリ。	密(1~2mm 人の右糞含 む。)	良好	内外面とも橙 色	外側ス付着 O-13
P-5	C SS03 堆上下層	甕	① 14.8△ ② 8.8△ ③ 3.0	外傾しながら外傾して立ち上がる複合口縁を有する。堆部は平底面をもつ。口縫部下端は既く直面。肩部は丸く下端は既く外方に突出する。やや内厚。	外面…口縫部ヨコナギ。 内面…口縫部ヨコナギ。 堆部下端は既く直面。ナデ。指 揮正直有。	密(1~2mm 人の右糞含 む。)	良好	内外面とも橙 色	N-162
P-6	C SS03 堆土上層	甕	① 39.6△ ② 6.7△ ③ 3.2	外気気孔に直立する複合口縁を有する。堆部に外傾する平底面をもつ。口縫部下端は下張する。	外面…ヨコナギ。 内面…口縫部ヨコナギ。 堆部左方向ケズリ。	密(1~2mm 人の右糞含 む。)	良好	内外面とも橙 色	外側ス付着 T-2
P-7	C SS03 堆土下層	甕	① 15.6△ ② 5.6△ ③ 3.9	外気気孔にほぼまっすぐ立ち上がる複合口縁を有する。堆部は既く直面。肩部は丸く下端は既く直面する。あまり張らない。	外面…口縫部ナメ。 内面…口縫部…頭部ナメ。 頭部成形ナメ。頭部左方向ケズリ。	密(1~3mm の右糞を含 む。)	良好	内外面とも橙 色	S-201
P-8	C SS03 西斜面 堆土下層	甕	② 17.2△ ③ 5.7△ ④ 3.8	外気気孔にほぼまっすぐ立ち上がる複合口縁を有する。堆部は既く直面。肩部は既く直面する。堆部左方向ケズリ。	外面…口縫部風化質しき。ナデ。 内面…口縫部ヨコナギ。押打引き沈 済後淡灰。	密(砂粒を含 む。)	良好	内外面共にふ い黄褐色	外側にスス付 着N-158

標表27 南谷大穴遺跡出土遺物観察表 (2)

段状遺構

P-9	CSS03 P28内	裏	①17.6 ②8.1△ ③2.1	やや外反角氣味に外傾して立ち上がる複合口部を有する。端部は丸く口縫部は幅広く、屈曲する。脣部はやや弧状である。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部一部端部風化のため不規則。ヨコナデか。 脣部左方向ケズリ。	密 (1~2mm の石英を多く含む。)	良好	内外面とも質 粒色	口縫部外表面 スチッキ O-16
P-10	CSS03 埋土下層	裏	①14.9△ ②3.9△ ③3.3	外反角氣味に外傾して立ち上がる複合口部を有する。端部は薄く、口縫部は幅広く、右側に傾く。皮肉を出す。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部一部端部ヨコナデ。 脣部以下ケズリ。	密	良好	内外面とも浅 黄褐色	口縫部外表面 スチッキ O-12
P-11	CSS03 埋土下層	裏	①13.0△ ②5.0△ ③3.0	外反角氣味に立ち上がる複合口部を有する。端部は丸い。口縫部は幅広く、右側に傾く。皮肉を出す。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部一部端部ヨコナデ。 脣部以下右方向ケズリ。	密 (1mm以下 の石英・赤石 を含む。)	良好	内外面とも浅 黄褐色	口縫部外表面 スチッキ F-Y-6
P-12	CSS03 埋土下層	裏	①24.2△ ②13.7△ ③4.3	やや外反角氣味に外傾しながら立ち上がる複合口部を有する。端部は丸い。口縫部は幅広く、左側に傾く。皮肉を出す。右側に端部風化がある。	外面…口縫部一部ヨコナデ。 内面…口縫部一部端部風化して不規則。左側に端部風化がある。	密 (2mm大 きな砂粒を含む。)	良好	内外面とも質 粒色	N-165
P-13	CSS03 埋土下層	裏	①18.2△ ②7.8△ ③3.1	外傾して立ち上がる複合口部を有する。端部は半圓形をもち、口縫部は幅広く、左側に傾く突出する。ならかなな脣部をもつ。	外面…端部風化が著しい。脣部外側微 度風化で認められる。	密	良好	内外面とも浅 黄褐色	口縫部外表面 スチッキ O-17
P-14	CSS02 埋土下層	皮	①14.2△ ②5.0△ ③3.8	外傾しながら内傾して立ち上がる複合口部を有する。端部は半圓形をもち、口縫部は下端が右側に傾く。外方へ突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…端部抑制している。ナテか。	密 (砂粒を含 む。)	良好	内外面とも質 粒色	N-157
P-15	CSS03 埋土下層	裏	①19.8△ ②5.7△ ③3.4	外傾して立ち上がる複合口部を有する。端部は半圓形をもち、口縫部は下端が右側に傾く。外方へ突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部一部ヨコナデ。	密	良好	内外面とも浅 黄褐色	N-156
P-16	CSS03 埋土下層	皮	①16.0△ ②4.9△ ③3.7	外反角氣味に外傾して立ち上がる複合口部を有する。端部は半圓形をもち、口縫部は下端が右側に傾く。皮肉をもつ。	外面…ヨコナデ。	密	良好	内外面とも浅 黄褐色	N-161
P-17	CSS03 埋土下層	裏	①15.0△ ②4.6△ ③3.4	外しながりや立ち上がる複合口部を有する。端部は半圓形をもち、口縫部は下端は丸く、外方へ突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…ナテ。	密	良好	内外面とも浅 黄褐色	N-155
P-18	CSS03 埋土下層	口縫部	①14.9△ ②12.0△ ③3.6	外反角氣味に外傾する複合口部を有する。端部は丸く、下端はやや下垂する。脣部はやや張り洗口部を有する。	外面…口縫部一部ヨコナデ。 内面…口縫部洗浄状。	密 (1mm程 の石英を含 む。)	良好	内外面とも浅 黄褐色	S-198
P-19	CSS03 埋土下層	脣部	②4.3△	脣のあまり張らない脣部。	外面…脣部平行洗浄、波状文が施さ れる。 内面…脣部ヨコナデ。 脣部左方向ケズリ。	密 (1mm程 の砂粒を含 む。)	良好	内外面とも浅 黄褐色	N-163
P-20	CSS03 埋土下層	底部	②15.5△ ④4.2	複脣部…底部と思われる。脣部はスマートで側脣部を出すと思われる。内面 明瞭な手足をもつ。	裏面…底部内側へ向く。ナテ。 内面…上方にナテ。	密	良好	内外面共に浅 黄褐色	S-216
P-21	CSS03 埋土下層	高杯	①14.4△ ②3.5△	浅い高杯の高杯部。脣部は丸い。	外面…ヨコナデ。 内面…ナテ。	密	良好	内外面とも浅 黄褐色	N-164
P-22	CSS03 埋土下層	高杯	②10.3△	大く円錐形の脣部をもち、脣部でや るやかに広げる。	外面…ナテ。 内面…強力なヨキがかかるに残る。 内面…シロナギナリ取りナガ。	密	良好	内外面とも浅 黄褐色	S-215
P-23	CSS04 埋土下層	皮	①20.2△ ②9.0△ ③5.5	口縫部は大きく外傾して立ち上がる複合口部。端部は外方へ傾く。下端はやや下垂する。脣部は張り洗出する。大きな張る脣部をもつ。	外面…1mm程ヨコナデ。 内面…強烈な波状文が施される。	密 (数 砂粒を含 む。)	良好	内外面とも浅 黄褐色	N-127
P-24	CSS04 P2内	皮	①12.5△ ②7.0△ ③2.5	口縫部は外傾して立ち上がる複合口部。端部は半圓形をもち、口縫部は下端は丸く、皮肉を出す。脣部は脣を張り、波状文をもつ。	外面…ヨコナデ。 内面…ヨコナデ。	密 (わずかに 砂粒を含む。)	良好	内外面とも浅 黄褐色	N-160
P-25	CSS04 埋土下層	裏	①29.6△ ②6.7△ ③3.5	口縫部は向背面。高く外反して立ち 上がる複合口部。端部は半圓形をもち、口縫部は下端は丸く引き出される。脣部は大きく溝ある。	外面…口縫部ヨコナデ。 内面…口縫部ヨコナデ。	密	良好	内外面とも淡 黃褐色	N-92
P-26	CSS04 埋土下層	裏	①44.7△ ②38.9△ ③39.5△ ⑤2.5	口縫部は外傾して立ち上がる複合口部。端部は半圓形をもち、口縫部は下端は丸く引き出される。脣部は幅広く、疊状形を呈す。	外面…口縫部ヨコナデ。 内面…口縫部ヨコナデ。	密 (3mm大 きな石英含む。)	良好	内外面とも浅 黄褐色	K-6
P-27	CSS04 埋土下層	裏	①36.0△ ②6.8△ ③3.4	口縫部は高く外反して立ち上がる複合口部。端部は半圓形をもち、口縫部は下端は丸く引き出される。脣部はあまり張らない。	外面…口縫部ヨコナデ。 内面…口縫部ヨコナデ。	密	良好	内外面とも浅 黄褐色	N-89
P-28	CSS04 埋土下層	裏	①17.2△ ②8.3△ ③3.5	口縫部は外傾して立ち上がる複合口部。端部は半圓形をもち、口縫部は下端は丸く突出する。脣部はあまり張らない。	外面…口縫部ヨコナデ。 内面…口縫部ヨコナデ。	密 (砂粒を含 む。)	良好	内外面とも浅 黄褐色	S-96
P-29	CSS04 埋土下層	裏	①16.4△ ②4.5△ ③2.8	口縫部はやや屈く外傾して立ち上 がる複合口部。脣部は丸い。口縫部 下端は極く引き出される。	外面…口縫部ヨコナデ。 内面…口縫部ヨコナデ。	密 (1mm程 の砂粒を含 む。)	良好	内外面とも浅 黄褐色	D-93
P-30	CSS04 埋土下層	裏	①16.0△ ②4.4△ ③2.6	口縫部はやや屈く外傾して立ち上 がる複合口部。脣部は丸い。口縫部 下端は極く引き出される。脣部が大きくなる。	外面…口縫部ヨコナデ。 内面…口縫部ヨコナデ。	密	良好	内外面とも浅 黄褐色	N-91

插表28 南谷大山遺跡出土遺物觀察表 (22)

## 段状遺物

P-9	CSS04 埋土下層	黒	①16.0cm ②4.7cm ③3.3	口縫部は外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端はよく彎曲する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部…端部ヨコナデ。 頭部以下右方向ケズリ。	密	良好	内外面ともに よい質褐色	N-102
P-10	CSS04 埋土下層	黒	①16.0cm ②3.2cm ③2.8	口縫部は外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端はよく彎曲する。	外面とともヨコナデ。	密	良好	内外面ともに よい質褐色	N-111
P-11	CSS04 埋土下層	黒	①17.4cm ②5.5cm ③3.6	口縫部は内版で高く外反気味に立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は既に引き出される。	外面とともヨコナデ。	密	良好	外面…黄褐色 内面…にい 褐色	N-97
P-12	CSS04 埋土下層	黒	①14.4cm ②4.8cm ③3.1	口縫部はやや外版して立ち上がる複合口縫。端部は外版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は既に引き出される。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部…端部ヨコナデ。 頭部以下右方向ケズリ。	密	良好	内外面とも良 好色	口縫部外側ス タッフ付 N-133
P-13	CSS04 埋土下層	黒	①16.2cm ②3.1cm ③2.6	口縫部はやや低く外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は既に引き出される。	外面とともヨコナデ。	密	良好	内外面とも淡 黄色	N-99
P-14	CSS04 埋土下層	黒	①17.8cm ②4.3cm ③3.1	口縫部は内版で外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は既に引き出される。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部…端部ヨコナデ。 頭部以下右方向ケズリ。	密	良好	内外面とも淡 黄色	N-95
P-15	CSS04 埋土下層	黒	①16.0cm ②6.2cm ③3.6	口縫部は外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は既に引き出される。	外面…ヨコナデ。化している。 内面…口縫部…端部ヨコナデ。 頭部以下左方向ケズリ。	密	やや不良	内外面とも淡 黄褐色	N-98
P-16	CSS04 埋土下層	黒	①14.2cm ②4.5cm ③2.7	口縫部は外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は既に引き出される。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部…端部ヨコナデ。 頭部以下右方向ケズリ。	密 (1mm の砂粒を含む。)	良好	内外面とも良 好色	口縫部外側ス タッフ付 N-98
P-17	CSS04 埋土下層	黒	①17.0cm ②4.8cm ③3.1	口縫部はやや低く外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は既に引き出される。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部…端部ヨコナデ。 頭部以下左方向ケズリ。	密	良好	内外面とも淡 黄褐色	N-94
P-18	CSS04 埋土下層	黒	①16.4cm ②3.6cm ③2.6	口縫部は低く外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は既に彎曲する。	外面とともヨコナデ。	密 (砂粒を含 む。)	良好	内外面ともに よい質褐色	N-110
P-19	CSS04 埋土下層	黒	①16.2cm ②3.9cm ③1.8	口縫部は低く外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は丸味をもって彎曲する。	外面とともヨコナデ。	密 (微 砂 含 む。)	良好	内外面ともに よい質褐色	N-112
P-20	CSS04 埋土下層	黒	①22.3cm ②5.5cm ③4.1	口縫部は外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は既に彎曲する。	外面…口縫部波状紋。 内面…口縫部後方ミカギ。 頭部屈曲部以下左方向ケズリ。	密	良好	内外面ともに よい質褐色	口縫部外側ス タッフ付 N-109
P-21	CSS04 埋土下層	黒	①18.8cm ②5.9cm ③3.5	口縫部は外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は既に彎曲する。	外面…口縫部波状紋後上部平行化 後…テナテ消し。 内面…端部ヨコナデ。 頭部屈曲部以下左方向ケズリ。	密 (1mm の砂粒を含む。)	良好	内外面とも淡 褐色	N-105
P-22	CSS04 埋土下層	黒	①16.0cm ②6.2cm ③3.9	口縫部は外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端はわずかに下垂する。	外面…口縫部14条の平行沈線。 内面…口縫部…端部ヨコナデ。 頭部屈曲部以下左方向ケズリ。	密 (1mm の砂粒を含む。)	良好	内外面ともに よい質褐色	外側ス付番 N-107
P-23	CSS04 埋土上層	黒	①20.0cm ②4.5cm ③2.8	口縫部はやや外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は既に彎曲する。	外面…口縫部平行沈線後一部ナテ消し。 内面…口縫部…端部ヨコナデ。 頭部屈曲部以下左方向ケズリ。	密 (砂粒を含 む。)	良好	内外面ともに よい質褐色	口縫部外側ス タッフ付 N-134
P-24	CSS04 埋土下層	黒	①17.2cm ②5.2cm ③3.4	口縫部は外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は既に彎曲する。	外面…11縫部平行沈線一部ナテ消し。 頭部屈曲方向ケグレ後接部方向ミ カギ。 内面…口縫部横方向ミカギ。 頭部以下左方向ケズリ。	密	良好	内外面ともに よい質褐色	N-103
P-25	CSS04 埋土下層	黒	①17.9cm ②4.9cm ③3.3	口縫部は外反気味に立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は既に彎曲する。	外面…口縫部平行沈線後一部ナテ消 し。 内面…口縫部ヨコナデ。 頭部屈曲部以下左方向ケズリ。	密 (砂粒をわ かむ。)	良好	内外面とも良 好色	N-104
P-26	CSS04 埋土上層	黒	①13.6cm ②4.2cm ③3.1	口縫部は肉厚で外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は既に彎曲する。	外面とともヨコナデ。	密	良好	内外面とも赤 褐色	N-129
P-27	CSS04 埋土下層	黒	①16.0cm ②4.1cm ③3.1	口縫部は内版で外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は既に彎曲する。	外面…口縫部波状紋後一部ナテ消し。 内面…11縫部ヨコナデ。 頭部屈曲部以下左方向ケズリ。	密 (1~2mm の砂粒を含む。)	良好	内外面ともに よい質褐色	外側亞種有 N-108
P-28	CSS04 埋土下層	黒	①16.0cm ②5.5cm ③2.8	口縫部は外反気味に外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は既に彎曲する。脇部はあまり張らない。	外面…ヨコナデ。 内面…11縫部ヨコナデ。 頭部屈曲部以下左方向ケズリ。	密 (1~2mm の砂粒を含む。)	良好	外側…灰褐色 内面…灰褐色 内側屈曲部有 N-99	外側口縫部ス タッフ付 内側屈曲部有 N-99
P-29	CSS04 埋土下層	黒	①14.8cm ②3.3cm ③2.4	口縫部は外版して立ち上がる複合口縫。端部は引抜きされる。口縫部下端は既に彎曲する。	外面ととも風化化しい。ナテか。 内面…端部ヨコナデ。	密 (微 砂 含 む。)	良好	内外面とも良 好色	N-113
P-30	CSS04 埋土下層	黒	①17.2cm ②5.4cm ③3.3	口縫部は外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は既に下垂する。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部…端部ヨコナデ。 頭部屈曲部以下左方向ケズリ。	密 (1~2mm の砂粒を含む。)	良好	外側…にい 褐色 内面…一様 褐色	外側ス付番 N-101
P-31	CSS04 埋土上層	黒	①15.2cm ②3.5cm ③2.4	口縫部は外版して立ち上がる複合口縫。端部は内版へ肥厚して平出皿をもつ。口縫部下端は既に彎曲する。	外面とともヨコナデ。	密 (1~2mm の砂粒を含む。)	良好	内外面ともに よい質褐色	外側ス付番 N-132
P-32	CSS04 埋土下層	黒	② 2.4cm ④ 5.0cm	わずかに平底を呈す底部。	外面…腹面ハケ目。 内面…上方右ケズリ。	密 (微 砂 含 む。)	良好	内外面とも赤 褐色	外側ス付番 N-125
P-33	CSS04 埋土下層	黒	② 2.0cm ④ 5.0cm	わずかに平底を呈す底部。	外面…腹面ミカギ。 内面…上方右ケズリ。	密 (微 砂 含 む。)	良好	外側…にい 褐色 内面…赤褐色	外側ス付番 N-124

挿表29 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (3)

## 段状構造

P 034	CSS 04 埋土下層	底部	② 2.4△ ④ 6.2△	わずかに平底を呈す底部。	外面…ハガク月落ミガキ。 内面…ケズリ。	密 (1 mm 大の砂粒を含む。)	良好	内外面とも灰褐色	外側底部へラ 起号有 N-136
P 035	CSS 04 埋土下層	底部	② 1.6△ ④ 5.4△	わずかに平底を呈す底部。	外面…横方向ミガキ。 内面…ケズリ。	やや粗 (1 ~ 2 mm 大の砂粒含む。)	良好	内外面とも黄褐色	N-125
P 036	CSS 04 埋土下層	底部	② 1.6△ ④ 5.4△	わずかに平底を呈す底部。	外面…横方向ハケ目。 内面…上方向ケズリ。	刺 (1 ~ 2 mm 大の砂粒含む。)	良好	内外面とも灰褐色	外側底部有 N-121
P 037	CSS 04 埋土下層	底部	② 1.△ ④ 5.0△	わずかに平底を呈す底部。	外面…横方向ケズリ。 内面…上方向ケズリ。	密	良好	外側…青い 内面…暗褐色	N-123
P 038	CSS 04 埋土下層	底部	② 2.△ ④ 5.0△	わずかに平底を呈す底部。	外面…横方向ハケ目。 内面…ケズリ。	密 (微弱含む。)	良好	外側…暗褐色 内面…にい 褐色	外側底部有 N-122
P 039	CSS 04 埋土下層	高杯	① 15.6△ ② 3.△	深い瓶底を呈す高杯形部と思われる。 底部は丸い。	外面…横方向ミガキ。 内面…丁寧なナテ。	密	良好	内外面ともに ない黄褐色	外側底部有 N-119
P 040	CSS 04 埋土下層	高杯	② 7.5△ ④ 14.6△	瓶底は短く、直線的に開き、底部で 大きく広がる。 底部は丸い。 底部に内透かしが4方にある。	外面…筒状上半横方向ミガキ。 下平横方向ミガキ。 横横横方向ハケ目。 内面…筒形ケズリ。 擦剥ナテ。	密 (砂粒を含む。)	良好	内外面ともに ない黄褐色	外側底部有 N-131
P 041	CSS 04 埋土下層	鼓形台古	② 5.9△	複合口縁部を呈す鼓形台古上部。	外面…ヨコナナ。 内面…筒形ケズリ等丁寧なナテ。	密	良好	内外面ともに ない黄褐色	N-128
P 042	CSS 04 埋土下層	鼓形台古	② 4.3△	鼓形台古上部一部一側部の破片。 曲面部は鋸く、瓶部は低い。	外面…ヨコナナ。 内面…筒部下部丁寧なナテ。 筒部一部台左方向ケズリ。	密 (微弱含む。)	良好	内外面とも該 黄色記号有 N-135	鼓形台外部へ 記号有
P 043	CSS 04 P38内	鼓形台古	② 2.7△ ④ 16.4△	おさりき「ヨ」字状に開く鼓形台古 底部と思われる。底部は丸い。	外面…ヨコナナ。 内面…筒部上平ケズリ。下平ヨコナナ。	密 (砂粒を含む。)	良好	内外面とも黄褐色	N-129
P 044	CSS 04 埋土下層	小型丸底座	① 9.0△ ② 2.5△ ③ 2.0	外側する腰部口縁部をもつ小型丸底座 と思われる。底部は丸く、口縁部下 端は短く突出する。	外側面ともヨコナナ。	密	良好	内外面とも該 黄色記号有	N-114
P 045	CSS 04 埋土下層	高杯	① 13.4△ ② 3.4△	やや開脚する底部から瓶面外反する 口縁部をもつ小型高杯形台古底部 と思われる。瓶部は丸い。	外面…横方向ミガキ。 内面…ヨコナナ。	密	良好	内外面とも黄褐色	N-117
P 046	CSS 04 埋土下層	小雙耳高杯 器台	① 10.0△ ② 2.0△	やや内透かす底部から短く瓶面外反する 口縁部をもつ小型高杯形台古底部 と思われる。瓶部は丸い。	外側面ともヨコナナ。	密	良好	内外面とも黄褐色	N-118
P 047	CSS 04 埋土下層	低脚杯	② 3.△ ④ 11.2△	低く、人間の脚をもつ細脚と思わ れる。	外側面とも風化著しい。ナテか。 やや粗 (微 細多く含む。)	やや粗 (微 細多く含む。)	やや不良	内外面とも該 黄色記号有	N-130
P 048	CSS 04 底面	蓋?	① 16.0△ ② 6.7△	口縁部はやや内側溝に開きながら 下り、端部は丸い。天井部はやや丸 みをもち、口縁部との境には明瞭な 稜をもつ。柄の可能性もある。	外側…口縁部ヨコナナ。 天井部ハケ目。 内面…天井部ヨコナナ。 口縫部ヨコナナ。	密 (わざに 砂粒を含む。)	良好	内外面とも黄褐色	天井部外表面ス 特有 N-120
P 049	CSS 04 埋土下層	土玉	径 3.0 穴径 0.8 重さ 25.8g	やいびつな球形を呈する。中心に孔 がある。	手捏ね成形ナテ。	密	良好	にい 黄褐色	N-137
P 050	CSS 04 埋土下層	土玉	径 2.5 穴径 0.6 重さ 9.8g	いびつな球形を呈する。中心に孔 がある。	手捏ね成形ナテ。	密	良好	褐色	N-138
P 01	CSS 05 床面	蓋	① 18.0△ ② 10.4△ ⑤ 2.7	口縁部は外側して立ち上がる複合口 縁部。瓶部は半周面をもつ。口縁部下 端は丸く突出する。瓶部は瓶形を呈 すものか。	外側…口縁部ヨコナナ。 側面前面横方向ハケ目後横波状 文様瓶形ハケ目。 下平不規則なハケ目。 内面…口縫部一部部ヨコナナ。 瓶部下右方向ケズリ。	密	良好	内外面とも該 黄色記号有	瓶部外表面ス 特有 S-97
P 01	CSS 06 P 1 内	蓋	① 14.6△ ② 21.6△ ③ 2.0	口縫部は外側して立ち上がる複合口 縁部。瓶部は半周面をもつ。口縫部下 端は丸く突出する。瓶部は瓶形を呈 すものか。	外側…口縫部…瓶部ヨコナナ。 瓶部半周面横波状。 波状が施され る。 瓶部下右方向ケズリ。 内面…口縫部一部部ヨコナナ。 瓶部下右方向ケズリ。	やや粗	やや不良	外側…青い 内面…にい 褐色	瓶部外表面ス 特有 S-195
P 02	CSS 06 P 1 内	蓋	① 20.8△ ② 40.0△ ③ 34.6△ ④ 6.4△ ⑤ 3.8△	口縫部はほぼ直立する複合口縁部。瓶 部は半周面をもつ。口縫部下端は丸く 突出する。瓶部は瓶形を呈す。 瓶部下端は丸く瓶形を呈す。 瓶部外辺に丸く瓶形を呈す。	外側…口縫部ヨコナナ。 瓶部下右方向横波状。 波状が施され る。 瓶部下右方向ケズリ。 内面…口縫部一部部ヨコナナ。 瓶部下右方向ケズリ。	密	良好	内外面とも黄褐色	瓶部外表面ス 特有 S-197

## 溝状結構

遺物番号	出土地点	器種	縦 横 幅 厚	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎 上	焼 成	色 調	備考
P 01	CSD 10 埋土上層	蓋	① 14.4△ ② 6.0△ ③ 2.4	口縫部は瓶内青色釉に立ち上がる複合口 縁部。瓶部は半周面をもつ。口縫部下 端は丸く瓶形を呈す。	外側…風化著しい。ナテか。 内面…口縫部一部部ヨコナナ。 瓶部下右方向ケズリ。	やや粗 (2 mm 大の砂粒を多 く含む。)	良好	内外面とも ない 褐色	N-176	
P 01	CSD 12 埋土上層	蓋	① 17.6△ ② 7.5△	瓶部は外側して大きめ開き、瓶部は 肥厚して外縁部と半周面をもつ。瓶 部に指痕跡が残る。	外側…ナテ。 瓶部下右方向横波状。 波状が施され る。 瓶部下右方向ケズリ。	密 (砂粒をわ ずかに含む。)	良好	内外面とも ない 褐色	N-181	
P 02	CSD 12 埋土上層	蓋	① 17.0△ ② 4.4△ ③ 3.4	口縫部は青色釉に立ち上がる複合口 縁部。瓶部は半周面をもつ。口縫部下 端は丸く瓶形を呈す。	外側…口縫部全周の平行沈錐。 内面…ヨコナナ。	やや粗 (1 ~ 2 mm 大の砂粒を多 く含む。)	良好	内外面とも黄褐色	N-180	

挿表30 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (4)

## 溝状造構

P o 3	CSD12 堆土上層	表	①15.0m ②4.3△ ③3.4	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は強く突出する。	外面…口縫部14条の平行沈線。 内面…口縫部ヨコナデ。 底部斜面部以下左方向ケズリ。	やや粗(1~2mmの大石英、長石含む。)	良好	内外面とも橙褐色	N-179
P o 4	CSD12 堆土上層	裏	①12.6m ②4.8△ ③3.5	口縫部は外反して立ち上がる複合口縫。端部は丸く丸められる。口縫部下端は強く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…ヨコナデ。 底部斜面部以下左方向ケズリ。	やや粗(1~2mmの大石英、長石含む。)	良好	外面…に赤い 色調 内面…淡黄褐色	I N - 7
P o 5	CSD12 堆土上層	裏	①17.0m ②6.2△ ③3.2	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は平面度をもつ。口縫部下端は強く突出する。	外面…ヨコナデ。 内面…ヨコナデ。 底部斜面部以下右方向ケズリ。	密(1~2mmの大砂粒を含む。)	良好	内外面ともに 赤い橙褐色	I I 線部底面有 N-178
P o 6	CSD12 堆土上層	裏	①18.2m ②6.2△ ③2.2	口縫部は極く外傾して立ち上がる複合口縫。端部は平面度をもつ。口縫部下端は強く突出する。	内面と底面も風化著しい。	やや粗(2~3mmの大砂粒を含む。)	やや不良	内外面ともに 赤い焼色	N-177
P o 1	CSD13 堆土上層	裏	①17.0m ②4.2△ ③2.1	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端はわずかに下屈する。	外面…風化著しい。 内面…口縫部風化著しい。 底部斜面部以下下屈す。	粗(2~3mmの大砂粒を多く含む。)	やや不良	内外面ともに 赤い焼色	N-183
P o 2	CSD13 堆土上層	裏	①18.0m ②4.8△ ③3.9	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端はわずかに下屈する。	内面と底面も風化著しい。ナテ。	密	やや不良	内外面とも灰褐色	N-182
P o 3	CSD13 堆土上層	上端	径 1.9 穴径 0.6 巣き 9.3m	長方形を呈す。中心に孔あり。	手捏ね成形後ナテ。	密	良好	に赤い橙褐色	N-184
P o 1	CSD17 堆土上層	裏	①24.2m ②7.6△ ③4.3	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は強くわざわざに下屈する。	外面…口縫部液状化。 内面…口縫部ヨコナデ。 底部斜面部以下ケズリ。	やや粗(1~2mmの大石英を含む。)	良好	内外面とも橙褐色	I I 線部外面風 化有 S-265
P o 2	CSD17 堆土上層	裏	①16.0m ②5.3△ ③3.5	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は強く屈曲する。	外面…口縫部液状化。 内面…口縫部ヨコナデ。 底部斜面部以下ケズリ。	やや粗(1~2mmの大石英を含む。)	やや不良	内外面とも浅黃褐色	S-263
P o 3	CSD17 堆土上層	裏	①17.2m ②3.5△ ③3.2	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は強く屈曲する。	外面…口縫部15条の平行沈線。 内面…口縫部ヨコナデ。	密(1mmの大石英を含む。)	良好	内外面ともに 赤い黄褐色	外殻スズ付有 S-264
P o 4	CSD17 堆土上層	武鉄芯	② 3.4△ ④ 8.6m	底く「ハ」字状に開く斜脚部。	内面と底面ともヨコナデ。	やや粗(1~3mmの大石英を多く含む。)	良好	内外面とも橙褐色~浅黃褐色	S-262

## C-V区集石・ピット群

遺物番号	出土地点	基 構 類	法長(cm)	形 壁 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	釉 土	焼 成	色 調	備 考
P o 1	集 石・ ピット群 堆土層	表	①17.4m ②11.2△ ③4.5	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は強く突出する。	外面…口縫部平行沈線後斜文が3段でわざわざされる。 内面…口縫部ヨコナデ。 底部斜面部以下ケズリ。	やや粗(1~2mmの大石英、長石多く含む。)	良好	内外面ともに 赤い黄褐色	YM-11
P o 2	集 石・ ピット群 堆土層	面杯	①18.1 ②12.9 ③9.9	杯部は浅い皿状を呈す。筒部は聞く。「ハ」字状に開き、底部で大きく広がる。	内外面とも風化著しい。 内面底部シボリ目残り、底部斜面方向ハケト。	やや粗	良好	内外面とも明赤褐色	O-20
P o 3	集 石・ ピット群 堆土層	面杯	② 3.8△	浅い皿状を呈す高筒杯部。	内外面とも風化著しい。 内面底部シボリ目残りが認められる。	密	やや不良	内外面とも橙褐色	YM-9
P o 4	集 石・ ピット群 底盤	直口皿	② 8.6△ ④14.4m	直口壺形と思われる。肩部はやや筒部を呈す。	外面…最大後付斜向ハケ目。 内面…左方向ケズリ。	密(砂粒を含む。)	良好	内外面とも青色 底部外面スズ付有 YM-8	
P o 5	集 石・ ピット群 堆土層	小型丸底盤	① 8.4 ② 9.0 ③ 8.4	口縫部は高く外傾する「く」字状口縫。端部は丸い。筒部は削除部を呈す。	内面と底面とも風化止め。	密	やや不良	内外面とも淡黄色	YM-10
P o 6	集 石・ ピット群 堆土層	腹	①14.2m ② 3.9	やや深く、体部に汽泡気味に立つ口縫をもつ。	内面と底面とも風化止め。	密(1~2mmの大石英を含む。)	やや不良	内外面とも橙褐色	底部外面風化有 YM-7

## 埋葬施設

遺物番号	出土地点	基 構 類	法長(cm)	形 壁 上 の 特 徴	手 法 上 の 特 徴	釉 土	焼 成	色 調	備 考
P o 1	C S X 01 小野丸底盤 有茎上	② 7.6△ ③13.8m	壁稼部を呈す小型九底丸倒瓶。	外面…風化著しい。 内面…A部斜面押圧痕残る。 下段以下左方向ケズリ。	密(4mmの大石英を含む。)	不良	外面…棕色 内面…淡黄褐色	S-157	
P o 1	C S X 02 基盤内	想思器杯蓋	①12.7 ② 4.6 ③12.5 ④ 7.2	口縫部はやや外傾しながら筒部に変る。筒部はノミ形状を呈す。口縫部と大口部の境には剥離的な接がつく。肩部には溝がある。	外面…A部斜面1周軸ヘラケズリ。 内面…口縫部ヨコナデ。	密	良好	外面…灰色~ 緑灰色 内面…黄褐色	火井部外面自然 焼かか K-3
P o 1	C S X 03 堆土中	裏	①17.2m ② 4.9 ③ 3.3	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は強く屈曲する。	外面…口縫部平行沈線。 内面…口縫部ヨコナデ。 底部斜面部以下左方向ケズリ。	密(1~4mmの大石英を含む。)	良好	内外面とも青色~ 黄褐色	別部外面スズ 付有 S-158
P o 2	C S X 03 堆土中	裏	② 4.7△	なだらかな寝部。	外面…沈紋。 内面…頭部斜面部以下左方向ケズリ。	やや粗(2mmの石英を含む。)	良好	内外面とも黄褐色	外殻スズ付有 S-169

插表31 南谷大山遺跡出土遺物觀察表 (25)

## 造 構 外

遺物番号	出土地点	器種	法量 (cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	筋 球	成 形	色 調	備考
Po 1	C-I 区 造構外	甕	①19.4△ ②5.8△ ③3.9	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は平坦面を持つ。口縁部下端は下垂する。	外腹…口縫部平行沈縫後抜款式。 内腹…は縫部と上ヨコナデ。 脚部…脚部は以下右方向ケズリ。	密 (1mmの大 の石英を含む。)	良好	内外面ともに ぶい黄褐色	外腹ス付背 内腹黒斑有 FY-12
Po 2	C-I 区 造構外	甕	①16.4△ ②4.8△ ③3.0	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は斜く突出する。	外腹…ヨコナデ。 内腹…口縫部と脚部ヨコナデ。 脚部…脚部以下右方向ケズリ。	密	良好	内外面ともに ぶい黄褐色	外腹ス付背 FY-11
Po 3	C-I 区 造構外	甕	①14.7△ ②16.9 ③17.7	口縁部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は平坦面をもつ。口縁部下端は斜く突出する。腹部は小方でやや屈筋形を呈す。底部は丸足となる。	外腹…口縫部ヨコナデ。 内腹…口縫部と脚部ヨコナデ。 脚部…脚部以下右方向ケズリ。 内腹…口縫部ヨコナデ。 肩部以下右方向ケズリ。 底部…脚部以下直線。	密	良好	内外面ともに洗 黄褐色	網部外腹ス付 背有 S-234
Po 4	C-I 区 造構外	高杯	①19.8△ ②5.0△	やや深い形状を呈す高杯形甕。端部はやや外反し、平坦面をもつ。	外腹…縱方向ミカキ。 内腹…縫部ヨコナデ。 下腹…脚部ミカキ。	密	良好	内外面ともに ぶい黄褐色	FY-14
Po 5	C-I 区 造構外	高杯?	② 3.3 ④18.6	大きく広がる西脇型と思われる。端部は平坦面をもつ。	外腹…横方向4ヶ目。 内腹…下半右方向ケズリ。 下腹…脚部ケズリ。	密 (1mmの大 の石英を含む。)	良好	内外面ともに ぶい黄褐色	FY-13
Po 6	C-I 区 造構外	鉢形器台?	①11.4△ ②3.6△	複合口縫を呈す鉢形器台。上右部と出される。端部は平坦面をもつ。機は斜め。	外腹…縦方向ミカキ。 内腹…縫部ヨコナデ。 下腹…脚部ケズリ。	密	良好	内外面ともに ぶい黄褐色	FY-9
Po 7	C-I 区 造構外	鉢形器台?	② 3.0 ④11.0△	複合口縫跡を呈す鉢形器台脚部とと思われる。縫は斜め、端部は平坦面をもつ。	外腹…縱方向ミカキ。 内腹…縫部ヨコナデ。	密	良好	内外面ともに 明黄褐色	YM-4
Po 8	C-I 区 造構外	小型丸底甕	①9.1 ②7.9 ③9.8	口縫部は内済して立つ「く」字状口縫。端部は丸い。底部は球形を呈す。	外腹…口縫部ヨコナデ。 内腹…脚部ヨコナデ。 底部…脚部は平坦面をもつ。	密	良好	内外面ともに ぶい黄褐色	S-199
Po 1	C-II 区 造構外	甕	①17.6 ②4.9△ ③3.7△	わずかに外反して立ち上がる複合口縫。端部は丸みをもっており、やや外反する。下端は下垂する。	外腹…口縫部平行沈縫。 内腹…ヨコナデ。	密 (砂粒を多 く含む。)	良好	内外面ともに 黄褐色	外腹ス付背 K-1
Po 2	C-II 区 造構外	甕	①17.4 ②5.1△ ③3.9	わずかに外反時に立ち上がる複合口縫を有する。端部は丸く、下端はわずかに下垂する。底部はあまり堅張らない。	外腹…口縫部平行沈縫。 内腹…口縫部ヨコナデ。 底部…ヨコナデ。	密 (1~4mm の石英を含む。 砂粒を含む。)	良好	内外面ともに 明黄褐色	外腹ス付背 YM-5
Po 3	C-II 区 造構外	甕	①18.2 ②10.4△ ③3.1	やや外傾気味に立ち上がる複合口縫を有する。端部は丸く、下端ははすかに外方に突出する。	外腹…口縫部平行沈縫。ナテ消し。 内腹…口縫部ヨコナデ。 底部…ヨコナデ。 脚部…脚部ケズリ。	密 (1mm程度 の砂粒を含む。)	良好	内外面ともに ぶい黄褐色	外腹ス付背 内腹黒斑有 CH-20
Po 4	C-II 区 造構外	甕	①18.0△ ②6.2△ ③3.8	やや外傾気味に立ち上がる複合口縫。端部は丸く、下端ははすかに外方に突出する。	外腹…ヨコナデ。 内腹…口縫部ヨコナデ。 底部…ヨコナデ。 脚部…脚部ケズリ。	密	良好	内外面ともに 黄褐色	内面に剥離あ 9 S-218
Po 5	C-II 区 造構外	甕	①21.5△ ②4.5△ ③4.0	外傾気味に立ち上がる複合口縫を有する。端部はやや丸味を帯びている。下端は斜めに丸く。	外腹…口縫部ヨコナデ。 内腹…ヨコナデ。 底部…ヨコナデ。	密 (0.5~4mm 以下の石英を含む。)	良好	内外面ともに 黄褐色	FY-8
Po 6	C-II 区 造構外	甕	①16.2 ②4.1△ ③2.9	外傾して立ち上がる複合口縫。端部はやや外反して丸い。下端は斜く削出する。	外腹…ヨコナデ。 内腹…口縫部ヨコナデ。 底部…ヨコナデ。	密 (0.5~3mm の石英を含む。)	良好	外腹…にぶい 黄褐色 内腹…明黄褐色	外腹ス付背 FY-4
Po 7	C-II 区 造構外	甕	①20.8 ②4.9△ ③3.4	外傾して立ち上がる複合口縫を有する。端部は丸味をもつて、下端を斜く削出する。	外腹…ナテ。 内腹…口縫部ナテ。 底部…脚部ヨコナデ。	密 (2mm以下 の石英を含む。 浮石を含む。)	良好	内外面ともに ぶい黄褐色	FY-7
Po 8	C-II 区 造構外	甕	①18.0 ②4.2△ ③3.5	外傾しながら立ち上がる複合口縫を有する。端部はやや外反して丸い。下端ははすかに下垂する。	外腹…ナテ。 内腹…ヨコナデ。	密	良好	内外面ともに 明黄褐色	O-11
Po 9	C-II 区 造構外	甕	①12.8 ②4.5△ ③3.3	外傾しながら立ち上がる複合口縫。端部は丸く外反している。下端は外方に突出する。	外腹…ナテ。 内腹…口縫部ナテ。 底部…ヨコナデ。	密 (1mmの大 の石英を含む。 浮石を含む。)	良好	外腹…にぶい 黄褐色 内腹…にぶい 黄褐色	外腹ス付背 FY-3
Po 10	C-II 区 造構外	甕	①13.6 ②5.3△ ③2.1	外傾気味に立ち上がる複合口縫を有する。端部は丸く、下端は外方に突出する。	外腹…口縫…ヨコナデ。沈縫か。 内腹…右方ナテ。	密	良好	内外面ともに 明黄褐色	O-10
Po 11	C-II 区 造構外	鉢形器台	② 6.8△ ④23.0△	鉢形器台脚部。	内腹…とも風化のため調査不明。 ヨコナデ。	密 (0.1~0.3 mmの石英を含む。)	良好	内外面ともに 黄色	O-14
Po 1	C-III 区 造構外	甕	①18.4△ ②5.8△ ③3.2	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。ヨコナデ下端は斜く屈曲する。	外腹…ヨコナデ。平行沈縫。 内腹…ヨコナデ。 底部…ヨコナデ。	やや粗粒 (1~3 mmの大石英、 長石を含む。)	良好	内外面ともに 明黄褐色	II級部外腹ス 付背 IN-16
Po 2	C-III 区 造構外	甕	①16.4△ ②6.0△ ③3.6	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸く、下端ははすかに下垂する。	外腹…ヨコナデ。平行沈縫。 内腹…ヨコナデ。 底部…ヨコナデ。	密 (1mmの大 の石英を含む。)	良好	内外面ともに ぶい黄褐色	口縫部外腹 黄斑有 S-229

播表32 南谷大山造跡出土遺物観察表 (6)

## 造 構 外

P o 3	C - III区 造構外	裏	② 3.8△	口縫部は外気気味に立ち上がる複合口縫。端部を久く。口縫部下端はわずかに下垂する。	外側…口縫部+裏本の平行沈像が上下2段に施され、その間に3重織の同心円スタンプ文が施される。 内側…美化のため調整不規。ナテが、	（1~3mm の大石を含む。）	やや不良 内外面とも淡 黄褐色	S - 236
P o 4	C - III区 造構外	裏	①20.0△ ② 6.2△ ③ 4.3	口縫部はやや外反して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は全く下垂する。	外側…ヨコナナ。 内側…口縫部ヨコナナ。 縫部端部以下左方向ケズり。	密	良好	内外面ともに よい黄褐色 S - 228
P o 5	C - III区 造構外	裏	①15.6 ② 4.8△ ③ 3.2	口縫部は外反して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は全く下垂する。	外側…ヨコナナ。 内側…口縫部ヨコナナ。 縫部端部以下左方向ケズり。	密	良好	内外面とも灰 色 IN - 10
P o 6	C - III区 造構外	裏	①13.5△ ②10.6△ ③16.6△ ④ 2.7	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は半坦張りもつ。口縫部下端は丸く突出する。口縫部はなだらかで、中位付近が膨らむ。	外側…口縫部ヨコナナ。 脇部端部凹面からハケ貝状手行沈像が施される。 以下側面開口部からハケ貝。 内側…口縫部ヨコナナ。 縫部端部以下右方向ケズり。	密	良好	内外面とも優 色 IN - 13
P o 7	C - III区 造構外	裏	①4.8△ ② 6.7△ ③ 3.1	口縫部は外傾して立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端は全く下垂する。大きく張る脇部をもつ。	外側…口縫部ヨコナナ。 脇部端部凹面からハケ貝状手行沈像が2段にわたって施される。 内側…口縫部ヨコナナ。 縫部端部以下右方向ケズり。	密	やや不良 内外面とも淡 黄褐色	IN - 12
P o 8	C - III区 造構外	裏	①17.6△ ② 5.1△ ③ 3.1	口縫部は外反して立ち上がる複合口縫。端部は半坦張りもつ。口縫部下端は丸く突出する。	外側…口縫部ヨコナナ。 内側…口縫部ヨコナナ。 脇部端部以下右方向ケズり。	やや粗（石英、 長石多く含む。）	やや不良 内外面とも淡 黄褐色	IN - 9
P o 9	C - III区 造構外	裏	①12.6△ ② 6.6△ ③ 3.1	口縫部は外気気味に立ち上がる複合口縫。端部は外反し、丸い。口縫部下端は丸く突出する。大きく張る脇部をもつ。	外側…ヨコナナ 内側…口縫部ヨコナナ。 脇部端部以下右方向ケズり。	密	良好	内外面ともに よい褐色 IN - 8
P o 10	C - III区 造構外	底部	② 3.4△ ③ 2.5△	小さく嵌合を呈す底部断片。上げ底となる。	外側…擬弓向ミガキ。 内側…ケズり。	（1mm の大石を含む。）	良好	内外面ともに よい黄褐色 IN - 14
P o 11	C - III区 造構外	低脚部	② 4.3△ ③ 6.4	やや高く中央となる底脚部と思われる。	外側…ヨコナナ 内側…材料内蓋充填される。ナテ。 縫部端部以下右方向ケズり。	やや粗（1~2 mmの大石、 長石含む。）	外側…淡黄褐 色 内側…にい 黄褐色	複部内蓋充 填有 IN - 15
P o 12	C - III区 造構外	上縫	長 3.0 中 2.0 穴径 0.4 重さ 16.6g	いびつな鉄錐形を呈す。中心に孔有。	手縫ね成形後ナテ。	密	良好	棕色 S - 231
P o 13	C - III区 造構外	上縫	長 3.5 中 1.7 穴径 0.45 重さ 8.8g	いびつな円柱状を呈す。中心に孔有。	手縫ね成形後ナテ。	密	良好	棕色 S - 232
P o 14	C - III区 造構外	上縫	長 4.5 中 1.0 穴径 0.2 重さ 3.8g	直角錐形を呈す。中心に孔有。	手縫ね成形後ナテ。	密	良好	にい褐色 N - 285
P o 1	C - N区 造構外	裏	①11.9 ②22.2△ ③21.8△ ④ 3.3	やや外反気味に立ち上がる複合口縫。端部は丸い。口縫部下端はわずかに下垂する。脇部は側脚形を呈し、最も大径はほぼ中位にもつ。	外側…口縫部平行沈像。 脇部端部の下に平行沈像が施される。以下縱向細かいハケ貝。 内側…口縫部ヨコナナ。 脇部端部以下左方向ケズり。 脇部端部以下右方向ケズり。	密	良好	外側…橙色 内側…にい 黄褐色 S - 226
P o 2	C - N区 造構外	裏	①21.0 ②19.6△ ③ 3.8	外反気味に立ち上がる複合口縫をもつ。端部は丸い。口縫部下端は丸く曲面する。などならな脇部をもつ。	外側…口縫部+裏本の平行沈像。 脇部端部横縫によく剥突。以下縱向細かいハケ貝。 内側…口縫部ヨコナナ。 脇部端部以下左方向ケズり。	密	良好	内外面ともに よい黄褐色 S - 222
P o 3	C - N区 造構外	裏	①29.4△ ②19.9△ ③ 3.4	外反気味に立ち上がる複合口縫をもつ。端部は丸い。口縫部下端は丸く曲面する。などならな脇部をもつ。	外側…口縫部平行沈像。 脇部端部横縫による剥突。以下縱向細かいハケ貝。 内側…口縫部ヨコナナ。 脇部端部以下右方向ケズり。	密	良好	外側…にい 褐色 S - 223
P o 4	C - N区 造構外	裏	①18.0 ② 5.3△ ③ 4.0	やや外傾して立ち上がる複合口縫をもつ。端部は丸く。口縫部下端は丸く突出する。などならな脇部をもつ。	外側…口縫部平行沈像。一部ナテ消失。 脇部端部横縫による剥突。以下縱向細かいハケ貝。 内側…口縫部ヨコナナ。 脇部端部以下左方向ケズり。	密	良好	外側…スヌ付 有 CH - 16
P o 5	C - N区 造構外	裏	①17.8 ② 5.3△ ③ 3.2	外傾して立ち上がる複合口縫をもつ。端部は丸い。口縫部下端は丸く突出する。などならな脇部をもつ。	外側…口縫部平行沈像+一部ナテ消失。 脇部端部横縫による剥突。以下縱向細かいハケ貝。 内側…口縫部ヨコナナ。 脇部端部以下左方向ケズり。	密	良好	内外面ともに 黄褐色 O - 24
P o 6	C - N区 造構外	裏	①19.4 ② 6.7△ ③ 4.2	やや外傾時に立ち上がる複合口縫をもつ。端部は丸く。口縫部下端は丸く突出する。などならな脇部をもつ。	外側…口縫部平行沈像+一部ナテ消失。 脇部端部横縫による剥突。以下縱向細かいハケ貝。 内側…口縫部ヨコナナ。 脇部端部以下右方向ケズり。	密	良好	内外面ともに にい褐色 O - 22
P o 7	C - N区 造構外	裏	①19.2 ② 5.3△ ③ 3.1	外傾して立ち上がる複合口縫をもつ。端部は丸い。口縫部下端は丸く突出する。	外側…口縫部平行沈像+一部ナテ消失。 脇部端部横縫による剥突。以下縱向細かいハケ貝。 内側…口縫部ヨコナナ。 脇部端部以下左方向ケズり。	密	良好	内外面ともに にい褐色 O - 23
P o 8	C - N区 造構外	裏	①16.6△ ② 6.6△ ③ 3.1	外反気味にはばまっすぐに立ち上がる複合口縫をもつ。端部は丸く。口縫部下端は下垂する。	外側…口縫部平行沈像。 脇部端部横縫による剥突。以下縱向細かいハケ貝。 内側…口縫部ヨコナナ。 脇部端部以下右方向ケズり。	（5mm の大石を含む。）	良好	内外面とも淡 黄褐色 S - 211

插表33 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (7)

## 追 構 外

P o 9	C-N区 造構外	裏	①19.8△ ②7.5△ ③3.8	外縫して立ち上がる複合口縫を有する。端部は丸く外反する。下端は下方へ突出する。	外面…口縫部ヨコナデ。波状文。 鋸歯一筋横ヨコナデ。 内面…口縫部ヨコナデ。 端部出せん。 肩部分右向ケズリ。	やや粗（1~2mmの砂粒を多く含む。）	良好	内外面ともに淡黄色	S - 217
P o 10	C-N区 造構外	右付腰	①16.4 ②13.4 ③18.2 ④11.0	外縫しながら立ち上がる複合口縫を有する。端部は丸く、下端ははざかに外方に突出する。肩部は丸く張り、肩部はほぼ直角を呈し、腰大怪を中央にもつ。長い大きな脚がつく。	外面…口縫部波状文、ナメ消し。 鋸歯一筋横ヨコナデ。 内面…口縫部ヨコナデ。 肩部出せん。 肩部左向ケズリ。 下平ミガキ。 内面…口縫部一筋横ヨコナデ。 端部出せん。	密	良	外面…にい 裏側色 内面…明褐色	S - 206
P o 11	C-N区 造構外	裏	①15.8△ ②21.6 ③17.4 ④4.2 ⑤2.8	外縫しながら立ち上がる複合口縫を有する。端部は丸く、下端ははざかに外方に突出する。肩部は丸く張り、肩部はほぼ直角を呈する。端部は平底。	外面…口縫部波状文、ナメ消し。 鋸歯一筋横ヨコナデ。 内面…口縫部ヨコナデ。 肩部出せん。 肩部左向ケズリ。	密	良好	外面…にい 裏側色 内面…にい 棕色	S - 219
P o 12	C-N区 造構外	裏	①10.4△ ②10.8△ ③3.8	大きく外反して立ち上がる複合口縫を有する。端部は丸く、下端ははざかに外方に突出する。肩部は丸く張り、肩部を柔らかく見せる。	外面…口縫部平行直線一筋ナメ消し。 鋸歯一筋横ヨコナデ。 内面…口縫部波状文。 肩部出せん。 下平ミガキ。 頭部出せん部以下左向ケズリ。	密	良好	内外面ともに褐色	外面ス付番 O - 21
P o 13	C-N区 造構外	裏	①16.2△ ②4.2△ ③2.7	外縫して立ち上がる複合口縫を有する。端部は丸く、下端は丸く、直角出でる。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部ヨコナデ。 端部出せん。	密	良好	内外面ともに淡黃褐色	S - 209
P o 14	C-N区 造構外	裏	①12.8△ ②9.3△ ③13.4△ ④2.7	下平直とする複合口縫をもつ。端部は丸く、口縫部下端は丸く屈曲する。脚部はさくはくに波形を呈すものと思われる。腰大怪は中位以上にある。	外面…口縫部ヨコナデ。 脚部出せん直角出でる。 内面…口縫部波状文四角キギ。 頭部出せん部以下左向ケズリ。 肩部上半は左向ケズリ。	密	良好	内外面ともににい褐色	外面ス付番 O - 18
P o 15	C-N区 造構外	裏	①15.9 ②8.4 ③15.0 ④2.7	外縫して立ち上がる複合口縫を有する。端部は丸く、下端は丸く、直角出でる。肩部はあまり張らない。	外面…ヨコナデ。 内面…口縫部ヨコナデ。 肩部右向ケズリ。	密	良	内外面ともに淡黃褐色	S - 208
P o 16	C-N区 造構外	裏	①15.8 ②12.5△ ③15.2 ④2.8	外縫して立ち上がる複合口縫を有する。端部は丸く、下端は丸く屈曲する。肩部はあまり張らない。	外面…口縫部ヨコナデ。 鋸歯一筋横。 肩部出せん。 内面…ヨコナデ。 肩部右向ケズリ。 脚部上半は左向ケズリ。	やや粗（1mm前後の砂粒を含む。）	良好	外面…棕褐色 内面…浅黃褐色	外面ス付番 S - 297
P o 17	C-N区 造構外	裏	①13.0△ ②9.2△	厚手の「く」字状山根をもつ。端部は丸く、くびれ。脚部はスマート。	外面…山根部ヨコナデ。 脚部右向ミガキ。 内面…ヨコナデ。 脚部右向ケズリ。 脚部上半は左向ケズリ。	密	良好	内外面ともに淡黃褐色	外面ス付番 S - 210
P o 18	C-N区 造構外	脚部	②9.8△ ④4.4	スマートな脚部—底部扁平。底部は平底を呈す。	外面…ミガキ。 内面…脚部右向のヘラケズリ。	密（1~3mmの大の石英を多く含む。）	良好	外面…赤色 内面…棕色	内外面ともにス付番 S - 214
P o 19	C-N区 造構外	脚部	②4.4△ ④5.0	平底の底部。	外面…ミガキ。 内面…指跡が残る。	密	良好	内外面ともに にい褐色 内面…にい 棕色	内外面ともにス付番 S - 213
P o 20	C-N区 造構外	脚部	②2.8△ ④7.8	平底の底部。	外面…ミガキ。 内面…ケズリ。	やや粗（0.1~0.3mmの石英を多く含む。）	良好	外面…くすんだ 棕褐色 内面…オレンジ 黄褐色	内外面ともにス付番 O - 15
P o 21	C-N区 造構外	裏	②5.8△ ③19.0	なだらかな肩部をもつ壺型。	外側…因縫があり、竹皮文が施される。 下平は因縫復元による斜突文が施される。 内面…左方向ケズリ。	やや粗（0.1~1mm程度の砂粒を多く含む。）	良	内外面ともに 褐色	外面ス付番 CH - 18
P o 22	C-N区 造構外	裏	②7.3△ ③17.4	ほほ筋形を呈すと思われる變脚部破片。	外側…因縫が施され、竹皮文が施される。 内面…脚部ヨコナデ。 脚部上半左方向。下平上方右ケズリ後ナゲ。	やや粗（0.1~1mm程度の砂粒を多く含む。）	良	内外面ともに淡黃褐色	脚部裏面有 CH - 17
P o 23	C-N区 造構外	脚	①12.2 ②12.5△	スマートな体部をもつ脚。	外面…ヨコナデ。 内面…脚部ヨコナデ。 脚部上半左方向。下平上方右ケズリ。	密（1mm程度の砂粒、石英を多く含む。）	良好	内外面ともに にい褐色	脚部外側にス 付番 CH - 14
P o 24	C-N区 造構外	低脚杯	②2.7△ ④7.6	低く「ハ」字形に広がる脚部をもつ低脚杯。	内外…ともにナデ。	やや密（0.5~1mmの砂粒を多く含む。）	良好	内外面共に黃 褐色	S - 220
P o 25	C-N区 造構外	蓋	①16.0 ②9.15	つまみ筋は丸く巾目みとなり、体部は低く、大きく「ハ」字形に広がる。脚部は丸い。	外面…横方開ミガキ。 内面…ヨコナデ。 脚部上半左方向。	密（1mm程度の砂粒、石英及び碧玉を多く含む。）	良好	内外面ともに にい褐色	体部外削有 CH - 15
P o 26	C-N区 造構外	裏	②3.0△ ③14.3	大きくて「ハ」字形に広がる脚部。下端は肥厚、先丸をもつ。	外面…ヨコナデ。 内面…脚部右向ケズリ。 下平ナゲ。	密（1~3mmの大の石英を含む。）	良好	内外面ともに 黒斑あり 淡黃褐色	内外面ともに 黒斑あり 淡黃褐色
P o 27	C-N区 造構外	鉄製蓋	①29.0△ ②18.9 ③29.0 ④16.1	1台切削後以降2段1段目と見え、端部は大きく外反した丸みをもつ。脚部は下垂する。脚部は丸く長い。脚部上部と上部台に比べて低く、小さい。端部は丸い。	外側…上部…脚部とも平行直線が施される。蓋部には3条の因縫が段に沿って施される。その上部は竹皮文。下部には因縫文が施される。 内面…上部…半平手後ヨコナデ。脚部…ボリ自力を吸収する。脚部上部…ナゲ。	やや粗（1~2mmの砂粒、石英を多く含む。）	良好	内外面ともに淡 黃褐色	内外面ともに 淡黃褐色

挿表34 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (2)

## 遺構外

P-028	C-V区 造構外	網底器蓋	①22.6△ ② 6.1△	大きめ外反する口部をもつ。底部は上方に肥厚し、下端部は鋸く引き出される。底部には突起が1ヶ所つき。内部は人字型である。	外面部・回転ナデ。 内面部・口縁部同様ナデ。 底部開心内凹叩きナデ消す。 帯目がつく。	密	良好	内外面とも灰 色	内外面に自然 模様がある O-28
P-01	C-V区 造構外	甕	①14.2 ④ 4.3 ⑤ 2.5	口縁部は外傾してから立ち上がる複合口形。底部は丸い。白線部口縁は鋸く開曲する。	外面部・ヨコナデ。 内面部・口縁部ヨコナデ。 底部開心内凹叩きナデ。	やや粗（石英・ 長石含む。）	良好	内外面とも灰 色	T-N 11
P-02	C-V区 造構外	甕	①15.8△ ② 18.7△ ③ 28.8△ ⑤ 3.0	口縁部はやや傾斜して立ち上がる複合口形。底部は肥厚し、平底をもつ。口縁部の端は鋸く、丸味を持つ。底部は人字型である。	外面部・山線ヨコナデ。 内面部・複数表面ヨコナデ。 底部開心内凹叩きナデ。	やや粗（2~ 5mmの大粒砂 含む。）	良好	外面部に浅い 橙色 内面部・銀色	底部外観スス 白台 N-288
P-03	C-V区 造構外	甕	②45.4△ ③25.0	底部を呈する腹側部。底部は丸底を呈す。蓋は大径には半位位にある。	外面部・前脚斜方向ナデ。 内面部・前脚斜方向ナデ。	粗（1~3mm の大粒砂を多 く含む。）	やや不良	外面部・橙色~ 灰白色 内面部・灰白色	底部内窓スス 白台 S-196
P-04	C-V区 造構外	高杯	①22.5 ② 17.0 ④ 14.0△	杯部は大型で、やや中央寄する底面部から底面部外傾する口縁部をもつ。底部はやや外反し、肥厚。底部には直線的な腰をもつ。底部は鋸く、直線的に開き、底部で大きく広がる。端部は丸い。	外面部・一面。 内面部・前脚底斜方向ナデ。	密（4mm大 の石英含む。）	良好	内外面とも橙 色	K-4
P-05	C-V区 造構外	高杯	①15.5△ ② 11.3△ ④ 8.8	杯部は深い腰状を呈す。底部は丸い。底部は細く、直線的に開き、底部で大きく広がる。端部は丸い。	外面部・一筋部上半ヨコナデ。 内面部・直線方向ナデ。	外面部に底部 内窓赤色	内外面とも赤 褐色	外面部及び底部 内窓赤色	K-5
P-06	C-V区 造構外	高杯	①15.8△ ② 11.3△ ④ 9.5△	杯部は深い腰状を呈す。底部は丸い。底部はやややく細く、丁寧な字状に開き、底部で大きく広がる。	外面部・一筋作成した 内面部・直線方向ナデ。	密	やや不良	内外面とも橙 色	N-290
P-07	C-V区 造構外	高杯	①16.1 ② 21.6 ④ 10.4	杯部は深い腰状を呈す。底部は丸い。底部は直線的に開き、底部で大きく広がる。	外面部・風化のため輪郭不明。 内面部・直線方向ナデ。	密	良好	内外面とも橙 色	O-19
P-08	C-V区 造構外	鉢形器身	② 4.8△ ④ 13.0△	小窓の鉢形器身右側部。底部は平底で、腰から弧曲部は鋸く。	外面部・平行沈打が施される。 内面部・直線方向ナデ。	密	やや不良	内外面とも灰 色	S-200
P-09	C-V区 造構外	瓶	①17.5△ ② 22.0	人字くびりを呈す瓶。上半部腹部はやや外反し、外側には折出する角状の把手がつく。	外面部・風化が著しい。 内面部・直線方向ナデ。	密	やや不良	内外面とも灰 色	S-233
P-10	C-V区 造構外	網底器身	①12.1 ② 4.9 ③ 12.4△ ④ 2.3	立ち上がり部は高くやや外反しながらは直立し、底部は鋸くノミ曲状を呈す。受部はやや水平に引き出される。底部は平ら。	外面部・直脚部の1/4回転ヘラケズリ。 内面部・直脚部による不整方向ナデ。	密	やや不良	内外面とも暗 灰色	O-26
P-11	C-V区 造構外	網底器身	①11.2△ ② 3.9 ③ 12.5△ ④ 2.2	立ち上がり部は高くやや外反しながらは直立し、底部は丸い。受部はやや上方へ引き出される。底部は浅く、底部はギザ。	外面部・直脚部2/3回転ナデ。 内面部・直脚部によるヨコナデ。	密	良好	内外面とも暗 灰色	体部外観薄 青 C-11-25
P-12	C-V区 造構外	網底器身	①12.2△ ② 4.2△ ③ 12.5△ ④ 2.1	立ち上がり部は高くやや外傾し、底部は鋸く。受部はやや上方へ引き出される。底部は浅く、底部はギザ。	外面部と同様ナデ。	密	良好	内外面とも青 色	C-H-27
P-13	C-V区 造構外	網底器身	② 3.0△ ③ 12.1△	立ち上がり部をなくして、上部はやや上方へ引き出される。底部はギザ。	外面部・直脚部の1/5回転ヘラケズリ。 内面部・直脚ナデ。	密	やや不良	内外面とも青 色	C-H-23
P-14	C-V区 造構外	高杯	①17.4△ ② 10.8△ ④ 10.7△	6枚脚は扁平で、開出する底部から外反する口縁部をもつ。底部には横に突起が2ヶ所ある。底部は丸く短く、受部はやや上方へ引き出される。底部は丸味をもつ。	外面部・一筋脚部回転ナデ。 内面部・直脚部回転ナデ。	密	良好	内外面とも灰 色	C-H-24
P-15	C-V区 造構外	網底器身	① 9.6△ ② 9.6△ ③ 11.6△	11枚脚は扁平で、開出する底部から外反する口縁部をもつ。底部には横に突起が2ヶ所ある。底部は丸く短く、受部はやや上方へ引き出される。底部は丸味をもつ。網部中に円孔が1個ある。	外面部・一筋脚部・一部回転ナデ。 内面部・直脚部回転ナデ。	密	良好	内外面とも灰 色	O-32
P-16	C-V区 造構外	網底器身	① 9.6△ ② 4.1△	口縁部は内窓青釉に立ち上がり、複合口形を呈す。底部は丸く短く。底部には横に突起が2ヶ所ある。底部は丸く短く、受部はやや上方へ引き出される。	外面部・1/2回転回転ナデ。 内面部・直脚部回転ナデ。	密	良好	外面部・青色 内面部・青色	内面自然模様 O-30
P-17	C-V区 造構外	網底器身	①19.7△ ② 5.2△	底部は肥厚し、底部は短く外反形状に傾く。	外面部とも回転ナデ。	密	良好	外面部・青色 内面部・青色	O-27
P-18	C-V区 造構外	染付皿	①13.2△ ② 4.8 ④ 7.2△	伊万里焼。高台からつく。	外面部・染付。 内面部・字彌輪。 内面部・透視見込文捺印判 有。底部には略号化された「風」 が押されている。	密	良好	内外面とも乳 白色	C-H-21
P-19	C-V区 造構外	青磁香炉	①10.2 ② 3.7	座部は内方へ肥厚し、玉枕状をもつ。	外面部・染付。 内面部・字彌輪。 下部は施墨されない。	密	良好	内外面とも暗 青緑色	C-H-22
P-20	C-V区 造構外	土玉	径 2.8 穴径 0.6 重さ10.4g 以上	いびつな球形を呈す。半球。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。風化著しい。 手捏ね成形後ナデ。風化著しい。 やや粗（砂粒 を含む。）	密	良好	にほい橙色	N-287
P-21	C-V区 造構外	土盤	奥 3.6 中 1.0 穴径 0.2 重さ 3.4 g	丸形容形を呈す。中心に孔有。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	にほい橙色	N-286

插表35 南谷大山遺跡出土遺物観察表

遺物番号	出土地点	器種類	法量(cm)	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
P o 1	西側周溝内	長杯底	①29.0× ②22.0× ③25.8× ④25.8×	外反気味に高く「ハ」字状に閉じ、縁部をもつ。輪部は外側に突出する平底盤である。柄部は球形となる。	外曲…環底…茎部ヨコナデ。輪部以下底面かハク目後輪部に横方向ケギリ。 内面…縁部ヨコナデ。輪部指揮子と後有方向ケギリ。	密	良好	外曲一浅黄褐色 内面一黒褐色	輪部外面高塗有 S-19
P o 2	西側周溝内	裏	①46.2cm ②44.8cm ③2.0	輪部は内面気味に立ち上がる後方に輪部をもつ。輪部は内方へ膨らむ。縁部ははね付輪部を呈す。	外曲…上輪部一茎部ヨコナデ。輪部以下底面かハク目。内面…輪部ヨコナデ。輪部以下有方向ケギリ。	密	不良	内面とも浅黄褐色	輪部外面ススキ付有 S-20
P o 3	北側周溝内	裏	①15.0cm ②2.8cm	内面気味に「く」字状に外極する円錐形片。端部は内方へ膨らむ。	内外面ともヨコナデ。	密(灰石・地 面を多量に含む。)	良好	内外面とも棕褐色	CH-1
P o 4	北側周溝内	小型丸漆器	①10.8cm ②3.4cm	「く」字状に立ち上がる円錐部の破片。端部は丸い。	内外面ともヨコナデ。	密	やや不良	内外面とも棕褐色	CH-7
P o 5	北側周溝内	小型器台	①8.2 ②8.0 ④10.2cm	1面部は内面気味に追加彫刻を呈し、輪部は丸い。輪台部は内円錐形を呈し、端部は丸い。輪台部に二方の円錐透かしあり。	外曲…上台部横方向ケギキ。 輪台部上半横方向ミガキ。 下半はヨコナデ。 内面…上台部横方向ミガキ。 輪台部上半ヨボリ後左方向ケギリ。 下半はヨコナデ。	砂利付灰 人の砂粒を多く含む。)	良好	外曲…に高い 複褐色 内面…浅黄褐色 ～に 高い複褐色	CH-6
P o 6	北側周溝内	土鍤	最大長 3.9 最大幅 1.75 穴径 0.65 重さ 9.3g	いびつな長持彫形を呈す。断面円形。中心に孔あり。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	棕褐色	CH-3
P o 7	北側周溝内	土鍤	最大長 3.8 最大幅 1.4 穴径 0.3 重さ 7.8g	いびつな長持彫形を呈す。断面円形。中心に孔あり。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	棕褐色	CH-4
P o 8	西側周溝内	土鍤	最大長 3.0 最大幅 1.8 穴径 0.6 重さ 6.4g	いびつな長持彫形を呈す。断面円形。中心に孔あり。	手捏ね成形後ナデ。	密	良好	棕褐色	CH-5

南谷大山遺跡C区出土石器観察表

遺物番号	出土地点	器種類	残存長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重さ(g)	石材	形態上の特徴	備考
S 1	C S I 01 埋土下層	砾石	6.9	6.1	3.9	265	繊維花崗岩	主な破面は2面あり、一面はよく使用され内溝している。両端部裏面を大きく。	O-9
S 2	C S I 04 埋土下層	刮削片	4.1	3.2	0.8	10.6	黑曜石片		KR-9
S 3	C S I 04 底面	磨石	11.4	9.5	4.1	690	右英安山岩質凝灰岩	扁平で横円形を呈す。全面を磨く。	KR-14
S 4	C S I 05 床面	磨石	5.7	5.2	2.0	103	右英安山岩質凝灰岩	扁平で角のとれた四角形を呈す。全体を磨く。	KR-15
S 5	C S I 06 埋土下層	敲石	11.0	9.3	3.6	616	右英安山岩質凝灰岩	扁平で横円形を呈す。片面に敲打面。	KR-17
S 6	C S I 06 埋土下層	敲石	6.9	4.2	4.1	128	右英安山岩質凝灰岩	横面を呈す。両面に敲打面をもつ。全体的に風化している。	KR-16
S 7	C S I 06 埋土下層	砾石	9.2	2.9	2.7	110	波紋鉱質凝灰岩	断面いびつな形を呈す。剥離いよいし、主な破面は3面あり、よく使い込まれて風化している。	KR-15
S 8	C S I 07 埋土下層	敲石	13.2	10.2	4.3	918	角閃石安山岩	扁平で不整形、敲打面を6面もつ。	KR-18
S 9	C S I 07 埋土下層	砾石	9.2	9.5	6.5	697	角閃石安山岩	横円形を呈し、両面に敲打・挫曲をもつ。	KR-12
S 10	C S I 11 埋土下層	砾石	20.2	20.5	19.8	5.95kg	繊維花崗岩	厚く、不整形を呈す。主な破面は1面。	KR-19
S 11	C S I 11 埋土下層	刮削片	3.5	2.8	1.0	11.2	黑曜石片		KR-385
S 12	C S I 19 底面	石皿	31.0	19.4	13.3	13.95kg	蛋白質質花崗岩	断面丸形を呈す。中央部が凹む。擇面が3面ある。	KR-384
S 13	C S I 20 埋土下層	敲石	11.6	5.9	4.7	406	角閃石安山岩	横幅円形を呈す。端部一面に敲打面をもつ。風化している。	KR-381
S 14	C S I 21 石燃	石燃	1.85	1.2	0.3	0.5	無斑晶質安山岩	無斑晶質、薄片。周縁に調整を施し、やや縮減している。	KR-387
S 15	C S S 04 敲石	敲石	10.1	5.95	5.1	471	角閃石含有右英安山岩質凝灰岩	長椭円形を呈し両端に敲打跡がある。	右英・角閃石の大 きな結晶を含む KR-11
S 16	右英石・ビット器	砾石	15.4	6.2	3.0以上	612	右英安山岩質凝灰岩	横幅円形を呈す。平頂。一方端に敲打面をもつ。全体が割かれている。	KR-309
S 17	C-I 区過溝外	大型鋸刃石斧	11.1以上	6.2	3.25	374	閃鈍岩	断面横円形を呈すものと思われるが、片面は斜面で、基部欠損。刃部はなく、刃角有。	右英が瓶底に入る KR-7
S 18	C-N 区過溝外	右旗	1.9	1.2	0.4	0.6	黑曜石	平基無右旗。中底部が削らる。側縁部は直線的で、細かな調整が施されている。	KR-7

摺表35 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (3)

南谷大山遺跡C区出土石器観察表

S 19	C - V 区 直構外	石鏃	2.8	1.7	0.3	1.6	無痕品質安 山谷	凹面無穿孔鏃、薄手。先端部を欠く。側斜部は直線またはやや膨らみ、頭部は鋸歯。全体的に削減している。	KR - 21
S 20	C - V 区 直構外	石鏃	2.1	1.6	0.4	0.7	側斜石	凹面無穿孔鏃、やや厚手。先端部は鋸歯で、断面は中心が膨らむ。頭部はやや渋曲し、鋸歯は細かい。	KR - 20
S 21	C - V 区 直構外	石鏃	3.4	1.6	1.0	6.0	水晶	水晶石様。	KR - 386
S 22	C - V 区 直構外	太型笏刀 石斧	9.821.1	6.4	4.4	465	凹面石	基部を欠く。刃部は両刃。先端部一部欠く。	有色風物を多く含む KR - 380
S 23	C - V 区 直構外	磨製石片	6.3	5.2	-	58	砂岩	磨製石斧の一部と思われる。表面はよく磨かれている。	KR - 378
S 24	C - V 区 直構外	砾石	18.3	4.9	4.5	672	右美安山岩 質風化岩	断面いびつな方形を呈し、細長い更正、主な研磨は一回。	KR - 377
S 25	C - V 区 直構外	砾石	10.7	4.8	4.2	314	細長角閃石 安山岩	長楕円形を呈す。全体磨かれる。	礫石が小さく多い。 5mm以上の角閃石 の結晶を含む KR - 375
S 26	C - V 区 直構外	敲石	10.3	7.1	3.4	335	灰白安山岩	扁平で横円形を呈す。両端に敲打面をもつ。一部欠損。	礫石が小さい。 S - 24に類似する KR - 376
S 27	C - V 区 直構外	石錐	10.9	9.7	4.7	668	右美安山岩 質風化岩	扁平で角のとれいいびつな三角形を呈す。敲打面は両面にある。	小さな雷母を含む KR - 383
S 28	C - V K 直構外	石錐	11.7	17.2	4.6	1477	安山岩	横円形を呈すと思われる石錐。半撓。敲打面は一面。端部も敲打面有。	シソ輝石(か)角 閃石を含む KR - 382
S 29	山鈴29号 埴	石核	2.5	2.0	0.9	6.9	玉髓	石核。	珪乳石の可能性有 KR - 10

南谷大山遺跡C区出土鐵器観察表

遺物 番号	出土地点	器種類	残存長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	形態上 の特徴	備考
F 1	C S 101 床面	袋狀鉄斧	6.9	2.3	1.6	42.2	刃部の幅1.9cmと狭い。柄の棒入部は両側を折り曲げる骨部をもつ。茎部端には幅1cmの後の紋様が彫かれていたものと思われる。	KR - 3
F 2	C S 101 床面	不明鉄器	2.8	0.6	0.4	1.9	断面長方形を呈し、端部が折れる。先端部欠損。	KR - 5
F 3	C S 105 壁上・下層	不明鉄器	5.6	0.6	0.4	2.8	断面長方形を呈し、棒状を呈す。端部は肥厚する。	KR - 2
F 4	C S 111 床面	鍬	10.5	1.2	0.4	16.2	刃部先端部を欠く。刃部は反りをもち、上面中央に鋸をもつ。裏面は凹み、断面透「V」字形を呈す。身部は直方形を呈す。	KR - 4
F 5	C S 112 床面	不明鉄器	15.8	0.8	0.7	30.4	断面長方形を呈す。先端部が折れる。茎部は本茎部に挿入される。	KR - 1
F 6	C S 117	持造鉄斧	7.9	7.2	1.5	230	刃部先端部及び姿部を欠く。刃部はゆるやかに広がる。表面は台形状を呈す。	KR - 388

C S 119 出土玉製品観察表

遺物 番号	出土地点	器種類	長径 (cm)	短径 (cm)	最大厚 (cm)	穿孔幅 (mm)	重さ (g)	材質	形態上 の特徴	備考
J 1	C S 119	有孔円盤	2.2	2.1	0.3	1.5	2.9	蛇紋岩	扁平な円形を呈す。片側穿孔による孔が2ヶ所あり、ボタン状を呈す。表面・側面に擦痕有。	KR - 22
J 2	C S 119	有孔円盤	1.9	-	0.3	1.0	1.2	蛇紋岩	扁平な橢円形を呈す。1/3次摺。片側穿孔による孔が2ヶ所あり、ボタン状を呈す。表面・側面に擦痕有。	雲母の結晶がきれ いに重ぶ 結晶片岩の可能性 がある KR - 23

插表37 南谷大山遺跡出土遺物観察表 (3)

	長径mm	短径mm	厚さmm	穴径mm	重さg	類型	材質
J 3	5.5	5.0	4.0	2.0	0.17	a類	蛇紋岩
J 4	4.0	3.8	3.0	1.5	0.05	a類	蛇紋岩
J 5	4.0	4.0	3.0	1.8	0.05	a類	蛇紋岩
J 6	5.7	5.5	3.5	2.0	0.16	b類	蛇紋岩
J 7	6.0	5.5	4.0	2.5	0.13	a類	蛇紋岩
J 8	6.0	5.5	3.5	3.0	0.13	b類	蛇紋岩
J 9	5.0	5.0	3.5	2.0	0.12	b類	蛇紋岩
J 10	5.0	4.8	3.0	1.5	0.07	b類	蛇紋岩
J 11	5.5	5.5	3.0	2.0	0.13	b類	蛇紋岩
J 12	5.0	5.0	3.5	2.5	0.07	a類	蛇紋岩
J 13	5.0	5.0	3.0	2.8	0.08	b類	蛇紋岩
J 14	4.0	4.0	3.0	1.5	0.06	a類	蛇紋岩
J 15	4.5	4.0	2.5	2.5	0.06	b類	蛇紋岩
J 16	6.0	5.8	4.0	3.0	0.13	a類	蛇紋岩
J 17	5.0	5.0	2.5	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 18	3.5	3.5	1.8	1.5	0.02	b類	蛇紋岩
J 19	6.0	5.3	3.5	2.0	0.15	b類	蛇紋岩
J 20	5.5	5.5	3.5	2.5	0.11	a類	蛇紋岩
J 21	5.5	5.0	3.5	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 22	5.0	5.0	3.5	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 23	5.5	5.0	4.5	4.5	0.13	a類	蛇紋岩
J 24	5.5	5.5	2.5	2.0	0.08	b類	蛇紋岩
J 25	5.5	5.5	2.5	2.0	0.10	b類	蛇紋岩
J 26	4.5	4.5	3.5	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 27	5.0	4.8	4.5	3.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 28	5.6	5.4	4.5	2.0	0.17	b類	蛇紋岩
J 29	5.0	5.0	2.5	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 30	6.0	6.0	3.0	2.0	0.14	a類	蛇紋岩
J 31	4.0	4.0	1.5	1.8	0.02	c類	蛇紋岩
J 32	—	—	—	—	—	—	蛇紋岩
J 33	4.5	4.3	2.5	3.0	0.04	a類	蛇紋岩
J 34	5.0	4.8	3.0	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 35	4.5	4.5	3.5	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 36	5.5	5.0	4.0	2.0	0.14	b類	蛇紋岩
J 37	5.0	5.0	3.0	2.0	0.12	a類	蛇紋岩
J 38	5.0	4.5	2.5	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 39	6.5	5.8	4.0	2.5	0.18	a類	蛇紋岩
J 40	4.5	4.3	2.0	1.5	0.03	c類	蛇紋岩
J 41	—	—	—	—	—	—	蛇紋岩
J 42	5.0	5.0	2.5	2.5	0.08	b類	蛇紋岩
J 43	6.0	5.5	3.0	2.0	0.15	b類	蛇紋岩
J 44	5.5	5.0	4.0	2.0	0.14	a類	蛇紋岩
J 45	5.0	4.6	3.0	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 46	4.5	4.5	1.5	2.0	0.05	c類	蛇紋岩

	長径mm	短径mm	厚さmm	穴径mm	重さg	類型	材質
J 47	6.0	5.5	4.0	2.3	0.16	a類	蛇紋岩
J 48	4.5	4.5	4.2	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 49	4.5	4.5	4.3	2.5	0.10	b類	蛇紋岩
J 50	4.8	4.5	1.8	2.0	0.04	c類	蛇紋岩
J 51	5.0	4.8	2.8	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 52	5.2	5.2	4.0	2.5	0.13	a類	蛇紋岩
J 53	4.0	3.8	2.0	1.5	0.03	d類	蛇紋岩
J 54	5.0	5.0	4.0	2.0	0.13	a類	蛇紋岩
J 55	5.5	5.0	4.0	2.5	0.14	a類	蛇紋岩
J 56	4.7	4.5	3.0	2.2	0.06	a類	蛇紋岩
J 57	5.5	5.0	2.8	2.3	0.09	a類	蛇紋岩
J 58	5.0	4.5	3.5	2.0	0.08	b類	蛇紋岩
J 59	5.6	5.5	3.5	2.0	0.16	b類	蛇紋岩
J 60	5.0	5.0	2.0	2.0	0.05	c類	蛇紋岩
J 61	4.8	4.5	2.5	2.5	0.06	b類	蛇紋岩
J 62	6.0	5.8	4.0	2.5	0.19	b類	蛇紋岩
J 63	6.0	6.0	2.5	2.0	0.12	b類	蛇紋岩
J 64	5.0	4.8	4.5	2.8	0.12	a類	蛇紋岩
J 65	4.0	4.0	2.5	2.3	0.05	b類	蛇紋岩
J 66	5.0	5.0	3.5	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 67	5.0	5.0	3.0	2.2	0.08	a類	蛇紋岩
J 68	6.0	5.6	4.0	2.0	0.16	a類	蛇紋岩
J 69	5.5	5.5	3.1	2.0	0.12	b類	蛇紋岩
J 70	5.0	4.8	2.0	2.0	0.07	c類	蛇紋岩
J 71	5.0	4.8	3.5	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 72	5.5	5.5	3.5	2.5	0.18	b類	蛇紋岩
J 73	5.8	5.4	3.0	2.0	0.13	b類	蛇紋岩
J 74	5.0	4.8	3.0	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 75	5.5	3.4	2.8	2.0	0.11	b類	蛇紋岩
J 76	5.0	5.0	3.0	2.0	0.16	a類	蛇紋岩
J 77	5.0	4.5	3.0	2.0	0.07	b類	蛇紋岩
J 78	5.5	5.2	4.0	2.0	0.15	a類	蛇紋岩
J 79	5.8	5.5	3.2	2.0	0.14	b類	蛇紋岩
J 80	6.0	6.0	3.5	2.5	0.17	a類	蛇紋岩
J 81	6.5	6.4	4.0	2.0	0.19	b類	蛇紋岩
J 82	5.0	5.0	3.5	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 83	6.0	5.0	3.0	2.0	0.11	b類	蛇紋岩
J 84	5.0	4.8	2.5	2.0	0.06	a類	蛇紋岩
J 85	5.0	5.0	3.1	2.8	0.09	a類	蛇紋岩
J 86	6.0	6.0	2.0	2.5	0.10	c類	蛇紋岩
J 87	5.5	5.5	3.5	2.0	0.16	b類	蛇紋岩
J 88	5.0	5.0	4.0	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 89	5.0	5.0	4.0	2.0	0.13	a類	蛇紋岩
J 90	5.0	5.0	3.0	2.0	0.09	a類	蛇紋岩

播表38 南谷大山遺跡C S I 19出土曰玉一覽表(1)

	長径mm	短径mm	厚さmm	穴径mm	重さg	類型	材質
J 91	5.0	4.5	3.5	2.0	0.12	b類	蛇紋岩
J 92	5.0	5.0	3.0	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 93	6.0	5.3	3.5	2.5	0.13	a類	蛇紋岩
J 94	5.8	5.2	3.8	2.3	0.16	a類	蛇紋岩
J 95	5.0	5.0	2.5	1.5	0.07	b類	蛇紋岩
J 96	5.0	5.0	2.0	2.0	0.06	c類	蛇紋岩
J 97	5.0	5.0	3.9	2.0	0.14	a類	蛇紋岩
J 98	5.8	5.5	4.0	1.8	0.15	b類	蛇紋岩
J 99	5.0	4.8	3.0	2.2	0.08	a類	蛇紋岩
J 100	5.2	5.0	4.0	2.4	0.15	b類	蛇紋岩
J 101	5.0	4.6	2.9	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 102	5.0	5.0	3.0	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 103	6.0	6.0	2.8	2.2	0.13	a類	蛇紋岩
J 104	5.0	5.0	2.2	2.0	0.07	b類	蛇紋岩
J 105	5.0	5.0	2.8	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 106	5.8	5.5	4.0	2.0	0.20	b類	蛇紋岩
J 107	5.0	5.0	3.0	2.0	0.10	b類	蛇紋岩
J 108	5.2	5.0	3.5	1.5	0.11	b類	蛇紋岩
J 109	5.0	4.8	3.2	2.5	0.08	a類	蛇紋岩
J 110	4.8	4.5	2.9	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 111	5.0	5.0	3.5	2.0	0.12	a類	蛇紋岩
J 112	5.0	4.8	2.8	2.2	0.07	a類	蛇紋岩
J 113	5.0	4.8	2.5	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 114	5.5	5.3	2.5	2.5	0.09	b類	蛇紋岩
J 115	5.5	5.3	3.5	2.8	0.14	a類	蛇紋岩
J 116	6.0	--	3.8	2.6	--	a類	蛇紋岩
J 117	6.0	5.5	3.0	3.5	0.09	a類	蛇紋岩
J 118	5.0	4.5	2.0	2.0	0.06	c類	蛇紋岩
J 119	4.0	3.5	3.0	2.0	0.05	a類	蛇紋岩
J 120	4.8	4.5	3.0	1.5	0.10	a類	蛇紋岩
J 121	4.8	4.6	3.0	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 122	5.0	5.0	4.0	2.1	0.09	a類	蛇紋岩
J 123	5.5	5.5	3.5	2.0	0.15	b類	蛇紋岩
J 124	5.0	5.0	4.5	2.3	0.13	a類	蛇紋岩
J 125	4.5	4.0	2.0	1.8	0.05	c類	蛇紋岩
J 126	5.0	5.0	3.0	2.0	0.06	a類	蛇紋岩
J 127	5.0	5.0	2.0	2.0	0.07	c類	蛇紋岩
J 128	6.0	6.0	3.5	2.5	0.13	a類	蛇紋岩
J 129	--	--	--	--	--	a類	蛇紋岩
J 130	5.2	5.0	2.0	2.3	0.07	c類	蛇紋岩
J 131	--	--	--	--	--	b類	蛇紋岩
J 132	5.0	5.0	2.5	2.4	0.07	b類	蛇紋岩
J 133	4.5	4.5	3.8	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 134	5.5	5.2	2.5	2.5	0.10	a類	蛇紋岩

	長径mm	短径mm	厚さmm	穴径mm	重さg	類型	材質
J 135	5.0	5.0	2.8	2.0	0.07	b類	蛇紋岩
J 136	5.5	5.0	3.8	2.8	0.12	a類	蛇紋岩
J 137	6.5	6.4	2.3	2.5	0.11	c類	蛇紋岩
J 138	5.2	5.0	2.0	2.4	0.07	c類	蛇紋岩
J 139	--	--	--	--	--	a類	蛇紋岩
J 140	6.5	6.2	3.0	2.6	0.16	b類	蛇紋岩
J 141	4.0	3.8	3.2	1.8	0.05	a類	蛇紋岩
J 142	5.0	4.8	2.9	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 143	5.2	5.2	2.5	2.5	0.09	a類	蛇紋岩
J 144	5.0	4.5	3.0	2.5	0.09	a類	蛇紋岩
J 145	4.6	4.6	3.4	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 146	5.8	5.8	3.0	2.0	0.14	b類	蛇紋岩
J 147	5.7	5.5	3.5	2.0	0.16	b類	蛇紋岩
J 148	6.0	5.5	3.0	1.5	0.15	d類	蛇紋岩
J 149	5.0	5.0	3.5	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 150	4.8	4.2	2.4	2.0	0.05	d類	蛇紋岩
J 151	--	--	--	--	--	a類	蛇紋岩
J 152	4.5	4.3	4.0	2.5	0.10	a類	蛇紋岩
J 153	5.6	5.6	3.8	2.0	0.16	a類	蛇紋岩
J 154	5.5	5.0	4.0	2.0	0.12	a類	蛇紋岩
J 155	4.3	4.0	2.4	1.5	0.05	b類	蛇紋岩
J 156	--	--	--	--	--	a類	蛇紋岩
J 157	5.8	5.8	2.4	2.0	0.10	c類	蛇紋岩
J 158	5.0	5.0	2.0	2.0	0.06	c類	蛇紋岩
J 159	5.0	4.5	2.8	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 160	6.0	5.8	3.9	2.8	0.16	a類	蛇紋岩
J 161	5.3	5.2	3.6	2.5	0.13	a類	蛇紋岩
J 162	5.0	5.0	3.6	2.0	0.13	b類	蛇紋岩
J 163	5.5	5.3	3.8	2.5	0.11	b類	蛇紋岩
J 164	4.0	4.0	3.0	2.0	0.06	a類	蛇紋岩
J 165	--	--	3.0	--	--	b類	蛇紋岩
J 166	4.6	4.5	2.8	1.8	0.07	a類	蛇紋岩
J 167	4.4	4.2	2.2	1.5	0.06	a類	蛇紋岩
J 168	5.8	5.8	4.8	2.4	0.14	a類	蛇紋岩
J 169	5.0	4.9	3.5	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 170	5.0	5.0	2.8	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 171	5.5	5.4	4.0	2.5	0.12	a類	蛇紋岩
J 172	4.8	4.8	4.2	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 173	6.0	6.0	3.0	2.0	0.15	a類	蛇紋岩
J 174	4.3	4.2	3.4	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 175	4.8	4.8	2.5	2.0	0.06	d類	蛇紋岩
J 176	5.5	5.3	3.0	2.4	0.10	a類	蛇紋岩
J 177	--	--	--	--	--	a類	蛇紋岩
J 178	5.5	5.4	2.8	2.5	0.10	d類	蛇紋岩

插表39 南谷大山造跡 C S I 19出土白玉一覽表(2)

	長径mm	短径mm	厚さmm	穴径mm	重さg	類型	材質		長径mm	短径mm	厚さmm	穴径mm	重さg	類型	材質
J 179	5.0	5.0	2.9	2.7	0.05	c類	蛇紋岩	J 223	6.0	5.6	4.0	2.0	0.19	b類	蛇紋岩
J 180	5.0	4.8	2.9	2.8	0.08	b類	蛇紋岩	J 224	4.9	4.7	2.0	2.0	0.06	c類	蛇紋岩
J 181	4.8	4.6	3.4	2.0	0.10	a類	蛇紋岩	J 225	5.0	4.8	2.2	2.0	0.05	c類	蛇紋岩
J 182	5.0	5.0	2.0	2.5	0.05	c類	蛇紋岩	J 226	4.8	4.8	2.0	2.0	0.05	a類	蛇紋岩
J 183	5.8	5.5	3.5	2.1	0.16	b類	蛇紋岩	J 227	4.0	3.9	3.0	1.8	0.06	a類	蛇紋岩
J 184	5.0	4.5	2.5	1.8	0.05	a類	蛇紋岩	J 228	6.0	5.8	4.2	2.0	0.19	a類	蛇紋岩
J 185	5.0	5.0	2.5	2.0	0.08	a類	蛇紋岩	J 229	5.8	5.6	2.2	2.0	0.08	c類	蛇紋岩
J 186	5.2	5.1	3.5	1.7	0.12	b類	蛇紋岩	J 230	5.0	5.0	3.0	2.5	0.10	b類	蛇紋岩
J 187	5.0	5.0	3.0	2.5	0.09	a類	蛇紋岩	J 231	5.7	5.5	3.7	2.2	0.15	a類	蛇紋岩
J 188	4.3	4.2	3.8	2.0	0.08	a類	蛇紋岩	J 232	4.8	4.6	4.2	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 189	-	-	-	-	-	-	蛇紋岩	J 233	5.0	4.8	3.0	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 190	5.0	5.0	3.4	2.2	0.07	a類	蛇紋岩	J 234	5.0	5.0	4.0	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 191	5.0	5.0	3.5	2.0	0.10	a類	蛇紋岩	J 235	5.2	5.0	3.0	1.5	0.11	b類	蛇紋岩
J 192	5.0	4.5	3.0	2.2	0.08	a類	蛇紋岩	J 236	5.0	4.8	3.2	2.0	0.10	b類	蛇紋岩
J 193	4.9	4.8	3.2	2.0	0.08	a類	蛇紋岩	J 237	5.0	4.5	2.0	1.8	0.07	c類	蛇紋岩
J 194	5.0	5.0	3.6	2.0	0.11	a類	蛇紋岩	J 238	5.2	5.0	3.3	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 195	6.8	6.0	3.0	2.0	0.12	b類	蛇紋岩	J 239	5.5	5.4	4.0	3.0	0.17	a類	蛇紋岩
J 196	5.5	5.3	3.5	2.5	0.12	a類	蛇紋岩	J 240	4.9	4.8	3.0	2.5	0.06	a類	蛇紋岩
J 197	5.5	5.5	4.0	2.5	0.16	b類	蛇紋岩	J 241	5.0	4.7	2.0	2.0	0.05	c類	蛇紋岩
J 198	5.0	5.0	3.0	2.0	0.10	a類	蛇紋岩	J 242	5.3	5.2	3.0	2.3	0.09	a類	蛇紋岩
J 199	4.8	4.6	3.5	2.0	0.09	a類	蛇紋岩	J 243	5.2	5.0	2.3	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 200	5.5	5.3	3.4	2.0	0.10	a類	蛇紋岩	J 244	5.5	5.0	3.6	2.0	0.14	a類	蛇紋岩
J 201	5.0	5.0	2.9	2.0	0.07	a類	蛇紋岩	J 245	5.8	5.6	3.0	2.2	0.11	a類	蛇紋岩
J 202	5.7	5.2	3.8	2.0	0.12	b類	蛇紋岩	J 246	4.8	4.5	3.2	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 203	5.0	5.0	3.5	2.0	0.10	a類	蛇紋岩	J 247	4.8	4.5	3.0	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 204	5.8	5.5	3.8	2.2	0.10	a類	蛇紋岩	J 248	-	-	-	-	-	a類	蛇紋岩
J 205	4.7	4.5	2.0	2.0	0.05	d類	蛇紋岩	J 249	4.8	4.6	3.7	2.0	0.11	b類	蛇紋岩
J 206	5.0	4.8	2.5	2.0	0.06	b類	蛇紋岩	J 250	5.0	5.0	3.0	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 207	4.7	4.6	4.0	2.0	0.07	a類	蛇紋岩	J 251	5.0	5.0	1.8	2.0	0.05	c類	蛇紋岩
J 208	4.0	3.9	3.5	2.0	0.06	a類	蛇紋岩	J 252	5.6	5.4	3.3	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 209	5.0	4.5	3.0	2.0	0.07	b類	蛇紋岩	J 253	4.0	3.9	2.5	1.8	0.04	b類	蛇紋岩
J 210	5.5	5.3	4.0	2.5	0.11	a類	蛇紋岩	J 254	5.7	5.3	3.0	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 211	5.0	5.0	3.3	1.6	0.11	a類	蛇紋岩	J 255	5.0	4.5	2.3	1.8	0.08	a類	蛇紋岩
J 212	5.0	4.8	3.5	2.0	0.09	b類	蛇紋岩	J 256	5.0	4.8	3.5	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 213	4.7	4.6	3.5	2.2	0.09	a類	蛇紋岩	J 257	6.0	5.6	1.5	2.0	0.08	c類	蛇紋岩
J 214	4.0	4.0	4.5	2.0	0.07	b類	蛇紋岩	J 258	5.2	5.0	4.0	2.5	0.14	a類	蛇紋岩
J 215	4.3	4.2	2.5	2.0	0.05	a類	蛇紋岩	J 259	5.0	5.0	2.9	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 216	5.0	4.8	2.5	2.0	0.07	a類	蛇紋岩	J 260	4.9	4.8	2.5	2.0	0.06	a類	蛇紋岩
J 217	5.5	5.1	3.2	2.2	0.11	b類	蛇紋岩	J 261	5.0	4.8	3.2	2.0	0.08	b類	蛇紋岩
J 218	4.7	4.5	4.3	2.0	0.11	a類	蛇紋岩	J 262	4.9	4.8	2.9	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 219	5.2	5.0	2.2	2.2	0.08	b類	蛇紋岩	J 263	5.8	5.5	3.6	2.4	0.16	b類	蛇紋岩
J 220	5.3	5.0	3.0	2.0	0.10	a類	蛇紋岩	J 264	5.0	5.0	3.0	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 221	4.7	4.6	3.3	2.0	0.08	b類	蛇紋岩	J 265	4.8	4.6	3.0	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 222	5.8	5.7	3.0	2.0	0.13	b類	蛇紋岩	J 266	5.5	5.3	3.2	2.6	0.09	a類	蛇紋岩

擇表40 南谷大山遺跡C S I 19出土白玉一覽表(3)

	長径mm	短径mm	厚さmm	穴径mm	重さ g	類型	材質
J 267	4.9	4.8	2.8	2.2	0.08	a類	蛇紋岩
J 268	5.0	4.9	4.0	2.0	0.12	a類	蛇紋岩
J 269	5.2	5.0	3.3	2.5	0.11	b類	蛇紋岩
J 270	—	—	—	—	—	—	蛇紋岩
J 271	5.3	5.1	4.0	2.5	0.12	a類	蛇紋岩
J 272	5.0	5.0	3.0	2.0	0.09	d類	蛇紋岩
J 273	5.0	4.5	3.5	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 274	5.0	5.0	2.8	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 275	4.5	4.2	4.2	1.4	0.12	a類	蛇紋岩
J 276	4.8	4.7	3.0	2.0	0.10	b類	蛇紋岩
J 277	4.0	4.0	2.8	2.0	0.05	a類	蛇紋岩
J 278	5.0	5.0	2.5	2.8	0.06	a類	蛇紋岩
J 279	5.0	5.0	1.5	2.0	0.04	d類	蛇紋岩
J 280	5.0	5.0	3.2	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 281	5.2	5.1	3.2	2.8	0.10	a類	蛇紋岩
J 282	5.0	5.0	2.6	1.8	0.09	a類	蛇紋岩
J 283	5.3	5.2	4.0	2.0	0.15	a類	蛇紋岩
J 284	5.0	5.0	3.0	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 285	—	—	3.5	—	—	b類	蛇紋岩
J 286	5.0	5.0	1.3	2.0	0.05	c類	蛇紋岩
J 287	4.5	4.3	3.4	1.3	0.09	a類	蛇紋岩
J 288	5.0	5.0	2.0	2.0	0.05	c類	蛇紋岩
J 289	4.0	3.8	3.5	2.0	0.04	b類	蛇紋岩
J 290	5.8	5.7	4.0	2.6	0.19	b類	蛇紋岩
J 291	6.0	6.0	3.2	2.1	0.16	a類	蛇紋岩
J 292	5.0	4.9	3.5	2.0	0.11	d類	蛇紋岩
J 293	—	—	—	—	—	—	蛇紋岩
J 294	5.9	5.4	3.0	1.9	0.10	d類	蛇紋岩
J 295	5.7	5.5	4.0	2.0	0.13	a類	蛇紋岩
J 296	6.0	6.0	4.4	2.5	0.21	a類	蛇紋岩
J 297	5.0	4.9	3.7	2.1	0.09	a類	蛇紋岩
J 298	4.8	4.6	2.5	2.0	0.06	b類	蛇紋岩
J 299	6.5	6.4	3.0	2.4	0.17	b類	蛇紋岩
J 300	4.5	4.4	3.0	1.8	0.08	a類	蛇紋岩
J 301	5.5	5.4	3.0	2.8	0.10	a類	蛇紋岩
J 302	4.8	4.6	2.8	2.0	0.06	a類	蛇紋岩
J 303	5.5	5.4	3.4	3.4	0.12	a類	蛇紋岩
J 304	5.5	5.4	2.5	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 305	5.0	5.0	4.0	2.8	0.13	a類	蛇紋岩
J 306	—	—	—	—	—	—	蛇紋岩
J 307	5.2	5.1	3.7	2.8	0.10	a類	蛇紋岩
J 308	4.2	4.1	3.9	2.2	0.06	a類	蛇紋岩
J 309	5.0	4.8	2.2	2.0	0.07	b類	蛇紋岩
J 310	5.5	5.0	3.2	2.0	0.10	a類	蛇紋岩

	長径mm	短径mm	厚さmm	穴径mm	重さ g	類型	材質
J 311	5.5	5.0	2.8	2.0	0.10	b類	蛇紋岩
J 312	5.5	5.2	3.8	2.5	0.13	a類	蛇紋岩
J 313	5.5	5.4	4.0	3.0	0.12	a類	蛇紋岩
J 314	4.5	4.3	2.0	1.5	0.06	a類	蛇紋岩
J 315	5.0	5.0	3.5	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 316	5.0	5.0	3.4	2.2	0.11	b類	蛇紋岩
J 317	5.0	5.0	3.6	2.0	0.13	a類	蛇紋岩
J 318	4.8	4.8	3.0	2.0	0.06	a類	蛇紋岩
J 319	5.8	5.5	3.1	2.0	0.13	b類	蛇紋岩
J 320	4.9	4.8	3.9	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 321	4.9	4.8	3.0	1.9	0.10	a類	蛇紋岩
J 322	5.0	5.0	1.8	1.3	0.05	c類	蛇紋岩
J 323	5.0	5.0	2.2	2.0	0.07	b類	蛇紋岩
J 324	5.9	5.6	3.1	1.8	0.11	b類	蛇紋岩
J 325	5.0	4.8	3.0	2.0	0.09	a類	蛇紋岩
J 326	5.3	5.0	2.3	2.0	0.08	b類	蛇紋岩
J 327	5.0	4.8	2.4	2.0	0.07	b類	蛇紋岩
J 328	6.0	6.0	3.0	2.8	0.13	b類	蛇紋岩
J 329	5.0	5.0	2.0	2.0	0.07	b類	蛇紋岩
J 330	4.0	4.0	2.0	1.5	0.06	a類	蛇紋岩
J 331	5.5	5.4	3.0	2.0	0.13	b類	蛇紋岩
J 332	4.9	4.8	2.5	1.5	0.08	a類	蛇紋岩
J 333	5.0	4.8	2.0	2.5	0.06	c類	蛇紋岩
J 334	4.9	4.8	3.7	2.0	0.08	a類	蛇紋岩
J 335	4.8	4.6	3.3	2.5	0.06	a類	蛇紋岩
J 336	4.3	4.0	1.5	1.5	0.02	c類	蛇紋岩
J 337	5.0	5.0	3.2	2.0	0.12	a類	蛇紋岩
J 338	5.8	5.5	4.0	2.2	0.17	b類	蛇紋岩
J 339	6.0	5.5	3.5	3.0	0.13	a類	蛇紋岩
J 340	4.5	4.4	3.0	2.0	0.07	a類	蛇紋岩
J 341	—	—	—	—	—	b類?	蛇紋岩
J 342	5.5	5.0	3.0	2.0	0.10	a類	蛇紋岩
J 343	5.0	5.0	3.0	2.0	0.11	a類	蛇紋岩
J 344	5.0	5.0	1.5	2.0	0.04	c類	蛇紋岩
J 345	5.0	4.9	3.5	2.4	0.11	b類	蛇紋岩
J 346	5.5	5.0	3.5	2.5	0.13	b類	蛇紋岩
J 347	5.0	5.0	4.2	2.0	0.14	a類	蛇紋岩
J 348	5.0	5.0	4.5	2.0	0.13	a類	蛇紋岩
J 349	5.5	5.0	4.0	2.0	0.16	b類	蛇紋岩
J 350	5.5	5.0	4.0	2.0	0.11	b類	蛇紋岩
J 351	5.0	4.5	2.0	2.2	0.06	c類	蛇紋岩
J 352	5.0	5.0	2.5	2.0	0.07	b類	蛇紋岩
J 353	—	—	—	—	—	—	蛇紋岩

插表41 南谷大山遺跡C S I 19出土臼玉一覽表(4)